目　次

北の門口……大和禎人：1
〔連載〕
支店長の妻たち（第二回）……三戸岡道夫：5
語りたくない・でも・語らねば……山口健二：18
其の(二)
近藤富蔵の生涯（第六回）……金子正義：27
編集子のメモ……：34
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

北の門口

大和禎人

駅のわかれに堂園さんは格別心の痛み覚えたことが幾度かある。それも上野駅の場合に限られるようだ。上野は彼にとって言わば郷里への「北の門口」であったからである。太い絆が彼を郷里に結んでいた。だからこの門口に人生上の大事のいくつかが思い出に刻まれたとして不思議ではない。

駅頭の離愁は人を見送り、また見送られる時と大方は決っていようか、堂園さんの場合も例に漏れないのだ。おおよそ大別して三回ほど、人生の節目に相当するようなわかれの経験が数えられる。北国人の彼はこの門口に立ち、そこを通らねば郷里に帰れない。幾度となく往き来に慣れてなんの感懐もなく通り過ぎて良いはずを、まさにそれは格別なことと言えるものだ。

さて、その一回目ははじめての上京をした時であって、彼は父親に伴われていた。田舎の小学校高等科を卒えて丁稚奉公をするためであった。気丈な彼は単身でよいというのに父親のほうが許さなかったのだ。わかれにあたってとめどなく涙があふれ出て困った。奉公先は浅草の問屋街であった。一トンもある原材料の生ゴムを少年の身ながら、リヤカーで運ばされても、決して音をあげることのなかった彼としては思いもかけぬ経験だった。

小僧の彼は独りの淋しさを六区の映画街に紛らせ、土地がら店にくるタダ券なども貰い手がなければいつも彼がむさぼり手に入れ、耽溺したものだった。

二回目は婿入りの縁組みが整い上京した折のことだ。一念発起して郷里の師範学校を出た彼は北国に義務づけられた年期を了え再度の出京を果たし、学校勤めをする、そんな成り行きになったものだ。

彼はまた父親との駅頭の出会いとわかれを経験した。この時彼の老父は重たげなリュックを背負っており、あ

る文学全集が中から出てきた。それは村夫子の父が円本時代を生きた多感を記念するものであった。とりあえずはその一部を、あとは駅止めで送ったということだった。これを金に替えて幾分なりと新所帯のタシにせよという尊い親心であった。この見送りの駅頭でのわかれに、またまた涙をおさえようもないシーンを記録した。

彼は堂園姓になり入夫はしたが、あくまで別居を条件とし、上京して学校勤めのかたわらある私大の高等師範部に籍を置いたのである。小学校訓導から、中等学校の教諭を目指すことはこの当時、お決りの図式で、大方と同じコースを歩んだものだった。「訓導」という職名の一方にあたかも上階のごとく「教諭」という職名の存在する教育の世界の歪みに彼もまた振り回される案配にも見えたが、純粋な向学の志に燃え、入り婿という境遇からも逃れるため「北の門口」を抜け出したものだった。

やがて、中等教員の資格を得た彼は郷里に帰り、高等女学校に職を得ることになるのだが、ここでも養家を遠く離れ、いまに言う単身赴任であった。それは彼の人生にとって「家庭」と呼ぶベースの将来になにかを運命づけるような成り行きだった。この間に子を成したことが不思議とも思える冷え冷えしたものを感じられるとしても、存外夫婦間のことは他人の当て推量など立ち入る余地などありようもないのが本当のところかも知れない。

だが、堂園さんのこの女学校勤務時代はハイライトをなし、充実した何年かであった。かの石坂洋次郎の『若い人』の主人公真崎先生に変身を遂げ、女生徒にもモテたものだ。いまもって同窓会があって招かれれば嬉々として出席をするため「北の門口」を出て行く。

さて、数十年の時間が流れた。いま彼、堂園さんはマルチーズとトメラニアンといった二匹の小犬をペットとして飼い、病妻を抱えた生活をしている。一男一女の子らはそれぞれ家庭をもって別居しているから、まことに味気ない生活である。妻は喘息の発作を起こしては入退院を繰り返し、いまは公害病患者の認定もうけ、なにがしの手当をうける身である。近くを環状道路が走っている事実によるのだ。手厚い福祉政策のお蔭である。助かってはいるが限りなく不幸なことだ。家事の一切が彼の賄いにかかっている。

小犬の散歩をさせ、買い物籠を下げる日課はもはや日常のこと、外聞を憚ることでもなくなっている。たとえば俄か雨に彼の不在の時、妻は隣家に電話をかけ、干し物の取り込みを頼むなぞ、病気にかまけ動こうとしない始末に、彼の献身は折々悲壮な感情をもたらす。いざ発作でも起ろうものなら、深夜であろうと車を走らせねばならない。喜寿をこえてなお車を捨て切らないのはボケ防止をかねてそうした悲しい奉仕のためである。

入り婿ゆえの献身、あるいは奉仕に忍従せねばならないという宿世が恨めしく思われ、堂園さんを苦しめる。懊悩は増すばかりだ。喘息の発作は多く心因によるものとしか思えない。小犬を飼う彼は小動物に溺愛を捧げて愛情の渇きを癒しでもするようすである。屋内に飼う種類だから、落ち毛が呼吸器の病に悪いということで、彼女は仇敵のように相容れぬ対峙の姿勢を頑なに崩そうとしない。小犬を仲立ちに夫婦は条件反射的に溝を掘り続けてきた。どうにもならない嫌悪を育ててきた。彼女として見れば決して夫をないがしろにするつもりはないのだが、家つきの一人娘にありがちな世間知らずの上、月並みに言う〈蝶よ花よ〉の育て方をされて、我が儘と本来の不器用をそのまま、〈童女〉の殻を抜け切らないといったフシが大いにある。相互理解の努力でどこまで許しあえるものか、互に模索し、模索して老年に至った。煩悩のレールは大袈裟に考えるなら人生の果てまで延々と敷かれているものに相違ない、とすれば結局諦めに落ち着くほかないように思える。しょせんは〈宿世の縁〉に帰りつくのだろうか。

ところで、いよいよ三回目の心痛むわかれに話題をうつす順序になろう。その日の「北の門口」はまるで堂園さんの心の底をファイバースコープででも覗いたように寒々としていた。単身赴任時代にさかのぼる日だ。

娘の上京にあい、滞在久しくなるのをなだめすかして駅のホームに立った彼だった。正月をひかえながら彼の方には帰郷の意志がまったくなかった。

堂園さんは戦後のこの時、再びの単身赴任をしていたのだ。以前にはやがての結婚をひかえ、独立独歩を目指したのだったが、こんどは少々違っていた。大袈裟に言うなら家庭からの脱出を潜在意識に置いた東京生活の願望にもとずいていた。食糧難という名分を楯にとりあえずまず単身でという思い切ったダイビングだった。

いまだ戦後荒廃の巷であったけれども、彼は存分に自由を呼吸することができた。世間一般がなにはなくとも回復した平和の中に自由をつかみ取りできる、そんな期待をもち戦後転入抑制の緩和を待って、堰を切ったような逆流現象の中へ彼も身を投げていたのだった。

娘の上京は学校の冬休みだったからだ。能う限り見物をさせ、見送る日を迎えホームに立ったのである。

発車ベルが離愁をかきたてるように鳴っていた。屋根に北国の雪を載せて「北の門口」へ入ってきて、そのまま折返しまた北国に向うような車両不足時代の貧し気な列車はベルのなり終るのを待って、ゴトリと動きはじめた。

と、その時だった。手を振ってわかれた娘が、瞳いっぱい見開いて、しかし、涙も見せずけなげな姿に頷きを与えたばかりのその娘が、デッキを飛び降りたのである。

「あっ」と堂園さんに血の凍る思いが走った。助走に入ったばかりとはいえ、列車はすでに黒々とした巨大な帯になりはじめたところであった。しかし、娘の黒い影はこぼれ落ちるかに見えて転倒はしなかった。ホームを列車の進行方向に走っていたからだ。無謀で、怖いことを知らない、一心な若さだった。母のところへ帰ることを拒み、父の懐を選んだ娘の不憫な心の内が思われ、思わぬ悔悟に堂園さんの胸は噛まれ、また、だれよりおのれの哀れに泣けてしかたがなかった。

堂園さんの「北の門口」に刻んだこれほどしたたかな思いはこれから先、生涯二度とはあるまい。

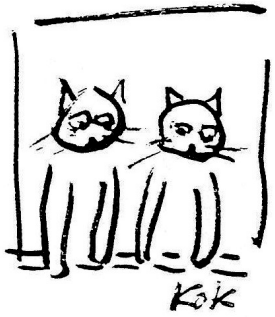
その時から何年になるのだろう。曲りなりに堂園さんの「家庭」は形骸上戦後復興を郷土を去るかたちで整え、嫁取り婿取りも終えていた。娘とのあのわかれも遠い日になるが、同じ冬の訪れは彼、堂園さんにとって辛く重い思いを積みかさねずにはいられない季節になる。妻の発作が頻繁を見るからだ。入退院が繰り返され、そのたびに彼は介護に大童を余儀なくされる。魚肉いっさい遠ざける妻の食餌の偏向に頭を悩ませ、それに自分のメニューと、炊事に奔走する労力は大変なものだ。入院してもらった方が楽という不貞な錯誤さへ頭を横切る。

二匹の小犬の老齢化もいよいよこの頃、愛撫に手数がかかる。散歩、ドックフードなど見向きもしない彼らの食餌、それに湯浴みまでさせるのだが、メラニアンの方は老耄がひどく湯槽に沈んで慌てる始末もあり、二匹とも深夜、堂園さんの面倒見が遅れると失禁が多くなっている。これらに注ぐ愛が深まるほど妻とは遠くなり小犬たちのために堂園さんの人生がある、という愚かしい始末になる。

堂園さんにも折々旅行の機会がある。そうした時、頼りにしているのが娘である。「北の門口」で無謀な飛び降り事件をおこし彼の肝を冷やすことのあった彼女なのだ。近郊の婚家から小犬たちを引き取りに来る。留守中を養ってもらうのだ。小犬たちは敏感に彼の旅立ちを察知していて警戒するのだが、なんとかごまかして家を抜けだすのだ。彼女は車を運転している。それで拉致はたやすく行なわれるのだ。もちろん妻はいっさい関与しないことだ。

なんたることか、二匹の彼らは娘の車のエンジン音を知っていてうかつにはリレーができない。タイミングが悪いと乗車拒否に会う。バトンタッチの呼吸の微妙は家族なみ、彼と娘と、二匹の彼らの間にのみ通用して、他の介入は許さないものになっている。まことに奇妙きわまる相縁奇縁というべきであろうか。

（元・一二・三一）



支店長の妻たち（二）

三戸岡道夫

いい気になって、七夕の歌をうたっている最中であった。突然

ウー、ウー、ウーッ

けたたましいサイレンが聞えて、救急車が団地の中へ入ってきた。人の気持を不安でかきむしるようなその音は、急速に近づいてきて、中庭から団地の窓にむかって、まるで吠えているようであった。

のんきに構えていた（しない会）のメンバーも、にわかに浮足だって

「ねえ、この団地の中よ」

「どうしたのかしら」

ベランダに駆け寄って、団地の中庭を見下した。

救急車は中庭の入口のところに停っていて、担架に人を乗せた救急隊員が、庭を横切るのが見えた。

「あら、あれ、極檀さんの奥さんじゃない」

「極檀さん？」

「ほら、あの後から追いかけてくる男の子、極檀さんの坊ちゃんですもの」

「あら、そう、そうよ、そうよ」

「どうしたのかしら」

担架は白い布で覆われ、その後から高校一年になる男の子が

「お母さん、死なないで」

泣きながら、担架にすがりつくようにしている。

福子は身をひるがえすようにして外に出ると、階段を足早に駆けおり、救急車の方に走った。

しかし、救急隊員の動作はす早くて、福子が着いたときには、息子も担架も車の中に消え、救急車は走り出してしまっていた。三、四人の奥さん連中が集って、その後を茫然と見送っていた。

「どうなさったんです」

福子が声をかけると

「自殺らしいんです」
「えっ、自殺！極檀さんが…」
福子の中で、一週間前のあの事が、はじけるように明滅した。
（やっぱり、あの事が原因なんだわ）
人々もそのことには気がついている。しかし、口に出しては言わない。
「高校へ行っている坊ちゃんがね、学校から帰ってきて、睡眠薬で自殺を図って倒れているのを見つけたんですのよ。わたしのところが隣なので、泣きながらとんできた、急いで救急車に電話して…。でも、あまり突然なので、わたしにも何が何だか、さっぱりわからないんですの」
「銀行の社宅での自殺なんて、始めてね」
「もし、新聞社に嗅ぎつけられると、困るわねえ」
福子が階段を上って、部屋に戻ると、
「どうでした？」
不安げな視線がいっせいに、福子を迎えた。
「睡眠薬の自殺ですって」
「自殺！」
一同はギョッとなって
「どうしたのかしら」
「きっと、先日のごたごた、あれが原因よ」
「不倫の清算？」
「…じゃ、ないかしら」
「でも、自殺するほどのことでは」
「いえ、妻い喧嘩だったらしいわよ。極檀さんの奥さん、頭に来て、離婚届けに判を押して、旦那さんに投げつけたっていいますもの」
「まあ、原因は自分の方にあるくせに」
「そこが、極檀さんの奥さんらしいところじゃないの」
救急車で運ばれた極檀令子の、夫の文彦は、明光銀行乃木坂支店の支店長である。
乃木坂支店の所属するグループは、東京第三グループで、その母店は虎の門支店。だから、虎の門支店長である今西圭太郎の所轄下にある支店である。
そういう点から言って、令子は今西福子ぐらいには、親近感を示してもよさそうなのに、彼女にはそうしたところがまったくない。また、（しない会）のメンバーにも入っていなかった。その辺が極檀令子の変ったところで、中野団地でサッチャー夫人と並んだ、変り者といわれるゆえんであった。
だが、令子の変りようは、サッチャー夫人とは、ちょっと違う。一口に言うと、変った感じがする、とでも言えばいいのか。その（変った感じ）というのに、うまい表現が見つからないのだが、要するに、令子には、なにかちぐはぐな感じがあるのであった。

一例をあげると、服装である。いつも、年令に似合わない派手な洋服を着て、道を闊歩しているが、その派手さの裏に、うす汚れた、陰気なものが見え隠れする、そんな感じがするのである。新調のニューファッションを着ていても、着こなしが、だらしない。それは、生れつきなのか、習慣なのか、福子にはよくわからなかった。
令子の社宅は、A、B、C棟と、三棟あるC棟の一階、東寄りにある。対する福子の社宅はB棟の西の二階にあって、一番遠い位置にあるので、日頃接触する機会は少く、団地の中ですれ違ったりすれば、軽く挨拶する程度である。だが、その時、銀行で夫が、福子の夫にお世話になっているなんていう素振りは、お世辞にも見せない。別に人間嫌いというのでもなさそうなのだが、要は人との付き合い方が、下手、無頓着なのかもしれない。
こうした態度は福子にだけではなく、他の人に対しても同じらしく、だから団地の中で令子と付き合っている人間はあまりいない。しかし、令子はそのことを、別に何とも感じていないようであった。でも、福子の心の中には、時として
（わたしにだけぐらいは、もうちょっと、何とかあっても、いいのじゃないかしら）
そんな思いが走る。
（わたしの夫は、あなたの夫の統轄店の支店長ですものの）
ましてや、
（わたしはこの団地の寮長ですわよ）
福子は寮長として、銀行からの指示事項を連絡したり、寮の管理の仕事を引受けている。二年前、極檀一家がこの団地へ引越してきたときにも、管理人が休んでいたので、鍵を渡し、部屋を開けてやったのも福子である。令子が留守の時など、宅急便の荷物やクリーニングを預ってやることだってある。だから、すれ違ったとき
「おはようございます」
「こんばんわ」
だけでなく
「お出掛けですか。いってらっしゃいませ」
とか
「なんだか、雨のようですわねえ」
ぐらいのお愛想は言ってもよさそうなのに、まっすぐ前を向いたまま
「おはようございます」
それだけ言って、歩いていってしまうのである。
いつのことだったか、宅急便の荷物を預ってやったことがあった。夕方になって電話で連絡すると、なんと、受取りにやってきたのは、小学校へ行っている女の子ではないか。
（冗談じゃないわよ。寮長のわたしが荷物を預って、わざわざ電話までしてあげているというのに、子供をよ

こして平気でいるなんて、非常識にもほどがあるわ。当然、自分が来るべきよ）

それ以来、福子は令子の宅急便などを決して預ってやらないことにしていた。

極檀家は、子供が二人。上が男の子で、高校一年生。下が小学校六年の女の子。長男が都立N校へ入ったのが自慢で、もう東大へでも入ったように、鼻意気が荒い。

夏休みや、春の連休などには、必ず家族揃って旅行に出掛け、昨年の夏などは、一週間もハワイ旅行に行って、顔をまっ黒にして帰ってきて、団地の奥さん連中を驚かせた。生活が万事、派手なのは、令子の性格の反映なのであろう。

「極檀さんのところ、家が資産家なのかしら」

「別にそんな話も聞いたこともないわねえ」

「じゃあ、奥さんの実家でも、いいのかしら」

「そうした噂も聞かないわ」

「それにしては、ずいぶん、派手ねえ。わたしだって、たまには一家揃って、海外旅行でもしてみたいわ」

寄ると、さわると、噂が絶えないのだが、要は令子が支店長の妻に似ず、派手ずきで、毎日、毎日を

（私は支店長夫人でございます）

と肩を張って、生活しているのが原因といっていい。言ってみれば、どこか無理をしている、それが変な感じとなって現われるのであろう。

（あれでは、旦那も出世しないわよ）

福子は腹いせに、時たまつぶやいてみたりする。ある日、夫の圭太郎へ

「極檀さんの旦那さんって、どんな人」

「どんな人って、お前、知っているんだろう」

「そりゃ、顔は知っているわよ。男前だわね。女性にもてるって噂よ。でも、ちょっと、にやけたところがあるわ。でも、そうしたことじゃなくて、支店長としての仕事の方、どうなの。将来、有望なの」

「まあ、普通だな。家では、奥さんに頭の上らないタイプかもしれない」

「奥さんがあんなに派手で、付き合い下手じゃ、旦那さんも出世しないわよね」

男前の夫と、派手で人付きあいの下手な妻、という組み合せの、少しずれた感じの夫婦ぶりを、福子は頭の中に描いてみた。

その令子が、突然、福子のところへ訪れてきたのは、つい一週間ばかり前のことだった。

珍らしいことがあるものである。妙に元気がなかった。

「どうかなさったの」

「わたし、昨日、主人と大喧嘩をしてしまったものですから」

「まあ、喧嘩を。うちでも、よくやりますわよ。夫婦

喧嘩なんて、いちいち、気にすることありませんわよ」

福子は年長者として、また寮長として、とりあえず、そんなふうに言った。日頃は、この礼儀知らずの、小なまいきな女めと思っていても、しおたれた姿で眼の前に現われてくると、何やら同情心めいたものが湧いてくる。

「どうして喧嘩なんかを。ご主人に女でも出来ました？」

「主人ではなく、その逆なんです」

「えっ、その逆？まさか。奥さんの方が…」

「そうなんです。その、まさか…。でも、まったく、誤解なんです」

珍らしく、令子はそこで涙を見せた。

令子の話をかいつまんで言うと、こうだった。

令子の隣に、加茂直人という支店長が住んでいた。亀戸支店の支店長である。関西の人間で、大阪に家があり、家族は大阪に住んでいる。いわば、大阪から東京への単身赴任支店長である。

支店長が単身赴任する場合には、単身赴任用の支店長社宅があるのだが、加茂支店長の場合には、その単身赴任寮に空き室がなかった。たまたま中野団地の社宅の一戸が空いていたのを、臨時に単身赴任寮として加茂支店長が使っていたのであった。それが、令子の隣りで、問題の原因となった。

加茂直人は長身で、苦み走ったところのある、スポーツマンタイプの人間であった。亀戸支店が支店長として、二店目の勤務で、性格が明るく、屈託のない人柄。団地の中で人と逢っても、誰彼となく愛想がよく、腰が低い。

「感じがいいわね」

奥さん連中には評判がいい。

そんな態度は令子に対しても同様で、いつか加茂直人がクリーニングに出すワイシャツを持って、うろうろしているところへ令子が通りかかって

「よろしかったら、わたしがお出ししておきますわ。うちでもクリーニング、ちょうど出すところですから」

「本当によろしいんですか。これは、おおきに。じゃ、お願いしますわ」

そんなやりとりが一、二回あって、加茂のクリーニングはいつのまにか令子の担当のようになってしまい、クリーニングが出来上ってくると、令子は加茂が帰るのを見はからって届けにいく。その程度のことは、隣同志の自然な親切だと、令子はたいして気にもとめずにいたのであるが、夫の丈彦から見れば、加茂の存在は、必ずしも快いものではなかったらしい。ある時、令子がなにかのはずみに、ふっと

「お隣の加茂さん、スポーツマンらしくて、素敵だわね」

と言ったところ、丈彦は露骨に嫌な顔をして、顔をそむけたことがあった。二人の上に、いつしか丈彦の警戒

の眼が光っていた。
しかし、令子はそうした丈彦の態度にまるで無頓着なのであった。独り暮しは不自由だろうと、おはぎを作ったときなど、ちょっと持っていったりする。行けば序に話しこんで、家に戻るのがおそくなることもあった。しかし
「本当に、それだけなんです。それ以上、何もないんです」
福子に訴える令子の表情は、真剣であった。
「何もないなら、ご主人、そんなに怒るはずがないじゃありませんか」
「こういうことが、あったんです。いつか、ワイシャツを届けて、家に戻ると、主人が銀行からもう帰って、待っていたんですね。(あら、ごめんなさい。お隣へ、ちょっとワイシャツを…)、すると主人が大声をあげて、(めしの仕度もそっちのけで、何しに行っているんだ)、すごく怒ったんですの。あまりすごい剣幕なので、わたしびっくりして、(はい)と返事して、すぐご飯の仕度にかかったのですけど…。でも、心の中では、少しぐらいおそくなったって、そんなに怒らなくたって…、なんてその時はまだ思っていたのです」
たしかにその頃から、令子と加茂との関係が怪しいという噂が、福子の耳にも入っていた。別に不倫の現場を見たというわけではないのだが、夫の留守の時間に、令子がしばしば隣家へ出入りするのを見れば、二人の間に何かあってもおかしくはないという無責任な噂が拡っていっても、仕方のないことかもしれなかった。
「でも、昨日は、やはり、ちょっとまずかったんです。怒られた直後だから、少しは注意すればよかったのに、昨日もまた、話しこんで、おそくなってしまったんです。子供の学校のこと、話しているうちに、加茂さんのところにも高校生の男の子がいて、思春期の男の子はむつかしいわねえなんて話ししているうちに、時間のたつのを忘れてしまって、はっと気がついて家に戻ると、主人がお腹を空かして待っているんですね。(まずいな)と思って、急いで台所に飛びこむと、いきなり、(いくら言っても、わからんのか。お前と隣の加茂とは、どういう関係なんだ)、あびせ倒すような言い方でどなられ、大喧嘩になったんです。わたしはちょっと加茂さんに親切にしてあげてるだけなのに、主人は疑って…」
気が強いようでも女である。令子は思い出して、泣いていた。
喧嘩のどさくさの中で、令子は離婚届に判を押して、渡してしまったというのである。
「離婚届に、判を。どうして、そんな馬鹿なこと…」
「何が何でも、押せ、押せって、すごく言うものだから、わたしも、ついカッとなって、押してしまったのです。でも、主人も怒りに任せてやったのですから、本当

に離婚なんてする気はないとは思いますけど」
「その離婚届は…」
「証拠にとっておくんだって…、銀行の貸金庫の中に納ってあるって、言っています」
夫婦喧嘩で離婚届に判まで押すなんて、聞いたこともないことだった。令子の夫は、見かけはおとなしそうだが、こちらも少し変人なのかもしれないと、福子は思った。
「でも、うちの主人、執念深いところがあるものですから、ちょっとは心配なのです」
「二回も同じようなことが続いたので、旦那さんも、カッとなって、そこまでエスカレートしたんじゃありませんか。夫婦間のことですもの　時間がたてば、治りますわよ、きっと」
そうとでもなぐさめるよりほかに、福子には言いようがなかった。下手に尻馬に乗って、離婚届を回収しないと危険だなどとそそのかせば、火に油を注ぐ結果になりかねない。
「奥さまにお話ししたので、すこし気分が楽になりました」
令子はそう言って、帰っていった。派手な服装で闊歩している姿はそこにはなかった。
(要は、世間知らずなんだわ)
そう思うと、令子への親近感のようなものが、すこし
福子の中に湧いてきた。
大喧嘩があって二日目に、加茂支店長は目黒にある支店長単身赴任社宅へ引っ越していった。鳥が翔びたつような、あわただしさであった。事情を察知した人事部が、急拠手配いしたのにちがいない。たとえ臨時とはいえ、単身赴任支店長を家族寮へ入居させ、いつまでも放置しておいた人事部の担当者は、ひどく叱責されたという。
噂はぱっと、銀行の中に拡がり、極檀丈彦は好奇の眼にさらされ、家に帰ると
「お前のおかげで、いい笑い者になった。銀行員の妻として失格だ」
二人の冷戦状態は、日毎に拍車がかかっていったようであった。
そんな動きの中での、今日の自殺騒ぎであった。福子には、令子の気持がわからないではない。だが、
(自殺とは、ちょっと大袈裟じゃないかしら)
令子の変った性格が、こんな所にも現れている感じがした。
(狂言ではないのか)
あの令子ならば、やりかねない。
派手な洋服を着て、肩を張って歩くように、夫婦喧嘩もオーバー・アクションなのかもしれない。だが、いくらオーバー・アクションでも、自殺となると、少し度を越してはいないかと、福子は思った。

の眼が光っていた。
しかし、令子はそうした丈彦の態度にまるで無頓着なのであった。独り暮しは不自由だろうと、おはぎを作ったときなど、ちょっと持っていったりする。行けば序に話しこんで、家に戻るのがおそくなることもあった。しかし
「本当に、それだけなんです。それ以上、何もないんです」
福子に訴える令子の表情は、真剣であった。
「何もないなら、ご主人、そんなに怒るはずがないじゃありませんか」
「こういうことが、あったんです。いつか、ワイシャツを届けて、家に戻ると、主人が銀行からもう帰って、待っていたんですね。（あら、ごめんなさい。お隣へ、ちょっとワイシャツを…）、すると主人が大声をあげて、（めしの仕度もそっちのけで、何しに行っているんだ）、すごく怒ったんですの。あまりすごい剣幕なので、わたしびっくりして、（はい）と返事して、すぐご飯の仕度にかかったのですけど…。でも、心の中では、少しぐらいおそくなったって、そんなに怒らなくたって…、なんてその時はまだ思っていたのです」
たしかにその頃から、令子と加茂との関係が怪しいという噂が、福子の耳にも入っていた。別に不倫の現場を見たというわけではないのだが、夫の留守の時間に、令子がしばしば隣家へ出入りするのを見れば、二人の間に何かあってもおかしくはないという無責任な噂が拡っていっても、仕方のないことかもしれなかった。
「でも、昨日は、やはり、ちょっとまずかったんです。怒られた直後だから、少しは注意すればよかったのに、昨日もまた、話しこんで、おそくなってしまったんです。子供の学校のこと、話しているうちに、加茂さんのところにも高校生の男の子がいて、思春期の男の子はむつかしいわねえなんて話しているうちに、時間のたつのを忘れてしまって、はっと気がついて家に戻ると、主人がお腹を空かして待っているんですね。（まずいな）と思って、急いで台所に飛びこむと、いきなり、（いくら言っても、わからんのか。お前と隣の加茂とは、どういう関係なんだ）、あびせ倒すような言い方でどなられ、大喧嘩になったんです。わたしはちょっと加茂さんに親切にしてあげてるだけなのに、主人は疑って…」
気が強いようでも女である。令子は思い出して、泣いていた。
喧嘩のどさくさの中で、令子は離婚届に判を押して、渡してしまったというのである。
「離婚届に、判を。どうして、そんな馬鹿なこと…」
「何が何でも、押せ、押せって、すごく言うものだから、わたしも、ついカッとなって、押してしまったのです。でも、主人も怒りに任せてやったのですから、本当

に離婚なんてする気はないとは思いますけど」
「その離婚届は…」
「証拠にとっておくんだって…、銀行の貸金庫の中に納ってあるって、言っています」
夫婦喧嘩で離婚届に判まで押すなんて、聞いたこともないことだった。令子の夫は、見かけはおとなしそうだが、こちらも少し変人なのかもしれないと、福子は思った。
「でも、うちの主人、執念深いところがあるものですから、ちょっとは心配なのです」
「二回も同じようなことが続いたので、旦那さんも、カッとなって、そこまでエスカレートしたんじゃありませんか。夫婦間のことですもの　時間がたてば、治りますわよ、きっと」
そうとでもなぐさめるよりほかに、福子には言いようがなかった。下手に尻馬に乗って、離婚届を回収しないと危険だなどとそそのかせば、火に油を注ぐ結果になりかねない。
（要は、世間知らずなんだわ）
そう思うと、令子への親近感のようなものが、すこし気分が楽になりました」
令子はそう言って、帰っていった。派手な服装で闊歩している姿はそこにはなかった。
（自殺は、世間知らずなんだわ）
そう思うと、令子への親近感のようなものが、すこし

福子の中に湧いてきた。
大喧嘩があって二日目に、加茂支店長は目黒にある支店長単身赴任社宅へ引っ越していった。鳥が翔びたつような、あわただしさであった。事情を察知した人事部が、急拠手配いしたのにちがいない。たとえ臨時とはいえ、単身赴任支店長を家族寮へ入居させ、いつまでも放置しておいた人事部の担当者は、ひどく叱責されたという。
噂はばっと、銀行の中に拡がり、極檀丈彦は好奇の眼にさらされ、家に帰ると
「お前のおかげで、いい笑い者になった。銀行員の妻として失格だ」
二人の冷戦状態は、日毎に拍車がかかっていったようであった。
そんな動きの中での、今日の自殺騒ぎであった。福子には、令子の気持がわからないではない。だが、
（自殺とは、ちょっと大袈裟じゃないかしら）
令子の変った性格が、こんな所にも現れている感じがした。
（狂言ではないのか）
あの令子ならば、やりかねない。
派手な洋服を着て、肩を張って歩くように、夫婦喧嘩もオーバー・アクションなのかもしれない。だが、いくらオーバー・アクションでも、自殺となると、少し度を越してはいないかと、福子は思った。

※　※　※

その夜も、福子の夫の圭太郎が帰ってきたのは、もう十一時半を廻っていた。

帰りが遅いのは、毎度のことで、福子はもう慣れている。

（支店長の夜は忙しい。お客さんの接待、上役、同僚との付き合い、支店の行員たちとの懇親…）

支店長の帰りが毎晩早いようでは、出世はのぞめないと、覚悟している。

それに加えて圭太郎には、もう一つ、公然と夜遅くなる口実があった。男たちの（しない会）であった。これが、夜、飲み歩く大義名分になる。

女たちが（しない会）を作っているように、男たちの方も、（押切支店長を役員にしない会）を作っているのである。妻たちの（しない会）が多分に感情的なものであるのに対して、夫たちの会の方には、それにプラスなにがしかが、付け加わっている。

妻たちの動機は

（サッチャー夫人の旦那などに、役員になってほしくない）

というごく単純なものであるが、男たちの動機には

（押切哲夫などが役員になって、人事部長のポストに座ってほしくない）

という、仕事上の反発が上乗せになっている。あんな男が人事部長になって、我々の人事が左右されるなんて、まっぴらご免だという、男の意地みたいなものである。だが、更に、もう一つその底をさぐれば、人事部長を出すのなら、我が派閥から出てほしいという願いもある。

だから（しない会）男性版は、単に女性版のコピーではなく、構成メンバーも、多少異っていた。が、ともあれ、彼等はそれをだしにして、しばしば酒を飲み、

「今夜は、しない会だった」

と言えば、帰宅するのが遅くなっても、妻たちは文句を言わないということになっていた。

福子は夫の脱いだ洋服を、手ばやくハンガーに掛けながら

「おかえりなさい。今夜も、しない会？」

わざと、とぼけて聞いてみる。

「いや、百川常務との麻雀だ」

「今日、わたし達は、（しない会）だったのよ」

「今日は七夕さまだったな。また、おばたりあんが集って、笹の葉さらさら、を歌ったのか」

「歌ったのよ。ところが、大変。歌っている最中に、極檀さんの奥さんの自殺事件で、救急車が来るやら、大さわぎだったの」

「そうなんだってな、銀行の方だって、大変だった。人さわがせな奴だよ」

極檀丈彦が支店長を勤める乃木坂支店は、圭太郎の虎の門支店の統轄下にあるから、その支店長に事件が起れば、当然圭太郎の方へも及んでくる。

「奥さんが自殺して、救急車で病院へ運ばれたというから、びっくりして、すぐ病院へ行くよう指示したのだが、発見が早かったから、生命に別条ないということで、ほっとした」

「坊ちゃんが学校から早く帰ってきて、よかったのよ」

「うん。でも、自殺というより、睡眠薬の飲みすぎということらしい。喧嘩の後のごたごたで、精神的にまいっていた。旦那と子供を送り出したあと、睡眠薬を飲んで寝たんじゃないのかな。それが分量が少し多くて、子供が帰ってきても目を覚さない。子供はびっくりして救急車をと、どうもそんな具合らしい」

「でも、とにかく、助ってよかったわ。救急車が入ってきた時は、本当にどうなることかと思ったもの。でも、同じ団地の中で自殺さわぎなんて、嫌だわねえ。なんだか、寮長のわたしの責任みたいな気がして、気が重いわ。また、サッチャー夫人から嫌味を言われそう。いやだなあ」

「そんなの、お前が気にすることないさ。お前とぜんぜん関係のない出来事だもの」

「それは、そうと…」

と、福子は気分転換に話題を変えて

「今日、（しない会）へ、新入りメンバーが一人あったのよ。ほら、加納さんの奥さんよ」

「ああ、新橋支店の副支店長だろう。彼も、もう直き、支店長だな」

「あら、やっぱり、そう。本当なら、あの奥さん、よろこぶわ」

「彼、麻雀、うまいかなあ」

「麻雀？　そんなこと、知らないわ。でも、最近の人は、あまり麻雀やらないじゃないの。若い支店長をあまり麻雀に引っぱりこむの、よくないわよ」

「いや、支店長ともなれば、そんなこと言っていられないさ。客の接待に麻雀は欠かせないし、それに、上役との付き合いにも、麻雀、ゴルフの出来ない奴は見込みないよ。我々はそうやって鍛えられてきたんだ。時には、百川常務へ新人を紹介しないとな、同じメンバーばかりでは飽きられる」

「まるで生け贄ね。百川常務って麻雀のプロなんでしょう。そんなところへ素人を引っぱりこむの、かわいそうよ」

「素人か、どうか、やってみなくちゃ、わからない。素人だなんて言いながら、めっぽう強い奴もいるからな。一度、奥さんに聞いといてくれないか、麻雀、どうかって」

「嫌ですよ、そんなこと。自分でお聞きになればいい

のに」

「と言って、直接本人に聞くわけにもいかんしな。そうだ、新橋支店の支店長にでも聞いてみよう」

「あなただって、百川常務さんとの麻雀、いい加減にした方がいいわよ。付き合っていたら、きりがないもの」

もちろん、福子にも百川常務との付き合いが大切だということは、わかっている。サラリーマンの出世に、付き合いの効用は大である。福子がほどほどにと言っているのは、夫の健康が気がかりだったからである。圭太郎は肥り気味で、近頃血圧が高い。この前の人間ドックでは、糖尿の気を指摘されている。その証拠に、最近ではすぐ

「疲れた、疲れた」

を連発する。酒も飲みすぎると、翌日に残るという。

「若い時とは違うんですから、自分で気をつけて下さらないと」

夫の健康管理の責任の半分は妻にあるといっても、そうそう一から十まで、かまっていられない。

「うん、わかっている。だが、百川常務との関係は、もう十年以上だからな。俺はいま重要な時期にいる。役員になれるか、なれないかの、瀬戸際だ。それには、なんといっても、百川常務が頼みの綱さ」

「でも結城部長さんのように、あまりお付き合いをしなくても、偉くなる人もいるわ」

「奴は別格さ。仕事が出来る。頭が切れる。しかし、仕事だけを認められて出世する人間なんて、稀だからな。それに奴だって、表面では何もしてないような顔をしながら、裏では何をしているか、わかったものではない。とにかく、百川常務は将来の頭取候補だという噂が高いからな。俺は百川常務に当分しがみついているんだ」

「あら、頭取への最有力は、武士田専務さんじゃないんですか」

「うーん、最近は、必ずしもそうとは限らなくなってきた。たしかに、これまでは、武士田専務が有力だったが、最近は百川常務の株がぐんと上ってきた。だから、武士田専務を追い抜くことも、夢ではなくなってきたな」

明光銀行の上層部には、二つの派があった。武士田専務派と、百川常務派である。武士田も百川も実力があり、人気も高いので、行内の人脈は自然とこの二人を中心に形成されていた。

副頭取は三人いたが、いずれも次期頭取を狙えるような人物ではなかった。だから次期頭取は武士田専務だというのが、これまでの定説であった。来春、武士田専務の副頭取昇進は、間違いないと一般は見ている。ところが最近、百川常務が実力をつけ、めきめき頭を上げてきたので、百川常務も一緒に副頭取に昇格するかもしれないという噂が、飛びはじめていた。

「押切さんのご主人は、武士田専務にべったりなんでしょう」

「ああ、奴は専務の腰巾着だ」

「じゃ、押切さん、困るじゃないの」

「困ればいいさ。これで我が軍が、優勢になってきた、というわけだ」

押切哲夫が専務派で、今西圭太郎が常務派というのは、最初から別に意識して、そうなったのではない。これまでの長い銀行員生活の中での出逢いが、そういう結びつきを作ってきたのであるが、夫々の親分がライバルであることが、その仔分たちのライバル意識を更に煽っていることは、否定できない。

押切哲夫と今西圭太郎の年令は、一つ違いである。圭太郎の方が一年、入行が早い。しかし、男が四十才の半ばを越えれば、一年ぐらいの差はけし飛んでしまう。圭太郎は虎の門支店長、押切哲夫は渋谷支店長と、いずれも母店長のポストに到着し、今は同じスタートラインに立って、役員の座を狙っている。

福子が寮長という役を引受けているのも、その夫の出世と関係がないわけではない。妻が寮長をやっていれば、銀行からその功績を認められようし、それに、支店長の奥さんたちとの接触が自然に多くなるから、夫の支援者をふやし、人気を高めるのにも役立つ。本部の部長、役員を狙うのには、実力もさることながら、人気、評判が絶対大切である。その点は自分の方が、押切英子より勝っていると、福子はひそかに自負している。

「押切さんが役員になって、やりたいのは人事部長のポストなんでしょう」

「うん、本部の部長でも、経営陣に一番接近できるのは、人事部長だからな。彼は以前、人事部の人事課長をやっていた、人事部一家のメンバーだ。人事部長のポストは、人事部出身者がなることが多いから、彼もそれを狙っているのさ」

「だから、俺はエリートだって顔して歩いているのね」

「これまでに、人事部長が役員でなかった例はない。明光銀行では、秘書役をやった人間と、人事部長をやった人間は、絶対役員になっている」

「でも、百川常務の勢力が強くなってくると、押切人事部長の線も危くなってくるわね」

福子は頭の中で、何かを計算するようにそう言った。現在人事を担当している役員は百川常務であり、従って現在の神林人事部長は当然百川派の人間である。

銀行経営の中心は人事権であり、人事権は絶対である。だから、誰もが人事担当の役員になりたがり、人事部長になりたがる。武士田専務も副頭取昇格を機に、自分の仔分の押切哲夫を人事部長の席につけて、人事権を自分の勢力下に抱えこむのを狙うのは当然である。

だが、百川常務の方もいったん握った人事部長のポストを、そう易易と武士田側に引渡すかどうか。百川常務

の勢力が上昇気流に乗ってきたとなれば、尚更である。今後しばらくは、人事部長のポストをめぐって、武士田派と百川派との暗躍が、続くのは、まちがいない。

（だが、要領のいい押切のことだから、奴なら、なんとか、それをうまく乗り切るかもしれないな）

すると、突然、福子が

「あなたが人事部長になればいいのに」

あまり簡単にそう言ったので、言われた圭太郎の方がびっくりして

「馬鹿を言うなよ。俺は野線部隊長だ。本部向きじゃない」

圭太郎は銀行へ入行以来、本部の経験は一度もなかった。支店長になってからも、支店廻りばかりで、今の虎の門支店が五度目である。人によっては、その途中で、本部の次長や副部長をやり、また支店長へ、というコースを踏む支店長も多いのだが、圭太郎は野線一本槍であった。

その夜、二人が床についたのは、十二時もかなり廻った時間であった。

蒲団に入って、しばらくすると、何か異様な声が、外から聞えてきた。人を一生懸命呼んでいるような声である。寝静まった団地の闇のなかを、這うように伝わってくる。

「おーい、おーい」

とその声は聞えてくる。

「おーい、開けてくれ」

福子は枕許のスタンドをつけて

「ねえ、あなた、また、あれよ」

二人は耳を澄ませた。

「押切さんのご主人よ。また、酔っぱらって帰ってきて、締め出されたんでしょう」

「そうらしいな」

時々、サッチャー夫人のところでは、こうしたことが起るのであった。夫が酒に酔って十二時すぎに帰ってくると、サッチャー夫人は寝てしまって、戸を開けてやらないのである。

「おーい、帰ったぞ、開けてくれ」

でも、知らん顔。酔った夫は、ドアの外で、いつまでも

「開けてくれ、開けてくれ」

と叫びつづけ、それが寝静った団地のなかに、聞えてくるのであった。

「かわいそうに。いい加減に開けてあげればいいのにねえ」

「結局、いつも、どうするんだい」

「知らないわ、そんなこと。最後まで聞いていたことなんて、ないから」

「まさか、野宿ってわけでもないだろう」

「最後は結局、開けてやるんでしょうけど。いつか、締め出された押切さんのご主人に、夜おそく逢ったっていう人から聞いたけど、ご主人、仕方がないから、もう一度飲むんだって、駅の方の飲み屋へ戻って行ったそうよ。逆効果ね」

「鉄の女、他人に強いだけじゃなく、自分の旦那にも強いというわけか」

「きっと、生れつき、酒飲みが嫌いなのよ」

いつか福子も一度、押切哲夫とサッチャー夫人が、玄関のところでもみ合っているのを見たことがある。その夜はまだ時間も早かった。早いといっても、もちろん十時半はすぎていたが、

「あなた、本当に、いい加減に、お酒、やめてくださいよ」

だが、正体なく酔いつぶれた押切哲夫は、まるで鼻歌を唄うように

「お酒のむな、お酒のむなの、ご意見なれど、よい、よい」

「なにが、よい、よい、ですか」

「ちとや、そっとの、ご意見なんどで、酒やめられましょか…」

「歌なんか、うたってる場合じゃありませんよ。本当に、困るわねえ。こんなところ、人に見られたら、役員への道がパアですわよ」

押切哲夫は昼間は冷静な支店長のタイプなのだが、酒が限度を越えると、人が変ってしまう。昼間の仮面の重さが、夜になると崩れ落ちるのでもあろうか。

それをサッチャー夫人は恐れているのである。折角こまで昇りつめてきた出世街道を、酒のためにしくじったのでは、泣くに泣けない。

いつのことだったか、酔っぱらった押切支店長を、同僚が家まで車で送っていったら、出迎えたサッチャー夫人が、すごい権幕で

（うちの人に夜おそくまで、お酒を飲ませないでください）

と叱りつけたという。

（冗談じゃないよ。酒を飲ますのは、そっちの方じゃないか）

同僚の支店長がこぼした話は有名である。

「さあ、サッチャー夫人、今夜も長びきそうだから、寝よう、寝よう」

スタンドを消して眠りに入ったが、戸外では、まだしばらく

「おーい、開けてくれ」

低く、長く、声はつづいていた。

（つづく）

語りたくない、でも、語らねば……

其の（二）

山口健二

苦しいから手足をもがく。泳ぎを知らない山路のもがきは、海面に浮び上るのに適していたとは云えない。只むやみに手足をもがいていただけであったが、救命衣が胸につけてあったからであろう。ポカリと云う感じで、青空が一瞬見えた。一息夢中で空気を吸いこんだところで、又再びゾゾゾーと水中に引きこまれた。それは足を引っぱられる感じであった。

〝ああ！船が吸いこんだな〟

と考える力はあった。〝今度は駄目かな〟と云う想念も頭の片隅を走った。

だが二三秒にして、大きな海のうねりの表面に浮び上った。海の水は泥の様に感じられた。船が吐き出した油であろう。遠くひとかたまりの人間が、ひっくり返ったボートの底に立ち上って、軍歌と思える歌をうたっている。絶叫している。

〝兵隊じゃないな。船員だ。こんな目に何度も会ったことのあるヤツ等だ〟

山路の頭の中に、かすかに、ガダルカナル・スマトラ・オーストラリアの海に海没した日本艦船のことが走った。海の大うねりの山に在るときには、はるばると広い視野が眼前に開いた。何名か見覚えのある兵士の顔も見えた。

手のとどく位のところに辰羽丸の甲板にあった便所の扉と思える縦一間程の板が浮んでいるのが目に入った。命のあるなしは、まさに瞬時の出来事がものを言う。中国の大陸で支那軍と壕に入って対峙している時を例にとれば、二人のうちの片一方の兵が何の気もなしに背を延ばしたその瞬間にシュウッと飛来した弾丸に、かれの頭は射ちぬかれ、その弾丸と並んで飛来したもう一発の弾は、もう一人の兵の鉄甲にすべって、かれを壕の中に横倒しにしただけで命をうばうに至らなかったと云う事実もある。まことに命は、人間の予想など、顧りみることなく瞬時、瞬間に去来するものである。

この時の、一枚の扉が、山路を、いやかればかりでなく、かれの部下の兵数名の命を、拾ってくれたのだ。

海の大うねりを縫って、アメリカ国の飛行機は、何度も頭上に飛来の音を響かせ、ダダダッ、シュッ、パッパッと機関銃を打ち込んで来た。山路の周囲の海にブッポンと小銃の音がした。これは、敵の飛行機に対して発せられた小銃音ではなく、小銃を手ばなさずに海に入った兵士が、〝これまで〟と自分の体に向けてはなった銃の音と聞えた。

一枚の扉によじ登った山路は、その真中と思えるところに坐った。扉は海中に沈み、山路の膝までは海中にあった。波の大うねりの上にある時は、あたりが見える。かれは、すぐそばを泳いでいるかれの小隊の兵、K、Y、Wに大声で呼びかけた。

〝おおい、、、こっちへ来い。此れにつかまれ、、〟

山路の心の中に、大海の中に独りぼっちでない自分をみつけた安堵と、自分はかれらという部下があったんだという思いが入りみだれて去来した。WとYが、どうやら山路ののっている板のはしにつかまった。山路の膝まであった海水は腹のところまで高まった。

〝山路少尉！助けて呉れ〟

右側五米程離れたところに、真青になったI軍医中尉が泳いでいた。もうこれ以上は駄目だ、という思いと、

碌に兵隊の苦労もせずに、二三ケ月で中尉という肩章をつけ、山路に敬礼をさせる軍医に対する憎しみが瞬間的にあたまの中を走って、山路はそっぽを向いた。でもかれは板まで泳ぎついて端に取りついた様であった。が、山路は、それ以来、日本敗戦まで、ついにこの軍医と顔を合わせる機会はなかった。

南洋の海は暮れ易いのであろうか。いや午後三時過ぎに沈められて、生きることに必死であった山路には、時間の経過ということは、脳中になかったのだ。大うねりの底に沈められた時は、あたりは真暗になった。

でも、かれには、これが命の終りだという思いはなかった。それは多分、かれがまだ士官候補生養成の学校にいた時分、そこの区隊長の大尉が、区隊長というのは、生徒が、一般歩兵、機関銃、通信等、その使う武器によって〝区〟という分類であって、山路は歩兵砲区隊であったが、その区の校長と云った所である。その大尉が講話という形式の学科の中で、

〝わが国は、たとえ兵力劣勢のため、一部で戦闘に敗れることがあっても、必ず援軍と云うものが来て助けてくれることになっている。お前らは、その様な立場に立ち至っても、断じて絶望することなく死力を盡さねばならぬ〟

と訓辞めいたことを断言したことがあった。

山路は、上等な士官候補生でなかったばかりでなく、

卒業の時に提出することになっていた「軍人勅諭」の清書も、遂に、うつ然とした反軍的な気分で書かずに、恐らく最後尾の序列で曹長の位階を貰って卒業したのであった。が、妙にこの区隊長の言った〝必ず援軍が来る〟と言う言葉を愚直にも信じていたようであった。いや、かれには〝皇国に命を捧げる〟とか〝鬼畜米英〟とか巷間もてはやされた考え方は薄かったのだから自分の命を保ちつづけるのに都合のいい言葉として〝必ず援軍が来る〟という区隊長の言葉を覚えていたのであろう。

南太平洋の波のうねりは、山路と数名の兵をある時はうねりの頂上に運び上げ、ある時には深いうねりの谷間に沈めながら、既に機銃の掃射を続けていたアメリカ国の飛行機の気配も消えて、薄暗くなりかけた谷間の底から仰ぎみた山路の目に、船のマストの先だけがちらりと見えた。その時あたまにひらめいた考えは、

〝援軍が来た！〟ではなくて、〝戦場掃除だ！〟と云う術語であった。こんな術語が実際あるのか、その様なことが、この戦争中に行われていたのかどうか、それから五十年たった今日でも山路にはあきらかでない。ただ山路が大学と云うところで、法律と云うものの講義をたまさかに受けていた頃、最早その教授センセの名前も忘れてしまったが、田岡とかいう方で後に京都大学へ移った国際法のセンセであったが、〝戦場掃除〟ということを口にされ、続いて、国家間の條約で守られているものは、全くないと言ってもいい、と言葉を添えられた様に記憶する。

だが、どうして、こんな大洋の真只中で、生死を分かつ瞬間に、このような言葉が、ひらめいたのであろうか。それは全く頭脳の働きの妙というより外にない。夢という現象も頭脳の働きの解けない謎を我われに常日頃、あたえているところで、遂には生きていること自体が、夢か、うつつか、幻か、と迷いこむことさえある。そしてハッと我れに返るということになる。

大うねりの暗い底で、ちらりと仰ぎみた船のマストの先と覚しきものは、ゆらりゆらりとゆれて、やがて大うねりの中途から頂上へと流されあがった山路の目に、すぐそこに床に寝て仰ぐ天井位の高さに、駆逐艦より更に小さいと思われる船の全体が横たわっているのが入って来た。日本国の船だというたしかな思いは、なかった。只、甲板を走る人影は褐色にかすんだ。その人影は、甲板から縄を、海面めがけて投げているのであった。

〝どこの国の船でもいい。あの甲板へあがりたい〟うねりの頂きから甲板は手がとどきそうであった。船はうねりの底に入ったのだ。板の上に全力をかけて立ちあがった山路めがけて縄が飛んだ。〝お前ら先にゆけ〟かれは板の端に辛うじてつかまっている小隊の兵に叫んだ。このことは真暗な洞窟の闇と、飢えにぬりこめられた島での敗戦までの三ケ年を通して、山路にとって、たったひとつのかすかに明るみをあたえてくれる出来事であった。

〝よくもまあ、、、あの追いこまれた生死の瞬間に兵を先にあがらせたもんだ！〟二三の兵は猿のような勢いで甲板に拾われた。

〝まだショウコウがいるぞ〟

縄は山路めがけて飛んだ。手につかむことは出来たが、再び波のうねりは、かれを波の谷底に運び、今まで手のとどきそうになっていた砲艦らしい船の姿はマストの先きだけが見えるまで遠ざかっていた。これは、まこと文字の通り命の縄であった。

波のうねりは、ゆっくりと山路を、水平線まで見渡せる高みへと運んだ。もうあたりや、遠くを見る心のゆとりはない。残った全身の力をふりしぼって命の縄を引いていた。だが全身海水につかった身体の重さは、かれを、すぐ手のとどきそうな甲板まで引き上げてくれぬ。別の水兵が、縄を輪にして投げた。投げ方がうまかったと云うほかない。その輪は山路の頭からスポッと落ちて、その輪にすがると身体が浮き上った。甲板上に三名の水兵が縄を引いているのがわかった。

山路はよろめきながら甲板に立った。水兵は日本人であった。場所は船尾らしく、一台の高射砲が空にむけられ、射手の兵が一人、その砲のむきをぐるぐると廻しているのが目に入った。〝まだ飛行機がいるんだナ〟と云う刺戟が全身を走った。

何時間、意識を失っていたのであろうか。目があいて、あたりをぼんやり見ることが出来た。狭い船底の部屋には、腕や足を接し、背中や腹をふれ合いながらぎっしり人間が横たわっている。

〝オレは、海の中から拾われたんだ〟

おぼろげな記憶が、かたちを整えずに脳の中を走った。かれの右隣りに横たわっている人間が、顔には全く覚えはなかったが、今迄見たことのない美少年に思はれた。そして、かれは自分の身体の中心にある生殖器が、むくむくと固く立って来るのを感じた。このことは、かれの七十四年の生涯の中で、片手の指で数えるぐらいしかない不思議な経験の一ツであった。

身体のそこが熱く固くなると、頭の中にかたちなく去来していた思いが、少しづゝ形づくられていった。

〝オレは、海の中から、この船の者に救い上げられたんだ〟

考えがそこにゆきつくと、甲板に立ったおのれの姿が朦朧と浮び上り、〝ヤマジショーイ〟と云う遠い海上からの呼び声が聞えて来た。それは甲板に立ったかれに必死に助けを求める声の様であった。山路はその声に、耳をふさぐ思いで、自分が拾われた舷を離れて、それは左舷と

思われたが、ことさらに自分がもがき苦しめられた海に別れを告げたい衝動にかられて右舷の側に歩いて、船側を見た。その足どりは、自分では、しっかりしていると思ってはいたが、水兵の一人が肩を貸してくれたようであった。その艦側の海面に、丁度一杯のボートが、それは海没した辰羽丸とは別の、轟沈ではなかったのであろう、輸送船に積みこまれた救命ボートと見た。そのボートが山路の立った右舷に近づいた。そこでも数名の水兵によって縄が投げられた。そこえ、波の大うねりが押しよせて、救命ボートは山路のいる艦の横腹にドスンと音たててぶつかった。ボートに満載された兵員は、どっと縄にすがろうと片側に寄った。バクッと云う音が聞こえたように山路には思えた。救命ボートは兵を抱えこんだままひっくり返って腹を見せた。

〝アッ！いかん〟

山路は言葉にならぬ息を呑みこんで、艦側に背を向けた。腹を見せて、傘のようにかぶさったボートの中から脱出することは、もう出来ない。絶望というものだ。その絶望をふり切って艦側を離れた山路の目に、艦底に降りゆく階段の入口に四五本の日本刀が立てかけられているのが、チラリと目に入った。

〝こいつらは刀を持って海に入ったんだな〟

刀を捨てて海に飛んだおのれを悔いる思いがあたまをかすめた。

艦に拾われてから艦底に降りていったまでの、この様な記憶が、横たわって、あたりを見まわしているあたまに、切れぎれ、ばらばらに、キュウビズムとか超現実派とか称されている画かきや彫刻家の作品のように、それとは定かにつかめない幻影となって縦横にあたまの中を馳けめぐるのであった。

〝はて、、、何時間、此処に寝ていたんだろう〟

〝オレは、海から拾われて、この船の艦長に、礼のアイサツをしたろうか〟

〝オレの小隊で、何名海から拾われたろうか〟

そう云うまともな想念が浮んでくるまで、意識がもどって来た。

山路は、ガバと飛び起きた。足は、かれの身体をしっかりと支えた。

〝そうだ艦長にアイサツするのが先だ〟

かれは、その艦底の部屋を出ると、水兵にたずねながら細長い艦長室にたどりつき、海軍大尉の前に立っていた。山路は思いっ切り元気と、拾われた有難さを示そうと、大声で怒鳴るようなアイサツをしながら敬礼していた。その大尉は、山路より四ツ五ツ年長にみえた。真赤になった顔をニコヤカにくずしながら山路の肩をたたき、励ましの言葉を云ったのだが、その言葉は、全身を固くこわばらせた山路の耳には捉えられなかった。〝真赤な顔〟〝ニコヤカに微笑んだ顔〟だけが鮮やかに、それか

ら五十年たった今日でも山路のあたまに焼きついている。かれとは、これが最初の出会いであり、最後の出会いでもあった。と云うのは山路がトラック島春島で、営々と島防衛に追われている間に、かれは、フィリッピン、レイテ湾のアメリカ軍上陸艦隊への日本海軍の切込み作戦に参加して戦死している。かれがエンダビー沖における輸送船団の壊滅的な海没について、どこから、どのような命令をうけて山路たちを拾ってくれたのか、全く山路の知り得ることではなかったが、あとあと、かれは艦長の〝真赤な顔〟は、かれが、その前日のトラック島海軍、空軍基地の壊滅に、やり切れない気持ちを手許にあったウィスキーがぶのみで、まぎらわしていたのではなかろうかと、この艦長の顔と人間味を殊更になつかしく偲んでみるのであった。

〝一体俺は何時間ねていたんだろう〟

うすぐらい艦底では時間はわからない。ようやく、甲板までよじ登って立った。右に左に果てしなく広がり、沈みかける船や、そこから海中にのがれ出た将兵を点々と、あるいは、かたまりになってばらまいていた海は消えて、鼻の先程に近く、長い島が横たわっていた。夕陽は、その島影に沈みかけ、更に遠く別の島影をうつし出していた。

〝オレは、二十四時間寝てたんだナ〟

二十四時間前に、かれが甲板に引き上げられた時に、一番初めに目に入った艦尾の高射砲は、矢張り、天の一角を指し、一人の水兵がその砲の向きを変える構えで砲側に中腰になっている。アメリカの飛行機の攻撃をかいくぐって、この島に近づいたのか、それともこれからの敵の攻撃に対する構えであろうか。山路の全身をなましい恐怖が走った。今まで、かれが感じたことのない恐怖の衝撃であった。〝殺し合う〟。戦争ということは、この山路が瞬間全身に感じた恐怖を、狂気が、押しつぶして空中に四散せしめねば行われないことだ。

〝あの島にあがりたい。艦の甲板では、一丁の高射砲はあっても、甲板には身をひそめる所はない。辰羽丸のように、一パツ食えば、海に逆戻りだ！〟

山路の心には、命を拾ったと云う思いの裏に、もうこの命をなくしたくないと云う希いが、波のように広がり、かれの全身を包んでいたのである。島につきたい。土の上に立ちたい、そして岩盤の影に、あるいは掘った穴にでもいい、身を秘めたい。

山路ら松本五十九連隊の生きのこり将兵は、何やら魂を失った木偶となって、島の崖っぷちに、それでも辛うじて軍隊できたえられた身動きと号令に支えられて並んでいた。師団長の査察だと云うのである。最早、山路の

心の中には、軍隊で二次的にたたきこまれた階級の意識は、か細く消えかかり、かれの前を数名の幕僚と覚しい男たちと通りすぎる背の低い、中将の襟章をぼんやり眺めていた。

此処で山路が知ったのは、かれの小隊で、遂に海に没してかえらなくなった兵は、二名であると云うことであった。兵どうしは仲間であるから悲しみもあったであろうが、山路には兵を失ったことを悲しみ悔む心のゆとりはないようであった。

南洋の夕陽の沈み方は、あわただしい。先程まで、明るさを漂わせていて山路の心のくずれるのを支えていた夕陽は、姿を消し、どっとくら闇がせまった。火や、明かりは、戦場には禁物である。ようやく、先発隊から支給された一本の懐中電灯を点滅して、身のまわりを整えねばならぬ。先発隊の手を通して、海中になくした軍刀のかわりに、曹長刀と称される刀と、掌の中に入る程小さいコルト拳銃がわたされた。〝こんな刀切れるんかな〟〝原隊で、曹長の位階で見習士官をやっていた時分、普段は指揮刀であったが、儀式など事ある時には、予備士官養成学校を卒業する時に、一振り八十五円で買わされた日本刀を腰につるした。そんな日本刀でも、官給の曹長刀よりは切れそうであった。然し、コルト拳銃と云い、刀と云っても、それは所詮は、自決用のものであり、将と兵を区分する紛飾に過ぎないのだ。日本軍の爆撃機に乗りこむ将校は日本刀を持った。これなぞあきらかに自決用と云うよりは、戦死者の傍には、日本刀がなければ型がととのわないと云う意識のあらわれなのであろう。

〝戦陣訓〟と云う文章の中に〝生きて虜囚のはずかしめを受け〟てはならぬと示されている。敗戦後、トラック島に上陸して来たアメリカ兵が山路に呉れた〝タイムズ〟と云う名のアメリカの写真雑誌に、一頁を占めて、フィリッピン上空を飛ぶ飛行機の操縦士の傍に日本人将校が写されていて、説明書きに、〝日本軍陣地を案内する日本軍人〟とあった。それを見て山路は、胸をしめつけられる屈辱感と同時に、〝何だ！オレだって、捕虜じゃないか〟と自嘲したことであった。日本人は死ぬことを予想して日本刀を持って飛行機に乗りこむ。アメリカ人は、〝じゃ行ってくるぜ〟と今迄履いていたスリッパのまま飛行機に乗る、とあるアメリカ兵が山路に語った。降投した日本人山路に対して、そのアメリカ兵は、一種の優越感に乗って左様なことを言ったとも思われるが、かれらの日常の兵隊生活から察すると、このアメリカ兵の言葉は、あながち優越感から来る誇張だけとも考えられぬ。かれらには、そんな気軽さがあった。そんな気軽さで戦争をされては、全くたまったものではない。

懐中電灯の点滅によって、身のまわりを戦闘に耐えられるように整えることは容易ではない。空には夜間であるが、これ又キラッと一点の赤や青の光を明滅させながら飛行機が飛ぶ、飛行音には兵も山路もピーンと緊張を強いられ、敵味方の判別をする間もなく、懐中電機の光を消して闇の中に伏せる。

山路の隊には、海中に失った二門の速射砲のかわりに、二十三ミリ機関砲一門と軽機関銃一丁が、先発隊からわけられた。機関砲は多分、爆撃隊で使われたものであろう。兵たちは、闇の中で、先発隊の兵から、それらの砲、銃の操作を、手さぐりで教えられている。

戦闘すると云うことは、まことに体内にある力と云う力を使い果たして、息たえるまでつづく自己防衛の希い、そのために相手の命の消滅を目ざす恐ろしい鬼の行為である。昨日は海中に在り、船の上に拾われ、そして、あれ程心中に希んだ土を踏んで陸上に登っても猶かつ休むときもなく敵を殺す武器の操作を身につけなければならない。海中で命を拾い、拾ってくれた船から夕闇の深まってゆく島の片隅に身をおき、空に飛ぶ飛行音におびえながら、山路の身体からは、ずるずると音たてて軍律と云うおのれをしばりつづけるものが、ゆるみ溶けてゆくのが感ぜられた。

戦局は、どうなっているんだろうか、真先に上陸して、この島々の守備に当って来た海軍の陸上部隊はどうなっているんだろうか。光を明滅させながら空を低く飛ぶ飛行機は、日本の残存空軍機であろうか。それとも他島から応援に飛来したものであろうか。曹長刀をなでさすり、コルト拳銃を掌の中に握りしめながら、山路の想念は、あられもなく乱れるのであった。

闇の中、目の先きに人影が立った。その人影は敬礼の姿勢であることがわかった。山路は敬礼を返すこともなく去脱した心持ちで、岩の上に坐っていた。ぎんぎんと声が山路の鼓膜を打った。

〝速射砲隊は、海岸線を西へ三千米移動し、マングロープの密生する湾を警備せよ。そこに一軒、小屋がある。了り〟

軍隊の命令に、この様にいい加減な明確を欠いた言葉はない。山路の小隊がたどらねばならない闇の中の行動に等しい。しかし命令は命令である。分解の仕方もよくわからないまま、機関砲一門をかつぎ上げ、軽機関銃は四名の兵の肩に乗って、あるかないかの海岸ぞいに急造された細道をたどった。山路の脳裏に、子供の時分に一度たどったことのあった富山県の〝親不知、子不知〟の険路の体験がチラリと走った。

成る程、小一時間も闇の中をくぐって歩くと、屋根と柱だけで、壁板は勿論、腰板もない小屋が、マングロープの群の深い海岸にあらわれた。その小屋の足許まで海水がおしよせ、マングロープ群におおわれて、小屋があることは、海の方からは見えまい。この島に何年か前に上陸した海軍の陸戦部隊が、一度は、此処に小陣地を構えたのでもあろうか。小屋の前は、人間大の岩石が散じ

後方は登り坂になり、四五本のやしの樹が黒々と空の星をかくした。

〝あの小屋でねむることだ〟

極度の疲労が山路の全身を包み、上空をかすめる飛行音にも小きざみな恐怖は絶えなかった。

〝オイ、ミンナ、あの小屋でひと眠りするぞ〟

こう云うのを精も根もつき果てたと言うのであろう。もう自己防衛の本能も薄れ、空飛ぶ飛行音さえ遠いものになってゆく気配で、当番兵が床に敷いてくれた、これも先発隊がくれたものであろうが一片の布切れになった古毛布に身を包んで深い眠りに落ちこんで行った。

（つづく）

一九八九・一二・二八

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（六）

第一章　八丈流人近藤富蔵

一、羽倉簡堂、富蔵に会う

金子正義

（一）

近藤富蔵、記録によれば父近藤重蔵守重三十四歳の文化二年乙丑五月三日、家女梅を母として生まれた。小字三保蔵、実名富蔵万吉・改めて高重・守信、流罪以後は守真、号して聞斉講武軒（北越修行中は不二一治）、八丈流島中の句会に列して俳号松陰舎平和と称した。

父の近藤重蔵守重・号正斉は蝦夷地千島の巡検、国境査定に尽力して功を立て、後に江戸城紅葉山書物奉行となり、著述多数を著して文功もあったが、老中水野忠成と争って大坂鎗奉行に左遷された。

京坂の地で行跡乱れることあって江戸に呼び戻され小普請入りとなり、大坂赴任前に構えた中目黒荏原台の鎗ヶ崎抱屋敷を本邸にしようとしたが、赴任中管理を頼んだ元地主の塚本半之助が地境を侵して所有権を詐称し工事の進捗を妨げた。重蔵は勘定奉行所に訴え、浅草今戸石浜の家臣宅に寓居して法の裁定を待った。

富蔵は父と共に江戸に戻ったが、直ぐ北越高田の性宗寺に預けられ三年の修業を経て帰った。恰度勘定奉行の裁きに依って地境の決着を得て抱屋敷の改築工事が再開されたので、富蔵は父に代ってその采配に当った。

塚本半之助は元庄屋であり目黒お鷹場組合の組頭を務めていたこともあって、近藤重蔵がお咎を蒙って小普請入りとなって昔日の権勢が失なわれたのを軽んじ、度々反抗しては争いを挑発していた。富蔵は父重蔵に無礼を働いたとして、文政九年五月十八日半之助一家数名を殺害した。

此れに依って父子共に罪に問われ、富蔵は遠島父重蔵は近江大溝藩分部家へお預け禁錮となった。

富蔵は翌文政十年四月八丈流島となり、父重蔵は文政十二年六月近江で禁錮の侭病死した。

八丈流人となったばかりの富蔵は、大賀郷名主菊池武豊に依れば、昂然として元旗本三百石の武威を誇り自か恃む傲慢な気風があって、時に激昂するかと思うと、憂愁沈思に墜ちて数日食を絶して流人小屋に篭ったり、落着なく山野を跋渉したりしていた。

多くの人を殺めた自責仮借の念もあろうが、富蔵は幼時からの人間形成の複雑さもあった。富蔵は父重蔵が千島探検択捉島の開拓で手柄を立てて帰国した二年後に生を享けたが、父重蔵は何故か梅が身篭ったとき、水に流せと強く言った。梅が家女であり本妻は同じ旗本の娘を迎えていたが、重蔵の長期の北方探検中に実家に帰りその侭離別していたからでもあった。

重蔵に家督を譲って茶人となっていた知新庵守知夫妻が此れを憐れみ、富蔵は祖母美濃が哺育し、実母梅は板橋宿外れ赤塚の実家に帰った。

重蔵には初めての男子であり祖父守知の熱意もあって嫡子として認めたので蚤ぐるみに育てられ、多くの侍女に傅かれたが、父母の顔も知らずその恵愛を享けないので、癇性強く勝手気侭となり、稀に見る父重蔵を怖れ嫌って泣き喚く有様だった。

文化三年、露艦の樺太寇略、翌四年千島択捉島、蝦夷礼文島等への来寇があって、重蔵は急遽蝦夷地の防衛策に出立した。重蔵は西蝦夷地より利尻島等を巡察して蝦夷地防衛計画を企画し幕閣に提案した。此れに依って老中堀田正敦の蝦夷巡察があり、翌年奥羽諸藩が防衛配備についた。折から欧州のナポレオン戦争の影響もあって北辺は小康を得たので重蔵も帰国した。

度々の北辺の探索等で家に居なかった重蔵は、漸く富蔵を身近に置いて訓育しようとしたが、富蔵は物覚え悪く学問を嫌うので、親に似ぬ愚者よと情をかけなくなった。

父重蔵は探検家と言うより当時第一級の実証学者で、御三家を初め諸大名の家中の者を教え、紅葉山書物奉行となる程の名儒であったので、富蔵が成長する程に学才の至らざることを事ごとに貶していた。

富蔵を慈しみ育てた祖父母が相次いで世を去ってからは、傅役小野寺重兵衛の諫言もあって文武の道に励み、文政二年（一八一九）十四歳で将軍家斉・世子家慶のお目見得も済み、大坂鎗奉行に赴任する父重蔵に従って大坂に在勤となった。

重蔵は紅葉山奉行より大坂への左遷を憤慨して日夜遊興に耽り、酒池肉林に溺れているようでも、富蔵には文武各道の師をつけて厳しく修業させた。富蔵は成長するにつけ己れの武威を誇り乍ら、父に及ばざるを思っては劣等感と反抗の足掻きから家出逃亡を繰返し、発見される都度寺院等に謹慎させられた。

近藤重蔵在坂中の菩提所摂州天満の称法山教本寺に預

けられたのを機縁に仏教的な信仰心が芽生え京の六角堂や石清水八幡に参篭して神秘的な霊性を感得したり、古い伝承や、山嶽信仰にも関心を深め、儒仏を習合させた自然的な神霊の力を信ずるようになって、純粋多感な若侍の心に多くの思いや情念が卍巴となって燃えていたのだった。

中目黒鎗ヶ崎の抱屋敷での塚本半之助一家の斬殺も、父重蔵の大坂在勤中、留守を任せられた半之助が屋敷を勝手に物見遊山の茶屋に変え、剰さえ近藤重蔵の失脚に乗じて地境を侵して自分のものとし、此れ糺そうとした父重蔵に度々無礼をはたらいたとして、父に代って武士道の上から成敗した、と自負していたのであった。一家殺害の非情も儒仏の教えに違わずと信じて疑がわなかった。

八丈流人も他島と同じく島に上陸すると村割当となり暫くは村百姓五人組で養われる。国地の沙婆に居たときに手に職を持った流人は、九尺二間の流人小屋でも相応に活業で糧を得て島人にも調法がられるが、格別な職分手仕事の出来ない者は、百姓仕事の手助や、扶役人夫で其の日其の日を送った。扶役は道路普請、山番、石垣造り、船舶出入の沖仕事といくらでもあり、村人に信用されると、旧家の小前手伝から牛番と云うように男手はいくらでも必要だった。だが、八丈の土壌は、火山灰地か岩石質で地味悪く耕地狭少、潮害等で絶えずある飢饉では真先に餓死するのは斯うした流人だった。

手に職を持つ流人とて同じであった。平生は島人に調法がられている髪結、木履づくり、竹篭づくり等も凶年となると省みられず却って力仕事の流人より食に窮した。

中には江戸大阪の商人底抜けに商才に長けた流人もいて、八丈特産の袖反物等を村々から買い集め、御用船、商人船が入ると湊に運んで玄米と引替えて、島人や流人に転売して利を稼ぐ者もいた。だが此れとても国地の米相場や、両替商、大商人の操る舳と米の見積相場の変動で僅かな利も全く無くなることが屢々だった。

寛政の頃は商人船での取引は反物一反は玄米一俵であったが、文政の頃は一反は玄米島桝五升となった。流人の御薬屋金次郎は、島人から島桝三升で反物一反を買い集め、商人船に売っては利莢を稼いだりしていたが、度度の違反で八丈小島へ島替となって発狂し、騒動をおこして火焔の中で憤死した。

近藤富蔵は歴とした旗本であり商才がある訳でも、手に職がある筈も無く鋤鍬も握ったことも無かったが、始めは一通りの流人扶役をやり、道路の補強や旧家の石垣の繕いなどで食を得ていた。気れつき身体強健であったのでそんな仕事には直ぐ馴れ、樫立村の服部屋敷の玉石垣等も見事に築いて島人を驚嘆させた。富蔵は他の流人のように嫌々食物の為に仕事をするのでなく、城壁でも築く心意気で怡しみ乍ら仕事をしていた。見込まれて陣

屋や各村の名主屋敷の石垣を頼まれると、海岸から均等な大きさの丸石を選び運んで整然と積み並べて、豊かな脹みと暖かな情感すら漂わせる出来栄えとするのだった。

そんな折、服部屋敷や大里の陣屋で猶いの食事を出すと、五合ぐらいの飯は忽ち平げ、鰹の刺身などは一度に五本ぐらいはペロリと平げる程の健啖振りであった。容貌魁偉で身の丈六尺余りの大男なので、文政より天保にかけての名横綱阿武松緑之助のようだと流人仲間にも怖れられる程だった。臂力が秀れているばかりか書をよくし、絵も幼少の頃茶人であった祖父の知新庵の膝下に居て、水墨画の手解きを受けていたので仲々旨く、天気が良いと島内を巡って風景を写し、地図なども巧みに書いた。元々多芸の素質があった。文政四年大阪より江戸に戻った翌年より北越高田の高雲山性宗寺に預けられて三年間、周円大法師の下に修行中、見様見真似で仏像仏具の繕い迄覚えた。八丈で寺社の依頼を受けると、仏像、神体から堂宇の補修迄もやって本職に劣らなかった。

斬うして一年の歳月が流れる頃には富蔵も流人生活にも慣れ、島人にも馴むようになった。元々八丈島人は流人の身分は問わず、くんね（国人）は歓待する傾向があるので、多才な富蔵は次第に島人に敬愛されるようになっていった。

文政十一年富蔵二十三歳の秋、名主の菊池武豊や取締役の高橋長左衛門等が、富蔵の前身を哀み、富蔵の日頃の暮しぶりにも感じて仲人となり、水汲女として三根の沖山栄右衛門の長女逸を妻に迎えさせた。沖山栄右衛門は百姓となっているが、宇喜多秀家の次男小平治秀継より八代の末であった。

富蔵は後日逸が妊さん女房であったと知ったが、八丈の女は奥手で十六、七より二十四、五歳迄はメワラベ（女童）と言い、国地の者が見ると二十を過ぎた女も十五六歳に見えた。二十一、二歳で始めて春情を萌し、四十を越して漸く男女の交りが盛んとなると言うくらいであった。

逸の年令は明らかにされなかったが、三根で屈指の美貌であり良き織女であった。宇喜多一門に類する女は貢納織女とならなかったが、それだけ仲買商に渡す反物の収入が多かった。亦、貢納織女と違って畑仕事も水仕事も厭わぬ働き者であった。

富蔵は大賀郷の九尺二間の小屋住いから、東三原山麓にある沖山家の飛地畑の一隅に逸を娶って居を構えた。三根の聚落外れの南より二町程三原山の山懐に入った松の疎林の小高い丘であった。軒の左に八丈富士が見え、右には神湊に入る船が手に取るように見えた。家の下には田の掛け水となる鴨川の細流があって家の呑水ともなった。夏には平家蛍が群れ飛んで幻想の世界に住むようで流人の身を忘れさせた。

大賀郷大里の八丈陣屋には小一里あるが、三根村名主

の小宮山屋敷は鴨川の石橋を渡って街道を北に五町程で、何事かあれば夜中でも駈けつけられた。家の直ぐ裏手の松の峯づたいの鴫山の中腹には尾端観音があった。後に富蔵が屢々参篭する鴫山観音堂である。

後年、八丈流罪四十年を経た明治十三年、漸く赦免状が届いて東京に戻り、それより近江大溝の勝野に父重蔵の墓参後、西国三十三ヶ所、東国三十三ヶ所の順拝をして再び八丈に帰り、奇しくも此の観音堂、遣迎山大悲閣観音堂の堂守として八十三歳の生涯を終える所となるのである。

当時は周辺は黒松が堂を囲み、七月十日の四万六千日の祭礼には五ヶ村の老若男女が大勢急坂を登って参詣するが、普段は幽邃そのものであった。本尊は安阿弥作と伝えられる聖観世音大菩薩と左右に釈迦・彌陀の二尊が在った。

後年富蔵はその北側の久世堂に起居するようになるのである。当初は文化十三年に流され来た芝増上寺山内の瑞華院住職周練が住んでいたが当時は無住であった。

周練は後、八丈富士山麓の九蔵金土に庵を建て、八丈島最初の念仏講を開いて、浄土教を布教していたが文政十年四月十二日病死した。恰度、近藤富蔵が八丈流島と決まり永代橋を出帆する頃であった。

文政十二年暮れ、長女操が生れた。始めての我が子に流人の身を忘れて日夜喜びに浸っていた富蔵に、突如冷水を浴せかけたように父重蔵の死が伝えられた。

「あの剛毅不屈の父が、如何に遠隔の地の禁錮とは言え、評定所吟味の収監中も泰然自若としていた父が病死するとは」と富蔵には信じられなかった。此れも父には拘りなく自分一個の信念にて、父辱しめを受ければ子これを雪ぐと、武士道にかけて半之助一家を皆殺しにしたことが却って父に類を及ぼしたことになった。父の死を早めたのは己れの至らなさからであった。と慚愧し闇の鴫山に立って痛哭して、峯伝いに尾端観音堂に詣で阿弥陀経、観音経を誦えて父の冥福を祈った。其の後も日参して勧行に努め、父の命日と聞いた六月十六日と大罪を犯した五月十八日には、長楽寺の大誠和尚の許しを得て三日間の参篭をし、その後も看経読経に明け暮れていた。

日が立ち年を経る程に富蔵は変っていった。多くの人を斬った非情冷酷な武士の面影は消え、贖罪に努める修行僧か虐遇に耐える殉教者の風貌となっていった。

斯うして富蔵が信仰厚く、知識や習俗が豊かなことが次第に島人達に伝わると、いつか村のアッパ（子供）が富蔵の家を寺小屋のようにして集まり、富蔵は「四十八字以呂波」「商売往来」「庭訓往来」等を教え始めた。

その裡、島の旧家の跡取息子に漢籍儒学を教えて呉れと頼まれて手解きを始めると、己れの浅学に気付き父重蔵の学殖の深さが分ってきた。今更学び直しても到底父

には及ばないが、人を教える以上改めて学問を学び直そうと、長楽寺の大誠和尚の弟子となって孝経学記四書の上に、五経十一巻の素読から学び直した。

其の頃大誠和尚は既に還暦を過ぎていたが、夜の勤行が済んだ後の一刻を富蔵の為に講ずるを厭わなかった。富蔵も雨風の日も冬の冷たい乾の強雨の中でも倦まず弛まず、決められた日時に鳴山から半里の道を長楽寺に通った。

大誠和尚だけでなく、長楽寺と並んでいる宗福寺にも時折り寄ったが、宗福寺の先住十六代霊道和尚は文政七年大神丸で行方不明となり、今だに生死不明で、当代十七代励順は未だ二十歳そこそこなので、謙虚に富蔵に書を教えることは辞し寺蔵の文献古文書は自由に閲読することを許して呉れた。

流人の身の富蔵には両寺に謝礼すべき資を持たなかったが、教えている子弟の家々から米、麦、粟、稗等の主食やあしたば、大根などの礼を受けるので、これを削いて微意を表していた。

富蔵一家は逸がよき織女であり、里の沖山家は自作農なので衣食に事欠かなかったが、天保甲午五年は前年の凶作で二月には大飢饉となり、全島が飢えに苦しみ富蔵一家も餓死するかと危ぶまれたが、卯月に仙台船が漂着し、その積荷米穀三千俵の分配によって危期を脱したこともあった。

斯うした風浪、塩害、飢饉が度々あっても、浮世を離れた別天地のような鳴山の麓で暮す富蔵は、文武両道に秀れた父重蔵の血を享けた素質が漸く芽を吹き出し、祖父知新庵の風雅の遺伝的素質も併せて出たのであろう。島の文化人達の茶会、句会などにも列するようになった。天保六年（一八三五）には長男守一を得て富蔵は国地へ帰る願望もいつか消えていくのだった。

其の年天保乙未年は大旱であった。炎暑が月余に及んで一滴の雨も降らず、西山富士・東三原山麓の草木の枯れ倒れるのは未だしも、八丈の僅かの水田が悉く干上がり、畑の粟、桑も焼き果てる有様となった。

島人は今年も打ち続く大飢饉となるのか、或いは何にか天変地異でもおきるのか、と不安に戦き乍ら村々の神社や仏堂に雨乞いの祈りをあげ続けたが、一向に雨雲の動く気配も無く、夏の船便すら影さえ見せなかった。三根村より末吉に至る東山続きの奥深く、山谷狭益の所に南沢という窪地があって、窪地の岩壁に懸る大滝があった。滝幅一丈九尺、高さ十数丈で其の瀑音は山谷に轟き響いて物凄く島人も懼れて近づかなかった。其処は古より伝えられる祈雨の霊場であった。早魃で百計尽きたるときのみ修験者が滝水に浴して一心に祈禱すれば慈雨ありと伝えられ、修験者の在島せぬときはこれに代る篤信の者が、新しき簑笠を竹につけ祈禱し乍ら滝水を注ぎ、一心に祈願すれば忽ち雨水に恵まれるとも言われていた。

此の年の旱天渇水の異常に、島取締役の高橋長左衛門は、三根村の名主小宮山善右衛門等村役人と相談の上、古来の伝承に従って南沢瀑布で雨乞祈禱をすることになった。

七月十八日村の小役人より惣百姓は元より流人の者共迄残らず北の浜で身を清めて、南沢の滝口に集って来た。始めに白衣を被けた修験者と僧侶が交互に滝壷の渕に立って、布子の垂れ流れる程に衰えた滝水を身に注ぎ乍ら天を仰ぎ、遥かの洋上を拝して双手を差し延ばして降雨と入船とを祈った。次は人身供養を模して滝壷に入って身を清める祈りであった。高橋長左衛門が、誰か浄水に浴する者はないか、と叫んだが誰も応ずる者がなかった。水涸れて滝水は無きに等しいが、滝壷は森々たる幽谷の神秘を漂わせて青く深く静まり、その深浅は計り難く、誰もが其の霊威を怖れて応える者がいなかった。

長左衛門が何度も声を嗄して訴えると、参集の群の後から近藤富蔵が涸れた渓流を踏みすすんで滝壷の縁に直立し、逞しい体軀で呪文を唱えて滝壷に飛び下りた。深さは肩を越したが富蔵は何恐ることなく祈念し続けた。踌躇していた地役人も一人二人と滝壷に入った。猶も疑い怖れていた農民も次々と滝壷の水を浴びて雨乞いの叫びをあげた。

暫て雨乞いが終って村人達は空を仰ぎ乍ら家路についた。富蔵は鎗ヶ崎の抱屋敷に居た頃、直ぐ裏近くを流れる多摩川用水で水練したことなどを回想し乍ら山を下った。

家近くなる頃、晴天に雲が疾り始めたかと思う裡に忽ち雨雲が拡がり雷鳴も響き始めて大粒の雨が落ち沛然たる大雷鳴となった。雨は山野を蘇えらせ、渓流を走って滝に懸り忽ち滝壷より溢れ流れて田水となって乾田を潤し、余水は樋を流れて家々の用水甕に満ちた。

不思議にも翌十九日には国地よりの通い船二艘が神奏に入った。島人の喜びと愕きは、雨乞の伝承の確かさを改めて知り、神仏への信仰を一層深め、富蔵への賞讃の声ともなって島中に拡った。

後、南沢の神霊の旱魃打払いへの御礼に不動尊石像を献納することになって、その彫像造立を富蔵に依頼することに村役の衆議が一決した。

富蔵は偶々文政十年秋九月の船で流配された房州長狭郡磯村の百姓久次郎が石工の心得もあったので、海岸から石像に適した高さ三尺余りの自然石を探し出させ、二人して一尺八寸の舟形座像不動尊像を刻み、島人と南沢の滝口に運び上げて奉安した。

翌年一月廿八日初不動の日に不動尊開眼の法筵を行ない、僧侶、修験者が列する中で、特に島取締役高橋長左衛門の指名に依って富蔵が開眼の導師となって祈禱した。

富蔵は祈禱の結びに即席の偈を献じた。

偈文は

不動忿怒大明王　六趣分化摂物行
諸天教勅無善意　随願降雨皆吉祥

感動した高橋長左衛門は、これを日誌に書き留めていた。その夕に奉納法楽の句会が催された、その記録にも

鳴滝の不動新らし秋の栄　高橋為全（長左衛門）
改めて見る滝清し民の秋　小宮山善尚（善右衛門）
幾秋もかわらで守れ滝不動　松蔭舎平和（富蔵）

と島の役人や心得のある者の後に富蔵の献句もあった。

続く

編集子のメモ

○年明けて本誌はやがて誌齢満九歳を迎える。「まんじ」の前身「作家群」も通算ではほぼ同じだが、発行は不順がちであったのに比べ、本誌は季刊の順調を保ちバックナンバーも「作家群」の三倍を記録し、来年は十周年を祝う勘定になる。

○この号の三十四ページはやや淋しく、コンスタントの四人四作になった。雑誌発行の最低のページ建ては活版で八ページ一台一折りとして、せめて四台三十二ページは満たさねば体裁をなさなかったものだ。発行へ向けての頑張りは雑誌をもっている限りあたりまえなのだが、しかも季刊とあれば当然すぎることだが、いろいろ、もろもろの事情もあって、共通の土俵に同人全員の作品揃い踏みはいまだ実現したことがない。残念である。

○連載三編、個性の顔をそろえて目次の華やかさに小誌の意気を見る。三戸岡は「降格を命ず」の好評の勢いにのり、第二弾もいよいよ佳境に向うかに思われ、山口は依然病床にあり酸素ボンベを抱きつつ悲壮なペンをとり、語らねばならぬ戦場心理を如実に描きつづけ、金子は重厚、悠然として、いささかもゆるぎない筆をすすめている。

○本誌を飾るカットは毎号オリジナルに恵まれている。作者は俳人、余技とは言えぬ妙、お褒めをいただいている。

（お）

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

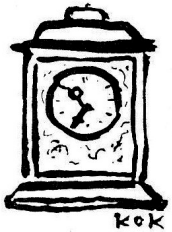
作家群同人

～～～

目次

カステリオーネの夜は更けて（九十三枚）…佐々木一郎 1
雪の夜……井上二三男 32
続々童子寸描……太和禎人 36
Gone are the days……山根三枝子 49
父が酒を絶ち筆を折りました……高戸なつみ 58
〔連載〕
支店長の妻たち（第三回）……三戸岡道夫 63
近藤富蔵の生涯（第七回）……金子正義 70
編集子のメモ……79

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義
童画・おおわみきと



カステリオーネの夜は更けて

佐々木一郎

中央高校教師藤田一之が、村上美登利に出会ったのは、北イタリアのヴェロナ市郊外にあるサン・マルチーノの塔の屋上だった。この美しい大理石づくりの塔は、千八百八十四年、イタリア統一戦争の勝利を祝って、ヴィットリオ・エマヌエレ二世（イタリア統一国王）が建立したモニュメントといわれている。

藤田はこの日、県赤十字社主催の、「日本青少年赤十字三十周年記念・赤十字の父アンリー・デュナン遺跡視察旅行団」という恐ろしく長いタイトルが付けられた視察団の一員として、ここを訪れていた。たまたま、大学時代に写真クラブに在籍していたという実績が認められて、帰国後作成する予定の「視察団報告書」の写真部門担当者に任命されたため、時折、グループを離れて撮影に専念する機会が多くなり、それが彼女と出会う一つのきっかけともなった。

この時も彼は、一行より遥かに遅れて、塔の内部の、螺旋状の階段を、ゆっくりと登って行った。ここには特別の照明の装置は無いのだが、各階のフロワーに設けられたバルコニーからの採光が十分明るくて、内部の鑑賞に支障は無かった。彼は、時々、赤茶けた鉄製の手擦りにもたれ掛かったり各階毎に置かれたベンチに腰掛けたりしながら、右側の壁の半分以上にわたって展開している、高さ三メートルを優に越える絵巻物風の大壁画を撮り続けた。

特にこの大画面のモチーフは、スイスの青年実業家アンリー・デュナンに赤十字を発想させる直接の契機となった、千八百五十九年六月二十四日のいわゆる「ソルフェリーノの戦い」――イタリア統一戦争中最も多くの死傷者を出したといわれる――の戦況の生々しい伝達であり、その各シーンにおける兵士達の苦悩に満ちた表情などが見事に描き出されている力作だった。

デュナンはその著書「ソルフェリーノの思い出」の中

で、かなり大胆にその戦況を記述している。

「密集した敵味方の縦隊は、進むところ何ものをも倒す破壊的な奔流のような激しさで互いにぶつかり合う。こちらでは、恐ろしい、ものすごい格闘が行われる。オーストリア兵と連合軍の兵は互いに踏み倒し、血みどろの死体の上で殺し合い、銃尾で殴ぐり合い、ともに頭の骨を砕き、軍刀や銃剣で腹を裂き合う。なさけ容赦もあらばこそ、これはもう屠殺場であり、血に狂い血に酔った猛獣の闘争である。負傷者さえも息の根の止まるまで抵抗し、もう武器を持たない者は敵の喉をつかんで歯で食い切る」

今年四十一歳の藤田には、もちろん戦争による被災の体験はない。

したがって、これを補う意味も含めて、藤田は、学校の「青少年赤十字クラブ」の時間の際には、この凄まじいまでに戦争の惨禍を綴った「ソルフェリーノの思い出」をテキストとして使っている。

彼は、デュナンが、

まったくの偶然とはいいながら、生まれて初めて戦闘の場面に遭遇し、驚愕や恐怖の心をこらえて、村人達と一緒に、苦痛に喘ぐ哀れな傷病軍人達の看護に当たった自分の心境を素直に表現している点と、その惨状に思わず「トゥッテイ・フラテリ（ああ、みんな、人間どうしなのに）」と叫び、国際法による赤十字を発想し、その実現のために彼の後半生を捧げることとなった経過をごく自然に綴っている点に深い共感を覚えている。藤田がこの視察団に参加したのは、アンリー・デュナンに惹かれたからだといってよい。

壁画が終わるともう最上階のフロワーで、屋上への出口の手前には小さな円形のホールがあった。ここには、当時の軍人たちが使用した銃、刀、軍服、靴、各種のマークなどが陳列してあった。油絵も幾つかあったが、その中心に据えられた絵は「カブール将軍の苦戦」と名付けられた作品で、サルジニア（イタリア）の将軍カブールの肖像画と、その背景に、優勢なオーストリア軍に対して石を投げて最後まで抵抗しているイタリア軍将兵の姿が描かれていた。

藤田がこれらの写真を撮っているとき、ホールの外側に大勢の話し声が聞こえ、やがて階段を降りて行く足音が響いた。日本語のやりとりが続いたので、恐らく視察団の一行が見学を終えたのであろう。

藤田は、自分一人だけがこの塔内に取り残されそうな気がして、慌てて屋上に向かった。

屋上へ出た途端、藤田は、強烈な夏の太陽の光を浴びて思わず目が眩みそうになった。南国特有の抜けるような紺碧の空が果てしなく続いていて、紛れもなくイタリアの空である。

藤田は、汗を拭いながら、周囲を見回した。円形の屋上には、二メートル置きぐらいに赤煉瓦作りの柵が立て巡らしてあり、その外側にはひどく頑丈そうな金網のフェンスが張られている。外は一望千里、所々に緩やかな糸杉の丘や林や小さな民家が見えるほかは、視界を遮る何物もない広大なロンバルジヤ平原である。時間が昼近くなっているせいか、人影がまばらで、何か心細くなるほど静かである。藤田は、まず、出口近くで談笑しているイタリア人親子を何枚か撮った後、屋上全体を覆っているうら寂しさも捨て難いような気がして、赤煉瓦のそばまで下がってカメラを構えたとき、出口から屋上へ上がって来た若い女性と視線が合った。彼女は、ベージュ色の上着に白っぽいミニのスカートという軽装で、形の良い脚を見せていた。これが、村上美登利との最初の出会いであった。

「イクスキューズ・ミイ・ジャパニーズ？」

「えっ」と、突然声をかけられ驚いて彼の顔を見詰めた彼女は、その、いかにも日本人然とした藤田の容姿を認めると

「あらっ、ことによると、あなた、日本の方？」

「イエス、そうです、そうです。日本人です」

「ホホホホ……」

藤田の言い方が余程おかしかったのか、噴き出すように笑うと

「あら、ごめんなさい。つい、おかしくて……」

「いや、いいんですよ。それにしても、ここで日本の人に会えるなんてちょっと意外だったなあ……。それでついつい、あんなでたらめな英語をしゃべっちゃって……」

藤田は頭を掻きながら、言い訳のように、ローマでは呆れる程多かった日本人観光客が、ミラノ辺りを境として急激に少なくなって、デセンツァーノ、ヴェロナまで来るともう全然見当たらなくなってしまったと話した。

「そのとおりですわ。あたくしは、ここへ来てもう三年になりますけど、観光に見えた日本人の方を見るのは初めて……」

「うーん、やっぱりそうですか。それは淋しいことでしょうねえ」

「ええ、淋しいとまでは考えませんが、時々、日本のことを思い出しますわ」

藤田は、あらためて彼女の顔を見詰めた。色白ろで面長な顔付きは、ちょっと、女優の田中裕子に似ている。年齢は三十歳前後というところだろうか。

ふと藤田は、彼女の横顔に懐かしい人の面影を見付けて愕然とした。

三十年前に、彼の前から忽然として姿を消した幼友達の高須幸恵の顔が、今、ここにあった。

初恋、と言うのにはあまりにも淡いものだったが、藤田と幸恵は幼いころから不思議な赤い糸に結ばれたように育った。終戦後の、日本経済の底辺のような時代ではあったが、二人はいつも一緒で、暇さえあれば近くにある戦災を免れた神社の境内で、紅葉の葉や松ぼっくりを拾ってままごとをしたり、大きな鶴亀の植え込みの陰で隠れんぼや鬼ごっこをして遊んだ。小学校の入学式の日などは、大きなランドセルを背負った二人は手をつないで登校して、近所のおばさんたちに「やっぱり二人は仲良しなんだねえ」と感嘆されたこともあった。学年が進むにつれ、交際の形こそ変わっていったが、二人の心は少しも変わらなかった。

その幸恵が、五年生になったある日、突然、学校へ来なくなった。藤田の母親は、「幸恵ちゃんのお父さんが転勤になって引っ越しちゃったんだから、仕方がないんだよ」と、何とか幼い息子を得心させようと努めたが、ふさぎこんでしまった藤田の心は長い間、開かれなかった。

今考えてみると、やはりあれが、初恋というものだったのだろうか……。

あれから三十年経つ。

藤田は、既に結婚して一児の父親となり、幸福に暮らしている。しかし、幸恵は今どうしているのだろうか。

彼は、長い間心の隅にそっと仕舞って置いた小さな愛が、突如、激情として昇華し始めたことを知った。

それにしても、この女性には幸恵の面影がある。

「あら、どうかなさいましたの？」

「あ、いや、これはどうも失礼しました。まだ、名前も名乗りませんで……。僕は、こういう者です」

藤田は、高校教師と青少年赤十字指導主任の肩書の入った名刺を差し出した。

「まあ、恐縮ですわ。あたくし、お名刺は持っておりませんので……。村上美登利・ジェファーソンと申します。主婦ですわ」

「ええっ。奥様ですか。僕は、てっきり……」

藤田が、頭を掻く仕草をすると

「ホホホホ。独身にでも見えまして？　もう結婚して四年になりますのよ……。」

ふと、空を仰ぐと、いつの間にか綿のような雲が二つ並んで浮かんでいる。地平線は、まるで陽炎が燃えているように幻想的に見える。のどかな北イタリアの夏の風景なのである。

藤田と美登利は、並んで、広い屋上をゆっくりと見て回った。眼下のあちこちに見える村落は、多分、古戦場のポッツオレンゴ、リヴォルティラ、ボンティの村々であろう。

「ところで、大変失礼なことをお尋ねしますが、村上さんには、お姉様はいらっしゃいませんか？」

「姉ですか？　いえ、あたくしは一人娘ですの」

「そうですか……。あの、ご出身地をお尋ねしてもよろしいですか？」

「ええ、構いませんことよ。あたくしは、東京生まれの東京育ち。つまり、『江戸っ子』ですわ。父母は東京で会社を経営していますわ」

「あの、利根市に親戚がありませんか？　私の住んでいる町なんですけど……」

「利根市！」

美登利は、一瞬、ハッとした顔付きになって藤田の顔を眺めていたが

「いいえ、ありませんわ。それが、何か？」

「はあ、他愛のない話しとお思いになるでしょうが、僕にとっては一生忘れることの出来ない幼なじみ、高須幸恵という子でしたが、その顔があなたによく似ていましてね。それでつい……」

「まあ、そうでしたの……光栄ですわ」

「いえいえ、さっきも言いましたように、『日本人恋しさ病』ですよ。どうも失礼しました」

「まあ、ホホホホ」

「ハハハハ」

「それより、藤田さんこそ、どうしてこんな田舎にまでいらしゃったの？　日本の方が見えるなんて本当に珍しいことですわ」

美登利は、日陰に置いてあるベンチに藤田を誘った。

「僕のことですか。いえ、僕は一人旅ではないんです。さっき、大勢の日本人観光団にお会いになりませんでしたか？　大分賑やかだった筈ですが……」

「あ、さっきの方々ね。ちょうど、入れ違いになったみたい」

「ああ、そうですか。僕達のグループは、アンリー・デュナンの遺跡を訪ねて回る視察団なんですよ」

藤田は、話の合間に、カメラをあちこちに向けて、恰好の被写体とみると次々と写していく。

「何名ぐらいでいらっしゃったのですの？」

「総勢二十名です。顔触れは、一応赤十字関係者ですが、種々雑多です」

「まあ、雑多だなんて……」

「一番多いのが小中高校の教師です。青少年赤十字の担当者ですね。それから、医師と看護婦。看護婦と言っても若い人は一人もいません。昔は、日赤看護婦と言えば美しい白衣の天使と決まっていて、僕なども若いころは秘かに憧れていたものなんですが、このグループには、残念ながら、美人はいません。いるのは、元美人ばかりですね」

「ホホホ……。元美人だなんて」
しゃべりながら藤田は、ふと、前方の地平線の彼方に、四角い小さな建物がうっすらと浮かび上がっているのに気が付いた。あのあたりが、紛れもなく、古戦場ソルフェリーノなのだ。
「あっ、村上さん。あそこを見て下さい」
あまり藤田が大きい声を出したので、かたわらのアメリカ人の男女が驚いて振り向いた。
「ほら、あっち。僕の指先を見て下さい。あそこにちょっと不細工だけど、石造りの四角い砦が見えるでしょう。あれが、さっきお話ししたソルフェリーノの砦に違いないんです」
「えっ、どれですの？」
美登利は、藤田の肩に指を掛けると、背伸びをしながら、囁やいた。つと、成熟した胸の膨らみが軽く藤田の背中に触れた。
「いや、この先の真っ直ぐ向こうですよ、ほら」
藤田はちょっと狼狽して、慌てて前方に身を屈め、さりげなく美登利の指を肩から外しながら、ソルフェリーノの方角をことさらに凝視した。突然若い女性の息吹きを首筋に感じて、不覚にも藤田は、思わず顔を赤らめていた。
学校の勤務中には、教え子の女子生徒達に手を引っ張られたり、時には首っ玉に噛じりつかれたりすることもあるが、それはあくまで高校教師という範疇と割り切っていて、女性という意識は殆ど持ったことがない。勿論、生徒の中にはかなりの美人や成熟した肢体の持主もいる筈なのだが、それでも、彼のようなヴェテラン教師の目には他愛のない生徒の動作に写る。
これは、産婦人科の医師も同じであろう。
その藤田が、少年のように胸の高鳴りを覚えた。
彼女が高須幸恵の面影を持っている女性のせいなのか、それとも、日本人の来訪者が殆ど無い異郷に来ているノスタルジアのさせる仕業なのだろうか。
「あら、どうかしまして？」
美登利は、びっくりしたように藤田を見たが、その顔付きを見ているうちに、ふっと何かを感じたのか、黙って目を伏せた。
この時、庭の方で何か叫ぶ声がした。赤煉瓦の囲いの間から身を乗り出して下を見下ろすと、どうやら、視察団のメンバーが裏手にある博物館の見学を終わって集合し始めているらしい。この屋上からはハッキリとは分からないが、どうやら何か説明をしているのはイタリア赤十字社北イタリア支部長カステラーニ伯爵らしい。むくんだような皮膚をした、顔の大きな、鼻だけツンと突き出した白髪の老人である。

藤田は、その模様を何枚か撮り終えると、美登利の方を向いて、
「どうも、村上さん、残念ながら、どうやらお別れする時間がきたようですよ……。お会い出来たのはほんの短い時間だったけれども、僕にとっては、一生忘れられない思い出になってしまった」
手を差し延べて、美登利に握手を求めると、日本から持参した匂い袋をそっと手渡して
「こんな贈り物しか出来ませんけれども、誰かに差し上げようと思って持って来たのが、あなたのような美しい方に、いや、美登利さんのような素晴らしい方に、差し上げることが出来て本当に幸せです。多分、もうお目に掛かることもないと思いますが、どうかお幸せに……」
「まあ、綺麗。いくら日本の品が自由に手に入るからって、匂い袋までは無理ですわ。まして、こんなに高級品なんかは……。嬉しいわ」
「……しかし、もう一度会いたいなぁ」
染み沁みと藤田が呟くと、
「あら、会えますわ。また……」
「ええっ。それ、どういう意味ですか？」
「……それは、この次お会いした時お話ししますわ」
「そ、そんな……」
視察団一行は、塔の前にバスを置いて、徒歩で、「サン・マルチーノ納骨堂」に向かった。この道筋は、「ソルフェリーノの戦い」の際にオーストリア軍の主力部隊が布陣したポッツォレンゴに達する道の別れ道だったが、途中の眺めが素晴らしく、特に、約五百メートルにわたって続く糸杉の並木道は、いかにも北イタリアの牧歌的な風情だった。木陰には爽やかな風が吹いていて、まるで、先程までの塔の屋上の照り返しが嘘のように思えた。
納骨堂に入る前に通訳の塩谷・アントニオ夫人の説明があった。
「このサン・マルチーノの納骨堂の外に、ソルフェリーノにも同じような納骨堂があるんですよ。そこには、フランス軍の将兵の遺骨だけを納めてあります。なぜ、フランス軍の将兵だけを別に祭ったのでしょうか？　折角『みんな人間どうし』と叫んで看護したというのに、なぜ祭るときには別々にしてしまったんでしょう？　それればかりではありません。ソルフェリーノの納骨堂には特別室が作られていて、そこには、頭から足先まで完全に揃った二体の将軍の骸骨が安置されているそうです。死んだ後までも軍隊の階級が付いているなんて、皆さん、日本人の宗教感覚じゃ、ちょっと理解出来ないんじゃないかしら？……」
一行が納骨堂に入って行った後も、藤田は一人残って撮影を続け、最後に入場しようとしたとき、ガタガタッ

と入り乱れた足音がしたと思うと、両脇を支えられた一人の女性が顔面蒼白となって現れた。

「だれか薬を……。早く、木陰に寝かせてください」

叫んでいるのは、団長の神保主事である。

「あの、どうかしたんですか？」

「えっ、あ、藤田さんか。骸骨ですよ。骸骨を見て気持ちが悪くなっちゃったんですよ」

「骸骨……」

藤田はちょっと戸惑ったが、撮影の仕事もあるので、入場料をそそくさと支払って納骨堂内部に入って行った。

成程、凄い。壮観と言っても良いのだろうか。

室内全部が骸骨でぎっしり埋められている。円形の部屋の周囲がガラスばりの陳列棚になっていて、それが二段に区切られ、天井にまで達している上段には頭骸骨が整然と並べられており、下段には手足の骨が互い違いに隙間のないほどぎっしりと詰め込まれている。これでは、説明書にある千二百七十四体という数も、満更誇張でもなさそうだ。

それに、どういう宗教観に基づいているのかは分からないが、頭骸骨の一つ一つがきれいに磨き上げられていて、その頭部が中央に吊されている蛍光灯の光を受けて青白く輝いて見えるのが不気味である。勿論気のせいに違いないのだが、どの方向を見ても、必ず幾つかの頭蓋骨の眼窩がじっと藤田の顔を見下ろしているのである。

これでは貧血を起こす女性が出ても無理はないと、うなづいたが、ふと、村上美登利だったらどうするだろう、と考えた。「キャッ」と叫んで逃げ出すだろうか、それとも、あのおっとりした口調で、「あら、これ、人間の頭骸骨じゃありませんこと？」と、藤田に尋ねるのだろうか。

美登利の顔に重なって今度は幸恵の顔が浮かび上がった。あどけないお河童頭の少女が、美登利に手を引かれて納骨堂に入って来ようとする。「いけないっ。幸恵ちゃん。ここへ入って来ちゃいけないっ」藤田は、悲鳴を上げながら絶叫した。

それにしても、世界は広い、と思う。

日本国内で通用している宗教観、倫理観が、必ずしも、世界では通用しない。

この骸骨の納骨方法にしても、日本国内だったら、倫理的には勿論、法律上からも許されないのに違いない。それが、航空機なら十数時間で着くことが出来るほどの距離にあるこの北イタリアの地では、当然のことのように公開展示が許されている。尤もこのお陰で、今まで、日本にいたのではなかなか知ることが出来なかったデュナンの晩年の真相を、藤田は知り得たと言っても良い。

日本では、――特に、青少年赤十字では――デュナンを神格化する傾向が高まっていて、（アンリー・デュナンの晩年の二十年間は霧に包まれていて不明である）と、英雄伝説のような扱いをしてきたのだが、現地イタリアのデュナン研究家エジオ・ムッテイは、淡々と、「アンリー・デュナンは事業に失敗し、破産宣告を受けたために、ハイデンで隠遁生活を送らざるを得なかったのだ」という調査結果を明らかにし、関係資料も公開した。

藤田も、ムッテイの講義で、長い間抱き続けてきたデュナンへの憧憬が些か傷つけられたことは事実だったが、同時に、（普通の人間に過ぎなかった彼が赤十字を確立したのだ）と考えると、反って親近感を増したことも事実だった。

ふと我に返ると、藤田は、堂内に自分一人が取り残されていることに気が付いた。思わず背筋がすっと寒くなるような思いに駆られて慌てて出口に向かった。

カステリオーネまでのバスの中は賑やかだった。

朝早くミラノを発ち、デセンツァーノの駅で観光バスに乗り換えてから、サン・マルチーノの戦勝記念塔や納骨堂の見学、さらにはソルフェリーノの砦（ロッカ）の視察、と、殆ど休みなしに引き回されたうえ、初めの予定にはなかった、カステラーニ伯爵主催の「昼食会の招待」という、生まれて初めての経験までさせられたのだから、まさに一行は、緊張と疲労困憊の極に達していたといってよい。

その緊張が、バスに乗り込んだ途端に一遍に吹っ切れて、たちまち談論風発の車内となった。

まず、塩谷・アントニオ夫人の説明が始まる。

「さて、皆さん。これからの予定をお知らせしておきます。カステリオーネまでは大体二時間半から三時間掛かるとみてください。

カストリオーネは、現在は、鞄やかつらなどの家内工業が盛んな町として知られています。人口は一万五千人。九つの教会と一つの修道院、そして古いカレッヂもある静かな平和な町です。

それから、皆さんの宿のことですが、『シシリー』と『スタンレー』の二軒に分宿します。宿の規模は、大体日本の共済組合程度と思って下さい……」

この辺りからミラノ、ヴェネチアを結ぶ高速道路に入る。ガタガタ揺れていた座席がスーッと安定してくる。

このとき、一番前の座席にいた神保団長が妙なことに気が付いた。運転席の速度計の針が、いくらスピードを上げても上に振れないのである。

「塩谷夫人」

「はい、何でしょうか」

「運転手さんに、今何キロのスピードで走っているのか聞いてください」

「はい。ちょっとお待ちくださいね。（イタリア語で

運転手と話し合う）分かりました。この一か月ほどメーターが壊れていてよく分からないけれど、多分百五十キロぐらいじゃないかということです」

「えーっ、そ、そんな……」

「プ、プ、ププーッ」と、バスはクラクションを鳴らして走る。この音が、昔の日本で流行った豆腐屋のラッパの音に似ていて、奇妙な哀愁が漂う。

道路の両側の並木が流れるように後ろへ走って行く。時々見える赤い花は、猿すべりと夾竹桃である。農村地帯なので、赤い万年瓦の農家の屋根が点在し、とうもろこし畑が延々と続いている。また、この辺りには意外に銀杏やポプラの木が多く植えられているのが目に付く。

そばを流れる小川の水量は驚くほど豊富で、藤田は、日本の奥入瀬渓谷を思い出した。

両側がいつの間にか糸杉の並木に変わっている。カステリオーネに近づいてきたのか、薄いワンピースを着たイタリア女性や長髪の若者達の姿が多くなってきた。

「グーモーニング、セブン」

藤田は、モーニング・コールを微かに聞いて起こされたが、まだ昨夜のワインの疲れが取り切れていない。気が付いたら、ここはカステリオーネの安宿「ホテルシシリー」だった。

昨夜は、レストラン・ラ・カシーナで、カステリオーネ支部長のガリレオ主催の「歓迎晩餐会」があって、全員が出席して大いに飲み、食い、かつ歌って、帰宅し就寝したのは確か午前三時を回っていた。

藤田は、このパーティを通じて、初めて、『陽気なイタリア人』の本質を見たような気がした。彼等は日中の煩わしい出来事などはきれいに忘れて、また明日のことなどは一切考えないで、この一刻を心の底から楽しく歌い、踊り、語っていた。恐らくこれが、この国の人の本来の姿なのであろう。

中でも、彼が一番驚ろいたのは運転手キムの変貌ぶりだった。彼がテノールで歌った「オーソレミヨ」の見事さはまさに抜群の出来だった。一瞬満場が静まり返ったあと、万雷の拍手を受けるキムの姿を見て、藤田はしばし呆然としていた。音楽の知識を殆ど持ち合わせない田舎教師の彼は、日本でこれだけの歌が歌える人と言えば、「音楽大学出身の専門家」とばかり思い込んでいただけに、この男が、「速度計」も満足に付いていないバスの運転手キム本人とは到底信じられない思いだった。

朝食をとりに階下へ降りて行くと、まだ客はまばらだった。真っ白い歯をした小学校の若い教師達が、談笑しながらうまそうにパンを食べている。まさに彼らは元気

印なのだ。

外に出ると、隣家は小さな本屋であった。カステリオーネの地図とコカコーラを一本買って一ドル札を出したら、親爺はしきりにその札を透かして見たり、叩たいて見たり、ついには指先で弾いたりしてから、三百リラの釣り銭を寄越した。どうも妙な感じであった。尤も後で聞いたことだが、一行の一人がデセンツァーノで買い物をして一万円札を出したところ、九万何千円かの釣り銭を出されて、びっくりして返したそうだ。要するに、日本人が初めての土地なのである。

藤田が地図を頼りに歩き出すと、何時の間にか同行三人になっていた。県境の分教場の教師で寺の住職も兼ねている吉田、この旅行から帰ってから一週間後には再び文部省派遣でスペインへ来なければならない青山が、藤田に添って歩いている。舗装道路に近づくにつれて、周囲に生け垣を巡らせた小さな一階建ての家並みが続く。色の濃い花が咲き乱れていて、赤いスレート瓦との調和が美しい。日本流に言えば建て売り住宅というところであろう。

右手彼方に修道院が見え出した。十七世紀中期の建築物が今尚そのまま使われているのだが、信仰の力と言うべきであろうか、礼拝堂や廊下の大理石は、いつ行っても、顔がはっきりと映る程磨き上げられているという。

「あの修道院が、ソルフェリーノの戦いの時、傷病兵を収容して、修道女や村の女性達が夜を徹して看護した所なんですね」

畏敬の念を込めて青山が言った。藤田と吉田は黙って帽子を脱いで通り過ぎた。

夏の日は燦々と降り注ぐが、時折、涼しい山の風が吹いてくるので心地よい。

藤田は、向こうから歩いて来る三人連れの農民に声を掛けた。

「キエザ・マジョーレ？」

この町ではイタリア語とフランス語きり通じないというから、度胸でぶつかるより方法は無い。

突然何国人か分からない人間から、聞き馴れない言葉を浴びせ掛けられて三人は驚いたらしい。

「キエザ・マジョーレ？」

今度は言葉が通じたのか、それとも意図が分かったのか、三人で何やら話し合っていたが

「ドゥーモ？」

「イエス、ドゥーモ」

藤田は、村で購入した地図を検討して、ある程度の知識を得ていたので、キエザ・マジーレが村人からドゥーモ（大殿堂Duomo）、または、カンナザリオ・エ・チェルスヨ（立派な大きな教会）と呼ばれていることを知っていた。なにしろ信仰心の厚い土地柄なので、こんなに小さな町なのにキエザ（カソリック系の教会 Chiesa）

だけで九つもあり、マジョーレだけが「ドウモ」と別の名称で地図に書き込まれてあったのを思い出したのである。英語のカテドラスと同義語なのであろう。

三人の若者の指差す方角には小高い丘があって、地図で示している位置と一致しているので

「ありがとう。サンキュー」

と、手を振って謝意を表し、目的地へ急いだ。

キエザ・マジョーレ（La Chiesa Maggiore）は、庭の広い大きな教会だった。ちょうど結婚式があったらしく、正門から腕を組んで出て来た新郎新婦に、二列に並んで待ち受けていた参列者達が盛んに米を投げ付けていた。これがこの地方の風習なのであろう。そう言えば塩谷・アントニオ夫人が「イタリアという国は、北イタリアが働いて、南イタリアが消費すると言われている国で、北イタリアには豊かな農家が多いんです」と説明した言葉を思い出した。

藤田は、こののどかな風景を眺めながら、思うともなく、突如訪れた千八百五十九年六月二十四日の悲劇を思い起していた。「思い出」では、こう述べている。

「カステリオーネの病院、教会、修道院、サン・ルイジ兵営、サンフランシスコ教会、憲兵隊およびマジョーレ、サン・ジュセッペ、サンタ・ロザリーアの三教会は負傷者で満員になっている。彼らは建物の中に詰め込まれ、ただ、藁の上に横になっている。街路や中庭や広場にも藁が敷かれ、四方から一時にやって来る負傷兵達を少しでも太陽から防いでやろうと、こちらには、俄か造りの板屋根が作られ、あちらにはテントがはってある」

庭の一隅に滋愛、人間愛を表したというピエタ像が建てられている。これは、青年時代彫刻を学んだエジオ・ムッテイがミラノ博物館にあるミケランジェロ晩年の作品「ロンダニーニのピエタ像」を模作したものと言う。

デュナンの像について、塩谷夫人がこんな話をしてくれた事がある。

「銅像というと、日本では直ぐ本人の顔って相場が決まっているわね。ところがデュナンには、四つもモニュメントがありながら一つも本人の顔が無いのよ。

デュナンはその死に際して『私の墓は建てなくてもよい』って遺言したので、十年間も墓が建っていなかったのね。ところが、デュナンが第一回ノーベル平和賞受賞者と分かると、チューリッヒの市長が中心になって募金して忽ち市営墓地の正面に立派な墓を作っちゃったわけ。ところがその像というのが、旧約聖書に出てくる『よきサマリア人』が『傷ついたユダヤ人』を介抱している像なのよ」

「デュナンの顔じゃなくて？」

「そうよ。それから、ジュネーブ大学の構内にもあるわ。プレートにはヘンリー・デュナント・モニュメントって書いてあるくせに、台座の上には翼の生えた天使が乗っているだけ……」

「へーえ、天使がねえ」

「スイスのハイデンという村の、ドイツ国境にあるボーデン・ツェーという湖に面して建てられている碑には、『よきサマリア人』が右手を空高く上げている像が彫ってあるわ。赤十字が未来永劫、栄えて行くことを表わしているんですって……。それと、キエザ・マジョーレの庭の隅のムッテイの力作ね」

藤田は、アンリー・デュナンの体から、「純粋な人間の善意」だけが抜け出して、空高く飛び立って行ったような思いになった。

確かにヨーロッパの人々は、いや、赤十字を創設した多くの人々は、デュナン自身を見ていたのではなくて、その飛び立った「純粋な人間の善意」だけを見ていたのに違いない。考えてみれば、人間愛、人道などというものは人類が発生した時から存在していたものだから、アンリー・デュナンは、それを顕在化し、組織化したことに功績があったと、考えるのが本当かも知れない。

だからこそ、幾つモニュメントが建てられても、「よきサマリア人」か「天使」の像になってしまうのだ。

まだ、キエザ・マジョーレの周囲を色々撮りたい藤田は、「国際赤十字博物館」を早く見たがっている青山たちと別れて単独行動をとることとなった。

山道を下って行くと、日本の昔の茶店のような店があったので懐かしくなって、コカコーラを注文した。すると、先客がくるりと振り向いて「藤田さん」と言ってニッコリ笑った。ハッとしてその顔を見ると何と紛れも無く美登利ではないか。

「あ、……驚いたなあ。こんなところで美登利さんにまた会えるなんて……」

「だから申し上げたじゃありませんの。またすぐにお目に掛かりますわ、って……」

「しかし……」

「実はあたくし、このカステリオーネにずっと住んでおりますのよ……」

「えっ、そりゃあ人が悪いや……。それにしても、また会えるとは夢にも思わなかったなあ」

茶店を出ると、道は細いだらだら坂となる。森と言っても、日本の森と比べると下枝の部分が少ないのでかなり明るい。そのうえ、時々木漏れ日がキラリと光って夏の太陽を二人の頭上に注ぎ掛けてくれる。

森が切れると、眼下に高級住宅の群れが広がってきた。

「あたくしの家にお寄りになりませんこと？」

何時の間にか、藤田の右腕に取り縋るようにして歩いていた美登利が言った。

「折角ですが、僕は今すぐ食事をとりたいんです」

「食事でしたら、あたくしの家でなさったらいかがですの？　あたくし、藤田さん、あ、これから藤田さんを一之さんとお呼びしてよろしいかしら？」

「は、はい、結構ですけど……」

「うれしいわ。では、一之さん。ホホホ。あたくし、一之さんにお話ししたいことがたくさんありますの」

「は、僕もそうなんですけど、ただ、じつは食べたい物が決まっているんですよ」

「それなら家にはメイドがおりますから……」

「リゾット・アイ・フンギという余り高級とは言えない食べ物なんですよ」

「リゾット・アイ・フンギ？」

「ええ、恥を申し上げますとね。私は頑固な米飯主義者でしてね。いや、そんな気取った言い方は止めて、つまり、米の飯が大好きなんです。毎日食べてないと元気が出なくなっちゃう性分なんです」

「あら」

「それが、もう旅に出てから十日間になるというのに毎日パン、パン、パンでしょう。おかずは肉と、いんげん、グリンピース、人参の煮物とジャガ芋の組み合わせ。ディナーの時だって、フルコースに変わるだけで、米の飯が出るわけじゃありません。もうホトホト参りましたよ」

「ホホホホ……。そうでしたの」

「ところが、夕べの歓迎会のオードブルにそのリゾット・アイ・フンギ（ＲＩＳＯＴＴＯ　ＡＩ　ＦＵＮＧＨＩ）という食べ物が出たんですよ。簡単に言えば『きのこ入りおじや』ってところなんですが、これが実にうまかったんです。味付けや炊き方は日本とはまるで違うんですが、何しろ米が主体ですからね。あんまりおいしかったので、お代わりを二杯もしてしまいました」

「まあ、ホホホホ……」

「『おい、まだオードブルなんだぞ』って、友達に散々冷かされました」

「あ、それならば、あたくしが知っているお店が近くにありますから、そこへご案内しますわ。少し汚くて小さいお店ですけれど……」

「いえ、家の大きさなんて……。あの雑炊がまた食べられるんでしたらどんな所でも結構です……」

「では、そこに決めますわ」

美登利は先に立って歩き出したが、ふと、足を止めると、藤田を振り返って、

「そろそろあたくしの事についてお話し申し上げなければいけませんわね……」

「……はあ」

「あたくしは、昨日も申しましたように東京育ちですの。女子大の三年生の時にアメリカに一年間留学しましたの。これといった目的も無いアメリカ暮らしでしたけど、この一年間が、あたくしの人生観を大きく変えてしまったような気がしますの」

「つまり、一人娘のあなたがお家を継がなかったということですね」

「はい、それもありますが、それ以上に、これからはあたくし自身が選んだ人生を、あたくし自身の力で歩んで行こうと決心したんですわ。家柄とか財産とか義理などに囚われない、神に召される時に、決して悔むことのない人生を過ごしたいって考えたんですの」

「それが、ジェファーソン氏との結婚？」

「ええ、そうですわ。彼は、当時、四十三歳の空軍大佐でした。沖縄の嘉手納飛行場の第一作戦部長でしたわ。恐らくヴェトナム戦争の生き残りなんでしょうけど、彼は過去のことをあまり話したがらない人ですから、詳しいことは存じませんの。

ただ、男性的で、優しくて、頼もしい人だと思って、彼のプロポーズをＯＫすることにしたんですの」

彼女は立ち止まって、しばらく山あいの景色を眺めていたが

「あたくしの方はそのくらいにして、ねえ、一之さん」

「は？　何でしょう？」

「昨日、一生忘れることが出来ないっておっしゃった幼なじみの方、その後、お元気ですの？」

「いえ……」

「……」

「いや、どこに住んでいるのか、どういう生活をしているのか、全く分からないんですよ。随分探したんですけどねえ……」

「そんなに仲のよい方でしたのね」

「はい、こんなに小さいころから十歳ぐらいまでの間でしたが、二人はいつも一緒でした。離れていても、いつもお互いのことを思っていましたし、心の底から信じ合っていました。一度、いじめっ子の駒吉と言う子に彼女がいじめられているのを見て、死物狂いになって掛かっていったことを覚えています。五年生に三年生じゃあ話になりませんよ。それでも、殴られても蹴られても掛かって行ったそうです。『幸恵ちゃんの為なら死んでも戦う』って、仲裁に入った近所のおじさんに言ったそうです」

「まるで、ナイト、ね。それで、彼女は？」

「血だらけの僕の枕元で、いくら親が帰ることを勧めても、頑として動かなかったそうです」

「まあ！」

「その幸恵ちゃんが、小学校五年生の時、突然、僕の前から姿を消してしまったんです」

「……」

「今の、大人の僕の目から見れば、単なるおやじの転任に過ぎなかったんでしょうが、仲の良かった幼い僕達には、生木を裂かれるような思いでした。僕は、幸恵ちゃんに毎日手紙を書きました。夕方になると郵便箱の前に立って、彼女の返事を待っていました。多分、三か月ぐらい待ち続けていたと思いますが、とうとう、幸恵ちゃんからの返事は一通も来ませんでした」

「まあ」

「……」

「それじゃあ、もし、もしよ。彼女が今幸せな結婚生活を送っているって分かった時は、あなた、どうなさいます？」

「勿論、すぐ駆け付けて心から祝福してあげます。そして、万一、幸せじゃない生活を送っていたとすれば、僕の全力を挙げて幸せにして見せます」

「まあ、そんなに……。じゃあ、もし、彼女が、今、一之さんにプロポーズしてきたら、あなたはどうなさいますの？」

「そういうことはありません。なぜなら、彼女と僕の心を結び付きはそんな程度のものじゃないからです。結婚している僕の家庭を壊すようなことを考える筈がないんですよ。幸恵ちゃんが……」

「……」

藤田は、美登利の方を振り返りながら

「美登利さん。愛には、セックスを仲介とする愛のほかにも、いろいろの愛があると思うんです。例えば、親の愛とか、きょうだい愛、友情、隣人愛なんていうような……。僕達の愛も、そのどれに属するのか分かりませんが、結婚していても、遠く離れていても、お互いに信じ合う心は永遠に変わらないと思います」

「……そうですわね」美登利は小さくつぶやいた。

美登利の案内したレストラン・ラ・セルバンテスは割合に近い場所にあった。殺風景な土間に六人掛け用のテーブルが無造作に並べられた田舎のありきたりのレストランだったが、大衆酒場も兼ねていて、後ろの棚に酒瓶をギッシリと並べた大きなカウンターも備えてある。早速、藤田と美登利のテーブルの上に、手足の長い若い女の子がビールを二本持って来た。驚いた藤田は、すぐそのウェイトレスを呼び止めて、「イクスキューズミイ、ビアー、ノーサンキュー」と言った。どうせ英語は両方とも片言位しか話せないのだ、という安心感があった。すると彼女は、「アクア、……アクア」と叫ぶ。

傍らで美登利が「水と言う意味ですわ」と囁く。

「ああ、水ですか。オーケー、サンキュー」と、礼を言ってコップを引き寄せると、「駄目」と美登利の柔らかい手が重ねられた。

「水、と言ってもこの水は水道のお水なんです。石灰分が強いから、あたくし達のように飲み慣れている者には害はありませんけれども、飲み慣れない方は必ず胃腸障害を起こしますわ。あたくし達も、お客様がいらっしゃる時には『アクア・ミネラル・ノンネ・ガサタ』って注文して買っておきますの。『ミネラル・ウォター』のお好きな方はそのままご注文なされば良いのですけれど、あのサイダーから甘みを取ったような炭酸水の味が厭だとおっしゃる方は『ナチュラル』とおっしゃれば、日本の水のようなおいしいお水が飲めますわ」

そのうちに、待望のリゾット・アイ・フンギが運ばれて来た。藤田は待ち兼ねたように立ち上がったが、それがマカロニであることに気付くと、

「リゾット・アイ・フンギ。ノーサンキュー、マカロニ！」

と、大声を出した。

びっくりしたウエイトレスはその場に立ち竦むし、奥の方からは割烹着を引っ掛けた太った女が慌てて飛び出して来た。それと前後して現れた髭面の男が、大きな口を開けて何やら叫び出した。その横には何時の間に来たのか薄汚い作業着の若い衆が二人腕を組んでジッと藤田達を睨んでいる。どうやら二人は取り囲まれた恰好になった。

藤田と美登利は、なにやら不気味になってきて、改めて、われわれは、リゾット・アイ・フンギという料理が食べたくてここに立ち寄ったにすぎないということを、身振り手振りを交えながら説明し、どうやら害意のないことだけは認められたようだったが、何しろフランス語も日本語も皆目通じない北イタリアの片田舎だけに、しばらくの間は、両者立ち竦みのていになってしまった。

その時、戸外で赤ん坊の火の付いたような泣き声がしたかと思うと、立て付けの悪いガラス障子が乱暴に引き開けられ、乳母車を押した小娘が金切り声を挙げて飛び込んで来た。それを見てびっくりした割烹着の太った女は、慌てて乳母車まで走って行ってその中から赤ん坊を抱き上げ、何回も頬擦りをしたあげく、その大きな胸から乳房を取り出して厭がる赤ん坊に無理やりに乳首を含ませようとした。髭男の方も心持ち青ざめた顔付きで、一緒になって赤ん坊の気配を窺っている様子を見ると、どうやらこの二人は赤ん坊の両親のようである。

この様子をじっと見詰めていた藤田は、ふと、この赤ん坊の泣き方に異常さを感じた。これは、単に眠くて泣く泣き方とも、空腹のために泣く泣き方とも明らかに違った泣き方である。ことによると、一刻も早く原因を突き止めて応急の処置を施さなければならない症状になっているのかも知れない、と気が付くと、藤田はつかつかと太った母親の前に近付いて行った。

その様子に母親は驚いて、慌てて赤ん坊は抱き竦めて後ずさりしたが、しばらく、呆然としている父親の顔を見詰めていたが、とにかくこの東洋人が、静かにほほ笑みを湛え、何度も何度もうなずきながら両手を差し延べて進んで来る様子を見ているうちに、何故か医者にわが子を渡すような錯覚に陥って、ついつい、まだ泣き続けている赤ん坊を差し出してしまった。

藤田は、当然のように赤ん坊を受け取ると、まず、額に手を当てて熱の有無を点検し、次いでおむつを調べて異常のないことを確認すると、ゆっくりとおむつを脱がせ、腹部、臀部、太股、両脚の順に子細に調べていった。

やがて藤田は、赤ん坊の股の付け根に二本の小さな棘が刺さっているのを発見すると、早速、ショルダー・バッグの中の「救急箱」からピンセットを取り出して抜き取った。しかし、長い方の棘は思いの外深く刺さっていて、やや出血もしていたので、藤田は自分自身の唇で血を吸い出し、その後をオキシフルで十分に消毒してからカット・バンで押えて処置を終えた。

着衣を着せ終えると、取り巻いていた人々の間から思わずホッとした溜息が流れたが、藤田にしてみれば実はこれからが大切な治療になるのであった。

傷口の痛みからまだむずかっている赤ん坊を優しく抱き上げると、軽くリズムを取って揺すりながら、藤田は静かに日本の子守歌を歌い出した。

「ねんねんころりよ　おころりよ
　坊やは良いこだ　寝んねしな」
「坊やの子守は　どこへ行った
　あの山越えて　里へ行った
「里の土産に　何貰ろた
　でんでん太鼓に　笙の笛」

幾分哀調を帯びた静かで安らかな子守歌を、藤田はゆっくりと繰り返し繰り返し歌い続けた。赤ん坊は、突然今まで嗅いだこともない匂いのする異国人の胸に抱かれた不安から、また、再び泣き出した。

しかし、藤田は無関心に、延々と繰り返していく。

彼は歌いながら若くして死んだ母リキのことを思い出していた。無教養な女ではあったが、母は藤田をこよなく愛してくれ、添い寝の時には必ずこの子守歌を歌ってくれた。熱が少しあったり、怖い夢を見て脅えている時でも、この母の子守歌を聞いていると不思議と自然に寝入ってしまうのだった。

この信仰的な習慣は、藤田が長男好弥を育てるようになってからも続けられた。妻の兼子の産後の肥立ちが悪かったためもあって、好弥の添い寝には殆ど彼が当たったからである。当然添い寝の歌は母親リキ譲りの子守歌となったが、間もなく藤田は、母親と自分の歌との間には格段の差があることに気が付いた。それは、節回しでも声量でもなく、歌う者の心の差だった。藤田が、子守歌について幾分かの自信が持てるようになるまでには一か年の歳月が掛かった。好弥が誕生を迎える直前になってやっとその境地に達したことになる。つまり、子守歌は、親が子を思う愛の歌であり、母親が嬰児に呼びかける囁きであることを悟ったのである。

それからの藤田の子守歌は、心の中で、ゆっくりと嬰児と語らい、いつ夢の国に入って行くのかを相談する歌に変わってきたのだった。

藤田の子守歌は相変わらじ繰り替えされていた。赤ん坊の泣き声は、思い出したようにしゃくり上げる程度に変わってきた。

今はもう、藤田の心の中の世界には、藤田と赤ん坊の二人きりいなかった。勿論、赤十字もアンリー・デュナンもいなかった。日本もカステリオーネもなかった。回りの物音さえ聞こえなくなっていた。

ふと現実に戻って、改めて、赤ん坊の顔を見た。

赤ん坊は、先程からジーッと藤田の顔を見詰めている。それこそ瞬き一つしないで見詰めている。青い、澄んだ、大きな目を藤田の瞳一点に集中して身動きもしない。

それは、「もう眠くなったから眠ってもいい？おじちゃん！」と、問いかけているようであった。

藤田は、ほほ笑みかけて、そっとマシュマロのように柔らかな頬を突つくと、小さく「お休み」と囁いた。

赤ん坊が、間もなく、長い睫毛を合わせてスヤスヤと寝入ったのを見届けて藤田がそっと乳母車に移し終えた途端、「ワッ」とばかりに母親が彼の首っ玉にかじりついて来た。右も左も構わず接吻の雨を降らせると、ぐしょぐしょに濡れた顔をぐいぐいと押し付けてきた。呆気にとられている藤田に、今度は父親が松の根のような腕で抱き着いてきた。思わず体が後ろに倒れそうになる背中を支えて美登利が

「一之さん！　あなた、本当にお優しい方なのね……。……。あたくし、今、一部始終をあの医者から聞いて、涙が出てしまいましたわ」

「えっ、医者がいたんですか？」

「ええ、ほんの少し前に酒場にいらっしゃったようですわ。ほら、あのカウンターの、頭の真ん中が禿げ上がっている方がそうですわ。この町の診療所長さん。と言っても、外科、内科、産婦人科、小児科、耳鼻咽喉科、歯科、眼科、それに獣医もこなすという器用な方ですわ。この方がイタリア語もフランス語も話せますの。ですから、あたくし、今までのことを全部お話ししましたの。そうしたら、どうもここの赤ちゃん、今度の発作が初めてじゃないみたいですわ。この前の時には大騒ぎになって、『今度起きたら、必ず大病院へ入院させて徹底治療

をする』ってことになっているらしいですわ。何か難しい内臓疾患を抱えている赤ちゃんらしいのね……。

さいわい今日は、棘が刺さった程度の騒ぎで済みましたけれど、もし内臓から来た痛みだとしたら、あの子の姿は当分見ることが出来なくなるでしょうって……」

「うーん、そんなに悪かったのか。それなので、あの子守りが悲鳴を上げて飛び込んで来たり、やっと寝付いた時に、両親が大袈裟な喜び方をしたのですね」

「それに……それにね、一之さん。

あの先生はこうもおっしゃっていましたわ。あの東洋の男は、医者ではないようだが、現在の医者以上の技術を持っている。それは『愛』だ。あくまで素人療法だったが、あの隙のない処置は『愛』以外の何物でもない」

「どうも……それは少し買い被りのようですね」

「……それから、あの男は、東洋に伝わる神秘な術を使うようだ、とも……」

「え？　何だろう。東洋の神秘の術ってのは……」

「多分、子守歌のことだと思いますわ。

あの、のどかで、ゆったりした東洋的テンポの歌を繰り返し繰り返し聞かされていると、いつの間にか医者の自分まで幽玄の世界に引き込まれるような気がしてくるんですって……」

「いや、子守歌は催眠術ではありませんよ。あれは、親と子供の囁きなんです」

「一之さん！」

ざわざわと賑やかな人連れの音がしたと思うと、藤田達のテーブルの上にリゾット・アイ・フンギが次々と並べられた。髭の亭主の挨拶があったが、今度はエドモンド医師の通訳が付いた。

「リゾット・アイ・フンギは、仕込みに時間が掛かる食べ物でしてな。予約をしておいてくださらんと、困るんですよ。しかし、今日は、子供を救ってくださって、本当にありがとうございました。これはお礼です。どうぞ、腹一杯食べて下さい」

それから、賑やかな食事となった。赤と白のワインも瞬く間に飲み干されていった。藤田がリゾット・アイ・フンギをお代わりしたことは言うまでもない。

藤田が帰り支度を始めると、びっくりしたようにメイドがとんで来て、「アフター、アフター」と言う。驚いて藤田が何事かと美登利の方を振り返ると

「この後に、メイン・ディッシュが出るという意味ですわ。今までのはオードブルでしたのよ」

「しまったァ。また、お代わりしちゃった」

その時、大きな拍手の中を髭の亭主が腰を振り振り大きな皿を捧げ持って入場して来た。その横にエドモンドが直立不動の姿勢で付き添っている。まず、エドモンドが一歩進み出て、彼は、髭の亭主兼コック長が、いかにして花の都ミラノの一流レストラン「カトレア」で長年刻苦精励修行し、故郷カステリオーネに錦を飾るに至ったかを紹介し、今回披露する特別料理は、当店へ貴賓臨席の際には必ず提供する当店自慢の「鱒の地中海風アラカルト」であることを披露した。

出された料理は、大きな鱒をトマトで煮たもので、それに小海老や小魚の揚げ物、馬鈴薯、グリンピース、人参が添えてあり、これにレモン汁を掛けて食べるのであるが、正直言ってごく有り触れた大衆料理だった。しかし、このほかに肉料理が十分出たり、食後のデザートに至っては葡萄、西洋梨、林檎、牝丹杏などが無尽蔵に出るという豪華さだったし、最後に出されたイタリアン・コーヒーの味もまた絶妙だった。

パーティが終了したのはちょうど五時だった。藤田は、美登利を自宅まで送ることになった。この季節では、五時と言ってもまだ日が輝いているし、むしろ風が涼しくなっていて散歩には心地よい時間である。

少し歩き出すと、美登利がくるっと振り返った。

「一之さん！　美登利の恋人になって……」

「……　えっ、今、何て言いました？」

「美登利の恋人になって。それもあたくしの家へ着くまでがいいの。一之さん。お願い……」

藤田は、いささか呆気にとられていたが、その美登利の両眼から涙が溢れているのに愕然として

「美登利さん！」

思わず力いっぱい美登利を抱き締めた。

「……キスして」

上ずった声で言って、美登利は目を閉じて待った。藤田は、瞬間妻兼子と好弥の面影が脳裏を掠めたが、それを振り払うようにして、強く美登利の唇を吸った。

美登利の唇は火のように熱く燃えていて、その細い両腕は藤田の背中にひたと縋り付き一瞬の間も離れたくないようにピクとも動こうとしなかった。

二人の立つ大平原ロンバルジアには、二つの影が動かずに長く尾を引いている。

一秒、二秒、三秒、……突如、今度は藤田が燃えた。初対面の時からその容姿挙措に心惹かれ、ともに語り合う度にいとおしさが加わりながら、ただ彼女の家庭の幸せを祈って、じっと燃える思いを秘めていた藤田の心の火口から、突然熔岩が噴き上げたのである。

しかし、ここは北イタリアの片田舎カステリオーネであった。二人が街角で互いの愛を確かめ合っていても、だれ一人振り返る者もいない。サマー・ハットを被った三人の子供連れの母親や野菜篭を抱えた老婆が忙しそうに通り過ぎたが気に留める風もない。

どちらからともなく、二人は腕を組んで歩き出した。

「一之さん。あなた、あたくしが、あなたのどこに惹かれたのか、お分かりになる？」

「……」
「子守歌よ。　……　今日の子守歌ですわ」
「……」
「子守歌はいいですわ。毎日心ならずも大人の世界で翻弄されているあたくし達の心を、例え一瞬にしても、純な欲望のない気持ちに戻らせてくれる、まるで、嬰児が母親に抱かれているような安心感を与えてくれますわ」
「では、今日歌った僕の子守歌が？」
「いいえ、今日の歌だけではありませんわ。初めてお会いした時から持ち続けたあなたへの、甘い切ないような気持ちが、今日の子守歌で、はっきりと恋だったと分かりましたの！　そして、アメリカかぶれして、つい見失ってしまっていた日本人の良さ、日本人の心を素直に見詰めることが出来るようになりましたの！」
街路樹のアカシヤの並木の間に頭を丸く刈り込んだ松の木が散見する。虫よけのためか美観の為かははっきりしないが、細長い幹の先に大きなボールのような松の葉を付けている風景はまさに奇観である。これも北イタリアの農村の風情なのであろう。
「明日の晩、あなた、お暇が作れまして？」
「ヴェロナ市の歌劇を見学する予定になっておりますが……。なにか？」
「あなたさえ宜しければ、晩餐にご招待したいのですが……」
「えっ、それ本当ですか？　それは光栄です。もしそうなら、歌劇をキャンセルして、ぜひこちらに伺います。いやあ、これでカステリオーネの最後の晩をゆっくり楽しむことが出来ますよ。……ところで、明日は、ご主人にもお目に掛かれるのでしょうね」
「生憎、ジェファーソンは長期出張中ですの。一之さん。軍人の妻ほど表面華やかで、内面、死に直面している恐怖という宿命を背負った女はありませんわ。ここは東ヨーロッパの基地なんですの。ですから、国際情勢が緊迫して来ると、夫の出張は長くなるんです。硝煙の匂いを残したまま無事に帰った夫を迎える妻の気持ちって、一之さん、お解りになります？　ですから、五日間なり十日間の休暇が取れた時は思い切って楽しく遊びますの。知らない方は、軍人って華やかだなあ、とお思いになるでしょうが……。それでも、一之さん、あたくし達の心の中には、いつも消し切れない不安が付きまとっているのですわ……。さ、軍人生活のことをお話し出来るのはここまでですわ」
「……そうなると、一日も早く子供さんが欲しいですね」
「あら、子供ならもういましてよ」
「えっ、いらっしゃったんですか？」
「ええ、夫にはアメリカに妻子がいますの……」
「そ、そんな馬鹿な！　だって、あなたは正式に結婚

しているわけでしょう？」
「はい、あたくしが正妻で、ニューヨークのメアリーの方が愛人ですわ。ただ、あたくしと結婚する一年前に軽い意味での交際が始まって、あたくしと結婚してから子供がおなかの中にいることが分かりましたの」
「それじゃ、子供を認知しなければいいじゃありませんか？」
「……」
「認知をすると、財産問題なんかが起こりますよ」
「一之さん。あなたは、明日の身も知れない勇敢な軍人の心をお解りにならないようですわ」
「……」
「でも、この頃のように、毎月二十日以上も長期出張が続くと、ことによると、ニューヨークで親子三人で暮らしているのかしら、なんて考えることもありますのよ。そして、あたくしさえ身を引けば、すべて円満にいくのじゃないかしらって……」
「……」
「ですから、明日のパーティはあたくしと一之さんだけになりますの。　それとも、二人だけのパーティではご不満？」
「とんでもありません。喜んで……」
ホテル「シシリー」では、ミーティングが行われていた。特に、長期滞在予定のスイスのハイデンは、デュナン終焉の遺跡として最も重視されているのだが、なにしろ訛りの強いドイツ語地区でもあるので、特にミュンヘン大学の大学院に在籍中の秋山三千子を呼んでいた。
藤田は中座して部屋に戻ってきた。窓を開けると、思いがけず涼しい風が入って来た。今年もまた日本より一足先にヨーロッパに秋が来るのだろうか。
見えないことは分かっていながら、ついつい美登利の邸宅の方角に目をやってしまう。再び、別れのときの激しい抱擁が思い出された。美答利は、喘ぎながら「このまま死にたい」と口走った。あの純真無垢に見える美登利にも、あのような他人には言えない辛い一面があるのかと、ふと藤田は世の無常を感じた。
いつの間にか、「シシリー」の庭が賑やかになっていた。人数にしておよそ二、三十人。いずれも常連らしく、既に数十本のビール瓶が庭に転がされている。イタリア流の夕涼みである。この暑さでは、ここでしばらく飲んで語って、就寝はおそらく午前二時過ぎであろう。午睡の時間が四時間もある南国ならではの風景である。
いざ寝ようとしたら「ゴーゴーゴーゴー」という暴走族が通り過ぎて行った。
藤田は、ふっと日本を思い出していた。

午後三時半になると、全員三十名がホテル「シシリー」前に集められた。塩谷・アントニオ夫人から観劇に関する説明があり、その後、班の編成に入った。

観劇するのは世界的に有名な歌劇「ヴェルディのアイーダ」で、会場は、ヴェロナ市郊外の競技場跡に作られた自然を利用した大劇場で、売り出した入場券数万枚は既に全席売り切れの状況らしい。九時から開始なのだが、前奏曲が始まると入場を禁止するので、余裕を持って出発するという。この貴重な観劇に欠席する者は、毎日のハード・スケジュールで体調を崩している老人たちと報告書作りを任せられた藤田の五名だけだった。バスは例のメーター無しの赤い頑丈な大型車で、運転手はキムである。

一行を送り出してから藤田は忙しくなった。招待された時刻は迫っている。勿論礼服などは持参していないから、着古した背広何着かの中から比較的汚れの目立たない服を選び、ネクタイもワイシャツも靴も、手拭やセロテープを使ってなんとか恰好をつけた。

美登利の家は瀟洒な邸宅だった。庭園にはグリーンの芝生が敷き詰めてあり、全般的にはアメリカン・スタイルの体裁が保たれた高級軍人の屋敷である。

彼女は、一日中、恋しい人を招待する喜びを隠そうともせずに、朝から料理の材料やワインの買い出しなど、精力的にメイドを指図しながら晩餐の支度に熱中していた。また、旅行途中の藤田の軽装のことも考慮して、まずダンスパーティ等をプログラムから外し、自分自身も正式衣装を止めて、藤田と気軽に話し合えるような薄地のウールのワンピースという軽装に変えた。

定刻より大分前から落ち着かずに玄関に佇んでいたが、警笛音が聞こえ、車から降り立つ藤田の姿を見た途端、矢も盾も耐まらず走り寄って、ひしとその胸に顔を埋めながら、

「よく……よく来て下さいましたわ」

目頭から滲み出る涙を隠そうともせず、蚊の鳴くような小さな声で言った。

藤田は、美登利を抱き締めた腕をさらに強めて熱いキスを贈りながら、

「美登利さん。僕も昨日お別れしてから、ずーっとあなたの面影が消えなくて……」

まず、この地方特産の白葡萄酒で乾杯となった。イタリアの葡萄は、葡萄棚から垂れ下げて作るのではなくて、桑畑のように栽培する。銘柄も多様である。

「……一之さん。あなたは、なぜ、あたくしがここに住んでいるのか、不思議にお思いになりません？」

「僕は、米軍のことについては何も知らないんですが、

多分、定期異動でご栄転になったのかと……」

「それが違うんですの」

美登利は、奥の部屋に行ってしばらく何かを探していたが、やがて戻って来ると、新聞の切り抜きを藤田に見せた。

「拝見します」

それは昨年の「大韓航空機爆撃」に関する東都新聞の切り抜き記事だった。

「千九百八十三年九月一日
大韓航空機撃墜
大韓航空機、サハリン沖で領空侵犯、ソ連空軍機に撃墜される。日本人二十八名含む二百六十九人全員死亡。
同九月七日
国際定期操縦士協会、モスクワ線ボイコット決定。
同九月九日
ソ連オガルコフ参謀総長ら記者会見で、大韓航空機をスパイ機として撃墜と発表。補償責任拒否。
同八月六日
イスラエル軍、南レバノンから部分撤退開始。
同九月六日
イスラム教ドルーズ派民兵とキリスト教右派軍・レバノン政府軍と戦闘激化。米海兵隊四人死亡。
同九月八日
米艦隊、ドールズ派拠点を艦砲射撃。」

藤田は、驚いて美登利の顔を見た。なぜこれを藤田に見せようとするのか、その真意が分からなかった。

確か、藤田の理解しているところでは、

去年の九月に突発した「大韓航空機撃墜事件」の報道は、長年平和の夢をむさぼっていた日本国民にとっては大きな警鐘だった。当時、国民は、寄ると触るとこの話題で持ち切りで、ソ連謀略説とか大韓民国、アメリカ共同謀略説、はては、日本、アメリカ、韓国謀略説までが飛び交った。

結局は、単に大韓航空機がソ連領内に誤って侵犯しスクランブルに会ったのだろうということで納まってしまったが、それでも、日本国民のだれ一人として公表された真相に釈然とした者はなかったと記憶している。マスコミが騒いだのも最初の頃だけで、いつの間にか主要記事が他の話題にすり替わってしまったのも奇妙な感じの事件だった。

「あ、まさか、まさか、この事件とご主人が……」

「それは分かりませんわ。ジェファーソンは、前にも申し上げた通り、普段は明るくて気さくで、何でも話してくれる人なんですが、事が軍事のことになると何一つ話してくれませんの。『知らない方が君の幸せになるか

ら』って言って……。この切り抜きは、彼の書斎の床に落ちていたのを、拾って持っていたんですの」

「ふーむ。あの事件がアメリカにも関係があったのかなあ……」

「いずれにしても、突然、その翌年の三月にここへ転勤命令が出ましたのよ」

二人は、美登利手作りの鹿肉料理を賞味しながら、あれこれと話題を変えながら、時の過ぎるのも忘れて楽しく語り合った。

「日本人が少なくて淋しくはないですか？」

「昨日もお聞きでしたが、案外、そうでもありませんのよ。慣れ、ということもあるでしょうが、ここには月一回集まる日本人会が出来ていますの。

メンバーは十五、六名いる筈なんですけれど、常連となると七、八名というところですわね。あたくしと同じような軍人の妻たち、画家、日本の大蔵省や通産省から派遣されたお役人さん、商社マン、こちらの方と結婚して永住していらっしゃる方、柔道や空手や華道の先生。びっくりする事には『日本語塾』もあるんですのよ。それから看護婦さん、日本とは待遇が全然違うそうですね。勿論視察団の方と違ってピチピチした人ばかり……ごめんなさい。ホホホ。このほかに、時々、冒険家と称する方も見えるんですの」

「成程。そうだったんですか」

「この方々が、あたくしの家を会場にして、一か月に一回、日本語だけを使って一日中楽しく過ごすんですの。ホホホホ。勿論無礼講ですから、お国言葉丸だしでお話しになる方もあれば、お国自慢を次々に披露なさる人もいますし、お仕事でお付き合いなさっている方の悪口の言い放題って方もね。ホホホホ」

「ところで、不躾ですが、食事は？」

「勿論、日本食ですわ。それも、ご飯のおかずとして、お味噌汁、海苔、生卵、納豆、お漬物、焼き魚などの外に、天麩羅、鰻、お寿司、そば、うどん、カツ丼、天丼、それにラーメンや焼きそばなど、その時のご希望によってお出ししますの。お飲み物は日本酒、ビール……」

「や、止めてください。聞いているだけで気が遠くなりそうです。ハハハハ……」

「ホホホホ、じゃあ、来年、一度ご招待しますわ」

「有り難いですねえ。何を置いても飛んで来ます。いいだろうなあ。だれも知った人のいないこの大自然の中で、自分の思ったように出来る。自由に考えることが出来る。ことによったら、過去に遡った世界に戻ることさえも出来るかも知れない……」

藤田は、暗くなった庭園を眺めながら呟いた。

いつの間にか時間が十一時を回っていた。藤田は、帰り支度をしながら、美登利と何回も別れの接吻を繰り返し、恐らく自分の生涯に於いて、この二日間は、最良の「幻想の思い出」になるであろうと思った。

帰宅のため、藤田が玄関前の小ホールに出た時、美登利がその前に立ち塞がり、しばらく顔を見詰めていたが、やがて、抱き着いて泣き出した。初めは別れを惜しんでの涙かと思っていたが、どうやら美登利は、「もう、黙っていられないわ」「ごめんなさい」と何度も何度も小さく叫んでいる様子である。かなり興奮しているらしい。

びっくりした藤田が、抱き起こしてソファーに腰掛けさせ、ブランデーを少量飲ませたりして気を落ち着かせてから事情を聞くと、今度は藤田が呆然となった。

「幸恵はあたくしの叔母でしたの」

「ええっ、幸恵ちゃんは、やっぱりあなたの……」

「ええ、小さい時に大伯父の家の養女になって、利根市にも住んでいたそうですわ」

「……」

「ほんとうに……」

「そ、それで、その頃のこと、何かお聞きになりましたか？」

「それが……。なにしろ、あたくしたち、年が離れていましたし、それに、一度も会ったことがないんですの……」

と言って、美登利は目にハンケチを当てた。

「……それじゃ、無理ですねえ……」

「……あっ、一つだけ思い出したことがありますわ。叔母は、利根小から武蔵野小へ転校する時、それこそ泣いて厭がったそうですわ。後で近所の方が『普段あんなに聞き分けの良い幸恵ちゃんが、なぜあれほど反抗したのかねえ？』って、不思議がっていたそうですわ」

瞬間、藤田は心臓が凍り付くような思いになった。あんなに仲の良かった幼友達との仲をまるで生木を裂くように裂かれて、あのおとなしい幸恵がどんなに苦しんだことか。現在と違って、あの頃は、まだ子供が親に反抗の出来る時代ではなかった。

「それからですわ。叔母が自閉症になってしまったのは……」

「えっ、自閉症に……」

藤田は目の前が真っ暗になっていくようだった。

「武蔵野小に入ってすぐ、学校へ行くのを厭がるようになったんだそうですわ。無理に行かせても、だれとも口を利かなくなって、とうとう校医は自閉症の判断を下したそうですわ。そして、半年程入院して……」

「入院？　……入院してたなんて……　それじゃあ僕がいくら手紙を書いても返事が来なかった訳だ。いや、出したくっても出せなかったんだ……」

藤田は幸恵の両親が憎くて耐まらなくなった。なぜあの時、大の仲良しだった藤田のことに思いが及ばなかったのか、いや、考えついても、父親の栄転を優先したのに違いないのだ。そのために、幸恵は自閉症になった。

「あのう……」

「何でしょうか？」

「一之さん。驚かないで聞いて下さい。実は、その幸恵叔母は、十九歳の時に亡くなっていますの。今まで隠していたことを、このとおりお詫びしますわ」

「えっ、幸恵ちゃんは死んじゃったんですか……」

「ごめんなさい。一之さん」

「いえ、あなたの謝ることじゃありません。なんだ、幸恵ちゃんは、もう二十年も前からこの世にいなかったんですか……。それなのに、僕ったら……」

藤田はふらふらっと立ち上がったが、また、思い直したようにソファーに腰を落とし、きつく目を閉じた。

「シシリー」に戻った藤田は、ベッドの上に体を投げ出すと、まるで脳髄を抜き取られた人間のように、長い間茫然としていた。

午前一時ごろになって、美登利の家のメイドが、美登利からの手紙を届けに来た。勿論、「シシリー」の庭はまだ夕涼みの真っ最中である。

礼を言って受け取ったが、とても読む気にはなれない。しばらくの間ベッドの上に放り投げて置いたが、そのうちにやっと気が落ち着いてきたので、思い切って封を切ったら、手紙のほかに写真が一枚入れてあった。

手紙の前半は、幸恵叔母のことを隠して置いた詫びと藤田に対する切々たる思いが述べられていたが、後半は、藤田には思いも掛けないことが告白されていた。

「（略）これは、けして口外してはならないと母から固く口止めされていたことでございますが、一之様の幸恵叔母に対する愛が余りにも広く大きいことを知って、あえて真相をお伝え申し上げます。

勿論、このために一之様の長い間の夢を壊すことになって、お怒りを買うことも十分覚悟の上でございますし、また、理由はどうあれ結果的には幸恵叔母の秘密を漏らすことになりますので、この手紙が決して叔母への嫉妬から書いたものではないことを一之様に知って頂くため、私も、貴方への愛は、この手紙を最後として、すべて諦めて、二度とお会いしないことにいたします。

実は、幸恵叔母は幼い頃から軽度の自閉症を病んでおりました。自閉症は、一之様もご承知のとおり、まだまだ未開拓の分野の病気のようでございますが、幼児の感情や精神機能一般の発達障害の一つで、外界との接触を

絶って自分の心の中に閉じこもってしまう恐ろしい病気だそうでございます。放って置けばますます悪化して、精神分裂病者として悲しい一生を送らせることとなると考えた大伯父夫婦は、なんとか治療の方法はないものかと、利根市内のあるじっ懇な医師に相談に参ったそうでございます。

そこで、医師の案として示されましたのが「幸恵を救う為のカウンセリングチーム」の編成計画でございました。簡単に申し上げますと、精神科の先生を中心として、大伯父夫婦、一之様のご両親様、小学校の校長先生、担任の先生がチームを作って、お互いに連絡を取り合いながら治療していこうという計画でございました。

そのためには、まず大親友を作る必要があり、その候補に一之様が選ばれました。家が近くて年頃も同じで日頃幸恵叔母と仲良しの子供、というのが選考条件だったそうでございます。つまり、不幸にして将来病気が悪化した時、一人だけでも心を打ち明けることが出来る友達を作っておいてやれば、きっとこの病気の治療方法に新たな光明を見いだすことが出来るのではないかという主治医のご意見だったと伺っております。これまでは、普通の場合、母親だけが心を打ち明ける事の出来るただ一人の友でしたので、ついつい登校を拒否し、家庭にこもりっ切りになるケースが多かったそうでございますが、学校や戸外の生活の中にも母親に匹敵する大親友を持つことが出来たとしたら、この難病に打ち勝つことも可能でないか、という一つの試案でございました。

ここまで申し上げれば、一之様にも思い当たることが色々とおありかと存じます。

一之様が幸恵叔母の家においでになった時、一度でも大伯父夫婦が厭な顔を見せた事があったでしょうか。また、お二人で遊ぶ邪魔をしたことがあったでしょうか。それどころではございません。大伯父夫婦は、いつも一之様に心の中で手を合わせていたそうでございます。

幸恵叔母が貴方様のお宅にお邪魔した時も同じでございます。ご両親がどれほど気を使って下さったことか、遊び道具にしても、お菓子にしても、時にはご飯を出して下さった時も、何気ない風を装って、二人で仲良く話し合えるように気を配って下さったそうでございます。

神社の境内や公園のジャングルジムで二人仲良く遊んだことも、なるべく自然にそうなるように仕向ける双方の親の苦心は大変なものだったそうでございます。一之様の楽しい思い出の一つ、小学校の入学式に手をつないで登校したことも、やはり、双方の親の演出でございました。ここまで申し上げますと、なぜそこまでも、とお怒りになるかも知れませんが、実は、このころから叔母の病状がちらほらと進み出したのだそうでございます。一之様はよく「おとなしい幸恵ちゃん」とおっしゃいましたが、あのおとなしさは、一之様以外の人とは口を利

かない、緘黙といわれる症状だそうでございます。おそらく友達は勿論、ことによると大伯父夫婦にも余り口を利かなくなってしまったのではないかと思います。そこで最後の頼みの綱の貴方様にお縋りした演出とお考えになって、どうぞ大伯父夫婦をお許し下さいませ。

小学校の代々の担任の先生には、それはそれはお世話になったようでございます。それとなく、二人には勿論クラスの友達にも気付かれないように、同じクラスにして下さったり、近くの席にして頂いたり、学習グループや運動グループの編成の時にも特に配慮して下さったり、クラブ活動、遠足、運動会など、たくさんの社交の機会で一杯の学校生活の中で、随分と面倒を見て頂いたようでございます。

このあたりまでは、主治医の先生の治療方針が成功していたのでございますが、五年生になって、予期しない出来事が起こって、病状が一度に悪化してしまったのでございます。

病気は、年や体の変わり目に起こると言われておりますが、五年生の初めに、叔母は初潮をみてしまいました。これがショックとなって病状が悪化し始め、主治医の先生は急遽、大学時代の恩師で現在武蔵野大学医学部長の先生に紹介状を書いてくださいました。その診察の結果、一日も早く武蔵野市に転居することを勧められ、慌ただしく引っ越したのだそうでございます。

近所の方々には転任と申し上げたそうですが、実際には、別に勤務先が変わった訳ではなくて、あくまでも本人に自分が病人だということを気付かせない方便としてこう申したのだそうでございます。

気の毒に、このため、六十歳近かった大叔父は今までと比べると二倍近く通勤距離が遠くなったそうでございます。

一之様。あの転居は、決して親のエゴから行われたのではなく、大伯父夫婦の深い愛情から行われたことをご了解下さいませ。あたくしは、この誤解を……」

手紙を置くと、藤田は、長嘆息した。

「なんだ。そういうことだったのか……」

不思議と怒りも悲しみも沸いてこなかった。自分のこの三十年間は何だったのだろう、と考えたら、一度にワインの酔いが突き上げて来た。ただ、それだけだった。

ふと、床に落ちている写真が目に付いたので、取り上げて眺めた。名刺判の少し変色し掛かったものだったが、髪の毛をお下げにして洋服の上に半纏を纏った少女は紛れもなく高須幸恵だった。

「幸恵ちゃん」

やっと恋人に巡り会えたように熱っぽく囁いたが、ふっと、言葉では表現出来ないような違和感を感じた。

違うのである。写真の幸恵と藤田の頭の中の幸恵が違うのである。写真の幸恵は正真証明の幸恵であるが、藤田の幸恵は、もっと明るく元気一杯の幸恵だった。

「三十年の年月か……」

藤田は、一遍に悲しくなってきた。長い間幸恵を探しているうちに、知らず知らずのうちに幸恵のイメージ化が行われて、気が付いたら、藤田の頭の中にある幸恵は藤田の創造した幸恵に変わってしまっていたのだった。

「これで、幸恵ちゃんは本当に死んでしまった」

藤田は、大粒の涙をボロリと落とした。

藤田は、美登利の手紙の末尾を読んでいなかったが、そこには、こう書いてあった。

「私は、夫と離婚する決心をいたしました。ジェファーソンが出張から戻り次第、手続きを取るつもりでございます。

私が彼と別れるのは、決して彼への愛を失ったからではございません。むしろ逆に、彼を愛しているからでございます。

一之様にも申し上げましたとおり、ジェファーソンは勇敢な軍人でございます。明日戦死するかもしれない勤務についております。その彼が、久々に取る休暇を、親子三人の楽しい家庭生活の中で過ごさせて上げたいと、考えたからでございます。

一之様の幸恵叔母にお示しになった真実の愛を見させて頂きまして……」

外がガヤガヤと賑やかになってきた。どうやら観劇の一行が帰って来たらしい。窓から庭を眺めると、いつの間にか夕涼みの後片付けが始まっている。

空には、珍しく、青白い月が上ってカステリオーネの町を見下ろしていた。

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

〜〜〜

雪の夜

井上二三男

ホテル内部の明るいさんざめきと打って変わって、雪の温泉街の通りには音がない。すべてが静止してしまっている。動いているのは、このバス停を照らす街灯の光の中を舞い落ちる雪の片々だけである。下から見上げると、光の中では白い雪が薄黒い点になって舞い落ちる。夜になって、雪は勢いを増し、地表のすべての形と音を押さえ込むかのように降りしきっている。

旅館やホテルの窓からの光が雪のスクリーンをぼやーと明るくしている。

まだ時刻は、そんなに遅くはない。

温泉地へ来る客の殆どが自家用車か大型の観光バスでまだ陽の高いうちにホテルに着いてしまうか、夜の客があっても、タクシーを使う。今宵はタクシーも動いていない。

バスは下の町に住んで温泉宿の下働きに通う男や女の足である。乗客の減少で、だんだんと間引かれたバスの最終が八時半、腕時計を見ると、もう半をとうに回っている。雪のせいで遅れているのだろう。

黒い洋傘が雪で重くなる。秋雄は、傘をゆすって雪を振り落とす。

バスを待つ者は、秋雄の外にいない。

貞子に黙って来てしまったことが少し気になる。秋雄の方は、いつもの軽い調子で付き合ったまでだが、貞子の気持ちが最近はぐっと深くなったようだ。ホテルには人がいない部屋に不自由はしない。人目を忍ぶ行動も大胆になって秋雄にとって少し重くなってきたところだった。

常務からきつく釘を差されたのが潮時、色ごとは人の目や耳に入るようになったらおしまい、それが秋雄の考えだ。温泉旅館の下働きの男女は、様々な男女のカップル客の色模様の中にいても、それはそれ、仕事と割り切

り慣れもあって、見て見ぬ振り。しかし、仲間同士の色事には尾をつけ鰭をつけて騒ぎ立てる。秋雄のような風来や、事情があって夫と別れた女が多い職場では色事の役者には事欠かない。それだけにそれぞれうまく立ち回るのだが、貞子はそうした芸は得手ないようだ。常務からの注意は二度目。今日のはちょっときつかった。秋雄は、やはり見られたなと思った。

退職届は郵送すれば常務もホッとするだろう。貞子に言えばまたややこしいことになる。女と別れるのに女の気持ちを考えるなどということは、秋雄にはなかった。黙って消えちまう、それが一番いいのさ。現に「あたしを捨てたら死んじゃう」なんて言っていた春子だって、あれから何ヵ月も経たない後、もう男がいるという話が伝わってきていた。

山手の方からヘッドライトの明るさが雪明かりに滲み出、チェンが路上の雪を噛む音を立ててバスが姿を現した。

先客は三人、作業服に綿入半纏の五十台の男と三十台後半と思われる男女である。バスの中はぼやっと暖かい。もう途中から乗る客はなく、バスは降りしきる雪の中を坂を下る。窓は温気に曇って外は見えない。フロントガラスに雪が当たり、それをワイパーが払い、その間から前方が見える。ライトの中に白いものが舞い落ち、闇の中に白い路面が浮かび上がり、そして後ろに去って行く。

それにしても、貞子にはほかの女と違う実があった。器量は十人並、色白で、穏やかだ。夫と別れた事情は聞かされていないが原因は男のほうにあるに違いない。従業員宿舎には入らず、四才の女の子と下の町の長屋の一間に住んでいる。秋雄に寄せる好意も他意のない純真な思いのようである。貞子の気持ちを秋雄は警戒することもなく受けているが、一人暮らしの隙間を埋める打算が秋雄の方にこそあった。秋雄は誘われるままに貞子の長屋を訪ねたことがある。女の子が滅法可愛いらしい。保育園に行っているというが、人のいない部屋で母親を待つ生活で人恋しさがあるものか、肩までこたつ布団に潜るようにして秋雄の顔から目を離さない。下膨れの円い顔のつぶらな目は精一杯の親しみに満ちているようだ。

「あこちゃん、これ運んで」

台所から母親に声をかけられると、それが嬉しいらしく、パッと立ち上がると、僅か畳一つ二つのところをスキップしながら飛んで行く。黄色のセーターにジーンズのジャンパー、緑色のズボン。秋雄は、女はこんなに小さいうちから全く可愛らしくできているなあと感心したものだ。

テーブルの上は、貞子の精一杯の歓待の品々が並んで

溢れそうだ。秋雄にはそれがかえって（ちと参ったな）という気を起こさせた。女の子は、華やかなテーブルの上と常には見ない明るい母親を見て、それがこのおじさんが来ているからだと悟っているとみえ、秋雄を見る瞳が大きくなる。

「おじさんとこへくるかい」

と、声をかけると、もじもじとこたつ布団の中へ潜りこんで、布団のはじから目だけを出している。二度目に声をかけると恥ずかしそうにしながらも、秋雄とこたつ布団の間に入り込む。円い柔らかい小動物はもぞもぞと動いて、じっとしていない。秋雄にとってこれは不思議な感触である。可愛らしいと心底思う。

秋雄のあごの下にあるオカッパ頭を撫でてやる。

「あこちゃんは、いいわね」

貞子は、目を細くした。

あの夜は大袈裟な歓待に少々気が重くはあったが、明るく振舞う貞子といい、可愛らしい女の子といい、楽しい夜だった。あれが家庭の温かさというものなのか。

秋雄はまたバスの中に目を移す。女は男に肩を預け、男は女を引き寄せるようにして女の耳に囁きかけている。「だって」、「うっふん」女は言葉を鼻にかけての喃語である。何をして口を糊しているものか、堅い仕事の者とは見えないが、二人は正に至福の境地である。

綿入半纏の男はと見ると、襟にタオルを巻き、背中を丸めて懸命に右手の小指で鼻を掘っている。気になる塊があるものか、時には小指の先に付着したものの状態を確認しながら、なお掘削作業に余念がない。

実際の年よりは老け込んだ感じのしょぼついたその男に秋雄は、ふと、自分を重ねて見る思いがした。秋雄も数年の後にはこの男と同じ年令になるのだ。俺ももう若くはないのだ。秋雄は、目が覚めるように思った。独り者の寂しさよりも気安さのほうがいい、むしろ周りの女どもからチヤホヤされて秋雄は年のことなど考えたことはなかった。

風来坊であることを自分に言い聞かせて、自分本位に生きて来たが、若いつもりの恰好を付けて自分を甘えさせているだけではないか。こんな考えにとらえられたことは今までになかった。湿った雪の夜の空気が重く秋雄を包んで、心の中までしっとりさせてしまうのか。

秋雄は、急に人が恋しくなった。

今夜はどうかしている。秋雄はそう思いながら、急に貞子に会いたくなった。せつないように会いたい。秋雄は、目を閉じて、自分の心をじっと見詰めた。今までも人恋しくてならないことはあった。しかし、それは、特定の人が恋しいのではなかった。漠然と人が恋しいのであった。

いま、秋雄の胸の中は無性に貞子に会いたいという気持ちが大きく広がっている。そして、貞子のことを思うとじーんと心に痺れるものがあった。よし、明日、貞子に会おう。そして、貞子の気持ちを確かめよう。いつもの調子で誰にも、何も言わずに来たことをよかったと思う。恰好屋の秋雄はそうでなければユーターンはできないところだ。

町に近くなって、車の往来が繁くなり、路面に吸われるように降りしきる雪もタイヤに踏まれて溶けて、水を溜めた路面をタイヤチエンが打つ。

明日貞子に会おうと決めた秋雄は、心が温かく融けて、流れてゆくような幸せを感じて、チエンの響きがはるか遠くの音のように聞こえた。

バスは、やがて町に入る。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

続々 童子寸描
——頑駄無の巻——

大和禎人

ほどなくわが幹人くんは満五歳を迎える。幼稚園年中組（もも）にとって殿りの三月誕生会も間近いこの頃である。

三月二十一日生れで、早生まれ中の早生まれというハンディはもはや気になることではなくなっているようで、きみは闊歩して少年期に向かいつつあるように見うける。

かってきみは宮内庁病院に向かわれる天皇さまの姿がテレビ画面に写し出されるのを見ていて、（あの人ビョウインへ行くの）と心配する声をあげたことはまえに書いたことだったが、そのお方が亡くなられて昭和から平成に時代が変わるという出来事があった。そのことをこの続々編では書きもらす訳にいかないだろう。

幼いきみにとってそれはさしたることではないに違いないのだが、大人のわたしたちにとっては一つのエポックをなす出来事だった。人間の死は何人であれ英語なら厳粛に（Die）あるいは（Death）と呼ぶところを崩御と言い、諒闇という国民服喪の重苦しさの中に置かれたじぃの記憶はもちろん大正天皇の時のものだが、小学五年生だった。壇上に立たれた校長先生が嗚咽される光景に出会い、そのこと自体にはなはだショックをうけたことは「大正っ子」という長編の少年編にも書いたとおりである。

また、（少年倶楽部）という当時ひろく愛読されていた雑誌の表紙で、紺絣の少年が国旗の竿頭に黒布をつけ半旗を準備している姿を斉藤五百枝さんという画家によって描かれたものがあった印象もなぜか心に深く刻まれ残っている。

当時のことだ。歌舞音曲の自粛はもちろん、少年のわたしたちも声をひそめるあんばいの文字どおり諒闇を経験したものだった。だが、当時御大葬と呼んだ葬送もこ

んどは大喪という表現に変わった。なにとはない配慮を感じる。そして、テレビに噛りついて葬列を見送った大人たちは大方限られた世代であったろう。

幹人くんよ、きみの心奥になにかを刻むことがあったろうか、すでに小学生であったじぃと異なり、いっそう小さい幼稚園年中組のきみにとってなんらかの印象を残したとしても、たぶん一過性に終るものに相違ない。この時期きみの熱中している「バカぼん」という番組の親父さんの言い種を真似て言うなら（それでいいのだ）というところであろうか。

「ボクがケミガワに行ったあとはどうやって暮しているの」

「……」

これは四歳児の口から言われてみると妙なものだ。恐れ入るほかない。

「うむ、それはキミがいないと寂しいよ」

「そうかあ」

それ以上はどうという会話ではないのだが、幼児の思いの中にそうした複雑な屈折を見出してハッと驚くのである。

（ケミガワのおばぁちゃん元気ですか、ボクも元気です）

これは口述筆記である。板橋のばぁちゃんが書かされている。きみはあいかわらず千葉の検見川と板橋の間を行き来することが多い。検見川はママの里方である。幼稚園が休みになればとくに長期の滞在をする。あちらのおばぁちゃんもお待ちかねなのだ。近いので幼稚園の休みに限らず往来は頻繁である。板橋のじじ、ばばはきみの留守を見すまして、この際とばかり旅行に出かけることが多い。けっしてきみの案ずることはないのである。

「あっ、お兄さん、祐次郎に似ている」

「ほんとなら嬉しいけどね」

「似てるぅ、ほんとだよぅ」

「ホラ、このお兄ぃさんだよ、この間、きみの留守にマークⅡのプラモデルもってきてくれた人、ホラ、パパが組み立ててくれたアレ」

と、じじはとりなすのだが、

「こんどはポルシェたのむね、ほんとうだよ、ゲンマン」

きみがミニカーに凝っていることを知っている自動車のセールスマンが相手だ。好感のもてる若者だった。

「ボク、いたな、ゲンキ」

「あっ、冷蔵庫もってきたおじさんだ」

「そう、覚えていてくれたの」

冷蔵庫を買い替えたのは一年ほど前のことだ。幼児の前頭葉発達の仕組みにはなにか特別の仕掛けでもあるら

しい。

金曜日ごとにご用聞きに顔を見せる信州屋のお兄ぃさんはとくに親友である。

「おっ、いたな、ボク」

「あっ、お酒屋さんだよ」

と、伝える。

このお兄ぃさんは愛嬌良しで、商売もそれなり巧みなのだった。

こうした社交性と思えるものはもちろん、もの怖じしない幼児特有の強みからくるものに違いない。

（ヘリコプター付）ビルデラックスという駐車場ビルの豪華玩具を買ってもらったあたりを、ミニカー遊びのクライマックスに、きみの遊びの嗜好が突然のように変化を見た。

いまやウルトラマンと怪獣との対決に血を沸かし、明けても暮れてもそちらへの熱中の度合いがエスカレートを増すばかりだ。

かの名だたる円谷プロ製作にかかるいわゆる（特撮もの）の魔力である。荒唐無稽で大人は見るに堪えないストーリーなのだが、架空にしろちょっぴり施されている科学の色彩や、ウルトラマンの展開する正義の活躍が幼い心を捉えて離さないようである。

愛蔵版「ウルトラ怪獣大全集」

ウルトラ怪獣 610 体総登場

愛蔵版「ウルトラ戦士特撮大全集」

いずれも小学館発行である。監修円谷プロとあって、（テレビくんデラックス）、（カラーワイド）などとシリーズを名づけられている。

また東映、東宝、東芝、コロンビア、ハミングバードなどのビデオ群も氾濫している。いまはミニカーに変わってウルトラマンや怪獣の玩具が数を増やし、圧倒的に幅を利かしている。

ビデオデッキの操作をすっかり覚えてしまって、繰り返し飽かず見るものだから、とうとう機械を壊してしまった。じじばばは良い加減うんざりし、悩まされていたので、この際しばらくは修理をしないことにしたものである。

ときに、きみに逞しい健太という友人ができた。公園の前の「ドムドム」という店のこどもである。年中組になってから、保育園から転入してきた園児である。かれはきみにくらべるとはるかにラフに生まれついている。臆病で引っ込み思案のきみにはこういう友達があってリードされるほうが良いようにも思われるのだが、すべてこの子にべったりで、家来のようであることは心配であるし、情けない。

かれは二輪車を自在に乗りこなし、遊びにも長けている。運動神経抜群のかれは運動会の徒競争もつねに一等だし、週一度のプールの時間でも達者に飛び込み、泳ぎもできるらしい。それにひきかえ、きみはいまだ（真理子せんせい）がプールの中で抱き留めてくれないと飛び込めないらしい。ママから聞くところによると、（真理子せんせい）をきみは好きらしく、なにかで声をかけられてポッと顔を赫らめることもあったそうな。そのひとの胸に抱きとってもらうのだから、たとえ泳げなくともかえって幸せなのかも知れぬ。おとなの女人にむけて憧憬を抱く……、それは漠然としたものにしろきみの成長を語るものだ。じぃにも秘かな同じ覚えがある。

さて、この健太の出現を一つのベースとしてきみは急速な成長を遂げる。

「公園に行く」

と言えばきみをガードするために必ずじじ、ばばどちらかが付き添い、ベンチにいて見守り、また変化をもとめて遠い公園にも出かけていったものだ。この時期門の扉にはきみの手の届かぬ高さに引っ掛け金具を取り付け、監督無しには道路へ出ないようにも配慮した。それをきみは〈開けよ〉と頑張って地団駄を踏んだものだったが、いつの間にか、長い靴ベラを持ち出して開けてしまうといったイタチごっこもいまは昔ばなしになろうとしている。

健太との交遊をもう少し、

かれはヌウーとしてつねに現われる。このヌウーはいつも同じだ。だが、感心なことに、

「いま何時、もう五時、まだだね、じゃ、まだ遊べる」

遊びの限度を心得ている。だが、時計は読めない。その点きみも同じだが、

「ほら、公園の音楽が聞こえる、五時だよ」

（家路）のメロデーは風に乗って聞こえることがある。

そして、帰りぎわが奇麗である。きみの方はそうはいかない。ベソをかいたりした。また、言われれば散らかした玩具の跡形づけもかれが積極的にする。

だが、時を選ばぬ訪問には閉口する。

「いまご飯だから、まってよ、キミは食べてきたの」

そう言う中に、きみの方が食事を止めてスルリと逃げ出してしまう。またそうかと思うと、

「きょうはお天気がいいから外で遊びなさい」

というばぁちゃんの促しに、きみの方は素直に身をひるがえし門口へ向かおうとするのに、

「おれはいやだよ」

とかれは動じないしたたかさを持っている。舌をまくのである。室内できみが豊富に買い与えられている玩具で遊ぶ方がよほど楽しく、魅力があるからだ。

またのある日、かれより先客があった。公園で知りあった祐ちゃんという子だ。この子は幼稚園が違うのだそうだが、たびたび風のように姿を見せることがある。

「おジャマします、みきとくんいますか」
と、たいへん行儀の良い子だ。
さてその日、健太は遅れてやってきて、この先客があることに気づくと、ムウッとしたあんばいに戸口に突っ立ったまま入ってこようとしなかった。
「健太、どうした」
「……」
返事をしないままなのに二人の方は呆れていたが、やがてきみの方が近づいて健太の目先に手をかざし上げ下げする、眼の虚ろを試すおどけの場面があった。
「健太、どうしたの」
祐くんも聞くのだが、かれはムウッとしたままであった。こどもの間のすざまじいジェラシーだった。
「祐、帰れ」
と、かれはやがて言い放ったことだ。かれはきみとの交遊を独占したかったのだ。
だが、
「かれも放っておかれているほうだから、みきと同じ可哀想な仲間なんだ、あんがいしっかりしたところのある子だよ」
ときみのパパは理解がよい。きみはいまのところ独りっ子だが、健太には妹があって、面倒見を言いつけられることもあるらしい。（ドムドム）はきみたちの幼稚園を含め短大まであるS総合学園に近く、地の利を得ていて当たりをとった軽食のチェーン店である。かれの両親は忙しく働きずめらしい。おばぁちゃんと妹、それにかれの三人が留守を守っているようだ。かれの逞しい性格や自立の行動はそういうベースに育てられたものだと思う。きみの大いに見習うべきものに思われる。だが、きみはその家来になってもらいたくはないのだ。
これ以上のところはきみの良識の発達に待ち、また、幼くも友を選ぶ場合の選択はきみ自身の問題でもあるのだから、生れついたのきみの性に判断を委ねねばならないことのようだ。
きみの幼稚園ライフは課外の教室参加で多岐、多忙である。伸芽、絵画、体操は園内。芽生えはスーパーの3F。パパ、ママの期待を担い、月謝の負担も大変と思われるが、選択も幅広く欲張ったスケジュールをこなしている。伸芽と芽生えは進学教室なのだ。
きみの登園はおもにばばの自転車に頼っている。擂り鉢状の公園を横断すれば二百メートルぐらいの距離を歩かせた方がよいと思うのだが、近ごろのこどもはそうはいかない。公園の上の道をぐるっと回り道をして行くのだ。マイカーを運転するママが多い。駅からはスクールバスもある。（バスに乗りたい）と言っていたぐらいだから、自家用の自転車では最低ということになる。
でも、パパが土曜が休日だとマイカーで行ける。それ

と雨降りの日はじじが運転するならいになっている。きみは（お殿さま）である。
「みきちゃん、行ってきますは」
「行ってきまぁーす」
そして手を振る。車庫から自転車を出して準備をするじじのつとめにむけての挨拶である。
朝のこども番組が登園時間との兼ね合いに難しさを与える。
「ロクガしといて、きっとだょ」
という注文は相変わらずである。それよりもなにより困るのは食事である。親たちの帰宅が遅いので、寝不足ものせいもあり、テレビに気をとられて食が進まない。ばばは一苦労する。制服へ着せ替え、道具を揃える。プールのある火曜日は体温を計り、参加、不参加をマークし、認印が必要だ。それに課外教材の点検も忘れてはならない。とにかく毎朝きみを送り出すまではハラハラしどおしである。
「このかおがウソつく顔に見えますか」
どこでどうして覚えたものか、こんな科白も知っている。
「家光のように春日局に叱られるぞ」
「ジダイがちがうもん」
折からNHKの大河ドラマは『春日局』であったが、大人の語りかけとしてはまことに拙劣な会話を四歳童児は軽くイナしてケロリとしていた。
なだめ、すかしはもはや手のうちを読まれて騙しはしだいに効かなくなってくるようだ。栄養バランスを考えあれこれメニューにばばは苦心するのだが、ネジ込むようにしなければ駄目である。実はパパもまったく同様であったという他からのいみじき証言を聞いているのだから笑いたくなる。
四月末から夏にかけ、きみはパパ、ママ。時にはじじ、ばばも一緒に（住宅公園）へ出かけることが多くなった。
そうしたいきさつの中、
「住宅公園いくのもいやだ」
と、敬遠し幼い心の底からの卒直な提言もあった。
池袋、練馬、成増、城北、錦糸、さらに浦和などとよく訪ね歩いたからだ。
住友林業、三井ホーム、積水ハウス、ミサワホーム、旭化成ヘーベルハウス、といった住宅メーカーがモデルハウスを競う展示会場を指して、つまり（住宅公園）と言うのだ。
たまたまキャンペーン実施中とかでクジ引があり、きみは不思議にクジ運が強く一等や二等を引き当てシューズドライヤーや幸福の木をもらったりしたものだ。しかし、こどものきみにとっては退屈千万であったはずだ。（もういやだ）は無理もないところだ。

だが、きみにとっても一つの重大事がやがて起ころうとしていたのだ。きみの生れ育った家をパパやママが建替えようとしていたからだ。やがて解体屋の手にかかってきみの生い育った家が壊される、なんとも忍びないことだ。じぃはきみより大きく小学校四年生のときそうした事態に際会している。壊されていく家の姿を網膜に焼き付け、けっして忘れまいと思った記憶があるのだ。いま、きみの上に同じことが起こり、それがいっそう幼いきみにどんな陰を落とすのだろうかと思うのだ。

きみのじじは気早く六月末には庭木の移動を初め、室内の方も夏ごろから片づけに手をつけ、きみたち成城の従姉妹の四方子、早李子ともどもの言う（鬼の部屋）、それはゴタゴタした十帖の洋間なのだったが、秘蔵の数々の面が掛けられていたことからそう呼ばれたのだ。整理はそこから始められていた。

（鬼）の由縁はじじの面の収集が伎楽、能、仏像にわたっていて、伐折羅大将や金剛、執金剛があり、怖いという印象を幼いものに与えたのだ。もちろん翁、大黒天、恵比須があり、弥勒、虚空蔵、月光、思惟といった優しい仏さまもあったが、やはり不気味であったらしい、おもに乾漆だが、紙塑のものもあり、こんどあらためて目録にしてみると十九種を数えた。

ここで思い出すことは、

「お面怖いよぅ」

とじじも泣いた記憶のあることだ。どんな面であったものか思い出せないが、小学校六年生の時「図画」の卒業制作『思い出絵巻』に描かれているものから判断すると天狗の面らしい。その面はないが、絵巻は現存していて今度の整理でも大切に残した。こんないきさつを思うと、どうやら面の収集は父祖伝承ということになる。きみよ心してこれらの遺産を大切にして欲しい。

「萬古聲」、「一是之夢」といった川野双弓揮毫の扁額、呉竹、竹外、浪速、江南などの軸もの。その他雪岱、土牛、宗則、正秋の版画といった若干の美術品も整理した。そして、書棚の前を覆うスクリーンとして特注して紺染に仕立てた「風神雷神」の巾二間のオリジナルカーテンなどまず貴重の品として梱包した仲間だ。ついでながら、きみの将来のため忘備にそなえたい。

次いで大ごとの蔵書整理に手をつけ、すべてワープロで目録を作るという作業にじじは励んだものだ。この作業は大変な辛抱のいるもので、半年は時間をかけねばならないだろう、じじはそう考え毎日キーを叩き、梱包では規格の決まった函の詰め合せにも苦心した。

いつものように夏休みに泊りに来たきみの従姉妹たちは（鬼の部屋）に寝起きしたが、怖さはすでに解消していてもうすっかり安心だった。

きみは従姉妹たちと楽しく遊ぶことができた。公園のジャブジャブ池に遊び、庭先のビニールプールにも水を張って、きみたちの歓声が毎日のように楽しげに聞かれた。お風呂もみんなで一緒に入った。従姉妹たちはきみの背中を流し大騒ぎをしたものだ。

「もう、こんどの冬休みはだめね、荷物で一杯じゃないかしら」

成城の伯母さんは心配したが、

「だいじょうぶ、かたづけるさ」

と、じじは自信がないままに約束した。正月前にコンテナに託し、一部は預けてしまいたいと考えていたからだ。そして、そのとおり師走に入って十八日に第一便を出した。仮住いへの移転する引越荷物と一時保管のコンテナの方の荷物が同時では混乱するだろうと考えた結果だった。

梱包の山の中にきみのウルトラマンや怪獣、そして新幹線などの玩具が持ち込まれ閉口したのもいまは思い出だ。

七五三の祝いはママの里方ですることにした。初詣が稲毛の浅間神社だったので、千葉でということにしたのだ。貸衣裳の和服で大いにハシャいだきみは、

「ボク、サムライだぞ」

とホテルのロビーで外人さんに呼びかけ、記念撮影のスタジオでは扇子を口にくわえ、印を結ぶおどけを演じて見せた。

宴はパパ、ママの両親に臼井の大ばばさんを加えたメンバーだった。初の曽孫ということで大ばばさんはなにかときみを可愛がっていてくれるのだ。初詣の祝いの折には荘一大じいちゃんが健在だったことを思うと、人生朝露のはかなさにひきかえ、洋々の人生をいまから歩もうとするきみだから、大いに芽出たく、感傷の余地なぞないのであった。

「こんどは厳しい選挙になります」

大じいちゃんのあとを襲い四選を目指す日出男大叔父さんを気づかう話題は時節柄、間近く年明けには解散総選挙を予想されるためであった。きみの大ばばさんは自身も多く役職をもたれる女丈夫とじじはお見受けしたことだった。

ともあれ、小春穏やかな佳き日、きみは幸せ一杯だった。

ところで、この七五三祝いのため、あらかじめいつもそうするようにきみのパパはきみたちを送って検見川へファミリアを運転していったのだが、事故を起こしてしまった。パパの恥になることをここに書きとめるのはこれも幼いきみの脳裏に、七五三というメモリアルデーにまつわり、なんらか刻まれたものがあると思うからだ。

出来事は十一月三日の文化の日に起こった。稲毛の浅

間神社へ宮参りをしようとする途中の追突事故だった。
相手は皮肉にも検見川のじじの運転する車だった。
二台の車が進入路線から右方の本線に入ろうとしてブレーキを踏みながら待っていて、右手の本線の車の流れに気をとられ起こした事故なのだ。緩い発進だったが、前方不注意を免れない、右へハンドルを切っていたから、こちらの車の左前部が前の車の後部バンパーにぶつかったのだ。
「クルマがドシンっていって、ポロリンとデンキの目玉が落ちちゃったんだ、ポロッとだよ」
きみは帰ってきてからそう報告した。デーリーマルヨシのナミちゃんの小母さんまで、その日のうちにきみのおしゃべりで知れてしまった。
車の方はきみたちの帰りに先立って、すぐの翌朝早くパパが運転して戻ったので、じじたちも事故を知ったのだ。ガソリン漏れがなく、走れる状態だったので、人目を避けた運転だった。七五三の祝宴はその翌日だから、パパもあらためて電車で出かける羽目になった。
きみの祝の当日、検見川のじじの車を見ているが、バンパーの凹みはそう目立つものではなく、衝撃でトランクに歪みがあるいはという程度だった。こちらはヘッドの片目を潰した状態だから、修理よりも買い直しだが、検見川の車は保険で修理できた。幸いむこうのじじに鞭打ち症状もなく、身内同士の事故だったことでトラブルにならないで幸いだった。
顚末のあらましをここに述べたのは当然「クルマ社会」に生きるきみであろうし、わが家の車の歴史の中の出来事として、きみが将来に記憶を蘇らせる手がかりにするためだ。じじのホンダの軽は知る由もないが、スターレットからこのマツダ・ファミイリァの時代をきみは知っている。マツダのお兄さんからプラモデルをもらい、
（祐次郎に似ている）
ときみが世辞ともつかぬ声を上げたのはつい先ごろだった。
ところで、パパがこんど買った車は日産のスカイラインだ。全額をパパたちが負担しているし、スポーツカーで、車の全長もこれまでとは違う。パパとママが協力して車庫を拡張するため日曜大工をしたくらいだ。じじはもう怖くて乗る気になれない。万一傷つけでもしたら大変だからである。二十年の運転歴もこれまでと腹を決めたのである。
「こんど買うなら、マークⅡがいい」
きみは気楽なことを言った。いっぱしの一家言のようでも、そしてプラモデルや絵本でかなり（クルマ通）のきみだが、ママによればジュースの缶を載せるところがあるからだそうだ。
「ボクはじめて救急車に乗った」

毛布にくるまれ、パパの運転するスカイラインで帰ってきたきみの第一声だった。きみの語録として将来に残るであろう。
風邪をひいたきみは高熱に冒され、十二月三日の深夜ついに四十度、そしてひきつけを起こしたのだ。パパが二階から慌ただしく下りてきてそれを伝えた。ばばが容態を見に行くやらして、ただならぬきみの病状から、ママが機敏な判断で電話機に飛びついて、ダイヤル一一九を回し救急車の出動を頼んだのだった。
ほどなく来てくれた救急車をじじは寝間着姿のまま、寒む夜の門口に立って待ちうけ、手をあげて迎え入れたことだ。
「かかりつけの病院がありますか」
テキパキとやりとりがあって、
「では、坂上の板橋中央産院の小児科へ連れていきます、知ってますね、保護者は一人だけ乗って下さい」
ママが付き添い、パパはあとから車で迎えに行ったのだった。
「きょうはこの子で五人目って、看護婦さんが驚いて言ってました」
これはきみの帰りを迎えた時のママの話だ。
この年の感冒はとくに小児を冒し、ひろく流行したらしい。幼稚園の学級閉鎖があったし、
「ああいうとき、びっくりしちゃって、もう慌てるでしょう、舌をかんだりすると危ないって聞くけど、発作でかむことはまずありませんって、お医者さんが言っていたわ、でも、はじめてだからびっくりするわよ」
じじ、ばばがそれから間もない旅行先で、バスの中で耳にした若い母親の会話だった。よく似た話だ。
「クセになるといけないって、聞くわね」
これもママが病院で聞いている話と同じだ。癲癇傾向の心配はないか、ママとしては案じたようすで、
「精密検査をすすめられたけれど、受けたほうが良いかしら」
という言葉もあったが、きみの成長過程に滅多にはない出来事であったことは確かだろう。昔の世の親の間に「知恵熱」という云い方があり、このじじも幼時にその覚えがある。
（ボクはじめて救急車に乗った）
という解熱治療後に発したきみの第一声はそれで良いのだ。きわめて冷静なものだった。救急車に乗るなんてだれもが経験出来ることではない。ピィポ、ピィポ、ピィポ、そこのけそこのけといったあんばいに走ってくるだけで気を呑まれてしまいそうに思う。
きみは人生の難難にこれから先もぶつかり、どれほどか幾山河を越えなければならない。へこたれずにクリアして行って欲しい。
これはまだ先の結果であるけれども、この時期の悪性

感冒流行にかかわらず、幼稚園の年中組「もも」ではあの健太くんが一人だけ、年間、無欠席、無遅刻、無早退のパーフェクト皆勤を記録したようだ。

年明け、蔵書整理はいよいよ拍車をかけられ、一月二十一日に二度目のコンテナを送り出した。余すところ七日で、引越しをせねばならないギリギリで果たし得た安堵でホッとする思いであった。あらかじめ半年はかかるという予想は間違いでなかった。

「桃季のアルバム」という作品に書いているじじの父親、つまりきみの大じじが命運を賭け、手掛けた出版の初仕事となった「鳴く虫の観察」の凸版やら、門口に掛けたいまは珍しい琺瑯製の『弥円書房』の表札など倉庫から出てきた。ほぼ（昭和）の御世一代を眠っていた品々だ。御世などと思わずも書いてしまったが、じじの感慨として奇跡に近かい埋蔵時間を表わすのに単純明快だからである。上記の本の織田一磨さんの原画はもちろん無事、ただし版権を譲ってしまった「黄河の水」の方は残念ながらなにも残ってはいない。そうした一方に漱石の「三四郎」、草平の「煤煙」、鏡花の「白鷺」、節の「土」など新聞の切り抜きを製本したものなどの稀覯も含まれている。先代桃季庵の秘蔵を受け継ぎ、いずれはきみに引き継がれるはずの遺産である。点呼し目録の作成と梱包発送を了えたいまだから、あらましを書き留めてきみへの覚えに供えたいと思う。

「やぁーい、うるせーぞー」

童子はアパートの二階の、広い駐車場を見おろす開放廊下から叫んでいた。健太くんもいっしょだが、叫んでいるのはきみの方だった。総選挙で革新系候補の一人がこちらへ向けてスピーカーのボリュームいっぱい叫びあげていた。こどもの声はよく通るから、候補の方はきっと鼻白んだことだろう。仮住いに引越しをしてから間もなくそうした騒々しい季節を迎えていたのだ。きみのママも大叔父さんのために当然ながら気をもみ、しきりに電話をしていたようだ。

三部屋を隔ててきみたち親子とじじたち二所帯の新しい生活が始まっていた。

幼稚園はかえって近くなったが、信号機のある道路を横断しなければならなくなった。

「わかってるってば」

通園の往復だけは相変わらずぱぱに付き添われ、自転車のうしろに乗せてもらうのだが、健太くんと遊ぶためにはそうもしてはいられない。さっさと出ていくきみの背に横断の注意をすると、強く言い返えす。それだけの成長を思えば頼もしくもあり、また心配でもある。

「うん、部屋で食べる、ひさしぶりだから」

（ひさしぶりだから）と大人っぽく言うところにきみの深い思いがあり、ふだん共働きの親を待つ寂しさをにじませるところがあるのだが、

「おばぁちゃん、ついてきて、ちょっとそこまで、二〇四まで」

玩具をいっぱい持って移動するから、ドァーを開けさせるためだ。どうしてなかなかしたたかである。

合体、変身という妙味でこどもたちの、それも男の子たちに限る人気玩具がある。女の子なら着せ変え人形にあたるアイディアで売り出され、シリーズものになっているのだ。玩具メーカーのメディア開発のあの手、この手に驚き、ただ舌をまくばかりである。

Super Gundam. Zgundam.

そして、

武者ガンダムＭＫ２

とあって、「頑駄無・摩亜屈」など漢字が当てられている。そして右の武者ガンダムＭＫ２の場合、セットの内容を試みにそのボール箱から写すと

一、武者ガンダム　二、プラモ狂四郎　三、刀
四、ナギナタ　五、ノボリ（旗）　六、スペア人形
七、マーキングシール

という具合である。「協力・講談社月刊コミックボンボン」という文字も読み取れる。ハハーンとどうやら頷けるものもあるけれども、ほんとうのところはなにも分かったわけではない。

スーパーターボロボー、スターセイバー、
ビクトリーレオ、

これらはきみからの聞き書きで、幼いきみの口にのぼる前に誤った認識があるかも知れないが、なにはともかく、これらもまた同工異曲、だが、値段なりに高級のようだ。分解すれば足の部分はミニカーになったり、組み立てを解くいくつかの仕掛けがあり、また剣があり、盾があり、ライフルのごときも付属する。バラバラにしたものを組み直し、クリエートを楽しむといった趣向のものだ。昔にはないプラスチック玩具の自在さである。

すべてはネーミングからそもそもなにがなにやら分からない。狂四郎が出てきたから（柴錬）こと柴田錬三郎を思い出したり、（変身）とあればカフカを連想するのは大人の勝手であり、妄想であろう。

きみたちの世界はこの上なく自由で、天駆けるスケールをもつものらしい。

（頑駄無）を抱えて、あるいは抱えたまま眠りにおちたりして、帰ってきたママに迎えられ、またはパパに抱き抱えられて二〇四号室へ帰って行くきみの姿にじじはふとして摩訶不思議な、憶測し難い未来世代を考えることがある。

（二・三・尽）

［童子みずから描いた「童画」のページ］

Gone are the Days

山根三枝子

日記の中に書き記されてはいないが朝子にとって長年月の間、忘れられずに記憶の中にとどめられていることも少なからずあるようだ。

朝子達の一年上の学年の誰彼がその記憶の中に最上級生として浮かび出てくることからして、それは昭和十二年の春先のことであったらしい。

或る朝、それは何んとなく緊張感を欠いたような感じの朝であったので多分ウィークデイではなかったのであろう。全員がほぼ朝食をどうにか食べ終った頃であった。異常なといってもよいような大へん大きな爆音が響いて来て飛行機が超低空で寮の上空に接近し又飛び去って行ったということが分った。すると

「来たあッ」とか

「あッ　ほんとに来たんだあッ」

と二、三人の上級生達が、更に数人の人達が我先きにと三階へ、更に上の屋上にとかけ上って行くではないか。

朝子は何んのことだかわからなかったが、兎に角、屋上に上がったらいゝんだというゴーサインに確信が持てた。両足がよくもつれ合わなかったものだと思うくらい大慌てで、そこは若さの頂点にあること何しろ早く屋上に出なければ何かよいものをミスするんだという思いだけは朝子に抜け目なくもあった。

屋上にとび出した。丁度その時、校舎の左横のつまり東方の空から一機の飛行機が寮を目標にぐんぐん降下して近付いて来るではないか。屋上の全員は「ワァーワァー」「キャア　キャア」と叫び声を挙げて両手をちぎれんばかりに振るのであった。機が一番近づいた時、それは寮のすぐ南側にある林の真上を飛び抜けて行った。一人乗り機であり飛行帽で頭を包んだ航空兵が機体から上半身を少しだけ見せていた。いくばくかの隔たりと時間の短かさがあったにしても彼が寮生達を認めて充分に満足しているという感じは鮮かに伝わって来たことであっ

た。機は何度か降下接近を繰り返し、その都度　寮生達は歓喜にわいて手を振った。そして機は両翼をゆすってからとうとう雲の彼方に消えるように飛び去って行った。その当時は一面の麦畑や雑木林の中にクリーム色をした鉄筋三階建の校舎や寮が存在していたのだから上空からでもすぐ目標物は見分けられたことであろう。

興奮も覚めやらぬ彼女達の口からは次のような説明が語られるのであった。

或る休日のこと立川の飛行場に見物がてら遊びに行った彼女達は其所で偶然のことから二、三の航空兵若しくは航空将校と語り合い友達になるチャンスがあった由だ。彼等のうちの一人が

「僕は近々、何所かに行くかも知れないんだよ。その前に是非一度君達の所を飛行機で訪問したいなあ。僕の夢だ」

と彼は約束とも希望ともつかぬ調子で言った。

「そんなことが出来るものかしら……」

と疑う気持もあってあまり当てにしてもいなかったかも知れないし、或いは彼女達の中には彼の勇姿にほのかな憧れを懐いた人がいたかも知れなかった。

そんなことがあってから二、三ヶ月も経った頃であろうか。其の後彼女達と航空兵の間に行き来があったのかどうかは知らなかった。或る日のこと、やはり朝食後のことであった。食堂の上級生のテーブルの所で数人の者達が頭を寄せ合ってしんみりと　しかしながら強い興奮を抑え切れない様子で話し合っている。

「どうかしたの？　なあに」

と近寄って尋ねる朝子に眼鏡をかけた首のひょろ長い感じのYさんが一枚の新聞を指し示した。肩を落してガッカリした様子で

「ホラ　あの人なの」

彼女は淋しそうに微笑んで朝子に新聞を見せた。そこには「北支に散華」という見出しで飛行服姿の彼の写真と名前などが出ていた。他に二、三の人達も出ていた。新聞紙の片隅の一つの小さな記事であった。ほんの一寸前に寮の上空を飛びかって乙女達を喜ばせてくれたあの若い航空兵は、はかなくも又口惜しくも北支の空に散ったのであった。

其の当時の立川飛行場はだだっ広い野原のような所で飛行機の姿などもほんの少ししか見られなかった。あれから半世紀経った今日のあの成田や羽田の混み合った空港、それに想像するだけで見ることも出来ない航空基地の有様からはおよそ想像つかないようなのんびりした出来ごとのように思われるのである。あの時朝子は物凄い爆音で寮を目がけて急降下してくる飛行機に快感とも言えるスリルを覚えたことであった。そしてあの若々しい航空兵の姿は長年月の間に映画などの中でみるさまざまな俳優達の機上の勇姿と適当に混ざり合ってしまいロマンティックな要素を増し加えて記憶の中に残っているのである。

やはり昭和十二年の夏休み、帰省中のことであろうか。或る日の午後、一人のアメリカ人青年が朝子の家を訪れることになっていた。彼女の家庭にとって外国人の訪問はさして珍しいことではなかった。それでも新来の客であるというので朝子の母は少しばかり緊張したようであった。バスに乗って行かねばならぬ町なかの明治屋にサンドイッチを買いに姉を使いに出したり帰りがおそいと言って気を揉んだりしていた。

その男はかつてオックスフォード大学で学んだということ、又九月から新任の英語教師として台北高校に就任したのだと朝子の父は話していた。

ここに云う台北高校はもちろん旧制高校である。旧制高校は現在の高校とは色々な意味から大分異なっている。大体　数の上から言っても昭和の初期には全国の高校数は三十校とはなかった。これ等の官立高校の他にごく少数ではあったが成城とか成蹊、武蔵のような私立の高校があっただけであった。そして旧制高校に進んだごく少数の恵まれた者達が帝国大学といわれた国立大学に進むことが出来てエリートコースと考えられ若い男女の憧れるところであった。（女子には閉されていたが）従って旧制高校は入学試験も難しく浪人もずい分いたものだ。直ちに専門の教育が受けられる専門学校と異なり旧制高校ではより高度な専門課程の教育を受けるに足る基礎教育がなされた。だから旧制の高校生は思春期の三年間を学業のかたわら文学に親しんだり思想書を読んだり哲学を論じ人生を語るといったように余裕のある教養の学びをするチャンスというものがあったわけである。今日の高校はただその年令になって義務制の中学を出ればほとんどの人達が入学出来るのが高校なのである。戦後になって教育の機会均等、民主化、ということが進められ高校の数も数え切れない程にふえて来ている。朝子達のような年令の者である種の環境にあった者達には昔の高校はよかったなあという或る種のコンプレックスをもった思いがあるのもあながちに拒否出来ないことではないかと思うのである。

話をアメリカの青年に戻すことにしよう。

昭和のはじめにやはりオックスフォードに留学したことのある朝子の父親にとって彼の訪問を受けて同じ大学での経験を話し合うことが出来るということは充分に期待の持てることであったに違いない。彼、つまりMr.C（としておこう。未だ存命中のようなので）は新学期からの仕事について色々と事情を聞いておかねばならぬこととあっての訪問であった。彼にはアメリカ人によくあるような陽気な雰囲気はなくて用心深いような陰気な顔

付をしていた。背丈がすらりと高く本パナマの帽子と濃紺の夏背広などピチッときまっていて英国の紳士といった風体であった。朝子はお茶を運んだりして二言三言、言葉を交したりしたがもの静かな小さな声で父親と話をしていて朝子の存在など全く無視した愛想のない態度であった。「コイツメ　日本人を軽く視てるな」という印象は否めなかった。もっとも東洋の片隅のフォルモッサに住むやや後進である国の小娘などに対してどうして興味など持てようか。

その時はただそれだけのことで彼の訪問はやがて忘れられて行くべきものであったかも知れない。夏休みが終れば朝子は又東京に行ってしまったことだし彼に関する話題も其の後聞くこともなかったように思われる。ただ彼が帰る時に玄関わきで撮った写真が残っていることに依り彼は思い出されることもあった。

その時から四年余りが経過した。そして昭和十六年（一九四一年）には遂に日本は米国を相手に戦争を始めてしまった。当分は世界中が戦争にまき込まれて四年近くが過ぎた一九四五年に日本は遂にイタリヤ・ドイツに続いて敗戦国となってしまった。そして更に又十余年ばかりの悲惨な戦後の月日が流れた。世の中は戦前とは物質的には勿論のこと精神的な面でもすっかり変ってしまっていた。朝子の父母達は勿論植民地の台北から引揚げて横浜に住んでいたし、朝子もすでに三人の子持ちになっていて長男は中学生位になっていたであろうか。父は老令にもかゝわらず某私立大学他で講師などをして働いていた頃であった。実家を或る日のこと訪れた朝子は次のような話を聞いた。

父は或日のこと東京の某所で開かれた台北高校の同窓会に出席した。すると驚いたことにはあの Mr. C が恩師達の中の珍客として出席していた。敵国同志ではあったし長期間の音信不通というより絶交状態であった彼との再会を皆は大へん驚いたが又喜んだということであった。Mr. C は第二次大戦の始まる少し前時局の風雲急なる頃に台北高校を去っていた。其の後米国の海軍に復帰して将校となりフィリッピンに駐在していたそうだ。台湾の爆撃にも加わり又対日戦争の作戦指導の重要な仕事についていたということである。日本への本土攻撃に先立ちその足場とする所を台湾にするか沖縄にするかということも問題となったようであった。台湾南部の西海岸は遠浅であり敵前上陸のやりやすい地形であったので日本が特に防衛力を集中したことは一般に知られている。しかし日本側の予想は外れて米軍は防備のいく分うすかった沖縄に上陸した。台湾特に台北市の状況をつぶさに知っていた Mr. C にとっては大変好都合なことであったであろう。僅かな期間であったが教師として学生達との間に友情も出来ていたことであろうし、その町を爆撃する Mr. C の気持はどんな複雑なものであったことか。彼は

台北空襲の折には台北高校を爆撃しないように特に注意を払ったということである。朝子の父は一九六八年に死亡しているがこのいきさつを話した時にはビッグニュースとしてほんとうに驚いたような様子で生き生きとした調子で朝子達に話してくれたということである。Mr. C は一種のスパイとして台湾に渡って来ていたのではないかとの噂が専らである。当時は疑ってもみられないことであったが彼の慎重なそして厳しい表情があらためて思い出されたことである。

Mr. C は其の後、台北で領事などもしており今から十余年前にも同窓会に出席していた由だが堂々とした体軀の老人となり昔のスマートな面影は全く消えているというようなことが蕉葉会報（同窓会誌）に出ていたということである。

スパイなんてものは我々の身辺からかけ離れた所にいるものではないことを思わされたことである。

スパイという言葉には何かしら暗くて犯罪そのもののようなイメージがある。しかし有能な新聞記者が種々な情報をさぐってそれ等を報告する仕事とスパイ行為とはどう違うのであろうか。何所までがスパイ行為でなくて何所からがスパイになってしまうのであろうか。

第二次世界大戦の起る直前にあったあの有名なゾルゲ事件に関してはくわしくは理解していないが（興味を持った人のためにはゾルゲ事件に関する本は何冊か出版されている。国際的ジャーナリストの昭和史証言と言われるロベール・ギランの著書「ゾルゲの時代」という本がある。その中に開戦前夜の政争と諜報の都市東京でのゾルゲとヴケリッチの活動が書かれている。）あの時死刑になったゾルゲと他の者達以外に無期刑となったヴケリッチというユーゴスラビヤ国籍のアバス通信社（後のAFP）の有能な記者がいた。彼は網走の刑務所に送られ一九四五年の一月に栄養失調の状態から肺炎を併発して悲惨な獄死をしている。彼の妻であった淑子は　朝子達の塾に於ける上級生であったので　若き日の淑子の顔かたちから姿まで　はっきり思い出すことが出来るのである。

ヴケリッチ・淑子の姿がその場面にチラチラと出没しそのことがなければ彼女を知ることもなく済んだであろうところの塾での生活の一場面を語りたく思う。

朝子が在学した昭和の初期には塾では春と秋に文学祭が催されていた。秋のものは大々的で観劇者達の中には英語を話す外国人達も可成りいて彼等は芝居を見ることが出来る楽しさに喜んで来会していたようであった。朝子の在学中にはシェイクスピアの作品やジェームス・ジョイスのユリシーズなどが上演された。大体どの学年にも最上級生となる頃には一人や二人いやもっとかも知れ

ないがハムレッヘやプロスペロなどの主役となる大役をこなせる位の才人がいたものであった。

テンペストが上演されたのは朝子が入学した年の秋であった。彼女は一口も口をきかなくてよい若者の一人として出演した。プロスペロ役にはKさんがなった。彼女は卒業後の大半の人生を塾の教育のため働きつづけ七十代も半ばを過ぎた今日でも活躍している。テンペストに出てくるキャラクターは先づプロスペロ。彼は弟の奸計により一人娘のミランダと孤島で生活している元貴族の初老の男。本来なら官廷奥深く住むべきお姫様だが今は野性味たっぷりの小娘のミランダ。難破船から魔法によって導かれて上陸して来る王子のファーディナンド。父親以外の男を見たことのないミランダは一目でファーディナンドに恋をする。既に死亡している魔法使いの息子のキャリバン。彼は異様な生物でこの役には矢島恵子がなった。恵子は天才的な人物で奇人にも近いような人柄で学校内でも有名人物であった。彼女はこの役柄にピッタリで名演技を発揮し更に人気者になったが卒業後すぐに結核で死亡している。ファーディナンドとミランダのカップル役の二人も既に故人となっている。あの当時の美しい魅力的な二人の姿を朝子は忘れることが出来ない。あの時にモンスター役になって大きなモンスターのかぶりものをかぶって無気味な音楽に合わせて踊ったWさん。以後あだ名はモンスター、略してモンちゃんとなった。

背中に羽をつけて時折舞台に舞いながら姿を現わしては歌ったSさん。小柄な姿が身軽で妖精役にピッタリ。

Where the bee sucks there suck I
In the cowslips there I lie
……
……
Merrily, merrily shall I live now
Under the blossom that hangs on the bough
Merrily, merrily shall I live now
Under the……
……

と歌いながら舞台から消えて行くとプロスペロがおごそかな態度と顔付きをして魔法の杖を折るという最終場面。ファーディナンドとミランダは結婚することになるし悪者の弟であるアントーニオやナポリ王も不法な行為を後悔してすべてはハッピーエンドということで観衆一同喜んで拍手喝采をしたというようなこと位は何十年経った今でも朝子は思い出すことが出来るのである。

この妖精の歌はその心地よいメロディーと共に朝子の心に残り老女となった今でも茶碗洗いなどしながらフト知らずしらずのうちに歌っていたりして朝子は我ながら驚かされることもある。

先に述べたヴケリッヂ・淑子はこの劇上演の際に演劇部の委員をやっていたので 練習の折などにチョクチョク見かけることが出来た。若し彼女が美しくなかったら恐らく記憶には残らなかったであろう。彼女は上流の家庭の娘であったそうだ。通学生であったため、親の注意もゆき届いていたこともあって髪はいつも適当にセットしてあった。ひかえ目なピンク色のセーターが茶色のスカートと又いく分褐色がかった髪毛とよくマッチしていた。朝子は彼女の美しさに心をひかれて気づかれぬようにぢっと見つめていたこともあった。ロベール・ギランの著書で調べてみると其の頃はすでにヴケリッチ氏と知己になっていたようである。或いは恋が芽生えはじめた頃であったのかも知れない。そのことが他の色っ気も、しゃれっ気もなくガリ勉ばかりやっている学生達の中で一きわ光って朝子の目に映ったのかも知れなかった。

彼女のことに関するお話は未だつづくのであるがここでテンペスト上演とともに朝子にとって忘れることの出来ないもう一人の人がいることも付け加えたいのである。それは劇の上演を指導したミス・シエレシェスキーのことである。彼女は当時五十才前後ではなかったかと思われるがはっきりはしない。シエレシェスキーという名前は長ったらしいのでふだん学生達はシエレさんと一種のあだ名のように呼んでいた。

彼女は灰色をした柔らかで豊かな量の髪を後ろで束ねてまるめピンで止めていた。東洋人のように黒い瞳は鋭い光を発していて大きな口と共に野生の動物のような感じを人に与えていた。円熟し切った年令のせいかさして着飾ってはいなかったが着くずれ寸前までにゆったりした着こなしは一種の生活臭を漂わせていた。体にぴっちり合った流行の服を着た一見若くて美しいと思われる外人の先生達にはない貫禄という魅力があった。

芝居の指導の折に学生達の迫力のない発声や演技などを見るととても我慢し切れないといったように「ウーウッ」と悲痛な溜息まじりの声を出した。両手の十本の指をこめかみの辺りから髪毛の中にヒステリックに突込み床に向って「オー ノーウ ノーッ」と叫ぶのであった。そしてカツカツとすごい靴音をたてて舞台に突進するようにあがって行った。彼女の腰の辺りはどってり大きいのに足は意外に細っそりしていてピッタリ合った靴をはいていて足許は美しかった。彼女は自分が替ってその役を演技して見せた。手ぶり身ぶりは大げさでエネルギッシュであり朗朗と母音を響かせ抑揚もリズミカルな変化に富み堂々として美事であった。学生達にその通り真似させようと夢中になって指導していたが それには何か鬼気迫るものがあり、朝子は練習場である体操場の隅でこわくて身ぶるいしたこともある位だった。彼女は人種からいうとユダヤ人で国籍からいうと白系ロシヤ人であったとか。又若い頃はロシヤで俳優をしていたというこ

とであった。彼女の身の上はどんなものであったのであろうか。何故日本に流れてきて塾で英会話などの先生をしていたのであろうか。当時は未だ若かった朝子達にはシェレさんの身の上を詮索したり思いを巡らせたりするだけの人生経験の持合せはなかった。しかし今にして考えられることなのだが彼女の人生は屹度興味深いさまざまな出来ごとに満ちたものであったに違いないとあの情熱を秘めた瞳の輝きと共に思い出されるのである。一九一七年のロシヤ革命の時には彼女は三十才前後ではなかったであろうか。今はいずこの国のいずこの土の下に眠っていることであろうか。

さてヴケリッチ淑子こと山崎淑子は学生時代の或る日歌舞伎座に行った折、たまたま席がヴケリッチやロベール・ギラン達と隣り合わせになった。彼女は能役者の演技や地謡などについて英語で的を射た適切な説明をして彼等にとって大へん魅力的な女性に見えたということである。このことがきっかけとなり一目ぼれと言おうかヴケリッチと淑子は愛し合うようになる。戦前にあった日米学生会議に淑子は何人かの学生代表者の中の一員として選ばれ夏休みに渡米したりしていることからしても彼女は大へん知的な女性であったようだ。一方ヴケリッチもすぐれた有能な記者であったことから彼が不可思議な魅力をたたえた東洋のうら若い女性に夢中になったこともうなずけることである。プロポーズを受けた時に淑子の父親は激怒して結婚に猛反対をするのだが火がついたように燃えさかる恋愛は消しようもなく母親のとりなしもあって一九四〇年一月に二人は結婚をした。しかし結婚後の幸せな時期はそう長くはなかった。間もなくヴケリッチは取調べのため留置され一九四二年にはすべてのことが明るみに出る。一九四三年の九月末の検事の求刑は死刑であったが判事はやゝ寛大で一九四四年四月の判決は無期懲役であった。三ヶ月後ヴケリッチは日本の監獄のなかでもっとも厳しい条件の網走刑務所に移されることになった。出発前に淑子は息子の洋を連れて三十分間の面接を許されたのであった。

翌一九四五年の一月にはヴケリッチの死亡したことを知らせる簡単な電報が来た。終戦間際の当時、切符を入手することは非常に困難であったが淑子は洋を両親にあずけて網走に行った。其所で見るかげもなくやせ細り白衣を着せられ凍って棺におさめられているヴケリッチの姿を見て淑子は泣けるだけ泣いた。刑務所が用意してくれた馬橇に乗って火葬場に行き彼が灰になるのを見守った。彼女は息子がいなければ自分も彼と一緒に死んでしまいたかったという。しかし淑子は自分自身幽れいのように疲れ果てた姿で遺骨を持って東京に帰って来たのである。その一週間のあいだ ほとんど飲むことも食べることもしなかったということである。

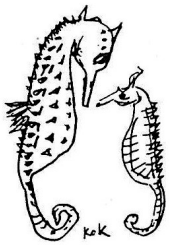
すっかり打ちのめされた淑子は結核になって倒れた。あること無いことを言いふらす近隣の人達、世間の非難を一身に受け兄弟達からさえも「お前は自殺しろ」とまで言われる。しかし父だけは「ここはわたしの家だ。わたしが守ってやる。離婚しなさい」と言った。

極度の食糧欠乏と荒廃した東京で幾度か病に倒れることを繰り返えしつつ彼女は再就職にこぎつけ息子を一人前に育てたのである。

戦後二十年程してスターリン・フルチョフも去ったあとソ連はゾルゲの仕事を再評価し彼の勇気をたたえてソビエト最高会議の決定で彼に「ソ連英雄」の称号を与えた。翌一九六五年にはヴケリッチに対しても大祖国戦争第一級勲章が与えられ淑子は洋と共にソ連政府に招聘されモスクワで亡き夫への勲章と栄誉を受けた。

ごく最近のことだ。塾三十五回卒のクラス会の写真の中で二十人ばかりの人達が写っている写真を朝子は見せて貰った。あのシェイクスピア劇でプロスペロの役を演じた才人のTさん、学友会長だったカヨちゃんその他ツン子さん、ポテ子さん皆なつかしい上級生達だ。勇ましいと言ってよい位活躍家だった彼女達も今ではすっかり年をとってしまい皆一人前のおばあさんになってしまっている。全部の人達の中で一人だけ一寸目立つ人がいる。全白の髪を形よくショートカットして紺色のツーピースの襟元から赤いマフラーを少しだけのぞかせている上品な姿の人。七十何才の人に美しいという言葉はふさわしくないかも知れない。しかしさほど大きくはない写真は美しい部分だけ強調しているようだ。すさまじいばかりの戦いの人生を生き抜いたそして今は静かな老年期の日々をすごしているヴケリッチ淑子の姿だ。ただ一度の燃える恋が彼女の一生を支えて来たのであろう。ただ一度の最高の恋が。

（未完）



父が酒を断ち筆を折りました

高戸なつみ

酒が好きなのではなく、酒を呑んで荒れていないと、「社会」への足掛りが得られなかった父、山口健二が昨年十一月十二日の退院から、今もって一滴の酒も口にしておりません。

本来は寂しがりやで人を恋しがる性質なのに、全くその表現を知らず、今もこの文章を書くテーブルの脇のベッドの上で荒く大きな呼吸音をさせ生きてはいるのですが、きっと彼の脳髄のどこかで「『社会』とのつながりを断って、ただ横たわっていよう」と決め事ができ上がったのでしょう。もともと、右に書きました己れの性質につき自覚のない人ですから、そうした方が楽だと思い込んだようです。

数々背負っている病気の中に、肺からの酸素の摂取量が極端に少ないというものもあるのですが、だからといって現在のようにただ横たわり口数も少なく、右手人指し指一本をあちこちと舞わせ指図することしか適わぬ程の重体ではなく、同じ容体の方でも小型酸素ボンベを携帯して仕事をしていらっしゃるご老人もあると伺いますが、山口健二思い込んだら命懸けですから、用便・歯磨・入浴以外は一切立ち上がる気配すら見せず、食事もベッドからすべり降り、休み休み（食事中何度もベッドに這い上がり横になり、荒い唸り声だか息だかを静めては又すべり降り）いただく状態です。

まわらぬ舌で「苦しいんだ」を繰り返し言います。枕元のガラス戸を通して冬の暖い西陽が入りますが、その陽が顔に当たる時が近づいてまいりますと、障子を閉めるよう、人指し指が動きます。何しろ狭い家ですから、歩巾が十五センチメートルになってしまっている彼の足でも、起き上がってベッドを降りて三歩踏み出せば手が届く距離ですが、彼は身体を動かそうとはいたしません。人体の内臓は、横になってばかりいるとその状態に順応してしまうそうですが、父の場合を観察しておりますと、

強大な意志を持って動かないのだと思えてならないのです。動かぬ理由は、何につけ一様に「苦しいんだ」。

兎にも角にも元気な男でありまして、毎晩高らかに吐く音の絶えたことのない酒量でした。お陰様で、生真面目な母に育てられた我等三人姉弟ですが、揃って原因は何であれ、その胃の内容物を吐き戻す真似が大変上手です。汚ない話、御免下さいませ。

私達が物心つくまでは宿酔いのズル休み等いろいろあったようですが、今記憶を辿りますと、その父が翌朝は平然と早朝から働きに出て行きます。ここで平然などと書きましたのは、前の晩泥のように酔っ払ったオトーチャンは、怒鳴り、暴れ、母を殴り、物を毀し、大立ち回りをしているのです。時には近所の方が見兼ね聞き兼ね、馳け入って下さることもあった訳で、それなのに朝になると背筋をピーンと伸ばし、ほんの数時間前に罵詈雑言喚き散らした当の相手の近所の方々に、チョット顔を引く程度の高慢な会釈をして小路を出て通りを行く後姿の不思議さ。

日曜・祝祭日・夏・冬・春、どんなお休みもなかったように覚えています。静かにお昼寝をしている図など一片もありません。

父は何かを追いかけ、何かに追われていました。本人は「ニョウボ・コドモガイナケレバ」を口癖に、生活に追われていたようにしか思い込んでおりませんし、過去を話題に致しますと「忘れた」「わからない」としか答えませんので事実の程はどの辺りにあったかは謎のままです。が、彼の血をそっくり受け継いだ娘として、若し仮りに女房子供がなかったとしても同じようにしか生きられなかったように思えます。

酔っ払って暴れて吐いて、尚深酒をして、きっと井中加和寿氏の最後をうんと若くして実現してしまったのではないでしょうか。（井中氏はさいたまやからの帰り道、石か何かに躓いて仆れたままとなったと父は書いたと思いますが。）

因に、最後に父が件の酒屋の立ち呑み仲間（？）と酔っ払って口論となり、谷中天王寺五重塔跡で大乱闘、体中に傷をつくり血糊と泥でベトベトになって傲然と帰宅しましたのは定年退職後、口中のデキモノの痛みでお粥をやっと啜り込んでいた時代のことです。

その父が酒を止めました。

加えて、自己中心志向、歪んだ自己顕示の最たるものと思われた彼の〝言語活動〟のうち、お友達に出す葉書さえ、主旨だけ述べて代筆させる様になりました。

まんじ編集後記で壮絶と評して頂いた「筆」を折りました。

病臥中の文章作りをお誉め頂いたことを心底喜び、皆様御承知と思われますが、彼はかなり役者ですから、カワイソウな自分を至極大切に演じ、又、世を拗ねており

ますので、その自分が正当にしかも活字でまで御理解頂けたと、いよいよもって壮絶なる闘いを続けようとしたのですが、流石に前回載せて頂いた作文の主語と述語がバラバラなことに驚き傷ついた様子です。

大和先生のお誘いを受け、それまでの人生ほとんど「仲間」を持たずに来たのですが、退職した後の心の隙間に本来の仲間恋しき心が合致して、重度の活字中毒者でしたから、「まんじ」の中で書いたものが活字になり、しかも仲間がいて…という状態は、彼のこの何年かの心の支えの一つだったと思います。

私自身は、父の文章は最初の一文は大長編、三行読むと中編小説、四行め半ばで掌小説となり、全部読むとただの作文と評し、真面(まとも)に読んだことはなかったのですが、皆様のお励ましを頂き、父としては根っ子の所にある真面目さをもって創作をしようと原稿用紙に向かってきたと思われます。

前回の作文についても、「大和サンハ、オカシクナイト言ッタヨ」とうれしそうに話すのです。

父は確かに精魂込めて作文に取り組んでいました。最近は文章を書くと日一日とやつれ、目の下の隈を濃くし熱を出し肺炎に至ることが何度がありましたので、母はその現実を重くみてやめる様言い続けてきました。けれどもまんじの皆様は、父にとっては数少ない「人は財産」ですから、私としてはどんな物でもいい書き続けて欲しく、原稿用紙を次々と買い込み彼の足元に積み上げ、握り易い持ち手の太いシャープペンシルを試させたりしたのですが、ついに「書けない」と言うに至りました。

最初は「書け書け」という私への彼一流の被害妄想かと思ったのですが、実際は、最初に書きましたように「動かない」「動けない」と自分に決め事をした一環として、書く作業を先ず止めてしまったのです。

父のやり方は、主題→プロット→構成と順序立てるのではなく、書きなぐり、言葉を表出しながら次を思考していく、言はば口から出まかせ流でしたので、書く作業に取り掛からぬ以上頭の中は空っぽうだったようです。

長い間、本当にお世話になりました。合評会に出させて頂いた帰りの車中、酸素吸入に頼り唸りながらも「俺はいい演説をしてきたんだ。」と大満足でしたから、(ご迷惑をおかけしました)ただ横たわる今の人生には自分で決めたものの本来の気質との間で葛藤は大きい様で、父は自らそれを〝老人性鬱病〟と名付けました。

先日、大和先生・柴田様においで頂きましたことは、繰り返し「有り難いねえ」と申しますから余程嬉しかったに違いありません。作品発表というお仲間入りはもうできなくなってしまったようですが、どうぞ皆様谷中近くをお通りの折りには五分、十分の時間を父に下さいませ。お顔を見せてやって下さい。そうして、気味の悪いことでしょうが、できましたら握手をしてやって下さい。

彼は自分のことすら大事にできなかった七十余年分寂しがっています。

一卵双生親娘でございますので、私も父と大体時を同じくして神経症を患らっておりますものですから、思慮分別足らず失礼な言いまわし等々多々あるものと思われますがお許し下さい。

では父よりの最後の一言を代筆します。

「私は次号には書けません。もう気力がありません。それで娘が替わりに私の悪口を書いたから、これ載っけてチョウダイナ。

大和さん、先日は柴田さんとわざわざお見舞い頂いて、その上「まんじだより」に「山口健二を見舞う」という文学的な記事を載せて頂き、重ねて恐縮至極でございます。」

そして翌朝唐突に

「オイ、アノ『チョウダイナ』はやめてな、『まんじのどこか片隅にでも、山口健二が筆を折ったというこの記事を載せて下さいませんか』ってな、言い変えといてよ。」

最後の一言と言いつつも、創作意欲を燃やしているのであります。

この父に、臨終の際(きわ)は数えきれません。強く記憶にあるのは、原因不明の高熱を、汗さえかけば治ると言い張って四日間、厚着着替えを日に七、八回もする程の発汗に任せた揚句の脱水症状、緊急入院後三時間で昇天する筈でした。これが二十四年前五十歳の真夏です。次は昭和四十八年秋口。運動などしたこともない人が突如始めた早朝マラソン。「床から飛び起きるとすぐそのまんま、準備体操も何もしないでターッターッタッタッ走り出した。帰ってくるとペターッと、まるで蛙がタンクローリーに轢れたみたいになって寝ていたの。体の厚みがなくなっちゃってね。」若い頃陸上競技の選手だった母は、その格好を思い出し身振り手振りで誠にお可笑しそうに話します。父は一ケ月走り続け、心臓をクタクタにさせました。朝方救急車で運ばれ、昼がヤマ場だと言われ、夕方には親類縁者うち揃い、病院の小部屋の父の枕元で覚悟をきめました。

年を追ってこんなことが頻繁になりましたので、イソップ物語の狼少年ではありませんが、家族の中にいつの間にか「オトーサンは不死鳥である」という感覚が育ちました。

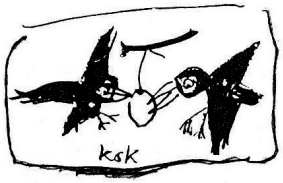
今回退院時には、「肺炎を起こすと生命の危険に繋がるから風邪をひかぬよう」と言われましたが、十日程前熱を出し咳込みが激しく、でも本人は病院へは行かぬと申しますので心配しましたが、自力で(勿論母は不眠不休に近いのですが)平熱を取り戻しました。

こうした父との毎日で、彼が酒を断ち筆を折り、睡眠薬を頼りに日中もウツラウツラして、このまま静かに死

んでいくとはどうしても思えませんし、思いたくもないのです。

「語りたくない、でも、語らねば…其の(三)」の原稿は、題名・署名を書き終え、初めの一文に着手しての手の届く所にありますので、若し、不死鳥としての父が甦り、臆面もなく又書き始めましたなら、恐れ入りますが、仲間入りをさせてやって下さいませ。

「君子豹変」「事情変更の原則」「俺は神様だッ」勝手極りなく家族をふり回す時の父の常套句でした。叫ぶだみ声はつっかかり耳に焼き付いております。ベッドからスルリと降り、スックと仁王立ちとなり、嫌な目付きでグルリを睨み、雄哮び上げる日の来るやも知れぬ。動かぬ父の唸りは、そんな悪夢の方が余程似合う力強さが感じられます。彼は結構元気なのであります。



支店長の妻たち(三)

三戸岡道夫

夏の暑さが始っていた

団地の庭のプラタナスや桐の枝が、緑したたる葉を思いきり四方に伸し、その枝ごしに、新宿の超高層のビル群が初夏の陽ざしに白く輝いていた。

その月の朝ぎり会が行われたのは、そんな晴れ上った一日であった。

福子は前日に髪のセットをすませ、念入りに化粧をして出掛けた。

朝ぎり会というのは、百川常務の妻の霧子を中心とした、女たちの親睦会である。その名前の霧子から一字をとって、朝ぎり会と名ずけたのである。

メンバーは、百川常務派の部長や支店長の妻たちで、はっきり名簿を作って管理しているわけではなかったが、総勢で、三、四十名にのぼった。会は毎月一回開かれることになっているが、毎回集まるのは二十名前後であった。

特に目的があるわけではない。ただ集って、おいしいものを食べに行ったり、芝居を見に行ったり、美術館めぐりをしたりする、女性同志の親睦、社交団体なのであるが、支店長の妻たちがそれだけ集ってくると、親睦を越えた、ある雰囲気が漂ってくるのも否めなかった。

百川常務の人気上昇につれて、最近では入会希望者もふえていた。

一方、百川常務のライバルである、武士田専務の妻の津留代の方も、同じような会を持っていた。こちらの方は、紫会といって、津留代の着物の好みが紫色であるところから、この名前がついたのである。紫会の方にしてみれば、最近の朝ぎり会の隆盛は、気にかかるところであった。

とくに今日の朝ぎり会へは、藤舟頭取の夫人が出席するということで、出席人数はいつもより多く、盛り上りを見せていた。

頭取夫人である藤舟千珠子は、朝ぎり会のメンバーではないのだが、その日、赤坂まで出掛けるので、序にちょっとお寄りする、ということであったが、福子は直感的に、

（わざわざ出掛けてくるのにちがいない）

と思った。この一事によっても、藤舟頭取と百川常務との密着度が想像された。やはり百川常務の副頭取への昇進が、頭取の手によってひそかに進められているのは間違いないと、福子は確信した。

会場は赤坂の（竹林）である。竹林の七賢人にあやかって名ずけた料亭であった。

そこだけが急な坂の途中にあって、斜面の一劃が全部竹藪になっていた。長年手入れをしたものと見えて、おびただしい竹の群が見事な姿で、したたる緑をきそい合っていた。

竹藪のまん中に、田舎風の料亭が建っている。信州の古い農家をそのまま持ってきたとかで、外見も、内部も、田舎の風情を活かして造られている。門を入ると、竹藪の中を急な石段が曲りまがってその田舎家までつづき、一瞬、竹林の七賢人ならぬ仙境をしのばせる、という趣向になっていた。

昼食時や夜の料亭は、背広姿のサラリーマンで占領されてしまうのだが、グルメブームの最近では、その中間の時間帯が、こうした女性達によって利用されるのである。やがて、中年女性の着物や洋服姿が三三五五と集ってくると、みどりに急に花が咲いたように、竹林は華やいでみえた。

「まあ、奥さま、今日は一段とすばらしいお召しもので」

「あら、奥さまこそ。お洋服がとてもお似合い。わたくしは洋服はだめ。足が短いから。一度、奥さまのように、すらっとお洋服を着てみたいわ」

言葉の上では相手をほめながら、心の中では自分の着物を誇示している。

頭取夫人の出席が、今日の出席率を高めて、三十名もの全メンバーが集っていた。しかし、ここには三十名も全部入れる部屋がないので、二つの部屋に分れたが、廊下でつながった隣り同志の部屋なので、一体感の中に変化が生れて、支店長夫人たちの女心をかえって満足させていた。

濡れ縁の外には、こぼれ陽を受けた竹のみどりが、森閑としたたり落ちている。

「まあ、すばらしい。東京の都心にこんな自然があるなんて、知りませんでしたわ」

「さすが、百川常務夫人の選定だけありますわね」

料理は京風懐石料理をベースにして、つぐみ、雀、鴨などの焼鳥が、季節に合わせてあしらわれ、それに九州有明海の珍らしい魚貝などが添えられるという、田舎風の風味になっていた。料理が色あざやかに加工されて運ばれてくると、

「まあ、きれいな、お料理」

「そろそろ、いただきましょうか」

「そうですわね。その前に、ちょっと一杯いきましょう。奥さまは、おビール？」

「わたしは駄目なんですのよ、アルコールは。でも、せっかくだから、ちょっとだけ、頂こうかしら」

などと、だめだ、だめだと言いながら、注がれたビールは一気に飲みほして、

「ああ、おいしい。生き返ったみたい」

しばらくすると、食事の間を縫って、百川夫人がお酌に廻ってきた。

「まあ、奥さまから注いでいただいて、罰が当りますわ」

「主人がいつもお世話になっておりまして」

「いえ、お世話になっているのは、私の方。わたくしの方からお酌に上らなくては、なりませんのに。本当に主人が常務さまにはいつもお世話になっておりまして、お礼の申しあげようもございません」

「お子さん、そろそろ、高校でしょう」

「はい、今年、やっと慶応の方へ入れました」

百川霧子は何でもよく知っていると、横で聞いていて福子は驚いた。事前に調べてでも来るのだろうか。こうでなくては、常務取締役の妻はつとまらないのである。

「よくお出来になるお子さまですもの、おたのしみですわね」

子供をほめることも、忘れない。

「いえ、いえ、駄目ですのよ。遊んでばっかりいて」

これでこの女の夫も、自分の夫への忠誠心を一段と強めるにちがいない、と霧子は胸の中で計算しているのにちがいない。

福子の前へ来る。

「あら、あら、こんな所にお座りになって、今日はどうなさったの。あなたは朝ぎり会の幹部ですもの、もっと真中の方へいらっしゃらなければ、困りますわ。後から、ちょっと、ご相談したいことがありますの」

「いつかお話のあった、結婚相談所？」

「そう。あれ、今日の席で、あなたから、皆さんにお話ししていただけないかしら」

「わたしなどで、よろしいかしら」

「あなたが一番適任よ。まさか、わたしの方から言うわけにもいかないし」

「わかりました。そうさせていただきます」

「この件、頭取夫人の方へは、後からわたしが話しておきますから」

その時、入口の方に、人のざわめきがして、

「お見えになりました」

百川夫人があわてて、立ち上る。
頭取夫人が入ってきた。
座が一瞬緊張する。百川夫人は正面の上座へ頭取夫人を、
「さあ、どうぞ、どうぞ、お待ちいたしておりました」
「あら、わたくしは皆さんがお集りだと聞いたものだから、ちょっとと思って、お寄りしただけですから」
と言いながらも、上座にぴたりと座って、
「みなさん、ごきげんよう」
と、さわやかに言った。
一同はその貫録に圧倒されたように、静かに頭を下げた。
が、またしばらくすると、元のリラックスした雰囲気に戻っていった。
百川夫人は頭取夫人の横で、ビールを注いだり、なにくれと世話をやきながら、熱心に話しこんでいたが、しばらくすると片手を福子の方に上げて、
「今西さん、今西さん、ちょっと」
と呼んだ。
福子は頭取夫人の前に進んで、
「ご無沙汰しております」
「いつぞやは、どうも」
いつぞやとは、福子がお中元の挨拶に訪問したことを言っている。
「いまね、結婚相談所のこと、頭取の奥さまにもご相談申し上げたところ、奥さまも大賛成で、是非とも進めるようにとおっしゃってくださいました。そろそろ皆さんに、あなたの方から話してくださらない」
「かしこまりました」
福子が話を始めようとすると、その場の雰囲気をす早く察した頭取夫人は、
「それでは、わたくし、この辺でおいとまを」
「そうでございますか。本当にありがとうございました」
こうした席への顔出しは、長居がよくないことを、頭取夫人はよく心得ている。
「これ、わたくしのほんの気持だけ、皆さまに」
そう言って、めいめいへのお土産を置いて帰っていった。
福子は立ち上ると、
「せっかく、おたのしみ中でございますが、この席をお借りして、一つ、ご相談申し上げたいことがございます」
一同は何事かと正面に向き直った。
「朝ぎり会の運営についてでございます。朝ぎり会は百川常務の奥さまを中心とした親睦の会で、今後ともこの基本的な考え方に変りはないのでございますが、せっかく大勢のすばらしい奥さま方がこのようにお集りになっていらっしゃるのですから、親睦だけに終らせては勿体ない、なにか銀行のお役に立つようなこと、ひいては世の中のお役にも立つことが出来るのではないかと、こう思うわけでございます。これについては、百川常務の奥さまも同じお考えでございます」
すばらしい奥さま方などと持ち上げられれば、誰だって悪い気持はしない。
「そこで考えましたのが、結婚相談所の開設でございます。と申しますのは、最近はわたくしたちの頃とちがって、男女交際の自由、恋愛の自由という世の中になってきておりますのに、案外と結婚がうまく出来ないというケースが多いようでございます。百川常務さまは銀行の人事部を担当されておられますので、とくにそういう方面に強い関心を持っておられまして、銀行の男子行員や、支店長や役員方のご子息さまなどについて、そうした相談を持ちこまれる場合が多いようでございます。ところが、その件数があまりに多いので、個人で対応していたのではとても処理できない、なにか組織的なものを作って対応していく必要があるのではないか、とこうおっしゃっておられます。これは明光銀行の円滑な人事運営をしていくためにも、絶対必要なことなのでございます」
誰もがみんな頷いている。
「それに、これは単に明光銀行の内部の問題だけではなく、銀行のお客さまからも、そうした要望が出てきております。ここにいらっしゃる皆さまの、ご主人さまの支店の中にも、お取引先の社長さまなどから、うちの息子のお嫁さんを探してほしいと、頼まれている方も多いのではないかと思います。お嫁さんを世話してもらったお客さまは、末長く明光銀行との親密な取引を続けてくれるでしょう。そして、この仕事は、わたくしたち女性の手でなくては出来ない仕事なのでございます。そこで、朝ぎり会の手で結婚相談所を作り、運営をしていきたいと思うわけでございます。どうぞ、以上の趣旨をご理解くだされ、ご賛同下さいますようお願いいたします」
福子の説明が終ると、すかさず百川夫人が、
「わたくしも以前から今西さんがお話した通り、何かこうしたことをやって、少しでも銀行のお役に立ちたいと思っておりましたので、皆さまのお力をお借りして結婚相談所が出来れば、非常にうれしいと思っております。頭取の奥さまの方へは、さきほど私の方からお話しして、ご賛成をいただいておりますので、ご協力いただけるものと思っております」
もちろん、一同、異議はなく、これから始まる新しい活動に、心をときめかしはじめていた。
ここで、ちょっと、明光銀行の経営陣の権力構造をふり返ってみよう。

明光銀行の主要経営陣は、日向会長、藤舟頭取、副頭取が三人、専務取締役が二人、それに常務取締役が五人と、合計十二名というのがその構成である。

副頭取の筆頭が横地達郎、専務取締役の筆頭が武士田健一、常務取締役の筆頭が百川一成というわけである。

これを頭取への可能性という点から眺めてみたら、どうであろうか。

三人いる副頭取はどう見ても、頭取の器ではなかった。その実力、器量、そして藤舟頭取との年令差などから見て、自他認めるところである。筆頭副頭取の横地は来年の春引退して、その後へは武士田専務が昇格する。この辺までは、ほぼ間違いないであろう。しかし、その先の頭取レースということになると、少し事態は不透明になってくるのである。

日向会長が次の頭取にと考えているのは、武士田専務であった。いや、早く武士田を頭取にしたくてうずうずしている、といった方が適切かもしれない。だから、武士田はこの春専務になったばかりなのに、もう来春には副頭取という声がかかっているのである。今の藤舟頭取はそれまでの、つなぎである――というのが、日向会長の心の内であった。

だが、藤舟頭取の方にしてみれば、この会長の考えは面白くない。たとえ、つなぎの頭取とはいえ、いったん頭取の座を手にしたからには、素直にその座を会長派に渡したくないという抵抗感が、日ましに強くなってきていた。

ところで、武士田専務には、頭取になるのに若干の問題点があった。仕事は抜群に出来、経営力、営業力と、申し分ないのだが、態度に傲慢不遜なところがあり、内外ともに評判があまりよくないことであった。企業のトップたる者には、人望が不可欠であるのに、その人望にやや欠けるのである。

そこへ、最近流れの様子が少し変ってきた。筆頭常務の百川一成が、めきめき頭をもたげてきたからである。百川も仕事では、武士田にひけをとらない力量を持っていた。それが、常務取締役のポストをこなすうちに、その本質に更に磨きがかかり、最近では貫録もついて、武士田専務に追いつかんばかりの勢いである。その上、百川は武士田のように、強持てではないので、評判がすこぶるよいのである。その評判が武士田専務の評判と比較されるので、いやが上にもその評価が高まっていくという面があった。その辺が百川常務の人徳とでもいえようか。

そうなってくると、藤舟頭取にも欲が出てきた。次期頭取の座は、この百川常務へ渡して、自分の勢力基盤を固めたいという考えが頭取の中に生れてきても、無理からぬことであった。

頭取交代ということになれば、藤舟は会長、日向は名誉会長ということになるのであろうが、武士田が頭取になると、彼は必ず日向の方ばかりむいて、藤舟が棚上げされてしまうことは、眼に見えている。出来ることなら今後とも、自分の言うことを聞く人間、自分を大切に扱ってくれる人間を後釜に据えたいのは人情である。

この際、百川常務を、専務のランクをとばして一挙に副頭取に昇進させたらどうかという夢が、最近藤舟頭取の中に強く育ちはじめていた。最近の百川の成長ぶりをみれば、それは必ずしも不可能ではないような気がする。ただ、果して、百川の二段とび副頭取昇進を、日向会長が承知するかどうかである。その方法はなんとか別に工夫する必要があるだろう。だがとにかく、来春の横地副頭取引退のチャンス時に、武士田と百川の、二人頭取誕生をぜひ実現させるのだ、と藤舟頭取は強く決心した。

藤舟頭取と百川常務とが、急に接近し出したのは、裏にそうした思惑があったからであった。男たちが接近すれば、その妻たちも密着度を強めるのは当然である。

百川常務を副頭取にブッシュするのに必要なのは、一層の人気である。武士田専務の方に人気がないだけに、百川常務の人気は強力な武器になるだろう。行内からも、銀行の外からも、百川常務の人気が高ければ、日向会長としてもそれを無視するわけにはいかない。

人気には、支店長からの人気、行員、役員、退職したOB、取引先、金融業界や大蔵省など所轄行政官庁からの人気などとさまざまで、それらが集積されて人気の全体像が出来上るわけであるが、とりわけ重要なのは、支店長たちからの人気である。

朝ぎり会の結婚相談所の設立計画の蔭には、そうした藤舟・百川コンビ作戦の意図がひそんでいるものと見てよかった。結婚相談所動を通じて、朝ぎり会メンバーの結束、拡大をはかり、百川常務のイメージアップを図っていこうというのである。妻を捉えることによって、その夫を捕えようという作戦である。そして、それがひいては百川派につながる支店長たちの利益にもなるのだということを、その妻たちはよく知っているのである。

福子は

（これから、少し朝ぎり会のメンバーをふやさなくてはならない。

と思い、胸の中に勧誘できそうな人名を、思い浮かべてみた。

（つづく）

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（七）

第一章　八丈流人近藤富蔵
一、羽倉簡堂、富蔵に会う

金子正義

（二）

天保九年五月二十一日（七・一二）早朝、簡堂は随員を従え大賀郷大里の陣屋を立ち、三根を経て登竜峠に向った。鴨川を渡り大川の土橋を過ぎ底土ガ浜を左に見て登竜坂にかかると、その名の通り曲りくねった急坂が峠に向って竜が攀じ登るようだった。

登るに従って西の八丈富士、東の三原山が一望に見える島内随一の景勝になるが、生憎の雨で見晴しが利かない。それでも峠を越すと雨霧を透して三原山と肩を並べるように二つ峰の白雲山が直ぐ近くに見えた。

尾根伝いの山中の道は足場が悪く、牛の背に乗る簡堂も度々危険を覚える程だった。道案内の島役人は、此の辺りは火の山の為に磁石の針も利かなくなると言った。下りにかかる道は一丈近い高さの蘇鉄や羊歯が生い繁っていて、雨が歇んでも行く先が靄って見えない。

漸く緩やかな勾配となると蛇行する道の両側に紫陽花が多くなり、雨にうたれて色鮮やかな花が山路を覆う程だった。

巳の下刻頃、宮ヶ路より末吉村に入った。道に沿って村の共同機織場があった。簡堂は牛の背から下りて立寄て見たが、機織場の家構や配列、貢納織場の注連縄まで三根村の機織場と全く同じであった。

末吉村は名主沖山市十郎の並々ならぬ努力で養蚕が盛んで、三根村よりも良質の八丈紬を織ると言われる。それは、八丈織のはじめは末吉村で丹後織を手本とし織り始めたので、今でも末吉村の八丈紬は丹後織と言っていた。丹後織は八丈紬より織賃も売値も高いのである。事実丹後織は上質であった。名主沖山市十郎は更に、奥州伊達郡の改良された養蚕技術を、その地からの流人百姓の八郎に村人を習らわせて一層品質を向上させたのであった。だが、簡堂には艶やかな絹糸も、織られている紬も三根村のものと区別がつかなかった。

簡堂一行は機織場を出て台が原を抜け、村の中程に在る名主屋敷に向った、屋鋪の前庭には紫陽花が小山のように盛り上って咲いていた。玄関前には大きな芭蕉が雨に洗われて一層緑を濃くしていた。

広間で名主市十郎、悴岡右衛門の迎えの挨拶を受け、年寄清右衛門等の村役人を閲して村事情の概要を聴いた後に、簡堂は奥に入り風呂場で汗を拭って下着を替え、客間で岡右衛門の妻女梅に髪を整えさせていると、普請役の本岐道平が来て、

「流人共を集め待せてありますが、お疲れなればそれがしから訓戒申しつけおきましょうか」

と牛の背とは云え、雨中の登竜峠の悪路を越えて来た代官の身を按じて伺った。

中年を過ぎてから肥りだした簡堂は、総髪を束ねた髪も薄く禿げ上った四十九才の我が顔を古びた島鏡に見乍ら、此の度の伊豆諸島の廻島は相当身にこたえたな、と思っていたところだったが、八丈へ渡る迄の再三の難航大時化で積荷も大分水を被り、別船夕口丸を式根より先航させ、義倉への備蓄米穀の充実、砲台への弾薬の補充は本岐道平等が適切に処置したが未だ充分でない、せめて島人の生活や、自然産物を良く見たり、流人達の訓戒は自分から果そうと思っていたので、

「いや、役目を果そう」

と立ち上った。

衣服を改め白砂を敷き詰めた広庭を見渡す座敷に出ると、廊下際には本岐道平と村の書き役の佐々木勘助が控え、廊下の左右には悴名主の岡右衛門と年寄清右衛門が褶袴急装（ハンテンモモヒキ）に対襟衣（ハヲリ）を着けて畏まっていた。縁下の踏石の脇に地役人相川兵左衛門が腰を屈めて立ち、白砂の広庭には前から薄縁・莚・砂地の三等の定めに従って、武士・僧侶・家持ち、小屋掛の流人達が三十人程坐わり中に三人程の女流人も居た。

八丈では他島よりも流人の暮し向きも緩やかで、宇喜多一族や越後騒動の永見大蔵のような武士や、不受不施の僧、尊王思想の国学者などが多いので親類からの見届物も多く、流人の喧嘩騒動の憂患も少ない、従って流人頭の必要も無く中之郷にいるだけであったが、末吉村には宇喜多一族や浪人よりも博徒や破戒僧、殺人傷害や放火等の重罪を犯した百姓・町人・遊女が多いので、古参流人が世話役を勤めていた。下役の平助、代貸の彦兵衛長屋の半兵衛等が勿もらしく前の方に畏まっていた。

簡堂は奥からずっと出て縁近くに坐った。高床の廊下の厚い床板が船板のように白く晒され、処々に船食虫に喰われたような穴が数球つなぎになっているのが目に入り、その縁下に流人達の平伏している痩せた背が繋がり

見えた。

岡右衛門の合図で平伏していた流人達が前からずっと頭を上げた。見渡すと、風に耐えた松や椿に覆われた石垣の末座に大きな躰の流人が肩を落し地面に目を向けて坐っていた。洗い晒した黒の単衣から露出している太く逞しい両腕は腰の付け根に屹度指を揃えて置かれ、紺の脚絆を着けてはいるが素足に草履、髪は後に藁で束ねた流人頭であるが人品賤しからざる面体であった。

「はて、他の流人共とは異端な容子、あれが近藤富蔵守重かも」

と簡堂は注目して、富蔵を意識し乍ら暗に彼に語りかけるように話し出した。

「毎日の道の繕い仕事で疲れていようが、儂は遙々江戸から来たのでお前達の様子を見たかった。大賀郷でも三根でも、お前達の築いた石垣や開いた道路を見て、良く罪の償いをしていると喜しく思った。お上も、お前達が島での務めを良く励めば御赦免の御慈悲もあろうかと思う。島役人より申し伝えてある掟のことをよく守って決して島抜けなどの莫迦なことを考えるな、儂の乗ってきた七百石積みの官船ですら何度も破船する処であった。三宅から御蔵に渡る島船ですら時化に逢って何艘も顚覆した。ましてや八丈の黒瀬の急流を渡るのは本業の船頭ですら難しい、漁船などで妄りに乗り出せば忽ち押し流され海底に曳き込まれて海の藻屑となる。未だ島に流されて一、二年の者もいるようだが、島に馴れた三、四年目頃が一番故郷が恋しくなるものだが、島の暮しも良いものだ。八丈はもう昔のように飢饉などもなくなっている。それぞれ身につけた手仕事を活業にして島御用に励み、暇があれば何にか一芸に磨きをかけて御赦免をたのしみにするがよい……」

と平易で温情に溢れたものであった。

簡堂が席を立った後、普請役の北村亮三郎より賭博、喧嘩傷害などの細々した掟について注意があり、特に島抜けは流人にとって重犯罪である、その企てあるを知ったなら速かに知らせよ、若しそれを隠し見逃すときは同罪とする、これを知らせた者には御褒美をとらすであろうと伝えた。

手代中山誠一郎が流人の解散を許して小半刻の訓戒は終った。流人達はぞろぞろと倉囲いの石垣沿いに裏口から出て行った。その中の富蔵を悴名主の岡右衛門が呼び留めて、

「御代官様が何にか直々にお話があるとの仰せなので其処で暫く待つように」

と言った。富蔵は何事かと訝り乍ら裏口の大きな蘇鉄の傍に控えていると、近習の石内安左衛門が離れの方で待つようにと伝えにきた。

富蔵は本宅と表門の間の蘇鉄の下を通って、庭伝いに本宅から板屋葦の廊下を渡した離れの方に行き、簾の垂

れ下がっている高床の縁近くの石に腰を下して待っていた。熊笹に囲まれた大きな踏石の横の紫陽花を眺め乍ら、

「代官の話とは何んのことか、名主や地役人の形通りの口上とは別に、島の実状や流人の暮し向きのことでも尋ねようというのか、支配代官の廻島は滅多に無いことで、更に非公式とは言え流人に直接話をするとはどう云うことであろうか、元旗本の近藤富蔵が居ると聞き、既に十余年の配流を経たので八丈流人の中で重きをなしているとでも思って、何にか訊き出そうとするのか」

文政十年五月に富蔵が八丈流人となって島に配流されたばかりの翌月、支配代官柑本兵五郎の伊豆諸島廻島の大吉丸が新島からやって来た。流人となって僅か一ケ月程で絶望的な苦しみの日々であった富蔵は、代官柑本兵五郎が赦免に来て呉れたのかと思った。特に随行役人中に間宮林蔵の名を聞いたときは懐しさに胸一杯であった。

林蔵のことは父近藤重蔵から寛政・享和の千島・蝦夷地探検の話の中で聞いていたからであった。

柑本兵五郎もまた伊豆代官就任前は、松前奉行所吟味役であったし、文化十年抑留していた露国海軍少佐ゴロヴニンを、高田屋嘉平を介してデイアナ号に戻した時、松前奉行所吟味役として交渉にあたるなど、深く蝦夷地に関わった者として、父重蔵を知らない訳は無く、富蔵が犯した鎗ヶ崎の事件で父子共々に罪を得たことは、同じ幕臣として慨嘆しているであろうと思った。赦免に来たのでないとしても江府を離れた八丈での出会いである。言葉をかけて呉れるであろうと秘かに期待した。

処が、柑本代官一行は風待ち日和見で一ヶ月程も滞在していたが、富蔵などには何の沙汰も無かった、代官は大賀郷大里の陣屋に留まり、島役所、名主宅に時折り顔を見せるのみだった。下役人達は良く島内を巡視していた。特に間宮林蔵は海防係として中之郷の藍ヶ江の砲撃用石室を視察したり、大賀郷陣屋裏の射撃場に防禦五十人組を集めて厳しく射撃訓練をさせたり、探検家らしく八丈の地理・天文・気象などを良く観測して歩いていた。

富蔵が哀れな藁の腰紐一つの半裸の流人姿で丸石運びの流人作業をしているとき、間宮林蔵が下役、足軽中間等を連れて西山を測量して歩いているのを遠くから見た。

父重蔵と共に極寒の千島、蝦夷地で苦労を共にした筈なのに富蔵を一顧だにしないのは、父重蔵以上に剛直不羈であるが人情の機微を解せず、偏狂尊大な性格なのだろう、罪を犯して家名断絶した近藤一族など眼中になく、流人の富蔵など歯牙にもかけないのであろうと憤りを覚えた。

間宮林蔵は八丈廻島後も幕府天文方として各地の測量地図作りをしていると聞いていたが、文政十一年シーボルト事件がおきて、幕府天文方奉行高橋作左衛門景保の牢死を始めとして、多くの天文方下役や長崎奉行所の通詞役人の処罰、シーボルトの国外追放、長崎鳴滝塾出の

医師、蘭学者まで広く類を及ぼした。これは間宮林蔵の密告に依るもので、天文地理、測量の師である高橋景保と、林蔵の樺太と大陸の海峡確認を世界に知らせたシーボルトの恩を仇で返したものと白眼視されていると、伝え聞いて富蔵は左も有りなんと思ったのであった。

（三）

十五世紀にはじまった大航海時代に世界の大陸や海洋が大凡そ明らかになったが、サハリン（樺太）が離島なのか、大陸の一部東韃靼の半島なのかは世界の海洋地理学者、航海者の謎であった。

一七八七年（天明七年）八月、仏蘭西の海洋探検家F・G・ラペルーズも北太平洋航路の開発に、五百噸の木造帆船フリゲート艦でマニラより、琉球を経て朝鮮海峡を抜け、日本列島西岸を測定し乍ら日本海を北上、樺太西岸を海峡深く入ったが、前方を遮切る濃霧を陸地と見て引き返し、宗谷海峡を通り抜けてラペルーズ海峡と名付け、カムチャッカ半島のペトロパブロフスクに入り、シベリヤ経由で本国に送った日本近海探検報告書に、サハリンは半島であると断定していた。

一七九七年（寛政九年）英探検家W・R・ブロートンも蝦夷地沿岸を測量し乍ら樺太西岸を北上、ラペルーズより更に八マイルも北に入って、北緯五十一度四十五分七秒まで航行したが、前方を半島の湾と見て引き返した。

一八〇四年（文化元年）対日修好関係の打開の露国特使N・P・レザノフを乗せて、クロンシュタットよりペトロパブロフスクに露国史上最初の世界周航をなしとげた海軍大尉I・F・クルーゼンシュテルンも、一八〇五年（文化二年）海峡確認に樺太西岸を北上したが五百噸級のナジェシュダ号では吃水深く海峡最狭部に入れず、サハリンは半島と結論して引き返した。

日本では長崎を通して入った仏王室のダンヴィルの地図等に依って、樺太を半島とし、その西方にサハリン島が在るとしていた。林子平の天明五年（一七八五）著作の『三国通覧図説』も、近藤重蔵も享和元年（一八〇一）幕府派遣の樺太見分の、小人目付高橋次太夫、普請役中村小市郎の南樺太実踏報告に考証を加えて、『辺要分解図考』を著わし、樺太を東韃靼の半島、別にサハリン島が西にあるとした。但し最上徳内は、寛政四年（一七九二）樺太見分に南樺太白主よりクシュンナイに北上し、東韃靼より交易に来る山丹人が北樺太のノテトより、海上十里程の瀬戸間を渡って来ると知った。冬期の瀬戸間は凍結して氷張りとなり犬橇りで直行すると聞いて、樺太は島であると推察した。

対日修好の使命を果せず長崎から追い返されたレザノフは、その報復にフォストフ大尉等に私命を発して文化三年（一八〇六）南樺太に来寇し、更に文化四年択捉島内保・沙那の会所を襲撃し、蝦夷地の利尻島を襲い、礼

文島沖で日本船の積荷を奪って去った。

幕府は衝撃を受け露国南下と露艦の再攻撃の有無を探る樺太接攘見分の探検隊を密かに派遣することになったが、露国等の異国を刺戟しないように松前奉行配下の下級役人を選んだ。

間宮林蔵は、其の西蝦夷地探検隊の松田伝十郎に従って文化五年北樺太を探検しその年白主で越冬して、翌年林蔵単独で、アイヌを傭ってアイヌ舟、山丹舟で北樺太を探検し、更に東韃靼に渡ってアムール河下流流域を探検して海峡を確認して帰った。

成功の鍵は海峡の海底が浅く、濃霧や海藻で大型船では渡航できず、西欧探検家の五百噸級帆船では海峡近くへ北上も出来なかったが、間宮林蔵は海峡最狭地ノテト迄はアイヌ舟ポロチップを乗り継ぎ、渡り口のラッカから対岸の東韃靼のムシホへはギリヤーク人の交易舟に便乗して漕ぎ渡ったからであった。

林蔵はこれを見聞録にまとめ『東韃靼地方紀行』と『北夷分界余話』として地図『北蝦夷島図』を付して文化八年松前奉行を経て幕府へ報告した。

林蔵は海峡確認の大発見をしたとも、名声を得ようとも思わず唯幕命を奉じて辺境を探ったまでと思っていた。

処が、幕府天文方奉行の高橋作左衛門景保は林蔵の偉業を認め、幕閣も林蔵の労を犒って、林蔵が長らく松前奉行所普請役雇いの七人扶持の儘であったのを漸く、松前奉行所調役下役格三十俵三人扶持とし、帰国後探検の疲労や凍傷等を癒す為に一生無役とした。だが林蔵の樺太探検を高く評価する水戸斉昭や、知識人の噂も広がり始めたり、折から国後島付近を測量に来きて泊湊で逮捕された、露国艦デイアナ号艦長V・M・ゴロブニン少佐の取調立会いを命じたこともあって、漸く樺太北部見分東韃靼探検の褒美として金子百両が下賜された。

林蔵は松前奉行所でゴロヴニンに来航の真意を尋ねたり、文化三、四年の露艦の暴乱を問い糺したり、奉行所の取調べ処置等を内偵して一々幕閣に内報した。其の後伊能忠敬が実踏し切れずに残っていた蝦夷地西海岸及び内陸部を測量して帰り、蝦夷地全図を忠敬の門下生と共に完成した。

文政五年四月房総沖に現われた英国捕鯨船を始めとして、翌文政六年八月蝦夷地幌泉に上陸した異国船等に依る騒ぎの本質を探ぐる為に、松前藩、奥羽諸藩の対応と防禦の内偵に派遣され、姿を変えて隠密調査に従った。

林蔵は文化年間の露艦来寇と異って、英・米捕鯨船が日本近海で鯨を捕えて油を絞る為に大量の薪・水が必要な為の沿岸上陸であることを突き止め、「外国船打払い令」が時代に適さなくなっていることを老中大久保加賀守忠真に内奏した。

斯うして次第に幕府の隠密方調査に従うようになるのであった。

文政九年シーボルトがオランダ商館長メイランの将軍拝謁の礼に随行して江戸に来たとき、長崎鳴滝のシーボルトの塾で教を受けた医師・蘭学者・開明的文化人達がシーボルト逗留先の長崎屋に頻りに訪問した。最上徳内までもが連日尋ねる有様であった。

高橋作左衛門景保も屢々訪問して賜物の交換をした。作左衛門は学術的研究心からとは言え、シーボルトの持つクルーゼンシュテルンの『世界周航記』と伊能忠敬の『大日本沿海輿地図』と間宮林蔵の『蝦夷・千島・樺太地図』の複製とを交換したのであった。

シーボルトは其の他諸方から贈られた標本、博物等を持って長崎に帰った。

文政十一年三月、高橋作左衛門景保の使いが、シーボルトよりの書簡と小包を持って林蔵宅に来た。林蔵は、シーボルト在府中も一度も長崎屋に尋ねたことも無く、会ったことも無いので驚いて封の儘の書簡と包を上司である勘定奉行村垣淡路守定行に届けた。

書簡はオランダ語で林蔵の海峡発見を讃え、包みは更紗一反であった。幕府御庭番出身の村垣淡路守は勘定奉行公事方分担であり、その洞察は鋭く、それに依って日本地図の国外持出を察知し、シーボルト事件の発端となったのであった。

シーボルトは帰国後一八三二年著書『ニッポン』で、間宮林蔵がサハリンが離島で大陸との海峡を発見したと公表したが直ぐ世界の地理学界、海洋探検家、航海者に知れた訳でなく、シーボルトの命名である"Mamiya-Seto"が世界地図の地名間宮海峡となったのは、一八八一年（明治十四年）フランスの地理学者エリゼ・ルクリュの『万国地誌・第六巻・アジア・ロシア』に記されてからである。

鎖国日本の学術的閉鎖性と、露国の軍事的政策上の秘密から、極東方面の非公開政策に依ってであった。亦、発見者間宮林蔵自身が栄誉心や学術的野心が全く無かったからでもあった。

林蔵は安永九年（一七八〇）常陸国筑波郡上平柳村の農家に生れ、小貝川の氾濫で毎年のように田畑が流出する苦しみの中に育った。幼少の頃から村人が田地の所有を明らかにする為に、竹竿や縄で田畑を測定して記録して置くのを見て測量に興味を持った。

其の頃、毎年小貝川の堰とめ工事に来る普請掛の村上島之允に見出され、その小者となって奥羽地方の駅路図作成の旅に従い、測量道具を担ぎ使い走りに飛び廻わり乍ら、測地棒を立て定測縄を張っては走る測地の初歩を学び始めた。

村上島之允は、寛政十年（一七九八）近藤重蔵・最上徳内等が択捉島に標柱を立てた蝦夷地見分探検隊にも、その下役として国後島迄行き、翌寛政十一年幕府は、東蝦夷地の松前領を直轄地として開拓に乗り出して、近藤

重蔵が東蝦夷地支配勘定となると、村上島之允はその支配下で東蝦夷地の測量・地図作成と植林、アイヌ人の農耕指導に当った。林蔵はその年より箱館会所の雇として村上島之允の下にあって測地、作図の助手となって、測量技術を身につけていった。

寛政十二年五月、伊能忠敬が幕府に願って自費で蝦夷地の測量にやって来た。林蔵は師の村上島之允よりも進んだ伊能忠敬の測量技術に驚き、忠敬の啓発を受けて現地で天文地理学、測地の新技術を学んだのである。

数年間、春より夏は黙々と測量と植林、アイヌの農耕指導に当り、冬は作図観測を学ぶ精励を認められ享和二年調役下役格となって、吟味役並柑本兵五郎の下役として松前地方の蝦夷地御用に従った。だが数年に亘る越冬と極寒の地の食生活の不適から、凍傷や壊血病となり役を辞して箱館付近のアイヌの部落に入って病を癒し、文化三年復職して択捉島沙那会所に赴任した。身分は元の普請役雇となって海岸線の測量と作図、新道の開発に従い文化四年の露艦の来寇による択捉島退去まで、測量技術を深めていたのである。

間宮林蔵の樺太探検、東韃靼への渡航の基をなす、天文地理の観測、測量と地図作り、アイヌ語の習得は、幕府天文方に集まる天文、暦法の学者の机上の学問学説や、長崎留学の外国語通辞と違って、極寒辺境の千島、蝦夷地での実踏、作図の苦労の積み重ね、数年に亘る越冬経験を蝦夷地アイヌ、千島アイヌの部落で現住民と寝食を共にし乍ら言語を身につけたのであった。

亦、文化四年の択捉島沙那会所の露艦の襲撃に敗退した場に居た屈辱を濯ごうと、露国艦船の再寇を探ぐり、北樺太の露国勢力との境を見分ける、奥地探検、国境見届の密命に応じたのであった。

亦、樺太が大陸と狭い瀬戸間で離れていることは探検出立の前に、最上徳内より教えられていたので、此れを確認して海峡発見者になろうなどとは毛頭思わず、長年苦学して身につけた天文、測地の技術を駆馳して湿原凍土の果てを見極めようとの探検者の根情があるばかりであった。

シーボルト事件後、林蔵が幕命一図に隠密調査に後半生を消耗し尽したのは、密かに林蔵の剛直頑迷の人柄を愛し、隠密調査の得難き人物と重要視して呉れた松前奉行以来の上司村垣淡路守や老中大久保忠真の信頼に応えたまでであった。

亦、林蔵は出自の上の了見狭少な僻みと言われ乍も、封建身分社会への鬱積した心情もあった。

天明の田沼意次の頃から身分秩序の封建の世でも、己れの才知能力次第で身を立て名を成す者も出てきたが、寛政より文化文政にかけて活躍した、北辺の探検者が、蝦夷地、千島、樺太の凍れる海を渡たり、吹雪の山野に伏して測量、探索に生命を賭けたが、殆ど奉行所配下の

下役ばかりで、それも、最上徳内を始め、伊能忠敬、村上島之允、松田伝十郎等、間宮林蔵の先輩達は悉く百姓町人の出身であり、その労苦と功績の大なるにも拘らず報いることは少く、最上徳内の如き大学者、大探検家で すら、文化四年第二回目の樺太見分を内命されたとき、漸く箱根奉行支配調役並、祿高百俵七人扶持であった。

それに引き替え、公方様大名高官には思い及ばないが、天文方高官の家に生まれた高橋作左衛門景保は、若くし家を継ぎ天文方奉行、書物奉行を兼ねて祿高三百俵、役金手当は計り知れず、然るに地図文書の管理を司る身にあり乍ら国禁を犯してシーボルトに、伊能忠敬が七十才を越える老齢の身で全国を歩いて完成した日本地図や、林蔵が手足の関節を凍傷で痛め乍ら、蝦夷地、千島、樺太の地を実踏して作った地図を異国人に密かに渡すなど林蔵にとって許し難きことであった。

事件後も、シーボルトの弟子を始め、洋学者、開明派知識人等から密告者の汚名を浴びせられ乍も長崎に潜入して、長崎奉行役人、通詞等の不正を発いたり、老中大久保忠真の密命を帯びて、石州浜田の回漕業八衛門の密貿易と、浜田藩の癒着を摘発したり、薩摩に潜行して唐物密貿易を探ったりしたが、天保十五年（一八四四）江戸深川の蛤町の僑居で病没した、六十五才であった。

天保九年のこの時、未だ近藤富蔵の知るところではなく、唯、あの傲慢に肩を聳やかして八丈富士山麓を探索していた十二年前の間宮林蔵も、幕府隠密となって消息不明となっている、と新入流人や国地よりの船便などで伝え聞いているだけだった。

富蔵はそんなことを思い浮かべて、支配代官羽倉簡堂も、近藤重蔵の子と知っても黙殺して行くであろうと思っていたが、意外にも話があると言われて却って不審であった。

だが、

「富蔵殿、入られよ」

と縁に立った簡堂が直接声をかけた。

続く。

伯柳生宗子十郎氏は、この度、目出度く古稀を迎えた。そして立夏は発行後すぐである。したがって本号はやくも夏季号である。ひさしぶりに充実の内容を盛ることができた。佐々木一郎が九十三枚を引っ下げての初登板である。北イタリアに舞台をおき、大韓航空機撃墜事件も話題に・・・、その国際的スケールは従来の本誌に例を見ない作品となっている。

○本誌のページ建ては過去一二頁ということが二回ある、この記録はその後更新されていない。背文字のバックナンバーが収まりよく、ある程度厚い雑誌でありたい。これはつねに編集子の請い願うところだ。右の佐々木作品は作者に一挙掲載について遠慮がちな問い合わせがあったがなんら気兼ねなきよう伝えたことだった。同人各位の奮励により紙幅を奪いあうくらいの精進を期待したい。

○山口健二がついに筆を折るかに、息女からの一文が寄せられた。脅威を覚えさせるほどの強靭な意志力をもってこれまで作品掲載皆勤のついに熄むに会い、なんとも惜しまれる。しばらくは休養のうえ、不死鳥ふたたび羽搏く日のあることを念じたい。

○三戸岡道夫の第二弾書き下ろし長編は五月中旬発兌の見込み。前作「降格を命ず」は七、五〇〇部を売り尽くすという、勢いに乗る並々ならぬ気迫に拍手を送りたい。

（お）

「まんじ」第三十六号

平成二年五月一日発行（非売）

編集　犬和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇二東京・千代田区三崎町一―一―一　升本ビル　升本内

「作家群」（まんじ）編集部

☎〇三（二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―九〇八一五

加入者名「作家群編集部」

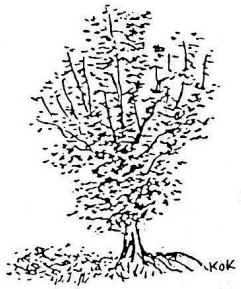
印刷　㈲加藤清耕社

千代田区神田神保町三―十　☎〇三（二六二）五七四三

～～～～～ 目　次 ～～～～～

輝かしい夏の日々 …… 芹沢　純 … 1
暢気な患者 …… 小久保勝義 … 11
錫婚旅行は雲に乗って …… 佐々木一郎 … 15
まかり行かむ …… 大和禎人 … 31
―神職連合―
〔連載〕
青山の土地をめぐって（第一回）… 三戸岡道夫 … 45
近藤富蔵の生涯（第八回）… 金子正義 … 57
編集子のメモ …… 63

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



輝かしい夏の日々

芹澤　純（セルバラ）

これも又、庭の茂みの葉隠れから白い大輪の花弁をくっきり見せている梔子の香りがもたらしてくれた物語りである。

もうかれこれ半世紀の以前、「緑の修道院」で、日米の学生たちが集い、二週間起居を共にした、その青春の日の忘れられない場面……

それは昭和十五年（一九四〇）の七月の九日から二週間の期間、都心から遠く離れたむさし野のさなかの津田カレッジのキャンパスで、東寮と西寮の二つの寮に分れて、アメリカの学生と日本の学生の合宿しての会議だった。第七回日米学生会議。全く学生の手で主催され、学生が主体となって行われた会議が、どんなにそれぞれの学生の将来の人生に影響を及ぼしたろうか……もはやこの世から去った人たちも何人も……日米の学生たちが百五十人ほど相会して、寝食を共にして、あんなに仲好く過したのに、その翌年の十二月八日を境に、日米は戦わされ、原子爆弾が二回も落とされるまで、その戦いは止みはしなかった……

会議のあった夏休みに神戸で書かれた原稿、「渦巻」は失われた。

木曽槙夫と冴百合子の物語を作者は再現できるだろうか。

木曽槙夫　彼ももうこの世から立ち去った…

あの天才的劇作家の若き日の肖像！

わづか二十二才にしてすでに彼は老成していた、あの落ち着いた物静かな挙止、わづか二、三才年下の他の学生たちに対して立派な教師であり、チェア・マン、リーダーの資格を備えていた、そして百合子があの時期に木曽に出合わなかったとしたら……

九月に入って、寮生たちは、学校再開より一足先きに、それぞれの家もとから、寮に帰ってきた。当時、神戸に

両親が住んでいた百合子も、前夜の夜行で神戸を出発して、朝東京に着き、寮に戻っていた。入学当時の家は横浜だったので、わけもなかったのであるが、それでも神戸からはるばるやってくることにそれほど苦労を感じてもいなかった。父と母に送られて、本の入ったバッグの他に、必ずヴァイオリンを提げていた。ヴァイオリンは私の無二の親友だった。別に重いと思ったことは一度もなかった。

秋が始まっていた。名にしおう武蔵野のまん中であった。見渡す限りの雑木林と、草原と、畑と。それは麦畑と、そして秋には甘藷畑だった。

正門より先きの入口からすぐの西寮、それと向き合って東寮が、全く同じ建物が二棟並んでいた。

寮の玄関の周りも、ことに中庭には夏草がのびきっていた。始めて寮に泊った夜、それ迄、ともかくもヨコハマという港を持つ都市に住んでいた身には、寮の二階の窓から、どこを見渡しても暗いむさし野の真中、ほんの一ケ所か二ケ所にポツンと灯りがともっているだけ、その心細さといったらなかったことを、百合子は思い出す。

その秋、一九四〇年の秋、百合子には、特に淋しく思う理由があった。その七月七日から二週間、第七回目の日米学生会議がここで行われ、二百人近い日米の大学生が、ここ東西の津田英学塾の寮に集まり、寝食を共にして、十のテーブルに分れて会議を行った。当時の、険悪になりつつあった日米の状勢にかんがみるとそれは驚くべき出来事であったことが、あとになってみてよく分ることである。たとえば、一九三七年の五月十五日に官邸で青年将校に暗殺された犬養毅（木堂）首相を祖父に持たれた犬養道子さんの、「ある歴史の娘」（「花々と星々」に続く）を読むにつれ、刻々に悪化していった日本の状勢、世界を敵に廻そうとするような危険な運命に向って驀進していた状態がひしひしと感じ取られるが、当時の、ことに日本側の学生たちにはそれほどの認識には欠けていたといってよいと思われる。その前年には、その年にも参加された後の花沢夫妻もアメリカに渡航され、向う側の会議に参加されていた。その翌年、百合子たちが選ばれて、アメリカに渡る側になった時、それは中止された。もし百合子たちがアメリカに渡った時、捕虜になる怖れがあるというのが理由であった。その時の日米の状態、いつ大衝突が起るかもしれないその「前夜」どんなに最後まで、日本側で戦争阻止に苦闘していた政治家たち、外交官たちがいたか、それは「マリコ」でよく事情が知られている。

あの輝やかしい黄金の夏の日々、しかし百合子たちにも、アメリカの学生たちにも、それほど切迫した思はまだなかった。ただ、アメリカ人として来日している、日系二世の学生が「もし日本と戦争になったら、僕たちはアメリカ人として戦う」と言い切っていた言葉が、一つのショックでさえあった。それほど日米の戦争が切迫しているとは信じられなかった。もちろん、ヨーロッパではナチスの嵐が吹き荒れ、一九三九年九月一日以来、ヨーロッパ戦争になっていたことは知っていたが。

寮に戻った百合子は、暗くなった秋の校庭のほうに歩んでいった……

と不意に、眩ゆい夏の光が、まるで暗い舞台を照明のいくつもの光の縞が照し出すように、辺りにパッとさしてきた。思わず目まいがするほど明るく……

百合子は、クリーム色に濃い紅の苺模様のついた夏のワンピースで、ハンカチを首に巻き、自転車を引いてそこに立っていた。男子学生たちが野球に興じていた、あちこち校庭に、夏服の男女の学生たちの姿があった、まだ朝早い頃であった。冴百合子は、そこから一千メートルほどさきの青梅街道沿いに、細長く続く小平の村の自転車店から、修理に出していた木曽槙夫の自転車を頼まれて取りにいってあげて、それに乗って校庭に戻ってきたところであった。槙夫は、百合子たちの第一週のグループのチェア・マンであった。それは「芸術と人生」というテーマを全部英語でリポートして、討論するテーブルであって、十番目であった。第二週は又別なテーブルに属することになっていた、経済問題に所属することになっていた。

木曽槙夫は、百合子より二才だけしか上でないK大学の英文科二年の学生であった。数え年で二十三才だったから、実際は二十二才であったわけである。中肉中背、むしろ痩せ形で、蒼白い顔をして、彫りが深く、それはどうみても思索家の顔であった。芸術家というより瞑想するタイプの人物であった。今思えば、そこにはどう見ても青年らしい溌剌さとか、活気は見られなかった。いわゆる青年らしさはどこにもなかった、二十代の始めで、既に四十代もすぎている人の顔立ちであった、事実、本人もそれを承知していたと見え、その十一月に築地の小劇場で上演された自作の劇「十一月の夜」で、自分のことを齢四十才にしてという科白をあてていた。百合子はひそかに彼のことを「私の憂うつ屋さん」と呼んでいた。そして、この特異なマスクに惹かれた。彼はすでに、劇作家を志していたが、自分が舞台に立つことも好んでいた。彼の英語はすでにすばらしかったし、英語劇にも芥川比呂志、一橋大の鳴海といった仲間と出演していた。その中に「化石の森」があって、ふしぎに心を捉えた、それは会議のあとのことであったが。

自分たちのテーブルのチェア・マンであったから、百合子たちは、その長い準備期間中にも、槙夫と接触することが多くなった。

暗い秋の日、不意に照明に映されて、あの夏の黄金の日々が校庭に出現した。若者たちの元気一杯の声、そしてあの真剣さ、そこには異国語で行う会議に備えて懸命に努力している緊張した雰囲気がみなぎっていた……

百合子の目の前にありありとまだ二ヶ月とたっていない七月のキャンバスが浮び上ってきた。

エレガントなクリーム色の三階建ての本校舎の建物の正面玄関の向って左手にあった、一本の大きな山百合、そこに丁度いくつもの花々がついていた、山百合のあの野生の強い香り、そしてのびのびと躍り上るような姿、あの夏の日に、いくつ花々をつけていたろうか、十花二十花、ただ一本の株から枝々が分れて、夏の盛りの空気を胸一杯吸っていた、あの頃の若者たちのように！

わづか二才年上というのに、木曽槙夫の教養の広さ深さは、とうてい百合子の及ばない所であった。語学を第一の勉強とする筈の津田の学生の百合子より、語学力も彼は抜群であった。そしてすでにフランス語に堪能であった、アテネ・フランセで習得したということであった。東京市内に住んでいた気の利いた学生は、色んな機会を捉えて勉学に励んでいた。おまけに木曽は劇作家の卵であり、俳優も演出家もかねていた。ヴィルドラックの「商船テナシティ」を上演し、自分は老人の役を演じたという。

当時、日米学生会議の本部は、大久保にあった国際学生会館であり、新宿から歩いていった。すでに新学期四月からまもなく、七月の会議に備えて土曜日毎に、あとからは別な日にも本部に通い、各テーブルに分れて準備をしていた。まづ各人がペーパーを書かなくてはならなかった。津田二年の百合子にはかなりの苦労だった。特別に英語を勉強していたわけでなかったし、外人の知り合いもなかった。百合子はヨコハマの県立の女学校（当時平沼高女）から津田の予科に入り、それから本科に入ったのだった。小学校の時、二年間上海にいて、英語を習ってはいたが。

ただ百合子は文章を書くことは好きであった。あの時、彼女が書かなくてはならないペーパーは、「芸術は人生のためにあるのか、それとも芸術は芸術のためにあるのか」というテーマに答えをだすことであった。どうやってテーマに近づいていいか分らない百合子たちに、木曽槙夫は懇切に示唆を与えてくれた。

L'art Pour la Vie

それを主唱したのはトルストイであり、芸術はすべて人生問題の解決のためにあると教えてくれた。

L'art Pour l'art

芸術至上主義であり、テォフィール・ゴーチェ等、フランスの詩人の提唱するモットーであり、芸術はあくまで芸術の純粋さを守るためにあるという芸術至上主義であ

った。

この槙夫の教示に従い、百合子はあれこれと自分の頭で考えていった。ただ百合子には、この両主義はあく迄別々のものではなく、そのどちらにも真実性があると思われた。というのも彼女は相当以前からショパンを愛していた、ショパンの音楽に世界のすべてが罩められていると思いこんでいるほどだった。自分で生活の資を得なくてすむ時、少女はそう思いこむことができたのだった。少女はそのため、はじめのうちはピアノを習いたくて仕方なかったが、M銀行の外国為替畑を歩いていた父は外国生活が多くて、とても度々の転勤にピアノまで携えてゆく余裕はなかった。オルガンの小さいのを買ってもらい、そしてヴァイオリンを習えることになった。当時、天才少女ヴァイオリストとして諏訪根自子さんが持てはやされていた時代だった。日米会議より五、六年前にさかのぼる時代である。当時の大新聞に根自子嬢の写真が度々見られた、人々はその愁いを帯びた美貌に魅せられ、その気品に打たれ、そして彼女のヴァイオリンの名技に酔った。テレビはない時代、ラジオから流れる音は流麗であった。やがてその天才少女は、近衛秀麿やその他の理解者を得て、ベルギーに留学できコンクールに入選し、そしてパリに学んだ。ドイツの参戦でフランスを逃れ、ドイツを通りシベリア経由で、近衛さんたちの一行と日本に帰国してまもない頃であったろう。

いつか少女時代、十五才頃からヴァイオリンに熱中する少女、しかしショパンのイマージュは常に胸に秘めていた。彼女、冴百合子が憂愁なものにしか本質的に惹かれないのもそのことに関連している。

百合子は、何とか拵えあげなくてはならないペーパーを前にして、懸命に考えた。はじめから英語で書き下す筈だった。

芸術はどうしても人生のために存在するのだと思えた。とかく物質に流れ易く、不毛に陥り易い人間の世界を美しく豊かにするのが芸術である筈だった。ただ人によって人生の解釈の仕方が色々ある筈だった。芸術は人生のために存在する、その人特有の人生のために存在する。ゴッホが生命の焔を全部燃やしつくして描いたのは、彼の目に映じる人生であった、風景も人間像も含めて。ゴッホの場合、芸術至上主義、芸術のための芸術などというモットーは何と空虚に聞えるか。芸術は真実でなければならない、人生の真実の姿を芸術家の目は捉えなくてはならない。

ただ百合子自身としては、ゴッホの足もとにも及ばない。とはいえゴッホの目にしていたあの旋回する糸松たち、日輪、空、渦巻く麦畑……それは彼の異常な感覚にとってあく迄真実の姿であった。外界の事物は彼の目にあのように映じたので、決して誇張して描いたのではなかった。世界は彼の目には旋回している、それは踊る世

界であった。

しかし、と百合子は考える。私にとって世界はショパンであり、それは神秘の湖の青さを湛えている。月光の中でのみ息づき、香りを放つ特種の白い花である。それは魂の昇華した姿であり、美の頂点である。芸術は人生のためにある、そして芸術は、芸術であるために美しい存在である必要がある。百合子は何とかこういう結論にペーパーを持っていった。そしてその終りにドラクロワがショパンについて記している言葉、「ショパンは地平線の彼方に美しい幻想の世界を創りだす」

（当時を思出して、その意を取って書いた。その頃、英字新聞の何かの記事からその言葉を見出したと思う。）

津田英学塾という所は、学生たちが勉強しなければ、どんどんおいてゆかれる所であった。先生方は、学生に安易な妥協など決してなさらなかった。特別な英語のキャリアを持っていなかった百合子は、二世や、ほんものアメリカ人も混っていた学生たちの間に混って、必死で勉強しなくてはついてゆけなかった。学生会議の準備で、土曜だけでなく、他の週日にも大久保の国際学生会館に通っていた百合子は、しかしついぞ一時間も授業を抜けたことはなかった。当時、都心からはるか郊外の小平村にあった学校から、十五分ほどバスに乗り国分寺に着き、そこから新宿まで三十分余、そこから歩いて十五

取っておいてもらう遅い夕食を取る。予習だの、ペーパーの準備、しかもヴァイオリンも弾いていた。三ヶ月近い準備期間。

その間、槙夫の学識の深さに百合子はすっかり感嘆していた。学校では教わらないことを槙夫は実によく知っていた。その時、彼はすでに道元の思想についても述べていた。そして和辻哲郎の「風土」を読むようにと。当時は、現代と比べて名著というものが限られていて、それらを精読すればよかった。集中してものが考えられた。

槙夫は深切に百合子たちに説明してくれた。百合子は津田英学塾（専門学の二年生、一年上に同じ学校の辰見桂子がいた、有名な古代織物を再現させた京都の織匠の次女で長女の淑子はもう二年上で、すでに卒業していた。いかにも京都の名家の令嬢にふさわしい立居振舞を身につけた雅やかなモダーン姉妹であった。地方出身の学生が大部分を占める同じ寮の住人の中で、関西の都会出身の人たちは目につく存在だった。又、大連からきていた人たちも。槙夫をチェア・マンとするテーブルの人たち十人のうち多くは女学生で、東京女子大、関西の女子校からの人たちで二、三男の学生が混っていた。そのうちの一人、地味な人を槙夫は、立沢君はラテン語、ギリシャ語にも通じている学者だと賞めていた。

和辻哲郎の「風土」の要旨によれば「世界の文化圏はヨーロッパの牧草圏文化と、アジアのモンスーン圏文化

に分れる」と槙夫は教えてくれた。もう一つ砂漠文化について述べたかもしれない。和辻さんの「風土」をその後、精読したかどうかも百合子は覚えていない。地中海文化について言及し、松でもそこでは柔らかい枝振りで生えるので、台風に襲われる日本とは異ると指摘したことも印象に残る。又何かの折にゴシック建築のことが話題にのぼった時、槙夫は一冊の写真集を持参し、テーブルのみんなに一つ一つ丁寧に説明してくれた。

百合子はその後、よく思う。もしあの時、槙夫との出会いがなかったら、今のコースを歩んでゆけただろうか、と。このオール・ラウンドな教養を備え、生真面目で、人間として深い愛情を抱く槙夫、後に「なよ竹」の傑作劇を遺して三十代で地上から姿を消してしまった天才的な人の存在！深い激しい憧憬を自らの胸に秘めて彼は自らの意志でこの世の外に出てしまった。

「夢見るよりもっと激しい希求の彼方にそれはあります」

その年、築地小劇場で上演された、彼の自伝「十一月の夜」の劇のプログラムにこの詞が、彼のものとして記されていた。

「夢見るよりもっと激しい希求の彼方に……」

百合子はしばしばそのことについて思いを至した……この黄金の夏から一年半近く、翌年の十二月八日日米開

戦のラジオを同じ学校の同じ寮の食堂で聞いた時以来、数々の辛い出来事の間にも……

七才から十一年間アメリカに留学して帰国してから、日本、アメリカの有力者たちの後援を得て建てられた津田カレッジにとって、そして多くのアメリカ人の献身的な愛情によって教育された塾の人たちにとって、こんなに悲しいしらせはなかった。何故日本はかつて自分が師と仰ぎ、先進国として敬していた国々と戦争を起さざるを得なかったのか？韓国、中国大陸、そして今アメリカ、その他英国、フランスと……

もしあの戦争がなければ、槙夫は今も活動できていたかもしれない……

槙夫、あの青春の輝やかしい夏の日々に二週間、彼と同じ構内に起居を共にしていた、そしてそれ以前、ほとんど三ヶ月近く、毎週顔を合せていた……

槙夫が蒔いた種子は百合子たちの胸の中に育っていったろうか……

槙夫は二十二才の若さで四十才どころか五十才、あるいはもっと越えた人の叡智を身に備えていた、あのむさし野に集合したエリートの学生たちの誰より、人生の叡智を有していた。「モンテーニュを読みなさい」と槙夫は度々口にしていた。その夏休み、百合子は関根秀雄の名訳で、「モンテーニュ随想録」を全部読み通した。ずっと後になって仏文学者として、ユマニストとして代表

的な名学者であられた渡辺一夫先生の講義に接した時、百合子は、しみじみ以前槙夫の教えてくれた言葉の意味を理解した。二才年上の槙夫は実際には二十才、あるいはもっと年長者の叡智を備えていた。それは単なる才智ではなく、知識の集積ではなく、まさにモンテーニュの叡智そのものであった。同じ神という名のもとに血で血を洗う争を重ねなくてはならなかった宗教戦争の十六世紀を何とか、和解に導こうと、あくまで影武者として必死の地下運動を続けたボルドー市長を務めたモンテーニュその人の智の結晶であった。そして盟友であったナヴァラ公アンリをアンリ四世としてフランス王位につけ、やっと血腥い新旧両教徒の戦後をいちおう拾収したのである。当時、生硬の未熟の百合子にはとうてい窺い知れなかった深い洞察力をもって、槙夫はすでに日本が進みだしていた危険な方角を察知していて、モンテーニュの自由な叡智について深く思いを廻らしていたに違いなかった。かの十六世紀のフランスの社会で、一寸でも当局の逆鱗に触れれば、危険な自由思想として火に焼かれたそれと同じ状勢の当時の日本にいて、槙夫は深海に潜航する思いでモンテーニュに人生の炬火を見出していたに違いなかった。槙夫から渡辺一夫教授への道は意外にも直接に繋がっていた……

少しも熟さない、生硬で、ただ気ばかり逸る百合子はチェア・マンの槙夫にとって、時に不協和音であったかもしれない。激しい感性を彼女の稚い知性は包みかねていた。百合子は求めていた……自分でも何か分らなかった、カレッジに入学した時十八才。カレッジの数年、人生の中で、最大限にその可能性の枝が未知を目ざして、やたらにあちらこちらに伸びてゆこうとするのだった。彼女の中に、堪えられていた葡萄の実が、槙夫を中心とする新しい活力をイーストとして発酵し始め、新しい液に転身しようとして懸命にいている有様だった。百合子は自分で自分をどうしてよいか、本当は分らなかった。

直接に自分たちを指導してくれる槙夫に、次第に百合子は惹かれていった。それは恋と呼ぶにはあまりに幼く、未熟であった。小学校を除いて女性の中でだけ教育を受けていた百合子にとって槙夫の存在は大きなものであった。敬愛が、少女の心の中で次第に年長者への愛に変っていってもふしぎではなかった。百合子は、ただ観念の中の恋愛しか知らなかった……

槙夫を慕わしいと意識し始めても、それはあく迄も夢の中のヒーローを求める気持であった……それは、同じ構内で、起居を共にするようになってから意識が強まった、丁度、構内の正面入口近くに今を盛りと咲き続けた山百合の野性の強い生の香り……自らの生の香りに酔いしれているのであった。

大久保の国際学生会館は木造で質素な建物ではあったが、チャンとした建物で、フィリッピン、タイなどアジア諸国からの留学生を受けいれていた。私たちはその中のいくつもの部屋を貸してもらい、十のテーブルに分れて、それぞれのメイン・テーマを検討し、ペーパーをつくり、自由な討議を行った。

あの時、百合子がふっと「詩人とは酔うことを知っている人ですね」と発言した時、槙夫が言った次の言葉が百合子の印象に残った。

「作家はその人の時代の証人でなくてはならない」

主観の塊りのような百合子に対して、警しめの意味もあって、槙夫が言ったような気もする。槙夫が、その本質として、一方では叡智の結晶であるが、他方では百合子にまさるとも劣らない夢想の人であることに気付いたのは、ずっと後になって、もはや彼と会うこともなくなり、彼の作品を通してであるが。たとえば、「思出を売る男」、しかし何よりも彼の名作劇「なよ竹」であった。そこにフランスの劇作家ジロードーの「オンディーヌ」（水の精）の影響も看て取った。又彼の「オンディーヌ」に寄せる思慕の念も。

当時、槙夫は十才も二十才も年下の少女に対する気持で、この模索中の百合子に接していた。

同世代の学生同志などとは全く思っていなかった。

百合子たち、普通の市民家庭に育った少女たちは時代の険しさに対する認識は、同じ世代の男子学生よりずっと甘かったに違いない。犬養道子のように、政治の中枢にある人の家庭に育った人と全く異り、時代認識、国際感覚は充分に育成されていなかった。たとえ当時、最もアメリカとの交流があった筈のカレッジで教育されていても。そのことを犬養道子は「歴史の娘」の中で明言している。このカレッジの学生たちは、普通の中流家庭の子女であり、その見解はまことに狭いと。彼女の当時の——彼女も一年ほど在籍していた——津田カレッジに対する批評は大へん辛い、彼女は鋭く批判している。そこはとうてい、国際平和のため活動したいという彼女の燃える意欲を充たすのに足らない。彼女、学習院で日本の上流階級の仲間入りをし、トップ・クラスの文化人たちを父母の親類、親友として持っていた彼女にとって、津田の世界など、小平の田舎にある微々たる存在にしか映らなくなってきたのであろう、彼女の最初の、この英語塾に賭けた望みが大きかっただけに。犬養道子は敬愛してやまない当時の駐米大使、母の姉の良人、斎藤博について、その最大のエピソードとして、揚子江に碇泊していたアメリカの砲艦、パネエ号を日本軍の飛行機が爆撃した事件の処理に当ったその対処の鮮やかさについて賞めそやしている。それは被害者の国の大統領夫人ルーズベルトの舌を巻かせたといい、以来、夫人は日本人斎藤の人柄に深い敬意を抱きつづけたと言う。

斎藤博は直ちにアメリカのラジオの番組を、自らの判断で買い取り、自ら出てアメリカに陳謝した。そのため

険悪になったアメリカ側の感情が、何とか収まったと記されている。

それは、第七回日米学生会議の前年でなかったろうか。「パネエ号事件」についての記事が津田カレッジの掲示板にのせられ、親米の学校として、遺族への義捐金を募る、といったことが記されていた。

その以前から、スペインの戦後について、いつも新聞に大きな記事が出ていて、漠然とではあるがそれは日本人にとって他人事のように思えなかった。そしてナチスドイツの連合国への宣戦布告、一九三九年九月一日、破竹の勢で、ドイツ軍はフランスの領土を侵攻し、パリは自ら降服した——もし、しなかったらあの由緒ある都は灰燼に帰していたであろう……

戦後のフランスとドイツの提携ぶりは、うそのようである。

パリをヒトラーの最後の命令に抗して救ったのは、他ならぬドイツの司令官であった……

あの七月の輝やかしい日々から何と月日は経ち、そして何という数々の事件が重なり合ったことか……

周辺こそ、すっかり市街地に化したとはいえ、津田のキャンパスはまだ昔の面影を留めている。クリーム色のエレガントな本校舎も、東西の寮の建物もそのままである。ただ木造の運動場の南側にあった梅林はとっくに姿を消し、新しい校舎がそこに建っているし、その他いくつもの建物が造られはしたが……

その裏の雑木林はそのままで、その中を縫ってゆく「恋人たちの径」もそのままである。

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

（発行日）　（原稿締切）

春季号・・・・・・・　二月一日　一二月三一日

夏季号・・・・・・・　五月一日　三月三一日

秋季号・・・・・・・　八月一日　六月三〇日

冬季号・・・・・・・　一一月一日　九月三〇日

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

季刊確保のため右のように規約を定めております。

暢気な患者

小久保勝義

明け方トイレに行った。帰り辷って転んだ。左肱が風呂場の硝子戸にあたった。どえらい音がして硝子の粉が降って来た。別にケガはなかったが、これは唯事ではないゾと、安芸は娘に電話して、救急車を呼んで貰った。

昨夜はねられなくて深酒をした。

がらにもなく遺産を四人の子供にどの様に分け与えようかと考えた。

彼は七十三になり、もうすぐ七十四才になる。家は自分の家で、アパートを一軒もっている。息子妻子が同居していたが、嫁とささいなことで諍いをして、息子妻子は家を出ていってしまった。それから安芸は独り暮しである。妻はもう早く亡くなって、今年は彼女の十三回忌である。

救急車は所沢と狭山の境の青村病院に着いた。そして入院。気がついたらベットにいた。その間のことは一切覚えていない。

終日点滴をうけて、枕頭には娘が付添っていたらしい。二、三日して私の隣りのベット（境にカーテンが引いてある）から、松葉杖をついた西洋の絵本に出てくる兎の様な顔をした五十才位の女が現われた。髪は断髪。

「となりのばばアです、どうぞよろしく」

このばばアさんがこの病室をとりしきっているのだとすぐに了解した。

リューマチで長く入院しているらしい。両手首はよく効かない。両脚は時々治療を受けていた。びっこを引いている。

この病室を説明しておこう、兎バアさんの横にドアがある。そして三米位してもう一つのドアがある。ベットは七ツ、兎バアさん、私、私の横に透析の男患者、つんぼで、口がきけない、色は真黒、上半身はたくましいが脚は蚊トンボの様にやせている。毎日車椅子に乗って透析に通う。そのほかは横になっている。食欲は旺盛だ。

牛乳の量が少ないと看護婦に文句を言っていた。

その隣に半身不随で少し頭が弱いが愛嬌のある尾沢と言う男がいた、昔は新聞記者だったそうだがいまや昔の才気は見られない。兎ばアさんの言うことは何でもきく。ベットの手すりをつたって歩いていたが、兎ばアさんの忠告で杖を使うことにした。言葉がはっきりしないので私とはシッケイを挨拶の代りにした。何か一生懸命語っているのだが、私には理解出来ないことが多かった。その前にヌイさんと言う八十才の半身不随のお婆さんがいた。終日無言。ベットの半分を起して貰わないと食事が出来なかった。右手に匙を持ち、お粥をぱくぱく食べていた、食欲は旺盛だった。時々息子や嫁が来て苺とか蜜柑を食べさせていた。いたんだ部分をよけて置くと、彼らの眼を盗んで、それを口に入れた。

そのうしろに「私は九十才だよ」と言うアヤさんと言う品のいいおばアさんのベットがあった。食欲がなくて家族が心配していた。その隣に桂さんと言う良く本を読んでいるおばアさんがいた。胸を打って入院していた。やがて三階へ来てよく歩行の練習をしていた。

この病室の患者は七人である。

安芸はだんだん回復して来て窓外の景色をたのしむ様になった。眼下に広い畑があり、右手に幼稚園が見えた。幼稚園に雪が降って雪合戦がはじまった。幼稚園の子供の遊び方や送って来たお母さんの様子をスケッチした。

安芸はよく歩ける様になった、そして三階の三〇六号に移った。

三〇六号には一人一人テレビが着いていた。すぐに百円玉を入れたが、やかましいと前の患者にとがめられた。前の患者は後でわかったことだが胃ケイレンでその夜は痛みがひどかったらしい。

この患者も慣れて来たら、気さくな人だ、岩井さんと言った、元気になったら色紙でクス玉を作って看護婦さんにあげていた。

隣は孫のベットに乗って蛍光灯を修繕してベットから落ちて頭をけがしたおじいさんだった。七十四才だった。

そのうち、婦長さんに「安芸さんはあたたかい部屋がいいでしょう」と日の当る三〇二号へ移された。

窓から幼稚園が見えた。畑も見えた。

ビニールをかぶせて春の野菜を栽培しはじめた。

朝検温七時、八時朝食、九時から十時点滴、十一時頃点滴が終る。十二時昼食、十二時半検温、五時夕食、九時消燈、時々診断がある、昼食前とか三時頃とか。

三〇二号に移ってから廊下の東側の窓際にベンチがあって灰皿が置いてある。

灰皿は毎朝きれいに掃除されていた。

ここへ集まる患者は胸を負傷したアイジョウジに似た労務者、ムチ打ち病の社長と呼ばれる男、骨折の学生、ムチ打ち病の肥埜田と言う四十四、五の男。それに背中

の曲ったおばアさんがいた。ベットで寝ている患者はいなくなったから、このベンチで煙草をふかし乍ら、喋るのが日課になった。皆退院の日をもくろんだり、看護婦の噂話をしたり、飯がまずいの、少ないのと、勝手な話をした。

灰皿は毎朝奇麗に清掃されていた。これは背中の曲ったおばアさんが洗ってくれるのがわかった。年は八十二だと言った。

おばアさんは胸を打って入院していた。若い時から煙草好きで、父母が煙草嫌いなのに、客が残していった吹殻を便所にかくれて吹ったと語った。家は米屋で今は息子がお茶を販売していると。話題の途中で、昔は人生五十と言ったもんだと言う話から、突然「人生五十功なきを恥づ、花木春すぎて……」と吟じ出したのには皆吃驚した。年期の入った渋い声だった。

小学校の先生をやっていて学童と雪掻きの最中に材木置場に転んで、背中を挟まれて、亀の甲羅の様になってしまったと語った。

我々喫煙クラブでは彼女を長老と呼ぶ様になった。

然しこの喫煙クラブは婦長の目のカタキで、中には許しを得ないで、かくれてのんでいる者もいた。

社長と呼ばれる男はあちこちに電話をしたり、人を呼びつけたり病室は（それは個室だったが）事務所の様だった。ムチ打症は軽いようだった。スゴイ訛があって、

八戸の出身だと言った。アイジョウジは北海道釧路の出身だと言った、どうも話の内容が土木関係、不動産関係の様だった、ムチ打の肥埜田は社長と話が合った。

私はベンチに近寄らなくなった。社長の傍若無人が気に入らなかったからだ。

社長は退院し、ムチ打の肥埜田も退院し、アイジョウジも退院した。

喫煙クラブのメンバーは変った。

煙草を吹わないけれど、このベンチにやって来る大原と言う男がいた。胆石で入院していて、病院には出戻りだった。大豆一升で豆腐が二十丁出来る、今は細君と別居していてパチンコ屋をやらせている、そんな話が面白かった。学校は出てない様だが、仲々の事業家で、何か今も営業をもくろんでいるらしい。

一ケ月も飯をくわないで酒ばかり飲んでいて肝臓を病んで入って来たデザイナーがいた。年は四十五、六、頭は禿げていて鼻下に美髭がある。

川越の農家出身の男がいた彼も煙草を吹わないけど話好きでベンチへやって来た、交通事故で頭を打っていた。交通事故で足を骨折して松葉杖をついている男もいた。肝臓が悪く職場で胸を打った若い男もいた。

裁縫師で自転車でころんで腰を打って、自称腕がいいと言う七十五の男もいた。犬と棲んでいて、女房には逃げられて久しいと言う。

考えて見ると、デザイナーも結婚二年目で離婚して今は独りすまい、裁縫師も一人で犬と暮している、大原も妻とは別居、今一人で暮している。私も一人すまいだ。

窓外の景色は日々に春めいて来た。ビニール畑に或る日青い芽の生えているのを見つけて、川越の農夫はあれは改良小松菜だと言った。舅と息子夫婦の三人でせっせとビニール畑を世話していた。

幼稚園は休みに入って子供らの姿はなくなり、庭の桜は花を咲かせた。

或る日、安芸は外来の待合室で新聞を読んでいた。不図見るポスターに、「こんな悩みをお持ちの方はいませんか、もう年なんだからとあきらめずに、医師に相談しましょう、治療を受ければよくなります。

トイレに間に合わない。

すぐにトイレに行きたくなる。

一定の距離を歩くと痛くて歩けなくなる

手や足に冷感やしびれ感がある

手や足の指先の色が蒼白になっている

じっとしていても手や足が痛む

手や足の傷がなおりにくい

こんな症状があったら当院でご相談下さい。

すべてがすべてではないけれど、あてはまる点がなくもなかった。

安芸の診断は貧血症と言うことだった。毎日の点滴に造血剤が加えられた。

安芸の手帳にこんな句が記された。

「暢気な患者」と題し次の数句がある。

患者われふくら雀や春を待つ

枕頭に桃活けて去る見舞客

患者われベットで摘む雛あられ

日脚伸びたる窓辺に集ふ付添婦

たまに家に帰れば

紅白の梅に野鳩の来てゐたり

春眠の重き瞼の患者かな

春月は送電塔の上にあり

間脳に春月入れて救急車

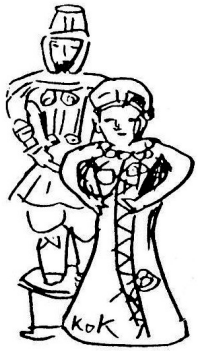
啓蟄やぞろぞろ集ふ配膳車

牽引器春愁の顔吊しけり

亀鳴くや点滴に腕縛されて

安芸はエープリフールの日退院した。

（二・四・四）



錫婚旅行は雲に乗って

佐々木一郎

ジャンボ機が全力疾走に入り次いで急上昇を続けている間は、さすがに、室内は恐ろしい程の緊張と静寂に包まれていた。

しかし、やがて水平飛行に移り、背凭れに強く押し付けられていた体が自由になったと知ると、室内にはホッとしたような明るい雰囲気が漂い始め、「ノー・スモーキング」「シート・ベルト」と書かれた緑のサインが消えると、早速、座席ベルトを外して立ち上がる乗客達の姿が見えた。

二階堂倫爾は、ベルトを外して一つ大きく背伸びをすると、窓外に目を向けた。

いつの間にか、このバン・アメリカン航空・ボーイング七〇七型ジャンボ機は、厚い雲海の絨毯の上を滑るように走っている。もし、ゴォーッという、電車で長いトンネルを通り抜ける時のような轟音が続いていなければ、まるで「孫悟空の金斗雲」にでも乗っているような感じである。

空は、先刻の成田飛行場の漆黒の闇がまるで嘘だったように、明るいブルー・スカイが果てしなく広がっていて、右前方に突き出ている赤い日の丸を付けた主翼が、太陽の直射を受けてキラキラと輝いている。

ふと見ると、窓際に並んで座っている妻の堯江がしきりにチリ紙を丸めて耳に栓をしようとしている。

「どうした？　気分でも悪いのか」

「えっ？　ううん、気分は悪くはないけど、さっきから耳がガーンとしていて……」

「それじゃ、今頃したって駄目だよ。飛行機が飛び立つ前にして置かなくちゃ……。

ほら、十年前の新婚旅行の時、ツーリッヒの飛行場でもマドリッドでも、上り降りする前にスチュワーデスが飴を配って歩いたじゃないか……」

「あ、思い出した。あの時、あなたったら、片手一杯

に飴を握ったものだから、スチュワーデスさんに〝オンリー・ワン〟って注意されて、慌てて一つだけ取って残りを返したりして……」

「おいおい。話をそらすんじゃないよ。で、耳のガーンはどうなったの？」

「あら、そう言えば、いつの間にか取れちゃったみたい。……不思議だわ」

堯江は、耳栓にしていた紙をごみ袋に入れると、改めて機内を眺め回した。

「今日は大分混んでるみたいですわね」

「うん。ファーストクラスの方は分からないけど、エコノミークラスの方は殆ど満員だそうだよ」

「そうでしょうねえ」

このジャンボ機は、三百八十人乗りであるが、二階堂達の部屋だけで縦十列、横十一列（二列、七列、二列）の搭乗客がギッシリ詰まっている。

座席の色は、部屋毎に変えてあるらしいが、この部屋はコバルトブルーの座席で統一されている。

いつの間にか、「非常設備」の説明が始まっていた。

部屋の入り口の両側の通路にスチュワーデスが一人ずつ立って、アナウンスに合わせて実演をして見せるのだが、乗客達は、墜落の恐怖を連想してしまうのか、幾分緊張した面持ちで見詰めている。

彼女達が退場すると、しばらくして、今度は「機内サービス」のアナウンスが流れ出した。

勿論、最初は英語、次いで日本語の順に案内する。

「本日は、当機をご利用頂きまして有り難うございました。本日のホノルルまでの飛行時間は、五時間と四十八分を予定しております。

……

本日の機内サービスをご案内いたします。間もなくお飲物、引き続きまして夕食のサービスを行います。

お飲物にはコーヒー、紅茶、日本茶の温かいお飲物、そしてビール、赤、白のワイン、ウイスキー、その他のカクテル類も用意いたしております。

キャビンクラスのお客様は、アルコール類は有料となっております。ビール、ワイン類は一ドル五十セント、または三百六十円、

……

また、ホノルル到着約一時間半ほど前には、軽い朝食も用意してございます。本日は夜間飛行のため映画の上映はございません」

「あなた、お聞きになった？」

「うん、夕食のことだろう」

「ええ、どうしましょう。観光社から渡されたパンフレットには機内の夕食が書いてなかったものだから、空港内食堂で済ませて来てしまったのに……。あたし、ま

だ全然、おなかが空かないわ」

「それは僕も同じさ。しかし、機内食のサパーはかなりの御馳走だからねえ……。そうなると、あの手でいくより仕方がないかな」

「あの手って？」

「ほら、ヨーロッパへ行った時にも、一、二度やったじゃないか。パラフィン包装のしてあるパンとかケーキとかはバックの中に仕舞って持ち帰って、煮物や生物だけを食べた……」

「ああ、あれ、マーガリンやシュガーまでバッグに入れちゃって……。うん、ちょっとグッド・アイデアじゃないの？　あたしたち、ちょうど、『食事なしコース』ですものね」

日本が戦争に敗れた日、二階堂は二十一歳、堯江は十歳だった。当然、二人は、食べ盛りの最中に、あの悪夢のような飢餓の日々を過ごさなければならなかった。

その後遺症は、この経済の高度成長期の「使い捨て時代」に入ってからも続いていて、二人とも未だに汽車弁の飯は一粒も残せないし、空き箱、包装紙の類は後日のために取って置く。

そのくせ、ほかのことでは結構時流に乗った生活をしていて、例えば外国旅行を楽しんだり、ブランド物を身に着けたり、クラウンのロイヤルサルーンを乗り回したりしているのだが、勿論、二人はその矛盾に気が付かない。

堯江は、難問の回答を見付けた大学生のような浮き浮きとした顔付きになって、前の座席の大木秀彦、山口亜希夫妻の背に声を掛けた。

この両人は、ハワイの教会で挙式をすることになっている。

「お二人さん。ご機嫌はいかが？」

突然声を掛けられて、びっくりして振り返った大木は、

「ああ、二階堂さんの奥さん」

「お式を挙げる前の心境はいかがですの？」

「えっ、いや、ハワイに近ずくにつれて、だんだん緊張してきました」

「後ろから拝見していると、あまりお話しになっていらっしゃらないみたいね」

「えっ、いや、普段のデートの時はもっといろいろと話し合っているんですけど、今日はなぜか話題がなかなか見つからなくて……」

「話題が見つからない、ですって？　亜希さん、あなたも？」

「はい」

山口亜希は面長な顔だちのおとなしそうな女性で、それだけ答えるとちょっと赧くなって俯いた。

空港待合室の自己紹介では、大木と同じ市役所勤務と答えていたので、多分、大木の方から積極的に求愛して

結ばれたカップルなのに違いない、と堯江はみている。
服装も、緑色の細い横線をあしらった半袖のシャツに白いスカートという清楚なもので、むしろ、赤と青の幾何学模様のワンピースを着た堯江の服装の方が若向きである。
二階堂は、まだ話し続けようとする堯江の袖を引いて座席に引き戻した。
「どうしたの？　あなた」
「あんまり、恋人達の間に割り込まない方が良いと思ってね」
「どうして？」
「どうしてって……。まだ分からないの、君は……。あの二人は、黙って座っていても十分に幸せを噛み締めているんだよ」
「……うーん、そうか……。そうね。これは、あたくしとしたことが、とんだお邪魔虫だったのね」
「ねっ、十年前の新婚の頃の気持ちを思い出したろう」
「……ええ」
妻に死なれて独身生活をしていた二階堂と、病身の父母を抱えて婚期を逸した堯江が、先輩の世話で結婚したのは、ちょうど十年前のことだった。
若くはない二人の結婚生活は、けっして平坦な日々ではなかったが、二階堂の誠実さと堯江の明るさが、いつの間にか、互いの愛情を素直に信じ合えるような間柄になり、最近は、もう何十年も連れ添っている仲の良い夫婦の生活そのものになっている。
しかし、人間の欲というものは限りのないもので、そうなればそうなったで、晩婚の者達の持つ共通の哀しい宿命——残された人生が少ないということ——に心を痛めるようになり、加えて、二階堂の健康に陰りが見え始めてきたことに気付いてからは、なお一層、互いに庇い会う熟年夫婦になってきていた。
この旅行も、二階堂の定年退職を記念して企画したことは確かであるが、同時に、二人がどうにか辿り着いた十年目へのゴールイン——最近の流行語で言えば錫婚——を記念した旅行でもあった。
二階堂達は、通路を隔てて座っている浅利啓子と木下良江が、何がおかしいのか笑い転げながら元気な声で話し合っているのを見て、思わず微笑んだ。
大手の商事会社のOLということだが、いわゆる独身貴族で、二人は、ここ数年来、毎年のように外国旅行を楽しんでいるという。
ともに二十一、二歳の、まだ子供っぽさの残る顔付きのお嬢さん達なのだが、なかなか旅慣れているようである。
この二人の女性と大木夫妻、二階堂達が、A旅行社主催の「アロハ・ハワイ七日間・フリーコース」の全メンバーで、往復の航空機、ホテル、オアフ島半日観光だけが一緒で、あとは全く別行動をとることになる。

突然、周囲が賑やかになった。「機内飲物サービス」が始まったらしい。スチュワーデスがアルコール飲料やグラスを積み込んだサービス・ワゴンを押しながら、注文を取って回っている。
アルコールの販売が終わると、今度は無料の飲物のサービスとなる。白のワイシャツに赤い蝶ネクタイ、そして紺色のヴェストに紺色のスカートという制服姿のスチュワーデス達が、「コーヒー、オア、ティー？」と聞きながら配って歩く。
二階堂は紅茶、堯江はコーヒーを受け取った。
「まずは、結婚十周年おめでとう」
「おめでとうございます」
二人はカチンとグラスを合わせて乾杯した。瞬間、さっと十年間の感慨が二人の胸の中を過ぎった。
「しかし、十年なんて、あっという間だね」
「そうですねえ」
「しかし、君には随分苦労をかけた」
「あなたこそ、四十年間、本当にご苦労様でした。それに『学校百年史』の執筆で毎晩遅くまで大変ね」
「うん。それでもね。それは考え方だから……。
運悪く退職間際まで時間外勤務をさせられると思えば癪に障るだろうけれど、運良く学校の百周年の祝賀会を済ませて退職するんだと考えれば、引退の花道が出来たようで悪い気はしない。
それに、僕は社会科が専門だから、執筆は苦にならないしね」
「そうですわね。尤もあなたは、『百年史』が無くても、毎晩遅くまで起きてらっしゃったんだから……」
「それより、残された三か月が大変なんだよ。校長会なんかで同級生達に会うと、必ずこの話が出る。
ここまで何とか無事に勤めて来たのだから、最後の三か月は、一生悔いの残らないような学校経営をして、気持ち良く教育界を去りたいってね……。
ところが、これが意外に落し穴が多いのだそうだ」
「落とし穴？　ホホホホ……。まるで、ファミコン・ゲームみたいじゃない？」
「いや、笑い事じゃないんだ。同級生の阿部君の話によると、なんでもこの五年間で、退職を目前にしながら校長が二人、教頭が二人も亡くなっているという話でね」
「まあ、四人も、ですの？」
「うん。現職だから、葬儀は校葬になったらしいけれど、四十年間も宮仕えの苦労をしてきた挙句、やっと、自由な自分の人生を楽しむことが出来るという寸前での世行きじゃあ、あまりにも哀しすぎるよ」
「本当にねえ……」
二階堂は、一昨年脳溢血で斃れた同級生の羽鳥の顔を

思い浮かべていた。

近くの町の中学校長をしている彼に久々に出会った時、二階堂は、そのあまりにも痩せ衰えた姿にびっくりした。聞けば、高血圧と糖尿病のために医師から減量を勧められ、思い切って体重を二〇キロも落としたのだ、と言う。その努力の甲斐があって、血圧も下がり血糖値も正常値に近付けることが出来たのだが、今度は、原因不明の眩いに毎日苦しめられるようになってしまった。閉口して、校医に相談すると、「減量があまり急激だった為の副作用ですな。当分は、絶対に無理をしてはいけません よ」と強くたしなめられたらしい。

しかし、研究指定校の校長である以上、多少の無理は覚悟で職員の陣頭に立って研究を完成しなければならない立場の彼は、家にいる僅かな時間だけは医師の指示通りの静養を摂ることにして、あとはすべての力を研究の完成に集中した。それが、彼の病状を一層悪化させたようだった。

いつの頃からか、朝礼訓話や職員会議の訓示の最中でも立ち眩みに襲われるようになり、到頭、心身の疲労の蓄積が限界に達したのか、次第に勤務を苦痛に思うようになってきた……。

羽鳥は、二階堂と出会った三か月後にこの世を去った。

葬儀の時、二階堂は、僧侶の読経が終わるまで、なぜか体の震えが止まらなかった。あの時、羽鳥は、「俺は今、早くこの二年間の研究指定校が終わってくれないかって祈るような気持だよ。もし、無事に終わって卒業（退職）出来たら、もう再就職のことなんか考えないで、精一杯家で休養したい……」と呟いていた。その言葉が二階堂の頭にこびり付いて離れないのである。

思えば、羽鳥は、現在の教育行政の歪みからくる犠牲者の一人だったのではなかろうか。それにしても、無事に定年を迎えさせてやりたかった……。

参列した十数名の同級生達は、みな蒼白な顔をしていたが、誰かが、「いよいよ俺達も射程距離に入ったか」と嘆いた時には、思わず互いに顔を見合わせてしまった。

「……」

「あなたも健康に気を付けて、心残りなく退職して頂かなくちゃあ……」

「……」

「どうかなさったの？」

「いや、何でもない。しかし、まだほかにも色々と厄介なことがあるんでね。例えば、校長自身が確りしていても、校内の職員やこども達が問題を起こしたんじゃ何にもならない。

これも後味の悪い引退になってしまうからね……」

「そう言えば、この前にも、新聞に生徒の万引きの記事が載っていましたわね」

「うん。冬休みというのは、生徒たちの交通事故や集団万引きがどうしても一番多く発生する時期なんだ」

「あなたの学校にも、そういう子がいるの？」

「いる。ただ、担任が目を光らせているから、まだ、可能性の段階で押えてあるけれどね。多分、十人はいると思うよ。

そのほか、学校の職員が、暴力教師と判定されて懲戒免職になった事件が一件、酒酔い運転で免職になった事件が一件、学校火災も一件あったというから、頭が痛い話だよ」

「そうねえ。けれど、部下の先生の退職になったことまで、校長先生が責任を負うの？」

「『学校教育法』という法律の中に、『校長は、校務を掌り、所属職員を監督する』という一項があるんだ。だから、監督不行届きという責任になるわけなのさ。ま、訓告程度で済むだろうけれどね。

しかし、学校火災だけは厭だね。あれは、理由はどうあれ、一応、進退伺いを出さなければならないからね」

「進退伺いですって！」

堯江は、残ったコーヒーを一気に飲み干した。

「そうさ、でも殆ど却下されているけどね……。

警察に聞くと、学校火災の原因の立証はとても困難なんだそうだ。あ、そうだ。もっと怖いものがあった。それは、修学旅行、遠足、それに、スキー、スケートのような危険を伴った競技会だよ。これも、校長が学校で執務していたとしても、大きな事故があれば、進退伺いを出さなければならないから情けない話さ」

二階堂は、紅茶を飲もうとしてカップを持ち上げたが、空になっていることに気付いて、顔を顰めた。

「だって、それは引率した先生の責任じゃないの？」

「勿論それはそうだけれどね。でも、校長にも責任があるってことなんだ。つまり、その引率も校長の命令でやらせたのだから命令者にも責任がある、ということになるのさ。

君の母校の女子高の校長先生のこと知ってる？　新聞にも載っていた筈だけど……」

「あの、登山事件の吉村校長先生のこと？」

「そう、その吉村先生」

「あれはひどかったわね。前の日にも担任の先生が行って安全を確認をしているし、コースもこの数年登って何事も無かったコースだったし……。それなのに、突然亜流酸ガスが噴き出して、後ろのほうを歩いていた生徒さんの一人がそれを吸って亡くなった事件でしょう。

それなのに、なぜか学校に残っていた校長先生が責任を負わされた……」

「そうそう。なにしろ吉村校長は人望の厚い人だった

から、陳情に出向いた人が大変な数だったらしいよ。死んだ生徒の親は勿論、PTA、同窓会、それに小、中、高校長会、県内の研究団体の代表が続々と検事のところへ陳情に押しかけたらしい。

僕もその一人だったけれど、その検事さんは『皆さんのお気持ちも、事件の事情もよく分かっているんですが、何しろ人一人が死んでいますのでねえ』の一点張りでね。とうとう罰金十万円の刑事罰だった」

「それでも、無事に定年退職なさったんでしょう？」

「それは当然さ。あれは全くの天災だもの。多少の行政処分は受けただろうけどね……」

「そういう話を聞くと、本当に、後の三か月間は薄氷を踏む思いね……」

「ハハハハ、県内の豪傑校長共が、退職の感傷に溺れて、すっかり弱気になっちゃってるんだ。

その点、僕は恵まれている。『百年史』執筆に追われて、そんな贅沢な感傷に浸っている暇がない」

この時、アナウンスが入り、スチュワーデスが入国カードを配りだした。

「出入国には、二枚のカードの書類が必要でございます。出入国管理局用EDカードは個人につき一枚ずつ記入の必要がございます。また、アメリカ合衆国税関申告用紙はご家族につき一枚必要でございます。これらの用紙の記入方法につきましては、皆様のお手元にございます日本語のクリッパー・マガジンの四十二ページに例が記載されておりますのでご一読下さいませ」

機が揺れ出した。それもかなり揺れる。しばらくすると、下からゴツンゴツンと突き上げるような音がし始めた。ちょうど、巨人が太い棒で旅客機の下から突き上げているような感じで、今にも機体が壊されそうな気がしてきて、何とも心細い。

「あなた、あたし怖いわ！」

「うん、いや、大丈夫だ。少し気流の悪いところに入ったんだ。すぐ元に戻るよ……」

「このまま墜落なんてことはないでしょうね！」

堯江は、真っ青になっている。

「……冗談じゃないよ。君もガイドブックで読んだろう。パンナムは、機内サービスでは日本の航空会社より劣るけれども、事故の少ないことでは世界一だって…。まして、東京―ハワイ間で事故が起きたなんてことは一度も無いそうだ」

二階堂は、幾分強張った顔で、出発直前に読んだパンナム社の宣伝文句を繰り返した。

やっと、アナウンスが入った。

「ただ今乱気流の中を通過しております。しばらくの間揺れて危険でございますので、お席を離れていらっしゃる方は急いでご自分のお席にお戻りになり、シートベルトをお締め下さいませ」

アナウンスが終わると同時に、スチュワーデス達によって窓のカーテンが閉められ、そして、パッと全部の照明が消えた。真っ暗になった室内に、一斉に緑のシートベルトのサインが点くと、思わず、乗客の中に声の無いどよめきが起きた。

室内にはしばらく重苦しい沈黙が続いていたが、そのうち、旅慣れた人々であろう、机上灯をあちこちで点け出したので、二階堂も初めて気が付いて、慌てて真似て点灯した。

その薄明かりの中で何気なく前の席を見ると、大木の胸に首を凭せ掛けている亜希の姿が見えた。その肩には大木の腕が力強く巻かれている。

「ほら、堯江……。ほら、前をご覧」

「えっ、何を？」

小机の上に突伏して揺れを堪えていた堯江は、声を掛けられて慌てて顔を起こした。そして、目の前に二人の姿を認めると、思わず微笑んだ。

「成程ねえ。あなたのおっしゃったことは、このことだったのね」

「そうさ。いかにも愛し合っている恋人同士って感じじゃないか。強いて言えば、声の要らないコミュニケーションというところかな」

「若い人って良いわねえ……」

「……うん」

堯江は、今の笑いで気が静まったのか、幾分生気を取り戻した顔で、今度は左側の二人を眺めた。

「あなた、それじゃ、そっちの方は？」

二階堂が堯江の指さした方を見ると、何と、この可愛い二人のギャル達はスヤスヤと眠り込んでいる。

「どうも、この二人には、恋人はいないようだね」

「ホホホホ……」

「ハハハハ……」

機体の揺れが静まってくると、再び電気が点いた。サインもいつの間にか消えている。

ホッとしてベルトを外し、クリッパー・マガジンを眺めていると、ブーンと良い香りが漂ってきて、スチュワーデス達の動きが激しくなってきた。夕食を載せたサービス・ワゴンがあちらこちらに見える。

「十時二十分か……」

二階堂は、日本時間のままにしてある腕時計を見て呟いた。空港内食堂「はり半」で特別定食を食べたのが八時だったから、まだ二時間半きり経っていない。

「あ、そうだ。あなた、そのカーデガン脱いで下さらない」

「どうして？」

「だって、あなたは、食事の時必ず何かをこぼすんですもの……。その白いカーデガンを汚されちゃあ堪らな

いわ。ホノルルの夜の散歩の時、もし涼しい日だったら、それを着なければならないんですから……」

堯江は、二階堂にカーデガンを脱がせると、サッサと自分のショルダーバッグの中へ仕舞い込んだ。

二階堂は、旅行に備えて、生まれて初めて上下の差し歯をした。これがなかなか口に馴染まなくて、まだ、パピプペポの発音が十分に出来ない。また、口腔の中にプラスチック製の口蓋が入っている為に、食物の味も咀嚼の状態も、感覚として十分に捉えることが出来ない。

その為に、ついつい不覚にも食事中にワイシャツなどを汚してしまうことがある。それを、堯江は恐れているのである。

四角いトレーに詰められた夕食のセットはなかなか豪華な献立で、見るからに二階堂達の食欲をそそった。二階堂は、柔らかそうなステーキにナイフを入れながら、堯江に向かって、

「まあ、食べられるだけ、食べてみるか」

「そうね。頂いてみましょう……」

恐る恐る食べ始めたが、たちまち、感嘆の声が上がった。

「……あ、これは旨いや。いつも食べに行く山波ホテルのステーキとは格段の差だ」

「これ、帝国ホテル製なの？」

「うーん。それとも、パンナム系のホテルかな」

料理は、この外にフライ、サラダ、パイ、寿司、パン、コーヒーなどが付いている。二人は上機嫌になって、食べ且つしゃべり続けた。

「ところで、堯江。うちのコロちゃんやキョロス君達のホテル代はいくら位掛かるの？」

「え、ああ、ペット・クリニックのことね。一匹が一日千五百円よ」

「えっ、千五百円！……。それじゃあ、うちで預けたのは、犬二匹、猫三匹だから、一日七千五百円、七日間で五万二千五百円ということか？　うーん、随分高い預かり賃になったなあ」

「その他に、虫下しが五百円ずつ……」

「……」

「だって、あなたに相談したら、良いっておっしゃったのよ……。食事の世話から排便の世話までして貰うんだから、仕方がないじゃないの」

「そりゃあそうだけど……」

二階堂家では、ベルシャ猫三匹とブルドッグ一匹、芝犬一匹を飼っている。

二人の間には子供がいないことと、二階堂の出勤後は堯江が一人になってしまうために、番犬を兼ねてブルドッグを一匹飼い出したのが始まりで、それ以後も、ペット・ショップなどで可愛い子犬や子猫を見るとつい買ってしまい、いつの間にかこんなに増えてしまった。勿論、二人とも大の動物好きなのである。

「それじゃあ、ついでに、洗って貰らえば良かったのに……」

「とんでもない。そんなことしたら、忽ち三、四千円取られちゃう……」

「ええっ、そんなに高いのか？」

「そうよ。だから、いつも私が洗ってやってるんじゃないの。五匹も洗うなんて、大変なんだから……」

「あ、それで、君の手や顔に時々引っ掻き傷が出来ているんだな」

「そうよ、どれも厭がって暴れるのよ」

「いやぁ、きみの顔やのどに引っ掻き傷が付いていると、ひとが、夫婦喧嘩をやったんじゃないかって気を回すと困ると思って、ヒヤヒヤしてるんだ」

「馬鹿馬鹿しい。誰がそんなこと思うものですか」

二階堂も、死んだ羽鳥同様、いわゆる〝哀しい中間管理職〟だから、勤務が厳しい。帰宅が遅くなるのは当然として、土曜日の午後は勿論、稀には日曜日の出勤もある。

夏休みになっても殆ど休暇は取れないし、冬休みは暮れから正月にかけての六日間きり休めず、春休みに至っては、職員、生徒が休んでいても、校長は旧年度の締め括りと新年度の計画で毎日忙しい執務に追い回される。

自然、家事一切は堯江の双肩に懸かってくる。

ふと気がつくと、いつの間にか、堯江がパンをちぎっては口に運んでいる。

「あれ、パンも食べてるの？」

「あ、あいしいパンよ。あなた」

「さっきの話じゃ、持って帰ろうって……」

「さっきはさっき、今は今、よ。もし食べ切れなかったら持って帰ろうってことだったでしょう。出来れば、おなかの中に入れちゃう方が、鞄が軽くて楽よ」

言いながらも、せっせと口を動かしている。よく見ると、トレーの上にはパイの半分とコーヒーきり残っていない。二階堂は、改めて十一歳の年齢の開きを感じて、何となく溜息をついた。

思わず浅利、山口両嬢の方を見ると、いつの間に目を覚ましたのか、相変わらず楽しそうにコーヒーを飲みながら談笑している。机の上は、勿論、奇麗に片付けられている。

「君の食欲には驚いたなあ。夕食を食べて二時間半きり経たないっていうのに……」

「あなただって、結局は全部召し上がったんだから、いいじゃありませんか」

「いや、スピードの問題だよ。スピードの……」

「スピードなんて、食事に関係無いでしょう」

「いや……」

二階堂は、堯江の食欲に嫉妬しているのだった。年の違う夫婦でも、仲良く十年も暮らしていると、互いに歩み寄ってラポール（好ましい人間関係）を図るようになる。つまり、二階堂は年よりも若返った考え方を持つようになり、堯江は二階堂に近ずいた人生観を持つようになった。

しかし、体力の差はそう簡単には縮まらないから、時々、思いがけない事で年齢差を感じて、二階堂を落胆させることがある。

浅利啓子や木下良江の食欲には微笑んでいた二階堂が、妻の食欲に嫉妬したのは、堯江一人が浅利、木下のお嬢さん達のグループに入ってしまって、自分だけが取り残されてしまったような心細さを覚えたからだった。

「ジュースでも飲みたい気持ちね」

「ジュース？　そうだね。頼んでみるか」

「頼んでみるかって、あなた、英語は大丈夫なの？」

「まあ、なんとかなるさ。こういう所では……」

「あのション城やレマン湖の二の舞は厭ですよ。あたしまで恥をかくことになっちゃいますからね」

「何を言う……。あれは、たまたまそうなっただけじゃないか」

二階堂も堯江も、〝英語は敵性国家の言葉〟の時代に育った。野球の、「ストライク」「ボール」を、「いい球」「悪い球」と改称した時代である。

当然、二人とも、英文解釈だけは少し分かる程度で、いわゆるヒアリングやスピーキングは殆ど出来ない。また今更、習おうという意欲も沸かない。

それなのにこの人ったら、と堯江は思う。

新婚旅行先のジュネーブで、突然、二階堂は、ション城見物に連れて行ってやろうと言い出した。何でも以前一度来たことがあるから、その記憶を辿って行けば訳は無いと言う。

そして、ジュネーブのコルナビン駅から列車に乗り込んだのだが、コペ～フネ～セリニ～モルガ～ローザンヌ～ベベと進んで行くうちに、堯江は窓外の景色の美しさに思わず嘆声を挙げた。右手には、レマン湖畔に並んだ窓際に花を飾った瀟洒な建物や、緑の中に見え隠れする小径がいかにもスイスらしい風情を見せているし、左手には、山の斜面に広がる葡萄畑の中に赤い農家の屋根が点在して、まるでグリム童話の世界のような景色が展開している。堯江は、スイスの列車の旅が出来たことに改めて幸福感を噛み締めていたのだが、それも束の間で、何と、この列車は肝心なション駅をあっと言う間に通過してしまった。

駅から階段で降りる湖岸には、バイロンの「ションの囚人」の詩で有名なション城がくっきりと姿を見せているというのに、列車は無情にも驀進し続けて行く。

さすがにびっくりした二階堂は、ちょうど巡回して来た車掌を捉まえて切符を見せ、「キャスル・ション！」と言った。

幸い、スイスの車掌はサービス感覚では世界随一だから、切符とその一言で、この東洋人がション城のあるChillon とイタリア国境に近いのionの発音を間違えて切符を買い急行に乗ってしまったことを一瞬にして推察した。彼は笑顔で、次のベェで下車して、一時間後に来るジュネーブ行きの各駅停車の列車に乗るように、親切にも紙に絵図まで書いて教えてくれた。

放々の態で下車してみると、ベェは予想以上に小さな駅だった。閑散とした待合室には、黙々と新聞を読んでいる老人が一人いるだけで、昼休みのせいか、駅員の姿も疎らだった。

駅前からは、いやに長い舗装道路が一本伸びていたが、ここにも人っ子一人姿を見せず、戸外から聞こえてくる賑やかな蝉の声が妙に寂しさを募らせる。

とにかく、初めて外国の土を踏んだ堯江は、心細くて仕方が無かった。こうなった以上、無事に日本へ帰るためには、頼り甲斐が有るのか無いのか分からないが、この新婚の夫の側を一刻も離れないようにしなければならない、と心を決めた。

そして、駅の周囲を物珍しそうに眺めて歩く二階堂の腕に取り縋って、熱い日差しの中を仲良く散歩して回ることとなった。

今でもハッキリ覚えているのは、二階堂が駅前の商店で真っ赤な色をしたオレンジ。ジュースの瓶を買って、一本を堯江に渡しながら、

「旅はするものだねえ。僕は、今の今までオレンジ・ジュースは黄色いものとばかり思っていた」

と言いながら、屈託無さそうに笑った夫の顔だった。

そしてそれを、呆気に取られて眺めている自分の姿だった。

次の日は、「死の行進」をさせられた。

ホテルを出て、――ホテルはジュネーブのコルナビン駅の近くにあったので――時計屋街を冷かして歩き、モンブラン橋を渡ってイギリス公園に出た。

そこを散策していたら、また突然、二階堂が、「レマン湖の観光船に乗って見よう」と言い出した。反対する理由もないので、堯江も付いて行ったのが不運だった。

湖畔まで来てみると、驚いたことに乗船場が二つあって、どちらがどうなのか皆目分からない。大きな看板に遊覧船の回遊図と時刻表は出ているが、説明は全部フランス語らしいので、尋ねるわけにもいかない。

談笑しながら並んでいる客の話している言葉もフランス語なので読むことが出来ない。

スイスにはいわゆるスイス語と呼ばれる国語は無い。国の発生の事情で、中心部にある首都ベルンやツーリッヒから西端のジュネーブあたりまでは主としてフランス語が国語である。

二階堂は、意を決して、早く出帆する方の船を選んだ。船は、湖上遊覧船とは言っても、スイスとフランスの二つの国の沿岸を巡る船――レマン湖の中央に国境線がある――だから、なかなかの大型船である。

船の甲板から見る展望はなかなか素晴らしかった。特に山間に開けたジュネーブの街並みは実に美しい。また、左手の森の奥深くにILO欧州本部や赤十字国際委員会らしい建物がチラチラと見え隠れするのも楽しい眺めである。

前方には、アルプスの山々の白い頂きが幾分煙って連なっていて、その中でも頭ひとつ抜きん出ているのがモンブランだ、と二階堂は言う。

フランス領側には農漁村が葡萄畑の間に散在していて、若い頃からパリに憧れていた堯江には、まるでフランス文学の世界にでも浸っているようなロマンチックな気分になってくる。ここまでは良かった。

車掌が切符に鋏を入れに来て、この船では使えないと言い、二階堂は切符売り場で買ったのだから使えない筈はないと言い返し、押し問答になった。

しかし、結局は、身長が一メートル七十センチ切り無い二階堂は、二メートル余りの三人の車掌に囲まれて、いとも紳士的に昇降デッキに向かうことになった。

船着き場の桟橋の上に立ち段々と小さくなって行く船影を見送って、二人は陸地に向かった。

この先は小さな公園になっていて、その前には小住宅が並んでいる。

「のどかだなあ。これが本当のスイスの姿だねえ」

二階堂は、感に堪えないような風情で呟くと、深々と空気を吸った。ベェの時と同じ態度である。

〝この人は船から降ろされて悔しくないのかしら〟と堯江は思ったが、新婚早々口答えもどうかと考えて黙って頷いた。もっとも、この旅行に出る数日前までは、「あなた」の言葉がどうしても出なくて、「先生」と呼んでいた頃だから仕方のないことなのだが……。

しかし、二階堂の言葉も満更嘘ではなかった。

小さな公園には色とりどりの花が咲き乱れ、穏やかな日差しの下では放し飼いの鶏がのんびりと餌を突いている。目前のレマン湖には名物の白鳥が静かに泳いでいるし、対岸のやや霞んだ村々や山々はフランス領であり、正面のやや左手にある村がおいしい水で知られたエビアンだ、と二階堂は言った。

公園横の小道を登り切ると、そこには片側三車線はありそうな広い国道が走っていた。そして、ここには、いかにも明るくて暑い夏が待ち受けていた。

幸い、幾らも待たずにローザンヌ駅行きのバスが来たので、二人は慌てて乗り込んだ。

バスは、二回程乗客を降ろしただけで走り続ける。間もなく前方に何本ものレールの走る操車場が見えて来ると、二階堂は、何を思ったのか、堯江の腕を引っ張るようにして下車した。

そして、これから「死の行進」が始まった。

実際の距離は二、三キロだったのかも知れないが、この時は五キロにも六キロにも感じられた。

何しろ暑い。日差しの強さもさることながら、三車線道路の照り返しが強烈であった。拭いても拭いても汗が滴り落ちる。仕舞には、顔が日に焼けて、ヒリヒリと痛くなってくる。それでも尚、汗を拭き続けなければならない。お洒落用のハンカチーフだから、直ぐ汗が溜まって、何回も何回も立ち止まっては汗を絞り出さなくてはならない。そのうちに足に豆ができて正常な歩き方が出来なくなった。愚痴を言って立ち止まるが、休む日陰が全く無い。せめて、麦藁帽子か新しいハンカチーフを買い求めたいと、あちこちに目を配るが、商店らしい建物が一軒も見当たらない。歩道側にも向う側にも厳めしい大理石造りの建物ばかりが続いている。恐らく官公庁か銀行か、ことによると、このローザンヌはジュネーブに次いで国際会議が数多く開かれる都市だから、その関係の建物かも知れない。それがまた、二人に妙な威圧感を与えて、一層暑さを助長するのである。

まさに精も根も尽き果てて、ローザンヌ駅に辿り着いた時は、堯江は思わず涙をこぼした。生きていられたという感涙である。

後で二階堂が語ったところによれば、操車場を見て、彼は、日本の大宮駅を思い出したらしい。

操車場ならば駅に近い。歩いても二、三十分だろう。ゆっくりと国際都市ローザンヌの市街を見せてやれる。暑くなったら木陰に入れば良いし、喉が渇いたらジュースでも買って飲めば良い。もし、数年前に来た中華料理店が見つかったら案内してやっても良い、などと考えて下車したら、これが全部裏目に出て、ジュネーブ～ニオン～ローザンヌ間を結ぶバイパスを放浪する羽目になってしまったのだと言う。

始めは猛烈に腹を立てていた堯江も、この話で、初めて二階堂の心の中を垣間見たような気持ちがした。少なくも、ヨーロッパが初めての新妻に、良い思い出を残してやりたいと懸命に努力したことは認めて良いと思った。

そう言えば、あの「死の行進」の時も、堯江の手荷物は二階堂が終始持ち続けた。乗物に乗った時は必ず堯江を窓際に座らせてくれたし、歩道を歩く時にはいつも二階堂はさりげなく車道側を歩いていた。

思えば、不器用な戦中派の愛情表現であった。

「フフフフ、あの時はお互いに若かったわ……」

「えっ、今何か言ったか？」
「いいえ、何も……」
堯江が笑いを堪えた時、スチュワーデスがやって来た。
「イクスキューズ・ミイ、オレンジ・ジュース、プリーズ」
「オーケー」
「それから、マ、マイ・ワイフ、えーと……」
「あたしなら、トマト・ジュース」
「オーケー、ゴシュジンワ、オレンジジュース、オクサマワ、トマトジュースネ。ドモ、アリガトゴザマシタ」
「ええっ、日本語が……」
スチュワーデスは、片目をつぶってウインクをすると、笑顔で立ち去った。
「でも、良かったじゃないの。無事に注文出来て…」
堯江は、憮然としている二階堂を慰めた。
「確かに、あの観光社は、〝日本語が話せるスチュワーデスは二人きりいない〟と言っていたのに……」
「それは、上手に話せる人が二人きりいないって言う意味よ」
「……」
「あなたが片言英語で話したがるように、あのスチュワーデスさんも話したかったのよ。きっと……」
「……」

いつの間にか、照明が消されて、周囲が静かになっている。机上灯もポツンポツンと消えて、今は二階堂の机上の外には一つか二つきり点いていない。堯江も、大木夫妻も、二人のお嬢さん達も、支給された枕に頭を付け、毛布を膝の上に掛けて、ぐっすり寝込んでいる。
二階堂は、長年の習慣で、まだこの時間では寝付けないので、準備してきたアガサ・クリステイの「ナイルに死す」を読み始めた。クリステイ・ファンの彼は、旅行の時は必ず彼女の単行本を持って出る。
ポアロ探偵が登場する辺りから、なぜか、活字から目が離れて、時差のことが気になり出した。もう少しで日付変更線を越える。十九時間の時差があるから、その時点で前日の午前七時十分に戻ってしまう。日付変更線を初めて経験する二階堂は、つくづく不思議だと思う。
機体がまた揺れ出した。クリステイの本が二階堂の足の上に落ちた。
しかし、二階堂は、もう何も気付かなかった。

まかり行かむ
——神職連合——

大和禎人

きょうは大安吉日、神々と安んじてお付き合いを願わねばならない。まさに（まかり行かむ）日である。
神職真壁矩恒は朝から万端の準備に忙しく、あれこれの積み荷をするため余念なく働いていた。
四輪駆動のワゴン車が彼の心強い味方である。運転歴もほどほどにもう熟練の域に達している。寺方の坊さまが回向にマイカーを駆る時代だから、神職が車を運転したからといって不思議ではないが、こちらはワゴン車であるところが少々違う。万端の積み荷があって坊さまのようには身軽にはいかないのだ。
神職装束一式、白足袋に木沓、草履が添えられる。
神鏡（神霊として祭る八咫鏡）
供物、神酒。
清め用の切麻、荒塩。
鍬、スコップ。
鍬入れ用の川砂を入れたバケツ。
組み立て祭壇。
篠竹四方分、その日の件数分を車の屋根に。
マイクロカセット、越天楽・五常楽の雅楽テープ。
ざっとこんなふうの積み荷である。とりわけ大安吉日となれば幾組もの行事の重なりがあるから、相当な分量になる。供物まで一切施主の方では用意しなくとも済む方寸だが、プラスチックの鯛の中身は上白砂糖であるなど笑い種で、神酒二本対にしたものとともに行事終了後は撤饌し、頂戴する初穂料の見返りに施主に提供し喜ばれる趣向になっている
新築、改築、増築の地鎮祭。
解体、鑿井などの縁起。
世はさまざまそれぞれに応じて（鎮め）の神事が行なわれるのである。
今朝は四時起き、そっと寝床をぬけ出た。

「あら、もうなの、早いのねぇ」
「うむ、道の空いているうちにと思えばしかたないさね」
「それはそうだけど、罪なお人だよ、タフなのね、あなたという人は」
しどけない胸をかき合わせ、そう言いながらもサチ女も床を離れるなりゆきはいつもの通りだ。神道に奉仕する身にとって、後朝の別れという風情には悖りがあるが、この妻女の姿態にはなにとはなく、それを濃厚に感じさせるものがある。だが、矩恒としてみればときに閉口しながら、むしろそこが気に入っているというフシのものだ。
「ぬしのかみさん色っぽいなや」
と言われる。
「こどもがいないからだろう」
と言い返しながら、かれの生業に奮迅する根底にはそうした妻女を愛しとする人情がたしかに潜んでいることを否定できない。
左入町というインターからC高速道に入る。都心へ入ろうとする車で早朝からの渋滞はいつものことだから、スタートダッシュに遅れをとると、取り返しがつかなくなる。だが、幸いきょうは順調のようだ。音量を絞って軽快なジャズ音楽をテープで流している。口笛でも吹きたくなる気分だ。アクセルをいっぱい踏み込み、しかし警告チャイムが鳴ればスピードを落し、また静かにペタルを踏み込むといった安全運転でひた走っている。
つい最近車内電話機も装備を実現している。
「ハロー、サチ、ただいま高速、進路渋滞無し、ただちにI区へ直行、どうぞ」
「了解、了解、どうぞ」
もちろん、高速へ上がってからは渋滞徐行でもないかぎり走行中の通話は危険である。料金所通過までの順番待ちの間に素早い連絡の電話だ。
「仕事上の電話はいつものようにただちに通報を入れておくれ、ハイ、どうぞ」
「了解、了解」
運転孤独を慰むラブコールのようで噴飯ものだが、基本料金の高い電話を備えるに値する予期以上の商売繁盛の実体を踏まえ得意である。ポケットベルとは比べものにならない便利さがあるのだ。やや重いのが難点だが、車を離れる時も手離さいで携帯する。
(見なさい、神職連合は成功だったではないか)
(あんたは山師だなんぞと言ってた連中だってまんざらではないはずだからな)
まずは企業共同体といったあんばいの連合は成功だった。唱導者のかれは連合成立後、当然理事長格の座にいる。だから車内電話も必要経費で備えられていたが、いささかもうしろ指を指される筋合いではない。昂然胸を張って活用しているまでのことだ。
(お寺さんだって近ごろは大川屋なんぞという墓石屋連中のそそのかしの手にのって、霊園分譲がアチラコチラといい加減お盛んではないか、近ごろ都霊園では使用権の有限を検討中とかのニュースがどう響くか、それはそれで坊さまの算盤勘定は相当なものだ、永代使用料一区画三百万以上、別に灯明料は一律十万円、おしなべてこれが相場、そのうえ檀家には一口五万以上の寄付まで募る、ガッポ、ガッポ儲かりますな、あちらさんが弾かれる算盤なら、こちらだって黙っちゃいられませんょ、ねぇ、そうでしょう)
(またの話、水子供養なんぞも大はやりで、秩父の奥第何番かの札所に近く、盛大なその例を見ましたな、満山寄進の赤いヨダレ掛けの水子地像さんで埋め尽くされ、それはそれは花畑のような眺めでありましたわい、臆面もなくこの霊場を拓いた人物の立像まであって、なんともこの世の罪深さを覗く思いでしたな)
(またまたのお話、ありふれているものに幼稚園経営というのもありましたな、「南無大師遍上金剛」と幼なが日々手を合わせる敬虔な精神教育が売りものでありますな、神社経営の幼稚園なんぞ、残念ながらほとんど聞いたことがありませぬな)
(またまた、またのお話、厄除、縁結び、どうやら当方の領域まで侵す勢い、いよいよ捨ててはおかれませぬ、さらには大仏建立というのもありましたな、名づけて「東京大仏」、名所を作り上げた坊さまもありましたな、もとはと言えば天明飢饉の餓死者供養塔のある由緒の寺ぐらいで知られていた寺でありましたが、郊外移転を機にこの建立で大発展をしたものでありました、坊さま商法の大成功をおさめた例でありましたろう、飢饉の供養塔では食ってはいけませんものな、これに類似のアイデアでやたら大きなある種の観音像建立を呼びかけ、坊さま勧進部隊を組織し遊説させるという、坊さまを巧みにあやつる業者も出現する始末まで、これはテレビのスペシャル番組で放映されたことでしたが、いよいよもってびっくりしてばかりはいられないことでありましたな)
遠い明治の世に廃仏毀釈というできごとがあって、神道国教政策の煽りをうけ、神仏混淆を潔癖に見直そうとてか、釈尊の仏体をやたらにうち毀すという暴挙に走る事実があった。どうやら無知、無辜が踊らされたというのが真相だが、宗教界の醜いなんともやりきれない相克としてわが矩恒はうけとめている。だが、それもことによれば罪なき無辜そのものの鬱屈した血の暴発であったやも知れぬ。
明治のご維新は国民一般にとって言わば「天上の大風」で、迷惑をこうむりさんざんの目に会った。その反発と

して、やけくそな気持ちが手伝って暴挙を導いたのではなかったか。ことに隠岐では島中ことごとくの寺院を毀ったというから凄じい。こうした（神仏の明治維新）は他にも佐渡、富山、信州松本、美濃苗木などで徹底して寺院の廃止、併合が行なわれた。これに対し真宗の地盤である三河などでは護法の一揆さへ起きた。寺領の上地、ともなう僧侶の還俗など仏教に大打撃を与え、日本の文化財に大きな損失を与えたのである。まことに悲しむべき出来事だった。……とこれは神職としての真壁矩恒の抱く認識である。

ところで、それにひきかえ矩恒の住む地域に残る古地図などにはなんの不思議もなく寺社が同じ垣の内に仲良く存在する姿を発見する。それは図絵風にまことにのどけき様子を伝え目に映るものだ。しかし、こんな例はなにも珍しいものではない。津々浦々に見かけたもので、ごく自然なありようであった。そういう時代があった事実をむしろ矩恒は貴重なものとし、やるかたない憤懣を胸にする神職の端くれだった。

「お主、ココの問題だよ、ココの、しっかりせんかいな」

了円坊主はそう言って笑い飛ばした。

「わたしはな、葬儀社と提携しとるよ、繁盛しとるがの、はやく言ってしまえば出前坊主さね、電話一本でどこへでも出張っていくよ、なにね、宗旨は問わないのさ、適当に経ぐらい読むさ」

「真言も曹洞もなしでかい」

「野暮言うじゃない、こちとら同じ坊主だぁな、フシ回しをかえるのさ、引導が必要ならそれも適当になにこの節だぁな、わかりゃしねぇのさ、かしこまって、シビレ切らして頭の上を素通りさ」

「だが、戒名はどうする、宗派によって違いがあるのじゃないか」

「それも心配しっこなしさ、こちとらの出番はあくまでもエキストラなんさ、地方に菩提寺があって、埋葬はいずれそちらへということなら、戒名はアチラさんの寺から届けられる、その紙切れから位牌にあらためて写すだけのことさね、もちろん戒名料はアチラさんのフトコロだがね」

「……」

「都会なのよ、べつだん菩提の寺が近くでなければ、ないからこその成り行きさ、葬式というセレモニーが無事にすみさへすりゃぁいいのよ」

詮ずるところそんなものかもしれない。

「ビジネスって言うわけか……」

「それそれ、ビジネス、ビジネスだぁね、世の中万事ビジネス、それでいいのじゃないかな」

矩恒はこの男を憎いと思った。僧衣をまとった商売人

がここにいる。だが、そのかれは幼な友達だった。

この高田了円は有名な南都薬師寺の高田好胤に紛らわしい名前であり、法名であるが、かれは破れ寺の次男坊から同じ町村内の少しはましな寺へ入夫し、副住職を名乗っている。義父の住職は卒中に倒れてから不自の身で、実権はかれが手中におさめ、手腕をふるっている。同じ高田姓にあやかりたくも、金堂、東塔を復興した薬師寺さんの好胤師の足下にはもちろん遠く及ばない。

ここで矩恒の脳裏を白黒の映像がよぎる。

「いま通過する電車は近鉄、野球のいちばん弱いパールズ」

どっと、修学旅行生のなかに笑声の沸き起こるのを計算に入れた巧みな説明で、東搭下で仏足跡を説明し、五重の塔の心柱の礎石の水溜りに投影する西塔の九輪、水煙を指しては、

「きみたち、芸術写真を撮るなら、この水鏡を撮りたまえ、傑作疑いなし」

といった好胤師若き日、滔々の名調子だ。

矩恒も了円もともに中学生だった。口を開けっ放しにして聞き入っていた仲間だ。

（こうなくては、まさにこうなくてはならぬ）

社家と仏門の違いはあっても、それぞれに共通する将来経営に対する漠然たる思いをもって聞き入っていたものだ。目前の了円はそれから三十年後の姿だ。

かれの言い分はすべていま風に割り切った考え方かもしれない。矩恒は唖然としてその顔を見ていた。たがいに小学校を国民学校と言った時代の同級生だったから、年令のほどもわかろう。あの鼻垂れが、と思うと不思議な気持ちである。いつも廊下に立たされることの多かったかれである。いまこれほどの賢しらへの成長は思いもかけぬことだった。寺門のありようをまざまざと思い知らされる出会いだった。

矩恒の「神職連合」への発想はこのときに芽生えた。

（そうだ、ボヤボヤはしてはおれん）

初詣、宮参り、七五三に頼っていたのでは神社は成り立たない、かつての国幣、官幣、そして大社から小社まで存在した手厚い神道保護は昔がたりである。それらの文字をセメントで埋めた巨大な石柱など、それも立派な御影石なぞで、大きければ大きいほど哀れを止める、そういう時代に矩恒は生れあわせた。その運命に順応することがいまこそ大事だという思いが湧き上ってきた。

「神明さん、山王さん、氷川さん、諏訪さん、それにひきかえうちは俗っぽい稲荷さんだけど、呼びかけなさいな、組合をつくるのよ」

「組合だって？」

「そうですよ、組合ですよ、単独ではダメ、力になりませんよ」

「組合はいやだな、社家は労働者とは違う」
「じゃ、はやりの連合、化けても中身は同じだけど、働きかけの方はあたしだって手伝ってあげる」
「で、それはいいとして、なにをどうするのかい」
「きまっているじゃないの、あんたの話の丁円さんの上をいくの、ヒントを頂きってところ」
「ヒントって、それはどういう……」
「じれったいお人ね、出前神主ですよ、出前でドンドンどこへでも出かけて行くんですよ」
「ドンドンねぇ、といったって丁円のところのように葬祭があるわけじゃなし……」
「それはそう、初詣、宮参り、七五三、それにあとは結婚式だけど、これはバッチリ式場特約があって割り込みの余地なし、おまけに神式の葬儀なんぞはめったなことにはないでしょう」
「だから、どうする」
「だから、組合のいやはどうでもいいとして、いよいよ出前の連合結成ですよ、それしか手がないものね」
「連合して、あとはどうする」
「建築会社や不動産会社と提携するのよ」
「……」
「わかんないの、よろず鎮めの行事をまわしてもらうのよ、建築ブームに乗っかるんですよ、地上げ屋さんのようなキタナイ商売と違って、キレイなもんじゃありませんか」
「それいいとして、コネがいるなぁ」
「コネならわたしがつけます、できるだけ大手がいいわね、とまらば大木ですよ、一部上場の中からマークして条件の良いところをえらぶの、選択はこちらでするんですよ」
「あんたはコワイ人だよ」
考えて見れば（神仏の明治維新）は遠い昔のこと、戦後の宗教界はアレヨと思うばかりの逆風が吹き荒れた。神道にはことさら酷な事情が襲い、息を潜めるような時代が訪れていた。日本国憲法の大きな柱の一つは「信教の自由」ということであって、敗戦国日本はそれまでの神道国教政策を占領国の意のまま、余儀ない逼息の状態に追いやられたと言っていい。政府閣僚の「靖国参拝」が年々の話題になるなど良い例だ。つい近ごろも、新宿副都心に建設中の都庁舎で棟上げ行事があったばかりだが、丹下健三さん設計のこの近代建築でも修祓が行なわれ、最後の鉄骨がクレーンで吊り上げられ、鋲打ちに際して神職の姿が大写しにテレビ画面に登場していた。しかし、都知事以下役所側はこれを宗教行事として、だれも参加していないという奇妙な事実が見られたのだ。矩恒にとってまさに理解に苦しむ、むしろ滑稽ともいうべき事態に思われたことだ。
（べらぼうな話じゃないか、なぜ、それならこの行事を

施主である側として認めたのか）
という疑問を避けられない。
矩恒の胸のうちにはそうしたことへのやるかたない憤懣の雲行きが共存している。神道者の家に生れたものとして奮い立たねばならない、そうした思いは久しく温められ、連合を実現してどうやら軌道に乗ることのできたいまは、ますます強固になるばかりだ。
（寺方の下風に甘んじることはない）
そういう思いも一方では強く持ってきた。
「あんたも男なら、やって見んしゃい」
もちろん、サチ女の九州訛りのこんな激励がたえずかれの後押しをしてきた。社家に縁あって嫁いできたかの女は「火の国」の生れだった。神々の発祥にあやかる縁起を父親が考えたあげくの縁組なのだ。

「真壁さん、まず運転免許をとることだね、機動力なしにはこの節商売にならんですよ、まずは教習所通いから始めるんですな」
K建設の営業課長から言われた。
「一念発起ですなこの際は、専務の紹介ですから仕事はまわしますが、それが条件になりますな」
「いまから、免許が取れるでしょうか」
「取れますって、女の子だってスイスイ乗っている時代ですよ」

この会社へのコネはサチが見つけてきた。つてを頼り、またそのつてから手繰り寄せたものだった。
「これを逃してはドコだってこれ以上の話はありませんょ、しっかりして下さいな」
そんなしだいで教習所通いが当座の仕事になり、不器用な質だが、どうやら免許も取れ仕事も順調で、かの面憎いライバル丁円の鼻をあかせるところまで自信をもてるようになっていた。
「よかったじゃない！やってみて、この間あの坊さまにひょっこり出会ったら、言ってたわよ、なにかしらん、おめでとうさんだって」
「言うよなぁ、やっこさん、面白くないあんばいなんだろうな」
「そりゃあ、そうよ、アチラさん霊園開発なんて切り売りじゃ底が知れてますもん、墓石屋に甘い汁を吸われておしまいですよ、お経の出前だってホトケさましだい、だいいち、他人さまの死ぬのを待っているなんて、おおいやだ」

夫婦ともに、いまは仕事に誇りをもつようになっている。出前仕事はいまのところ際限なく回してもらっている。次第に信用を得ているお蔭だ。かれがつかんだ建設会社は大手で、木質系住宅という新しい工法で伸びてきた会社だ。大阪に本社を置き、関東方面への進出は目い

まだ浅いのだが、それだけに新興の意気に燃え目覚ましい発展を遂げてきた、経常益七十億台という申し分ない大会社だった。

連合のマネージメントもなんとか円滑に行なわれている。受注の窓口はかれを一手とし、配分が行なわれる仕組みだが、カレンダーに書き込まれる氏名の大方はいまのところかれ自身が多い。というのも兼業して役場や農協、地元信用金庫といったところへ勤める仲間が多くて、さしあたり割り当てスケジュールはかれに過当で無理なものになりがちな実情がある。だが、それもおいおいに改善されるはずだった。どうしても吉日に集中する件数をコナすためにはやはり連合の必要性があり、仲間に休暇をとらせる無理もあるが、やがてはこの仕事が理解されると信じているのだ。

かれだけがこれまで長く勤めていた警察署の中にある交通安全協会の嘱託の職を思い切って辞め、自分のところ、つまり稲荷神社の社務所に連合事務局を置き、専任という立場にいる。

本腰で職につくには社家という殻をみな背負った宿命から、いわゆる二足のわらじを免れず、また、雇用するほうでも信をおいてくれない、中途半端に扱われる傾向を承知でも、うかつには職をなげうてないという悩みを大方がまだ抱えている。いちはやく、かれが職を離れる冒険をあえてしたのはやはりサチの励ましによるのであった。あげくかれを専務という立場に立たせたのだ。夫唱婦随でなくあいもかわらず婦唱夫随の傾きを免れない結果、そうなったものだ。

「あんたは社長ですよ、貫禄をおもちなさい」

言われるまでもなくおのずからな貫禄らしいものもそなわってきている近ごろだ。仕事の順調に裏打ちされた余裕の証拠だろう。

その貫禄なるものを確かめてみたくなった。浴槽に浸りながらふとしてその気になり、ザブと流しに下り鏡の中に全裸をさらしてみた。少々の二段腹、そしてその他のモノを気にしながら、仔細を見極めたのである。遠い少年の日の経験に似た行為である。そして、いくぶんかの確信をもつことができた。

(甘いな)

と思いつつまんざらではない気分に浸り、ホクソ笑んだものだ。

(貫禄か、ふふ、ふ、サチのやつめ、よく言ってくれたよなぁ)

鏡の中にいる紛れもないかれ自身を見つめ直したことだ。

凡夫のかれがどこまでも凡夫を発揮するあんばいだが、絆に結ばれ、また、いまはその内助に少なからずたすけられている矩恒である。

(子宝がないから、いつも新婚気分さ)

仕事にも、夫婦の愛にもだから全力投球ができる。

「きみは細君と二人きりの身軽だから、やってくれよなぁ、適任だよ」

仕事をおしつけにされたこんな腹立たしいいきさつもあったが、笑い返してやりたい気分だった。

さて、かれの司祭する神事の進行次第はおよそ次のようである。

一、修祓　祭壇、神具、斉場、参列者などすべての清めをする。

一、降神の儀　大地主大神を初めその地を守護する産土の神々に神籬に憑依して頂く儀式。

一、献饌　お神酒、饌米、塩を初め山海の味物を供える。

次いでは、

一、祝詞奏上　となるが、真壁矩恒にだけ別に見せてもらい、写すことにしよう。

一、四方祓　敷地の隅々まで祓清め、そこに座します神々に切麻を撒供する。

一、鍬入れの儀　工事始めの儀式として施主は鍬、工事方はスコップを盛り砂に型通りすき入れする。

一、玉串奉奠　参列者全員玉串を捧げて、工事の無事と完成を祈念する。

一、撤饌　お供え物を下げる。

一、昇神の儀　降神の儀でお降り頂いた神々に元の御座にお戻り頂く儀式。

なお、神事終了後直会として、全員で起工を祝うとともに、工事の安全と完全な竣工を念じお神酒により乾杯をする。

厳かに越天楽、五常楽の雅楽のテープがながされ、参列者にはあらたまった、清浄、敬虔な気持ちに導かれる。演出はこのカセットのあることで、効果を大いに高めることができる。

(神道は滅びなく日本人のこころの中に生きている)

という、実感を神職真壁矩恒はこのときに覚える。

そして神職者としてのほこりが胸のうちにみなぎるのだった。

車は高速道を下り、早稲田通りを走って七号環状線へは大和陸橋のところで入る。あらかじめ道路地図を調べてあるから、あとは西武新宿線を跨ぎ川越街道との交差地点までは直進すればよい。時間は八時だ。予測よりはやくここまで来られた。ローリング族グループのバイク四、五台が追い越していった。かれらの無法な暴走時間帯は終って引上げるところらしい。カーステレオのスイッチを切り替えて聞いた七時のラジオニュースでは快晴という予報だった。まずは上々の大安吉日になるだろう。

しかかるころだが、外回り車線は比較的空いていた。
装備しているネズミ捕りが、自動ドアを備える建物の前を通過するとき、どうかすると警告音を発した。この機械の泣きどころはこの誤報だ。交通取締まりはまずない時間だが、高速道に慣れて走ってきた速度感は渋滞がないと、油断を招きやすい。安全運転のかれだが、ネズミ捕りは用心のためだ。

I区M町は区部といっても北郊である。現地に着いたのは打ち合わせてあった九時には間もない時間になった。早速方位を見定め南面して祭壇をしつらえ、衣装を整える。慣れているから素早い。手鏡を使って威儀を確かめる。ワゴン車を運転してきた世間並みの中年男が、たちまちキリッとした神職に変身する。

うやうやしく施主、その他の参列者を迎え、

「お揃いでございますか、では」

と、司祭を宣し、カセットレコーダーの再生ボタンを押し、雅楽のテープを流しはじめる。荘重な越天楽に、つづいて五常楽のメロデーが式場はたとえ露天の殺風景であろうと、まこと神々の降臨したまう雰囲気を醸し出す。

さて、重々しく司祭進行するという順序だ。

祝詞は祭事のメインである。かれの奏上は朗々、凛々、メリハリの利いた美声である。評判はこの点で大変によい。

「こんどの仕事は大事な客筋になる、祝詞は是非真壁さん、あんたにたのむ」

ご指名が会社から入る。だれとは言えないが、かれ以外の派遣でミソをつけたことがあったからだ。

ところで地鎮祭の場合、いっさいで初穂料はいまのところ四万五千円である。ほどほどのお値段であろうか。かりに施主側でこれを段取りするとなると、地元にある神社を尋ね、あらかじめ交渉の必要もあるし、そのうえ厄介な供物までを準備する煩いが施主となりがちである。そういう心配が一切ないのだから、むしろよろこばれるという勘定なのだ。

此の処を祓い清めて厳の斉場と神籬刺し立て招ぎ奉り、坐し奉る。

掛けまくも畏き大地主大神、埴安姫大神および此の里を領有し坐す産土大神等の御前に斉主恐み恐みも白さく

此の度（某）是の所（地名）に新に家造りの事営まんと定めて（某）に負せて小竹刺立て注連縄引廻ほし今日を吉日と選び定めて諸人相集い古い例の随に斉鎌もちて荒草刈り払い、斉鍬もちて土引起し大前に御饌、御酒、海川山野の種々の物に時の果実をも取り添え

て地鎮祭仕り奉らんと真心に拝み奉る状を勤しと亨け給い、愛ぐしと神覧わし給いて掘り据えむ礎の底津岩根の万代に動くことなく、揺ぐ事なく地震火具土の禍事在らしめ給わず此の業に労き係わる工匠等が身にも八十禍津日の枉事なく、夜の守り、日の守りに幸わえ給いて土築く音の清やかに斉竹の寿具寿具に引廻ほせる注連縄の只一筋に撓む事なく、絶ゆる事なく業を勤しみ、工美わしく能く調えしめ給いて玉刻春内外の装い弥新しく、新室の木の香も迦具わしく（某）家族の常久の住う所と造り固めなす、荒鉄も真鉄も弥堅く塗り篭めし真砂の壁の崩るる事なく、営業も弥栄えに立ち栄えしめ給えと及び入りて事執り行なう（某）が役の諸人等をも守り幸わえ給えと恐み恐みも白す。

これを奏上しつつわが真壁矩恒胸は感動でいつも熱くなる。祝詞の内容は条理を尽くして遺憾のないものだ。神道の格式の中にこめられた詩情ともいうべきものを矩恒は詞の底に感じとる。かれの神職であることへの悦びや誇りがこの奏上の瞬時に凝集する。

直会が終ると（奉鎮祭・新築）と墨色も鮮やかな守護札を施主に、神酒対の二本（鯛のプラスチック入りの上白糖とともに施主に、（鎮めもの）を工事請負方に下げ渡す、守り札は上棟に際し棟の上に、また（鎮めもの）は基礎工事にあたり土中に埋められる。

ツーバイフォーなどと呼ぶ新工法といえど、この縁起には変わりがない。伝統の作法なのだった。

「神さまはできるだけ多くお名前をいただきましょうよ、そのぶんなりに、霊験あらたかを増すじゃありませんの、連合発行のお札ですもん」

「発行ねぇ、せめて領布と言いたいねぇ」

「それはどうでも、これ名案でしょう、重みがあるほどいいのよ、そうじゃない」

なんとも無雑な楽屋うらだが、矩恒はそれに従うことにした。

「なにごとも連合でいくか」

「そうですよ、八百万の神さまがわたしたちの味方ですよ」

そこで、

手置帆負神、屋舟久久遅神、屋舟豊宇気姫神
彦狭知神

と四柱の神を大土主大神、産土大神の二神の両翼に、都合六柱のおん名を守護札に墨書する仕様は矩恒自身が頭をひねったものだ。

（恐れ多いな、仏法でなら六道、この数でよかろう）

材料は檜の四分板。朱印を押捺した立派なものである。上棟には棟梁の方でも飾りを用意するものだが、この守

護札を添えれば、いっそう栄えを加えるという趣向だ。初穂料をいただく手前からもこの首尾は好印象疑いないものだった。烏帽子から木沓、つまり烏皮履(くちかわぐつ)の足下まですべて一流のものを纏い、隙のない挙措に終始する、そつのない司祭は場数を踏んでしだいに板についたものだ。

かれの守る稲荷社はもとをただせば流行神の仲間だ。庶民生活に密接な殷霊信仰から、ついには農事に止まらない商売繁盛の神となったものだ。

(サチのやつめ、俗っぽいとか言ったな、俗でなにが悪い、伏見さん、豊川さんをご覧うじ、こちらは村社だが、いまに本殿、拝殿、幣殿、楼門、回廊、すべて整う規模を実現してみせる)

「夢は結構だけれど、この狭い境内ではね」

「土地は新たに求めるのさ、方角は占って決める」

「資金はどうするの、知りませんよ、いいかげんになさいな、正気なの、つねってあげましょうか」

痴話に近く、二人とも神を恐れぬ会話かも知れぬ。ともあれ、出前神主を生業とするようになってから、すべてが順調なせいであったろう。

了円坊に久々で会った。

「お主のほうだいぶ調子がいいらしいじゃないか、聞こえてるともね、隠したってだめさ、建築関係とは目のつけどころがよかった、サッちゃんあたりの知恵かな」

(サッちゃんはないだろう)

と思ったが、どれだけ知ってのことか、

「まぁな、ポチポチさ」

「で、コミッションはどうしている」

「なんのことだそれは、コミなんとか」

「おとぼけなら、まぁいいや、その話は止しとしようや」

了円は急ぐらしく、そこまでで放してくれた。

「急いで、どこへ」

「なに、施餓鬼供養の助っ人さ、宗派のたすけぁい行事だ、ただでさえ、こっちとら忙しいというのに、寺方の因習だな」

吐き捨てるような言い方だった。

新築、改築、増築、解体、繋井、みな「鎮め行事」にかかわり、建築ブームでここかしこ応接にいとまなく出前繁昌である。サチの奔走開拓にあずかり、またくちコミで、建設業者はやがて一社に限らず、不動産業者にもおよぶ盛況であった。

(鎮め事)を神事とする縁起は古来のもの、神道の伝統の中に位置づけをうけ、祭政一致の歴史の重みを脈々と伝え、疑いもなく一種の民俗行事でさえあることに矩恒はほこりをもち、黄道吉日の「鎮め行事」を励む力にしていた。

初穂料からのいっさいの支出は、すべて妻女サチに任してある。建築会社のほうへのしかるべき渉外費も当然その中に含まれているはずであった。だが、それは矩恒のあずかり知らないだけである。

「お上さんいらっしゃいますか」

連合事務所の窓口は評判のよいサチを名指しで電話が入る。

「はい、神道連合事務所でございます」

サチの居合わせるときは、受話器をかの女の方で素早く取るキビキビとした応対で信用を得てきた。

『神道連合事務所』と正式にはネーミングしたものではないが、サチの電話応答の中から自然の定着を見たものだ。

「はい、はい」

と言うだけで、機転の利かない矩恒の応答ではビジネスは成り立たないのだ。ご指名は止むを得まい。

鎮め行事の出前という発想に機動力を加えるアドバイスはK建設の営業課長だったが、運転免許を取るため市部の教習所に通い、時には指導員の悪態に耐え取得を了えてから、真壁矩恒の人生に大きな変革が起こった。ワゴン車を駆動し、行動圏を広げて(世間)に触れ、(世間)を呼吸し、(世間)に学んだ。同時にそのことは矩恒流に羽根を伸ばし、かれ自身が驚くほどの濶達の世界を拓くキッカケになった。社家に生れ育って平々凡々なかれの一つの開眼だった。ワゴン車はそうしたかれの砦である。テープをセットし、ジャズ音楽を流し、また口笛を吹く、車内電話でラブコールをサチに送る。

「あなたはいいかげん極楽トンボ、あきれるわ」

「そうかな」

「そうですよ、お人好しなのね、だけどそれが取り柄かもね」

「そんなものかな」

こんな会話はすでに日常的なものだ。

(神道の世界も、また仏法の世界も閉鎖的なんだ)

と矩恒は思う。

(あの高田了円坊主め、アクが強いがああいう行き方が、ひょっとすると、現代流かもしれんな)

外界へ出てみてそれが分かった。

「あなた、神明さんが連盟に加入したいって」

「あちらさん、なにか言ってきたんかい、そりゃあ、よかったな、だが、電話でかい」

「ずいぶんと、あちらの奥さん口説いたもん、やっとですよ、お高いんだから」

神明社は伊勢神道、伊勢講の伝統から社格の矜りもあってか、加盟を渋ってきた。

「先月は熊野さんが折れて、仲間入りしているし、そ

んな関係もあるんだろう」
「それですよ、それは大あり、神明さんは浄階とか、アチラの高位に昇りつめてお得意の方だから……、あなたしっかりしてもらわなくちゃ」
神職連合の先鞭はかえって俗なわがお稲荷さんだった事実を確乎認めさせる必要がある。サチの言外に言おうとしているものを、さすがの矩恒もうけとらねばならない。
「（神道連合事務所）ここにありと看板出して鮮明なアピールがこの際大事なの」
「そうだな」
「そうだな、なんて手ぬるいことじゃだめ」
「じゃ、そうしょう」
「山王さんも職を思い切って辞めるって話だし、氷川さんは今年いっぱいでリタイヤ、諏訪さんだってそうなればいずれはね、いよいよ時節到来ですよ」
立派すぎるような、檜の看板板が用意された。
「あなたが書くのよ、踊るような前衛ばりでね」
「よしっ、書くか、墨はキミがすれよ」
「はい、はい」
矩恒の書はけっして前衛派ではないが、社家の素養としてかなり年季の入ったものだった。
（踊るような）
という指示があったからではないが、墨痕鮮やかにわれながら墨色も良く雄渾の出来だった。
「わっ、素晴らしい、あんたらしくない」
墨柄をもつ手を休めサチが頓狂な声を上げた。
（二・六・三〇）

青山の土地をめぐって（一）

三戸岡道夫

明日に控えた土地売買契約のことを思うと、押えても、押えても、頬の筋力がゆるんでくる。うれしさで、身体が震えるようだった。
（ついに、あの土地が自分のものになるのだ。これで長年の夢が実現する。念願の本社ビルが建設できるのだ）
オリエントアート株式会社の社長である稲取節也には、嘘のような気がする。
さきほどまで、港川不動産の営業マンの速水章がこの社長室の稲取の眼の前で、明日の契約の書類の点検をしていた。
「社長、これですっかり書類は揃いました。間違いありません」
速水章は礼儀正しい言い方でそう報告した。年令は若いが、信用のおける、しっかりした営業マンだと、稲取社長は速水を高く評価していた。だから、今度の土地契約についても、安心してこの速水に任せてきた。そして、速水は見事その期待に応えて、明日の契約にまで漕ぎつけたのである。
「売り主側の書類も揃っているな」
と稲取は念を押した。
「はい、さきほどお伺いしまして、全部頂戴してまいりました。すべて点検ずみでございます。間違いありません」
「とにかく百二十億円の買物だ。念には念を入れてな。失敗は許されぬ」
「わかっております。では、明朝九時に、また参上いたします」
明日の朝、関係者一同がこの社長室に集って、契約が行われることになっているのである。
「時間に遅れないように頼むよ」
「時間に正確なのが、わたくしの身上です。ご心配なく」

速水が帰ってしまうと、稲取は椅子に腰掛けたまま、窓の外に眼をやった。明朝この部屋へ集るメンバーの顔を思い浮べてみた。

まず、買い主であるオリエントアート社からは、この自分と、副社長の中田弘樹、経理部長の小峰明、総務部長の石井敏和、この四人でいいだろう。売主である栄進食品株式会社の方からは、社長の朝比奈信也と、その母親の朝比奈ひな、が出るはずである。仲介人である港川不動産からは、常務取締役の来島隆文と、酒井部長、それに担当の速水章。司法書士の斉藤征二。指を折ってメンバーを確認しながら、応接セットへ座る順番などを想像してみた。補助椅子を入れないと席が足らないかなと思った。

そんな思いにかられている時、ドアが開いて、副社長の中田が顔を出した。

「社長、おめでとうございます。いよいよ明日ですな」

「うん、ありがとう」

「準備は終りましたか」

「港川不動産の速水君が、さっき報告に来て帰っていったところだ。こっちの金の準備も大丈夫だろうな」

「間違いありません。今日わたしが銀行へ行って、預金残高を確認してまいりましたから、ご安心ください。なにしろ百二十億という巨額な金額ですから、受け渡しにも万全を期して、銀行振込の方式にいたしました。もちろん、売主の朝比奈の婆さんと、港川不動産とも打合せの上のことです」

「どうだ、一つ、祝杯とでもいこうか」

稲取社長は上気嫌で言った。

「いいですねえ、やりましょう」

稲取社長は立ち上ると、サイドボードの方へ歩いていった。サイドボードの中には、稲取の好みのワインがずらりと並んでいる。商売柄、絵の買付けやオークションに、海外へ出掛ける機会が多いので、その時買い集めたものである。そうしてサイドボードへ飾っておいて、気に入った客には、コーヒー代わりに供することにしていた。

手慣れた手つきで、その中から一本を取り出すと、二つ並べたワイングラスにたっぷりと注いだ。さわやかな香りがただよう。

「じゃ、乾杯」

「おめでとうございます、社長」

二人はグラスを軽く接触させる。喉の奥へ芳醇な味が流れた。

「でも、社長、あの土地がこんなにうまく手に入るなんて、社長はよっぽど幸運児なんですよ」

「いや、港川不動産がやってくれたおかげだよ。とくに、あの、速水っていう若いのがな」

いま二人が座っているオリエンタルアートの本社ビルは、港区青山×丁目に建っているが、残念なことに、直接、目抜き通りである青山通りに面していなかった。

東京の中でも、青山通りには、他の街路とどこか違った独得の雰囲気がある。オフィス街と、ショッピング街、歓楽街、樹木のみどり、それに文化の香りが適当にミックスされていて、人々の心を静かに魅きつけるところがある。

稲取の経営するオリエントアートは、すでに銀座、赤坂、日本橋、新宿、渋谷にと、支店を設置していたが、稲取は本社ビルを新しく建て直す場合は、青山通りと決めていた。青山通りに面して、華麗な本社ビルを会社のシンボルとして建設するのが、稲取の長年の夢なのであった。そのための完成予想図のパースも出来上って、この社長室の壁に飾られていた。

稲取は何杯目かのワインを口にすると、額に入ったその完成予想図を眺めながら、

「こうやって見ていると、明日にでも、もう出来上ったような気分だな」

「待望の土地が手に入ったわけですから、もうビルは出来上ったも同じでございますよ、社長」

中田副社長は言葉を慎重に選びながら、用心深く答える。稲取社長には疳性なところがあり、気に入らないと、突如として気が狂ったように怒り出すからであった。しかも、その怒り方が極めてエキセントリックで、ひどくなると自分の部下でも、客でも、見境いがつかなくなるから、危険であった。その感情の起伏を、傍にいて、いかにうまく舵取りしていくか、それが副社長の中田の重要な役目なのであった。

（何とかして、青山通りに顔を出したい）

これは稲取の長年の宿願といってよかった。幸いなことに、オリエントアートの南に隣接して、栄進食品株式会社というビルが建っていた。稲取はそれに眼をつけたのである。

（このビルを買収すれば、青山通りに顔が出せる）

土地は百五十坪ほどはあり、上に三階建てのビルが建っていた。オリエントアートの本社ビルと合わせれば、土地は三百五十坪になり、理想的なビルが建てられる。幸い栄進食品のビルは、建築後すでに相当の年数が経っており、建て替えの時期に来ている。交渉次第では、売却の可能性がなくもない。万が一売ってくれなくても、一緒に共同ビルを建てるということも考えられる。

売却の交渉に対して、栄進食品の社長である朝比奈信也は、

「昔からこの場所で仕事をやってきましたので、そのまま続けておりますが、うちの仕事は、どうしても青山の一等地でなくてはならんというのでもないので、値段次第では売ってもいい」

という返事であった。だが、母親の朝比奈ひなが反対

だった。肝心の土地の名儀が、母親のものだったからである。言ってみれば、母親の土地の上に、息子がビルを建てて商売をしているという、よくあるケースなのであるが、母親は八十九才の高令なので、理窟だけでは話が通らないところがあった。

「この土地は先祖代々伝わった大切な土地ですから、絶対売るわけにはまいりません。売ったりしたら、それこそご先祖さまに申し訳がない。罰があたります」

どうしても首を縦に振らないのであった。

母親がこの土地に固執するもう一つの理由に、ビルの一、二階は商売に使っているが、三階は住居になっていて、もう何十年と住みついているので、慣れた土地を離れたくないという、老人特有の心理が働いていることも見逃がせなかった。

だから、交渉は難航し、話がまとまるまでには、時間がかかったのである。

「社長、本当に途中で諦めなくてよかったですね」

ワインはそろそろ一本、底をついてきた。

「途中でもう駄目かと思ったことが何回もあったけれど、諦めずにやった甲斐があったというものさ。虚仮の一心、岩をも通すっていうけど、本当なんだなあ。でも、それをやってくれたのが、港川不動産の若い奴、速水だ」

稲取社長が言うように、頑迷な朝比奈ひなの心を解きほぐし、売却にまで話を煮つめたのは、なんといっても速水章の功績といってよかった。

オリエントアートと栄進食品とは、隣り同志の仲であり、互いに顔見知りの間柄なので、土地の売買交渉を直接やっても出来ないことはなかったが、稲取社長は港川不動産を介して話を進めていた。それは肝心の母親が売却に反対なので、それをどうやって陥落させるかという難問に加えて、価格の交渉、地価の鑑定、国土法の申請など、素人の手には負えない問題が、土地の売買には沢山あるからである。

速水章の年令は二十八才。入社して六年目。働き盛りの、営業マンである。それほど遣り手というほどではないが、粘り強い仕事振りの中に、なにか人の心をなごませるような、人なつっこさがあった。

そうした性格が、高令の朝比奈ひなの気に入ったのであろう。最初のうちは、誰が話しても絶対売らないと話を受けつけなかったのを、速水が何回と交渉しているうちに、次第に心を開くようになり、遂に売却オーケーの返事をくれたのである。

といっても、もちろん、話がすんなりと決ったわけではない。交渉の過程で、速水は速水なりの努力を積み重ねたのは言うまでもない。敬老の日には、お祝い品を届けたり、また、誕生日に薔薇の花束を持っていった時などは、

「まあ、このわたしに花束を。うれしいわねえ。子供も、孫も、あたしの誕生日なんて、とっくに忘れてしまっているのに。ピンクのお花もらったりして、なんだか若返るじゃないの」

晴れやかに笑って、涙をこぼした。

春秋のお彼岸には車で一緒にお墓まいりに行ったり、好物の大福餅を赤坂の有名店まで買いにいって届けたり、そんなことの積み重なりが、速水に自分の孫のような親近感を持ったのかもしれなかった。

しかし、売ることを承諾しても、住み慣れた土地を離れるのは嫌だという、感情論まで解決したわけではなかった。そこで速水は転居のための代替の家を、何箇所も何箇所も、自分でもよく根気が続くと思うほど探しまくった。やっと老婆が納得したその土地に、今はすでに家の建築が終り、朝比奈一家は引越を完了していた。

ワインに酔ってすっかり御気嫌になった稲取と中田の二人は、もう一度、壁の本社ビル完成予想図を愛撫するように見て、

「出来上れば、完全に青山通りの名物になりますね、社長」

「うむ」

と、稲取は満足そうに頷いて、

「青山通りに、芸術の花が咲くのさ」

計画している本社ビルは、地上八階の予定である。が、その外観がユニークであった。一階は超近代的な総ガラス張りのフロアー、それに対して二階は、ノートルダム寺院の壁面のように複雑精巧な彫刻を施した。中世ヨーロッパ風の建物。次の三階が一階と同じの総ガラス張り、四階が中世ヨーロッパ風と、交互にそれが続いて八階まで繰り返されるのである。いわば、総ガラス張りと中世ヨーロッパ風の外観の横縞模様のビルという、世界中どこを探しても例を見ないデザインのビルが、青山通りに南からの陽を受けて、輝こうというのである。稲取社長ならずとも、胸が躍ろうというものである。

一、二階は営業用の画廊に使う予定である。三階は貸し画廊、四階は美術関係の多目的イベントホールにする。五階は稲取がこれまでに集めたコレクションを集約して、(オリエントアート美術館)にしたい。六、七、八階を本社事務所として使う。

いつのまにか窓の外はすっかり暮れて、闇に灯が、人の心を誘うように、きらめいていた。

「じゃ、そろそろ帰るとしようか」

二人は一緒に立ち上る。まだちょっと飲み足らない気持だった。

「ちょっと軽く寄っていきましょうか」

中田の誘いに、稲取は、

「いや、今日は帰る。明日は大事な契約日だからな。明日を祝って、家内が赤飯を炊いて待っている」

稲取を乗せた車は、夜の青山通りを西に向って、流れるように走り去った。

その同じ日の、夕方。

速水章は稲取社長の社長室を辞した後、司法書士のところへ寄って、明日の契約の、登記用の書類が間違いないかを確認した。契約が契約だけに、万全の上にも万全を期したのである。

会社に戻ると、今度は必要とする関係書類をすべて揃えて、担当の酒井部長と、来島常務の点検を受けた。

「洩れているものはないな」

「ありません。準備は完全です。明朝、一同が揃ってハンコを押し、登記所へ書類を持ちこめば、それで終りです」

「ご苦労」

速水の頭の中に、この一年間通いつめた、朝比奈ひなの顔が、ちらっと横切った。過ぎてしまえば、苦しかった交渉も、懐かしい思い出のような気がする。

速水は自分の席に戻ると、書類をクリップで留め、会社の名前の入った茶封筒に入れた。これで明日、百二十億円の契約が完了するのだと思うと、うれしさよりも、ちょっと恐いようで身体が緊張した。百二十億円の物件の仲介なんて、長年やっていてもそう滅多にあることではない。

手数料だってドカッと入ってきて、たちまち速水の仲介成績が、トップに躍り出ることはまちがいない。不動産の取引仲介料は三パーセントであるから、もし計算通り入ってくるとすれば、三億六千万円である。それも、今回の仲介は、売主、買主両方の仲介に港川不動産が入っているから、手数料はその二倍の七億二千万円ということになる。もっとも、不動産の金額がこれほど大きくなれば、計算通りには貰えないことが多いから、実際はずっと少くなるであろうが、それでも億単位で入ってくることは間違いない。

(これで、よし)

速水は自分で自分を納得させるようにそうつぶやくと、茶封筒を鞄の中に入れた。この鞄を速水は、明日の朝まで護衛するのである。生命の次に大切な鞄。絶対、肌身から離してはならない。

重要な書類を速水が一晩保管しなくてはならないのは、明日が土曜日だからであった。週休二日制の港川不動産は、土曜日は休みである。普通の日ならば、書類は会社の金庫の中へ保管しておいて、翌朝出勤したとき金庫から取り出し、契約の場所へ持っていけばよいのだが、休日だとそれが出来ない。仕方なく速水が会社から持ち帰り、明朝、直接持参することにしたのである。

重要書類を夜間持ち出すという危険を侵さなければならない土曜日の契約は、速水たちにとっては、正直言ってありがたくなかった。しかし、(今度の土曜日は大安で、縁起がいい)という稲取社長の一声で、決ってしまったのである。金主の決定には逆らえない。

さて、明日が土曜日だということは、今日は金曜日だということである。サラリーマンにとっては花の金曜日。窓の外はとっぷり暮れて、闇に浮かんだ街の灯やネオンの色が、サラリーマン達の心を誘惑するように、またたいている。待ちに待ったハナキンの夜。男たちは一週間のストレスを晴らしに、夜の街へどっと繰り出していく。港川不動産のビルからも、三々五々つれだって、夜の街へ泳ぐように出ていく人の姿がそろそろ眼につき出した。

いつもならば、酒の強い速水のことである、同僚と一緒に夜の繁華街へと足を伸ばす頃である。だが、今夜はそうはいかない。明日の契約がある。生命の次に大切な鞄の守をしなくてはならない。速水は喉の奥が、酒を求めてうずうずするのを、ぐっと我慢して立ち上ると、

「お先に失礼いたします」

と挨拶をした。デスクに何とはなしに座って、誰かから誘いの声のかかるのを待っている同僚たちは、

「おや、珍らしいな、速水、帰るのかい。今日はハナキンだよ」

「せっかく今夜は、いい穴場、紹介しようと思っていたのにさ」

「明日、契約があるんです。じゃ、お先に」

「変にまじめなんだな。まあ頑張れよ」

速水は鞄を抱えるようにして持つと、エレベーターに向った。ラッシュのエレベーターは満員である。

一階でエレベーターを降りたとき、速水はばったり黒川元彦に逢った。

「おい、速水、もう帰るのか」

黒川の方から声をかけてきた。黒川元彦は所属の課は違うが、速水と同じ仲介営業部の人間で、飲み友達の一人でもあった。

「ハナキンなのに、寄っていかないのか」

「明日契約があるんだ。朝早いので」

港川不動産では、契約の前日は夜の遊びを禁止している。

「ふーん、契約ねえ。まじめだね。でも、そんな規則、誰も守っちゃいないよ。な、ちょっとだけ行かないか。いい所見つけてあるんだ」

そう言いながら、黒川は速水の鞄に鋭い眼を向けたが、すぐ視線を外した。

速水は黒川に背を向けて歩き出し、ビルの外に出た。

黒川はぴったり寄り添うように、速水のそばを離れない。

「飲むのも一人じゃ、つまんないしな。一軒だけつきあえよ。軽く飲んで帰ったぐらい、明日の契約にどうってことないさ。それに、ちょっと話したいニュースもあ

るんだ」

地下鉄の入口まで来たとき、速水の決心はぐらついた。駅前に拡る誘うような灯の海が、酔いを求める喉の渇きを呼び起し、自制の限界を越えたのである。速水は地下鉄の穴倉へ行くような階段を、一人とぼとぼと降りる気力を失った。それに、ニュースという黒川の言葉が、速水の気持に引っかかっていた。ニュースって、何だろう。サラリーマンはニュースという奴に弱い。

速水は黒川の後について、横断歩道を渡った。渡りながら鞄を気にして、脇にずり上げるように持ち直した。黒川は背は低いが、肩幅は広い。仲介営業部の中でも、仕事はよく出来る方だった。成績はいつも上位にある。だが、どこかに危険な雰囲気があって、人を騙してでも仕事をやりとげようという、仕事師のようなこわさのある男だった。だから、速水も心の中で警戒しながらつき合っている人間の一人だった。そう言えば、さっきエレベーターを降りたとき、偶然逢ったような気がしたが、黒川はそこで速水を待ち伏せしていたような気がしないでもなかった。

ビルの地下にある、活魚料理「一舟」と書いた暖簾をくぐると、そこに濃密によどんでいる魅惑的な夜の雰囲気へ、速水は一気にのめりこんでいった。

「ここは魚がうまいんだ。それに安い」

「来たの、はじめてだな」

「だろう。おれもこの間、お客さんに連れてきてもらったばかりだ。会社から近いだろう。ちょっと、って言う時に、ちょうどいいんだよ」

突き出しに、ひじきの煮もの。そのあと海の魚を中心にした料理が、適当な時間を置いて出てくる。ビールを二、三本飲むと、後は酒にした。

「さっき言ってたニュースって、何？」

「別にニュースというほどでもないがね」

黒川は盛んに速水に酌をしながら、

「来島常務は社長になれないよ」

突然、会社の雲の上のことを話し出した。黒川という男は、いつもこういう話し方をする。下っぱのサラリーマンの酒の肴に、ちょっと意表をついた話題を持ち出すのが、得意だった。おれはお前たちとは少し違んだ、何でも知っているんだ、という顔をしたがる。

「来島常務が社長になれないって…、そんなこと、おれと何の関係もないよ」

「でも、速水は来島常務べったりなんだろう」

「とんでもない。ただ、上司だから、仕事を一緒にやる機会が多いだけさ。でも、どうして社長になれないんだ…？」

社長の城戸篤はまだ社長になって三年、引退しなくてはならない年令ではない。だから、すぐというわけではないが、もし将来の港川不動産の社長が誰かということになれば、それは来島常務だというのが、社内のほぼ常識になっていた。それが違うというのである。

「どうして」

「梅尾会長が、社長復帰を狙っているからさ」

「会長が？」

速水には意外すぎて、すぐピンと来なかった。

「会長はもう社長を卒業したんだろう。それが、なぜ、逆戻りを？」

「会長はもう一度社長をやりたいらしいんだな。いや、やりたいというよりも、社長の座を取り戻したい、と言うのが本当かもしれない。というのは、三年前に社長から会長になったとき、社長を円満に勤めあげて会長になったというよりも、無理やり会長に祭り上げられたという感じの方が強いからな」

「うん、そう言えば、そうだ」

「会長もまだ若い。社長のポストに未練があるんだよ。もう一度社長をやってみたいという野心が、あるのじゃないかな」

「ふーん、そうか。考えられないことではないな」

速水は、梅尾会長と城戸社長の、二人の対照的な顔を頭の中に思い浮かべてみた。梅尾会長が引退して、城戸社長が会長になり、実力者の来島常務が次の社長になる、それが会社の自然な流れではないか。だが、梅尾会長の顔には、それを逆流させようという、あくの強さがたしかにある。そして、そうしたものを許容する不自然さがこの会社にはあるということを、速水は前から感じていたが、それがこんな具体的な形で現われてくると、その生臭さには辟易する思いがした。

「何か具体的な動きでも、あるのかい」

速水は探りを入れてみた。

「ある。その証拠に会長は本社ビルを建てたがっている。今の本社ビルは建物も古いし、立地条件もよくないからな。自分が社長に返り咲いた時のシンボルを作りたい、というのじゃないかな」

「新しい本社か。どこに？」

「虎ノ門の地上げしている所らしい。でもまだ、決定というよりも、会長と社長の間でいろいろ暗闘、という段階じゃないのかな」

きっとその暗闘の情報を、早耳の黒川はどこかで聞き込んできたのであろう。

「というわけだから、速水、社長常務連合軍への密着は、注意した方がいいと思うよな」

「ありがとう。せいぜい気をつけよう。ところで、俺のことより、黒川、君の方こそ、どうなんだい。会長べったりだって、評判が高いぞ」

「俺か……」

と、黒川は急にとぼけた顔になって、

「俺は、どちらでもない。中立派さ。等距離外交路線

を貰いている。うちの会社は、いつ、どこで、どう変わるかわからないから、片方だけにべったりというのは危険だ」

もっともらしくそう答えて、盃を口に運んだ。

「一舟」を出たのは、九時半頃だった。二人ともかなり酔ってはいたが、まだ満足したという感じではない。

「もう一軒寄って行こう」

「そうだな」

返事はしたものの、速水の気持はちょっとひっかかっている。明日の契約にである。だが、ここまで飲んでしまえば、もう一軒ぐらい、五十歩百歩だ。家に帰るのが一時間ばかり遅れるだけじゃないか。書類は鞄の中にある。書類さえしっかりしていれば、何っていうことはない。

「渋谷のピロミはどうだ」

彼等の行きつけのカラオケスナックである。

「いいな」

タクシーを拾う。

ピロミは道玄坂に近い、バービルの三階にあった。入っていくと、ちょうど店のピークの時間帯なので、満員の状態。カラオケがガンガン鳴って、客が盛んに歌っている。それでも、やっとカウンターの隅に場所を見つけて、二人はもぐり込んだ。

「ちょっとここで、我慢してね。もう少しすると、空くから。そうしたら、席を作るわ」

顔見知りのママが、手慣れた手つきでおしぼりを出し、水割りを作る。

「歌もどんどん歌ってね。今夜のお客さん、上手な方が多いから、曲のリクエスト早目にしないと、順番が廻ってこないわよ」

速水も黒川も、酔いにまかせて二、三曲ずつ歌うと、あっという間に時間はすぎて、ピロミを出た時は十一時。

「やっぱり最後は〝赤い靴〟へ行かないと納まらないな」

速水が帰る隙を与えずに、黒川が誘う。

「五反田か、行こう」

酔いの渕に深くひたった速水は、朦朧として、気分が大きくなっていた。

赤い靴は、名前から想像すると期待外れの、穴倉のようなスタンドバーだった。が、五反田に住む黒川の巣だった。先客が二人ばかり居たが、この時刻にねばっているのは定連にきまっている。客の出入りもなく、密閉された時間のない空間にすぽっと陥ってしまったような感じだった。もう、とっくに十二時は廻っている筈である。

黒川は時々そっと、速水の酔い加減を探るような眼で見た。その時の黒川の眼は、醒めている。

「もう帰るとしようか」

速水が呂律の廻らない口調で言った。

「もう、おそい。俺のアパートへ泊っていけよ」

「そうだな。そうしようか。今から帰ってもはじまらない」

外に出た。少し歩くと、運よくタクシーが来た。

「中原街道を行って、荏原三丁目…」

すっかり酔った速水は、タクシーの中で頭を垂れて眠っていた。が、本能的に鞄だけは膝の上にのせて、両腕で抱えこむようにしていた。鞄に黒川の鋭い視線が走る。

「おい、着いたぞ」

黒川のアパートは、ダイニング付きの六畳一間だった。速水は倒れるように転りこむと、畳の上にしばらく、つっ伏していた。投げ出された鞄を、黒川が隅の方に片ずけた。

「おい、飲むかい」

黒川は冷蔵庫をあけて、罐ビールを出してきた。

「うん、口直しにいいな」

速水はのろのろと起き上ると、まるで水を飲むように一気に飲んだ。

「冷えてて、うまい」

「テレビでも見ようか」

スイッチを入れると、NHKはすでに終了していて、民放の深夜のお笑い番組が、けたたましい音をたてた。

しばらくすると、速水はまた畳につっ伏して寝てしまった。黒川はその上に毛布をかけながら、速水の寝息をうかがった。速水は気持よさそうに眠っている。

黒川は用心しながら、部屋の隅の鞄の方に手を伸していった。

どこかでバイクの走り去る音がした。

鞄から手を引くと、黒川はテレビを消した。

部屋の中に静寂が戻った。速水は引つづき規則正しい寝息を立てている。黒川は安心した。部屋の電気を暗くすると、自分もゆっくりと毛布をかぶった。

しばらくたった頃、急に速水は夢にうなされたような声を出して、はね起きると、

「俺は帰る」

と言い出した。黒川はギクッとして、

「帰るって、こんな遅い時間、もう電車だってないよ」

「いいや、帰る。タクシーを飛ばせば大丈夫だ」

速水は立ち上ると、黒川がとめるのもきかず、靴をはいてアパートの外に出た。が、あわてて戻ってくると、

「鞄、鞄、鞄を忘れるところだった」

黒川は大通りまで送っていった。深夜のタクシーはなかなかつかまらなかったが、辛抱強く待っていると、やっと停った。

タクシーに速水を押しこむと、黒川はアパートに帰り、ドアの鍵をしめた。

水道の水をコップに一杯、一気に飲んだ。

黒川はにわかに醒めた顔になって、両手で顔を二、三回、叩いた。

部屋の片隅に行き、山積みの雑誌の陰に、隠すようにして置いてある茶封筒を手にとると、にんまり笑って眺めた。速水が寝ている間に、黒川が鞄の中から手早く抜き取ったものだった。

（これはある長編小説の中のある一部分に当るものです）

二戸岡道夫作品「支店長の妻たち」の中断休載について

このほど「降格を命ず」につづく第二弾書き下ろし長編としての刊行の実現にともない、連載中でありました右の作品は日刊紙の「書評」によりひろく紹介をうけ、好評という事実の周知を見るに至っております。この上なお重複する掲載は読者各位に申し訳なく、作者の意向もありましたので、中断し休載することに致しました。ご理解を賜りたくお断りを申し上げます。

編集部

読者各位

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（八）

第一章　八丈流人近藤富蔵

一、羽倉簡堂、富蔵に会う

金子正義

（四）

座敷に招じ入れられると、意外や明々とした脂燭の下に瓶子を立てた盆が置かれ、めじなの刺身、あしたばの御浸し、煮しめ芋等が盛られた膳があった。

鉄無地の単衣を着流しにした簡堂が床を背に緩ったりと坐ると、

「羽倉外記じゃ、其処許には初見であろうが、儂は、其処許の三、四歳の頃を知っている。文化五年末だ若かった儂が家を継いで遠国に行くので我が師であった其処許の父君正斎先生に暇乞いに参上した折拝見した。今、三十年を経て南海の果てで会うのも奇縁じゃ。従って今宵は代官、流人などでなく同じ直参旗本として話がしたいのじゃ……さ、遠慮なく過ごされよ」

と杯を向けた。

富蔵は余りのことに言葉も出なかったが、簡堂が気軽に西山の富士の優雅さや、黒瀬の海流の凄さなどを語り乍ら酒を酌み交わす裡に、富蔵の心も緩み、傍らに従者も待らさない簡堂の心配りにも気付いて、いつか気を許し合った武士同志の心地となっていった。

「其処許は永らく流配の苦しみを経験したから、伊豆諸島及び八丈の支配について思う処もあろう、支配代官は在府の侭で廻島は滅多にない。一つ儂に同じ武士同胞として憚ることなく何んなりと申して呉れよ、亦、其処許の父重蔵守重、正斎先生に直接教えを蒙った弟子として、何にか其処許に役立つことあらば遠慮なく申されよ報恩の一端にもなろう」

と膝をすすめて言う簡堂に心嬉しくなった富蔵も、言い度いことは山程あっても猥る思いに、何にから話したら良いか分らなかったが、

「お言葉なれば、某、流人の身を以って御公儀の政ごとなどを口にするは憚りありますが、腹蔵なく申し上ぐれば、一つは水汲女禁止のことにて、此れは慶長の昔、

八丈島地役人奥山縫之介殿が、流人の荒んだ気持を和らげんとして、宇喜多秀家公親子に我が娘を水汲女として参らせ、それより他の村方にも許されたものと伝え聞きます。

爾来、流人の犯罪も著しく減少したと言われます、然れども水汲女に子供が生まれ島人口の増加となり、食糧乏しき島民の食を脅かし饑饉の害を一層増加させたものと難ずる者もありまするが、流人は己れが妻子を養うが為に一層流人労役に励むばかりか、山野海浜に糧を求め或いは荒地に山畑を拓くなどして島の利ともなっております。

然れども、流人の赦されて国地に帰れば残された母子は憐れにて、朝に夕に沖に手を合せて国土の夫や父の無事を祈っております。亦、水汲女持ち流人が病死致しますれば遺児の養育も難多く、村方の負担となり申しましたが、宝永の頃より赦免流人が帰国のときに水汲女の妻子をも共に国地に渡ることが許され、先に帰国の赦免流人が妻子を国地に呼び寄せることをも許され、共に倖になりたりと聞きまする。

処が、明和五年戊子に伊奈半左衛門殿の後を継いだ、御代官江川太郎左衛門殿、仲々の明敏なる御代官と伝えられて居りまするので、従来より度々歎願申し上げている、伊豆七島への流人の中止と在島流人の赦免引揚げ方の歎願を七島の島役人連署して歎願いたしました。

羽倉御代官殿にも既に御承知のごとく、伊豆七島の年ごとの飢饉食不足は、耕地少なく地味不良の上に旱魃、潮害等の天災と共に、多くの罪人配流の為の人口増に依るものとして罪人配流の中止と赦免引揚げ方の歎願で御座いまする。

江川代官殿には早速取り上げられましたが、配流中止は大島のみで他島は従来のままにて、その上安永六丁酉年の七島への申渡書条目の中に「流人共ノ水汲女指置候儀堅ク停止」と申し付けられ、「但浮田一類ハ年久敷流人ニ候間、前々通差支障ナシ」とのことで、某も浮田一族の女を正式の妻に迎えましたが、他人はこれをも水汲女と申し居り、常々心苦しく過しおります。

不肖守真案じまするに、江川代官殿の申渡し定目は、明和五年七月十日の夜、前代未聞の大風にて、山林の大木多く吹き倒され、民家の過半数は損亡し、翌六己丑年は大飢饉となり坂上三ケ村で凡そ千六百人の餓死ありと聞きましたが、此の年前後の耕地の荒廃を慮ってのことかと推察仕り居ります。

扨て、羽倉様には天保三壬辰年より支配代官になられてより、江川代官の前例通り水汲女は禁止なされましたが、失礼乍ら流人共の実状はその令行なわず、寧ろ虚しき形ばかりの掟であることを、今度のご巡察でご明察なされたかと存じ上げます。

然し乍ら、天保甲午年建立の神止山の牌銘のことより

羽倉代官殿のご見識を知り、将又今日親しく御尊顔を拝し、其の気宇の宏量なるを感じ、水汲女禁止の旧令の中止を黙許さるやもと思います。

神止山のことにつきましては申し上げる迄も無く、昔より神止山の一帯は森々とした樹海でした。西山富士山麓の山牛が里辺に出るのを防ぐ為に石を畳み、木幹を横にして柵を結んでおりましたが、文化年間に江戸の町人八丈嶋屋与市と申す者が、島方官船水主の高橋長兵衛に資金を出し、柵より富士山麓まで一面を拓いて蕃藷畑としました処、収獲多く島民の食糧の足しになりましたが、江戸商人の利を多くしたのみでした。島人の愚かな者は蕃藷の収獲を見て更に畑を拓かんと樹木を切り倒したので、却って原野は荒地となって拡がり、神止山より東に連なる東の峯と、西の元乗山、手石山、大久保山一帯の山々も樹木薄れて海上の展望は良けれども風を防ぐ森林無く、時化多くなって公、私の船は湊に入らんとしても忽ち大風逆浪がおこり、船舶の多くは摧破される有様で漸く島人は神止山を農耕の場に拓いて山神の咎を受けたと気付き、神止山一帯の開懇を止め、樹木の伐採を禁じ、三根村蔵の坂に碑を建て、此の次第を特に羽倉代官殿の撰文に頂きました。

お蔭を以って漸く昔乍らの神止山に戻り、風浪による山暴れを防ぎ湊に入る船にも合図の烽火を上げることも出来て、難波破船も少なくなりました。此れも羽倉御代官様の大功として島人がその仁徳を慕う所であります。

神止山碑文の見識を以って、水汲女留置禁止の解除と更に八丈始め伊豆の島々年々人数増加し、島民困窮の果てに「子あらし草」などを用いて胎児を始末する有様で誠に非道のこと、此れも一に食糧の足らざる為にて、お救い米の増加と、流人配流の中止、八丈、三宅、新島など多くの流人を預かり居る島より流人共の赦免帰国を一人でも多くお取り計い下さるよう、某、富蔵守真の為では無く島人一同の願いとして申し上げまする」

簡堂は、富蔵の申し条一々尤もなりと頷き訊き乍ら、相当量の酒を干し乍ら澱みなく述べる富蔵を改めて見直し、流石は大儒近藤重蔵正斎の子、鎗ケ崎の変事を起さなければ父祖の学流を継ぐに至ったであろうに、不運なことよ、と憐憫の情が湧いて、

「其処許の申すこと良く分った。水汲女のこと禁令を出されたのは、確に明和、天明の頃は全国に天災、飢饉相つぎ食糧絶えて餓死する者多く、伊豆七島のみか奥羽諸藩すら幾十万と野に飢え死んだ有様であった。江川代官殿は、七島流人も幕府よりの救恤を頼るのみで無く、土壌痩せ風浪潮害によって糧物乏しき島の実情を考え、水汲女による口数の増加の弊を断たしめんとしたもので、儂も正論であると思う。但し江川代官の頃より救慌作物も進み、甘藷も良く産するようになり餓死者も減少していることなので、儂も肯えて禁止令を盾にして言々すべ

きに非ずと思う程に、廻島巡察の役務を果してより改めて検討するであろう。

扨て其処許は自身のことは慎んで余り言わぬが、遠慮無く何んなりと申し述べよ」

と促すと、はっと頭を垂れて唇を堅くしていたが、

「お言葉で御座りますれば某自身のことで無く、我が同胞について申し上げますれば、去る文政九年の鎗ケ崎抱屋敷に於ける塚本一家殺害の科により、某は八丈流罪父重蔵守重は罷免の上大溝藩分部左京亮光実殿にお預け禁錮と相成、後文政十一年罪人の侭にて病没いたしました。

某、八丈送り流人船にて永代橋を出帆の文政十年四月二十六日、見送りの親戚縁者の中に幼い弟妹も見えて憐れを催しました。二男の吉蔵は五才、三男の熊蔵は三才、三女仙は二才で母くにが抱いておりました。

評定所の申渡しに依り弟妹は親戚にそれぞれ十五才迄のお預けとなって、父重蔵の母方の大叔父畳奉行三浦義十郎へ引き取られ、弟二人には公儀お情によって一人につき二人扶持宛被下置され、くに仙の母子には父重蔵の所蔵せる珍器、珍書数万巻を三浦宅へ持ち寄ることを悼って、売り払った金子千五百両程が与えられて生計は苦しからずとは言え、既に十余年を経て預人の期限も切れますれば、弟達のことが案じられます。

既に吉蔵は仏門に入りしとか、風の便り、人伝に聞きおりますが、心にかかるは熊蔵のこと、風聞するに義十郎のお蔭をもちまして、性善く育ち学を好むとか、何卒羽倉様の廻島の御役済み無事帰国の後にても、折あらば御教導頂ければと願い奉ります。」

富蔵は、吉蔵、熊蔵、仙のことは口にしたが、顔も知らぬ自分の実母梅の生んだ二人の妹、こん、富士、更に別の妾女政の生んだふじもいたがそれには触れなかった。

簡堂は、富蔵が己れ自身より江戸に残る幼い弟妹の身を案ずるのに感じ入って、

「おう、おう、そのことよ、父正斎殿が、幼少の頃、昌平黌に共に学んだ、松崎慊堂、慊堂と言う儒学者が居られる。昌平黌より更に林述斎の薫陶を受けられ、遠江の掛川藩の藩授となったが、正斎殿が紅葉山奉行の頃に退隠して渋谷の羽沢に石経山房と言う家塾を開いて居られる。そこで秘かに正斎孤児を引き取ったと聞いたが、数年前三浦義十郎殿の没後、吉蔵は三田の不動堂へ入り、熊蔵の方が慊堂門下になったのだ。帰国したら早速尋ねて其処許のことを伝えよう」

富蔵は因しき縁に愕き、此れも父重蔵の遺徳によるものと感涙を覚えた。

渋谷の羽沢は鎗ケ崎より南東二十町程であった。そして父重蔵と慊堂は共に明和八年の同年生れで、学風も狩谷棭斎を中心とする仲間の考勘実証学者だった。

慊堂は肥後の貧しい農家の出身で幼くして寺の小僧に

出されるなどの苦労を経、江戸に出ても苦学したので、人情深く良く門下生を庇護し、苦境にある友人や家族を親身になって助けていた。

近藤重蔵失脚後その妾女のくにと子供達は三浦義十郎に引き取られたが、重蔵の四女の乳飲子ふじを抱えた妾女の政は寄辺なく路頭に迷うところ、慊堂は石経山房の家事手伝いなどをさせて過ごすうちに、幸い門人の仙台藩の儒医小笠原道生と結ばれ、後添となって母子共に引き取られて行った。

亦、重蔵の厖大な蔵書のうち幕府に没収された蘭書類を、大学頭林述斎に働きかけて遺子に返還させるなど、八丈流人の富蔵の全く知らぬ慊堂の被護を受けていたのであった。

羽倉簡堂は伊豆巡察直後の八月に羽沢の石経山房を訪れて、八丈綾織を土産に『南汎日譜』などの閲読を依頼し、近藤富蔵のことに触れ、熊蔵にも会って帰り、其の年の暮れに、明けて十五歳となる熊蔵を羽倉簡堂の門下生として引き取って帰った。

熊蔵は其の後も簡堂の文使いとして屢々石経山房に通っていた。

天保十一年六月十八日の『慊堂日暦』の記にも「十八日晴……近藤生来り、羽倉君には二十三日に発することを告ぐ……」とある。

其の頃簡堂は水野忠邦の天保改革の施策調査に活躍していた。伊豆諸島巡察の報告と、島嶼の税法及び海防の議を上陳し、老中水野忠邦に重んじられ、納戸頭となり布衣に列して天保改革に参画していたのである。

慊堂日暦の記は、其の頃天下の台所と誇って株仲間の特権に胡座する上方の豪商を抑えようと、その施策の準備に上方へ調査に行ったことだった。

簡堂の調査に依って水野忠邦は、天保十二年十二月に、「株仲間解散令」、「人返し、人別改め」等の改革を進めたが、どれも効果が裏目に出て失敗した、だが忠邦は、一層羽倉簡堂を重んじて、天保十三年正月には納戸頭に勘定吟味役を兼ねさせた。簡堂は天保改革の中心をなす「江戸、大阪十里四方の上知」の改革案を献策した。

天領、旗本領、藩領の錯綜する江戸、大阪周辺の所領を統一し、海防体制と幕府財政を補強せんとするものであった。然しこれも反対派大名、旗本の上知令反対によって老中水野忠邦の政治生命をも断たれるに至った。

天保十四年　九月十三日、「越前守、御勝手向き取り扱い不行き届きの儀これあり、云々」と老中を罷免され簡堂も職を追われた。以後世俗の縁を断って専ら読書に明け暮れていた。近藤熊蔵は嘉永六年赦されて旗本に復す迄簡堂の下にあった。其の年ペリー来航のこと等で国家多事となり、外国奉行川路聖謨よりの幕政参与の内諭もあったが、辞を病むを以って辞して出なかった。文久二年（一八六二）　八月二十一日尊王攘夷の風雲急を告

げるを他に静かに没した七二才であった。墓所も因しくも中目黒鎗ケ崎から程遠くない三田正泉寺であった。

だが此のとき天保九年、二人には遠い未来であった。簡堂は四十九歳、富蔵三十四歳であった。幕府の代官と流人と言う身分立場を超え、歳の差を忘すれる程の睦みようで夜の闌けるのも気付かなかった。

夜更けて名主宅を辞して長戸呂屋敷の囲い内にある土工長屋へ戻る富蔵は、馴れた夜道であったが足元が危なかしかった。

父重蔵以上に酒に強い富蔵であったが、小石に躓き岩に凭ったりし乍ら浮き立つ足を運んぞ。

「やはり国地の酒は美味く、八丈の粟粧の濁酒とは違って利くわなァ」

と呟き乍ら、黄金色の江戸の酒と違って黒い粟粧は、紫陽花の葉でねかすからだと嘆いた。

八丈の濁酒の粟粧は、粧一升五合と籾玄米三升五合に水五升を混合して、七升の濁酒をつくる。それでも米穀欠乏の八丈では不届として、文政十一子年より穀物払底ノ場所に御座候間、造酒之儀法度申渡置候、と申渡しが出たが表向きのことであった。

恰度、申渡しが出た年、富蔵は逸と夫婦になった。水汲女を娶るとは言え、披露のときは実家の沖山家親族や媒酌の高橋長左衛門、名主菊地武豊を始めとして陣屋役人等が来ての酒盛りとなった。

「神事、祝儀ノ節ハ少々宛差免シ置候也」と言う訳で大びらであった。勿も八丈では銭金などは通用せず、田作り畑掘り材木の山切り、屋根葺替えなどで働手を頼むのには酒が無ければ誰も来ない。水汲女の禁止と同じように酒造りの禁止など少しも守れないのだ、富蔵は独り笑いをし乍ら踉跟き歩いた。

八丈島では薩摩藷が飢饉の救荒用だけでなく主食に代るようになっても、藷焼酎を造るようになるのは未だ先のことであった。嘉永六発丑年の四月に薩摩出水郡阿久根町の丹宗庄右衛門秀房が流されて、村人に藷焼酎の造り方を教えてからであった。

続く。

編集子のメモ

○秋季号をお届けする。季刊のサイクルを追う編集でも結構忙しいものだ。幸い執筆陣の意欲をもって今号も多彩を盛ることができた。新しい顔を加えて六人六作と賑やかである。作者が違うからということでなく、その六作すべてがまた傾向を異にする。「まんじ」の「まんじ」たるゆえんであろう。

○三戸岡道夫「支店長の妻たち」の休載は別掲のごとき事情によるが、刊本の方は「朝日」、「産経」などの読書欄の好評を得、またテレビドラマ化を決定、新春放映の予定である。

○この号の紙面は従来の号と異ることにお気付きの方もあろうか、本誌はタイプ印書による製版だが、使用機種が違い、ピッチの違いが微妙に影響するようだ。今号に限り馴染みの人が外遊中とあって止むを得ない事情によるのだ。ギァの関係で行の不揃いも気になる部分があったが、加藤さんが修正してくれている。ワープロではそんなことはないのだが、印字の切れの点でタイプを捨てがたいのである。活版と写植の相違に似ている。

なお、今号担当も熟練者に相違なく、よく活字を拾ってくれているのだが、行アケをすべて追い込みにされていたのには困った。書き手のほうで苦心している文章の間合いの微妙をお解りいただけなかったようだ。（お）

「まんじ」第三十七号

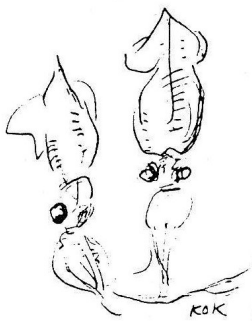
平成二年八月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（二九一一）六五五七　ますもと
郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（二六一―五七四三）



錫婚旅行は雲に乗って（二）

佐々木一郎

機は、ズシッと重い音を立ててホノルル空港に着地すると、そのまま五分程軽い滑走を続けて、ようやく停止した。

搭乗客たちは、無事にハワイに着いた解放感に思わず歓声を挙げ、言い合わせたようにシート・ベルトを外して背伸びをし、ゆっくりと頭上のハットラックから荷物を下ろし出した。

そのうちに誰ともなく、手荷物を片手に子供の手を引きながら逃げるように機内から消えて行く搭乗客たちの姿に気付き、それが空港待合室の入国検査の早い順番を取るためだと悟った途端、機内は一遍に騒然となった。そして今度は取り残された者たちがまるで何かに憑かれたように先を争って出口に犇き、接続通路の中は靴音の反響で一杯になった。

二階堂夫婦も、次から次へと押されたり擦り抜けられたりしているうちに、何時の間にか小走りになっていたが、ふと気が付くと、急いでいるのは日本人観光客ばかりで、背広をきちんと着こなしたイギリス人やフランス人らしい搭乗客たちは、歩幅が広いためか、それとも入国受付の順番が確保されているからか、特に急いだ風もなく談笑をしながらゆったりと歩いていることに気が付いた。二階堂は、国外旅行に出る度に、日本人のせせこましさに眉を顰める光景に度々出会うのだが、少なくとも、経済大国日本の矜持は国外に出た途端消滅してしまうように思えてならない。

待合室からはエスカレーターで三階の入国手続き室に向かうのだが、ふと前方を見ると、先頭のグループの中に何時の間に入り込んだのか浅利啓子と木下良江の二つのショート・ヘアーの後ろ姿が見えた。二階堂は反射的に後ろを振り返って見ると、案の定、大木秀彦と山口亜希のご両人は二階堂夫婦よりずっと後ろの列にのんびりと並んでいる。視線が会うと大木は笑って会釈をしたが、

その口の端から白い歯が零れて、機内ではあまり気が付かなかったが、いかにも清潔そうな好青年である。

入国の手続きが始まると、二階堂はまた気持ちを重くする光景を目撃しなければならなかった。

日本人や白人たちが簡単に手続きを終えて続々と入国しているというのに、後回しにされて事務所の隅の方に蹲って指示を待っている数人の黒人の姿だった。真っ黒なのはアフリカ系、それよりも少し浅黒いのはアラブ、パキスタン、アフガニスタン、それともインドなどの東南アジア系の人たちなのであろうか。

「また、厭なものを見ちゃったよ！」

「あの黒ん坊のこと？」

「しっ、『黒ん坊』は差別用語だ。誰が聞いているか分からない」

「でも、日本語じゃあ分からないでしょう？」

「分かる、分からないの問題じゃなくて、使っちゃいけない言葉なんだよ……」

「はい、旦那様……。それにしても、あの人たちは何なのでしょうね」

「うん。パリのドゴール空港で見た時はハイジャックの容疑らしかったけど……」

「あの頃は、あっちこっちにハイ・ジャックがあったから……。じゃあ、これ、麻薬の密輸容疑かしら？」

「うーん。そんなところかなあ……。いや、待てよ書類の不備ってこともある」

「書類の不備って何ですの？」

堯江は、ハンド・バックからチューインガムを取り出して一枚を夫に勧めた。

「まあ、何と言ってもパスポートの不備だろうね。記入してない箇所があるとか、証明が不十分だとか、写真と本人の顔が極端に似てないとか、ひどいのになると偽造のパスポートだったり……」

「そんな……」

「いや、本当の世界を知らない僕たちには、想像も付かないような事が色々あるらしいんだよ。第三世界と呼ばれている国々の中でも、やっと独立に成功して自由を獲得したものの、領土は狭いし、ろくな産業が無くて、国民は飢餓やインフレに苦しんで、万止むを得ず国際法を犯して麻薬を栽培したり、パスポートの偽造をしたり、密輸を企てたりする国もあるんだということを何かで読んだ覚えがある」

「あ、そう言えば、日本だって武器輸出をしているってこの間の週刊紙に出ていましたわ。折角の平和憲法が泣くって……」

「うーん。これも週刊紙情報だけど、日本の死の商人たちにはそれぞれ大企業がバックに付いていて、いざという時には安全な場所に逃げ込めることが出来るけど、この小さな国の人々は、駄目ならまた元の領主国に詫びを入れて、自由を断念しなければならないという絶対絶命の土壇場にまで追い詰められているんだという」

「……でも、世界中からそういう国には援助の手が差し延べられているんじゃありません？」

「それはその通りなんだけど、問題はその国に救援物資が届いた後の、国内の配分方法なんだよ。平等に難民たちに配られるのなら問題ないんだけど、これらの国の中には、国王が独り占めしてしまったり、政府の高官たちが山分けにしてしまった例が少なくないって話だよ。国内の配分はその国に任せられるからね」

「そんな、好い加減な……」

堯江が思わず大きな声を出したので、前に並んでいた人々が驚いて振り返った。どの顔にも余り長い間待たされている苛立ちが見える。ふと見ると、外の五つの窓口では係官がパスポートにポンポンとスタンプを押しては次々と入国させているのに、この側だけは一人のアラブ人らしい男のところで支えている。何か係官と盛んに押し問答を繰り返しているのだが、互いに譲らないので列が全然動かないのである。そのうち係官は行列の人々の罵声を尻目に、奥から分厚い書類綴りを持ち出してきた。

「これは赤十字で聞いた話なんだけど、ある貧しい遊牧民の種族の国へ食糧を運んで行ったところ、いきなり一番元気の良い若者たちがムシャムシャ食べ出した。驚いて、『一番衰弱している幼児や老人たちに先に遣ってくれ』って頼んだら、皆吃驚した顔をしている。よく聞いてみたら、この種族では、動物でも鳥でも魚でも捕まえて来た者がまず最初に腹一杯食べる、そして最後にこの狩猟や釣りに最も役に立たなかった者たち、つまり老人や幼児が食べる。これがこの苛酷な環境下で種族が生き残れる唯一の手段なのだと言うんだね」

「それ、どういう意味？」

「つまり、食べ物を取って来ることが出来る一番強い者を大事にして置かないと、結局は全家族が飢えてしまうということらしいよ」

「まあ、あたしには到底考えられない論理ね」

「しかし、頷ける点がないでもない。つまり、彼等は、僕たちが想像する以上に厳しい生存努力をしているんだということをね。どうもそうなると、『老人福祉』や『児童福祉』の推進を叫べるのは、先進諸国か、それに続く発展途上国までできりかもしれないなあ……」

「随分悲しい話ね。同じ人間だっていうのに……」

「あの黒人たちの母国も、政情が不安定なのかも知れないね。同じようにパスポートを示しても、日本人やアメリカ人やイギリス人なら『観光に来ました』って言えば『良くいらっしゃいました』で済むのが、ああやって後回しにされて厳重な検査を受けなければならないんだから、何か理由があるのだろう」

やっと二階堂たちの順番がきて、手続きを済ませ手荷

物を受け取り、出迎えのA旅行社に先導されながら外に出た途端、ムッとするような熱気が襲い掛かって来て二階堂は思わず立ち竦んだ。無理もない。とにかく日本の冬のさ中に出立し、機上では約七時間適温で過ごした直後に真夏の太陽の直射に遭遇したのだから……。

ハワイは「常夏の島」と言われるだけあって一年中温暖な日が続く。熱帯と言ってもベーリング海の影響と常に北東から涼しい貿易風が吹いて来るため、夏でも摂氏三十度を越えることは少なく冬でも二十度から二十五度程度で、その上に湿度が低くてカラッとしているので、年平均約二十四度の島の生活はなかなか快適だと言われている。しかし、直射日光は強烈である。そう言えば、A旅行社の「旅行マニアル」にも、ホノルル出身の帰休兵がつい気を許して炎天下で昼寝をしてしまい、全身に大火傷を負って入院した実話が載せてあった。

ハワイ美人にレイを懸けて貰い、頬にキスをされると、あとはA旅行社の指示で観光バスに一目散に走り込む。社内の冷房でほっと一息ついて何気なく運転席の方を見ると、吃驚するような大柄なガイド嬢が入って来た。ピンク地に縦の水玉模様をあしらったムームー風なワンピースを着た堂々とした体軀の女性で、身長は百八十センチメートル位、体重は少なく見積もっても八十キロはありそうな混血女性である。顔の浅黒さから見ると、ポリネシアの血がかなり入っているようだ。とにかく日本ではあまり見かけない容姿に圧倒されて、観光客たちは唖然として眺めていたが、ガイドが始まると、今度はその歯切れの良い日本語にまた吃驚した。聞けば、日本人三世で勤続十年のヴェテランらしい。チョイス夫人という。

「アローハ」

「アローハ」

観光客の中にはなかなか旅慣れた人がいて、すかさず彼女の問いかけに答える。それにつられて全員が唱和すると妙にハワイへ来ている雰囲気が漂って来る。こういうことが大の苦手な二階堂も、掠れた声で「アローハ」と呟いた。ハワイの旅はいよいよ始まった。

「アローハ。ハワイでは、よくいらっしゃいました、お早うございます。今日は、今晩は、ご気嫌いかがですか、そういうご挨拶の言葉は全部アローハ、という言葉によって代表されます。

外国からいらっしゃったお客様にアローハと言って、生の素敵な花を首から掛けて頂く習慣になっているのですが、今皆様に貰って頂いた花は随分豪華な花で、カーネーションの間に白いチューブのような花が入っています。チュガロスって申しまして匂いが良いですからレイの花に使用されています。

もう一つの違った花は紫の花、これは蘭の花で、ベンナオーケットと申しまして、匂いはございませんが非常に良いお花でございます。

これから市内観光をお楽しみ頂きましたあと、「クイーン・カピュラアニ」というホテルで昼食を取って頂きまして、その後簡単なご滞在中の日程をお話しします。ハワイのホテルのチェック・イン・タイムは三時の予定でございます。

ハワイでは観光バス、乗合バスの中は一切ノースモーキング、ノードリンキングになっておりますので、バスの中でのお煙草、お飲物はご遠慮下さいませ。前方にはバッセンジャー・セフテイのことが書いてございまして、進行中のバスの中はどなたもお立ちになってはいけないことになっております。また、観光地とか公園、ビーチでは物を絶対に売ってはいけないことが法律で決まっておりますので、店は何もございません。そういう所に奇麗な花が咲いているからといって取ったら罰金でございます。紙屑を散らかしても罰金でございます。ただ今ホノルル警察で厳重に取り締まっておりますことは、ピーチでお酒を飲んでいる人です。見つかりますと、その場で手錠を掛けられて警察連行でございます」

「どうも、このガイド、大分脅かすなぁ」

「あら、脅かしじゃないかも知れませんよ。所変われば品変わるって言いますからね」

「ところで、飛行機の中じゃ幾らか寝られたかい？」

「全然。ちょっと、ウトウトッとしたかと思うと、すぐ目が覚めちゃうんですもの。とにかくあの飛行機の音はちょうど電車がトンネルの中を通る時のような煩さね」

「僕なんか、自慢じゃないが殆ど睡れなかった。一晩中読書灯を点けっ放しさ。お陰で持って来たクリスティーの『ナイルに死す』を半分以上読んじゃった。

しかし驚いたねえ。夜中の二時十分頃になったら突然アナウンスが入って『ただ今のハワイ時間は、日付変更線を越えましたので、十二月二十六日月曜日午前七時十分でございます』とくるんだからねえ。慌てて時計の針を戻したけれど、実際に、それから三十分も経たないでハワイに着いたら、もうちゃんと朝の七時四十分の景色になっているんだもの……」

「それも、前の日のね。この日付変更線とか時差は、実際に経験した人じゃなければ分からないわね」

「うん……」

そっとバスの中を見回すと、約四十人いる乗客の半数は居眠りをしている。一番前の席にちゃっかりと座り込んでいる浅利と木下も、二階堂夫婦の後部座席の大木たちも眠り込んでいる。

しかし、ガイド嬢は慣れたもので、起きて聴き入っている残りの半数の乗客に向かって、益々熱心に説明を続ける。体格も良いが、声も良い。

「右側の白い花、ブルメリアと申します。匂いが大変

よろしうございます。日本の皆様。あたしたちは、日本旅行を致しまして、東京駅で人を見ただけで腰を抜かして帰って来ております。いかがでございます。この人口の少ないこと……。ホノルル市内、現在住んでいる人が六十万人ぐらいです。

左側の赤いお花、これポインセチアで、クリスマスフラワーとも呼んでおりますが、今年はちょっと色が悪いようでございます。

右側に黄色いお花が咲いております。アラマンダーと言います。

あの、お小さい方がいらっしゃいますから、ご説明します。右手をご覧になって下さいませ。青い実がなっていますね。木に……。これが椰子の実です。よく日本の皆様、ハワイへ行って椰子は見たがココナッツは見なかったわ、なんて嘘ばっかりおっしゃる。

椰子とココナッツは同じものでございます。（爆笑）

ホテル内にはいろいろとレストランがございますが、今日は女性の方が多うございますので、ぜひハワイでしか飲めないトロピカルドリンク、と言われます南国のお酒、殆どがジュースでございますが、まず、ブルーハワイ、チチ、マオタイを飲んでお帰り頂きたいと存じます。

左側に白い建物が見えて参りました。こちら、救世教のハワイ支部でございます。それからタンポポのようなあざみのような真っ赤な花が咲いております。これ、レアの花と言います。

日本の皆様。これ、珍しいんです。木はオフィア、花はレフア、木と花の名が違います。この花を採ると雨が降るという伝説があるんですね。

左側の木に青い実がなっていますが、あれ、パパイヤでございます。便秘の特効薬です。ハワイでは女性、子供には欠かせません。

そして、左側のオレンジ色の花、ベード・オブ・パラダイス、極楽鳥でございます」

「うーん、確かに話しは巧いけれども、花の説明ばかりじゃ退屈だなあ。どうも僕は花は苦手だ……」

「あら、そんなこと無いわ。あたしには、とっても興味がある説明だと思うけど……。第一、市街地観光を後回しにしてダウン・タウンから直接ヌアヌ・パリ峠に登っているわけでしょう？　ここは道は良くても山ばかりだから、木や花の説明をするきり説明をするものが無いのよ」

「ま、そう言えばそうだけど……」

オアフ島は南側のホノルル地区が観光の中心になっている。ワイキキ海岸、高層ホテル群と繁華街カラカウワ大通り、ダウンタウン地区のイオラニ宮殿、カメハメハ大王像、諸官庁、さらにはパール・ハーバー、ダイヤモンド・ヘッド、大きな植物園、動物園が、一年に何百万人もの観光客を集めている。

このバスは、ホノルル空港からヌアヌ・パリ展望台に向かい、取って返してダイヤモンド・ヘッドやパンチ・ボール、そしてホノルル市街地見学の予定となっている。

気が付くと、車内の乗客はいつの間にか目を覚まして、説明に聴き入っている。

「右側の方に薄いピンクの花が咲いています。これをベクアの花と申しまして、日本桜って呼んでおります。ただ今ジャングルみたいな所に入って参りましたが、ハワイには蛇は一匹もいません。（嘆声）ただ朝が早いですから、時々モングースといって、いたちが飛び出して来ることがあります。ハワイは昔から砂糖きびの畑が多くて、鼠が随分住んでいます。鼠を捕ってくれるんじゃないか、といって、昔、東南アジアの方からモングースを連れて来たわけなんです。ところが、鼠は昼間寝て夜活躍します。モングースは夜寝て昼間活躍しますから一度も出会ったことがないようで、（笑い）何でもやってみてから気が付くというのがハワイ人で、『いけんことした』言ってますが、（笑い）あとの祭りでして、今では、鼠もモングースも増える一方でございます。（爆笑）

アメリカ合衆国でハワイ程お米がよく売れる州はございません。あたくしたちこちらの日本人は、朝は必ずご飯にみそ汁、それもインスタントなど頂きません。みそも全部ハワイで作っております。ケミカルが入っておりません。だからみんな、朝炊いたご飯をお弁当箱にしっかりと詰めて、弁当箱もスーパーマーケット・ダイエーで売っておりますので、（爆笑）プラスチックの良いのを買って、サラリーマンは全部家からお弁当持ちでございます」

「おい、堯江。耳が痛いだろう」

「あら、朝ご飯はパンの方が良いっておっしゃったのはあなたじゃない！」

「どんな白人の家でも夜は必ずご飯でございます。だから、アメリカ人のことを米国人と申します。（爆笑）」

「なんだ。落し話か。ハハハハ」

「ホホホホ……」

「ちょうど右下がホノルル市の水道局の水源地でございます。今日から皆様に飲んで頂く水道の水の中には一滴の消毒薬も入っておりません。非常にハワイの水道の水はよろしいのです。お年寄りが長生きをしたり、病気が治らない方がハワイに療養にいらっしゃると、もう、不思議なくらい早く治ったとおっしゃるのは水のせいだと思います。

正面の山の向こうが海でございまして、九州の桜島の錦江湾の景色によく似ていると言われるのですが、昭和十六年十二月七日、日本海軍航空隊の真珠湾攻撃というのがございました際に、日本の飛行機が攻めて来たのも実はこの山の向こうです」

車内がちょっとざわめいた。

二階堂は、写珠湾攻撃と聞いて、それまで三十数年間忘れていた悪夢が蘇った思いがした。そうだ、ここはあの真珠湾のある国だった。

二階堂がこの真珠湾攻撃のニュースを聞いたのは、旧制中学四年生の学期末試験が終わって、校庭で体力章検定の投擲練習をしていた時だった。その後、特殊潜水艇の隊長の岩佐中佐には軍神の名が冠せられて報道され、二階堂も他の若人と同様、長い間尊敬と憧れの気持ちを抱いていたことを覚えている。

その数年後、昭和二十年五月には二階堂自身も殉教精神にも似た心地で、最後の学徒出陣に加わった。

しかし、戦後発表された真相の報道で、この一身を投げ出した純粋な愛国的行動が、実は一部の軍部及び軍国主義者たちの野望に操られた結果に過ぎなかったのだという事実を知らされた時、二階堂は何とも言いようの無い空虚な思いに長い間悩まされた。と、同時に、真珠湾攻撃も「宣戦布告前の奇襲」という武士にあるまじき行為だったのだと聞いて、それこそ、何処にも持って行き場のない程の憤りに燃えた。これでは、自分の命を懸けた大切な青春は何処に消えて行ってしまったのだろうと彼は泣きたい思いだった。

これが、二階堂の二十の青春だった。

その真珠湾奇襲の紹介を、それも現地で、突然ガイドされたのだ。二階堂はハッとして、思わず俯いた。

しかし、車内のざわつきの原因は別のところにあった。風光絶佳と言われるヌアヌ・パリが見えて来たための歓声だった。この峠は、表オアフと裏オアフを結ぶメイン・ハイウェイの途中にある峠で、ハワイ原語の「涼しい峠」という意味らしい。また、ハワイ王朝を築いたカメハメハ大王が、最後の統一戦争に勝利した古戦場としても名高い。

下車して笑いさざめきながら展望台に駆け登って行く若者たちの中には大木秀彦の姿も山口亜希の姿もあった。少し遅れて浅利啓子も楽しそうな顔付きで登って行く。

考えてみれば、彼ら、彼女らには、「真珠湾」という言葉は何の反応も起こさない言葉だったのに違いない。いや、仮に単なる知識概念として理解していたとしても、二階堂のように青春を回顧する感慨は伴わなかった筈である。なぜならば、彼ら、彼女らは戦争が終わってから三十年も経ってから生まれ、戦時中はおろか戦後数年にわたって続いた日本国民の極端な窮乏生活苦さえ知らずに育って来ている人たちだからだ。

ガイド嬢にしても、「日本海軍航空隊の真珠湾攻撃というのがございまして……」と淡々としゃべっていたが、この人も恐らく会社のガイドブックの受け売り程度なのであろう。当然、二階堂より十歳年下の妻堯江にしても、昭和十六年と言えば小学校へ上がったかどうかという頃だから、多分何も覚えていないであろう。

と、言うことは、この観光バスの中の観光客、ガイド、運転手を通じて、真珠湾攻撃の当時を体験しているのは最年長の二階堂一人ということになる。

彼は、また別の意味の、何ともやり切れない思いが込み上げてきて、憮然たる面持ちになった。

二十分程の休憩でバスはスタートしたが、登って来たパリ・ハイウエイを下るコースなので、今度もまた山また山、緑また緑の連続だった。

「この左右に大きな木が生えておりますが、ユーカリの木でございます。このユーカリの木を好んで葉の大きい蔦のようなものが巻き付いているんですが、『象の耳』と申しましてハワイ独特の蔦でございます。

今でこそ、こういった旧道は観光バスしか通りませんが、この道は昔からあるハワイの本通りでございまして、昔は馬に乗ったハワイの王族たちがこの坂道を越えカイルワという所に避暑に行かれたのですが、帰りにもこの山道を通りましたときに歌いましたのが、『雨雲が低く垂れ、木々は憂いに満ちて……』という『アロハオエ』の歌だと言われております。一説には、滅び行くハワイ王朝を嘆き悲しんでリリウオカラニという女王様が作った歌とも言われております」

ここでガイド嬢は、ゆったりとしたテンポで「アロハオエ」を原語で歌う。

成程、そういう説明を聞いてから耳を傾けると、いつも単なるムード音楽として聞いていたハワイアンが、荘重でかつ哀調を帯びて聞こえるから不思議である。

Ha aheo e Ka ua i na pali
Ke nihi a elai Ka nahele
E uhai ana paha i Ka lipo
Pua ahihi lehua o uka

Aloha oe, aloha oe
E Ke ona ona no ho i Ka lipo
Ono fond embrace
E hoi ae au
Until we meet again

車中、寂として声なし。

「荘重なものだねえ……」

「ハワイのフラダンスだって、伝統的な民族舞踊だって説明書に書いてありましたよ。あなたのように、脚の腰ばかり見ていちゃいけないんですって……」

「……」

「では皆様、今度は右下をご覧下さいませ。日本人墓

地が見えて参りました。ただ今の経済大国の日本ではございません。明治元年頃、広島県、山口県、福岡県の方から移民で渡っていらっしゃった方たちで、残念ながらだれ一人として生まれ故郷日本の土を踏んで死んだ人っておりません。また、言葉が出来ませんでしたから、白人社会から馬鹿にされました。しかし生まれて来る子供達だけはこんな惨めな思いをさせたくない、せめて教育だけは付けてやろうと言って、親が一生懸命教育の方にお金を使ってくれましたお陰で、今のハワイは日系全盛時代だと言っても良い位、日系人が政界、財界で活躍しております。今のハワイの州知事はジョージ・アリヨシといって日系二世でございますし、ハワイ大学の総長もマツダ・フジオといって日系二世でございます。

また、教育界で活躍している方が多くて、公立の小学校中学校高等学校の校長先生の八十五パーセントまで日系が占めております。医者、弁護士なども日系が多うございます」

この時、後ろから肩を叩く者がいるので振り返ると、大木が手に小冊子を翳して

「これに、ジョージ・アリヨシの小論文が載っているんですけど、ご覧になりましたか？」

「えっ、アリヨシ知事のですか？」

「ええ、もし良かったらお使いください」

礼を言って受け取ると、それは、「バンナム・グリッパー紙」に載ったハワイ州知事ジョージ・R・アリヨシの「アロハ・スピリット」と題する小論文だった。二階堂はじっくりと読み、堯江に回した。さいわい、行きと同じ道を戻っているせいかガイドは小休止している。

論文の要旨は次のようなものであった。

「ハワイ程色々な国の人々が仲良く共存している所はありません。ハワイ以外の国では、国籍の違った人々がお互いに信用し合ったり、和気靄々とは暮らせないのが現実です。しかしハワイでは、みんながっちり一体となって住んでいるのです。

色々の文化で育てられた人々が、お互いに違う習慣とか考え方を見ながら生活して行くので、様々な生き方を理解出来るようになるのです。

とにかくそういう点でハワイは特別で、あらゆる種類の人々とうまくやっていける人達が育っていく土地柄なんです。これは世界中でわがハワイだけではないかと自負しています。

これを私共は『アロハ・スピリット』と呼んでいます。ハワイを訪れた人々で、この『アロハ・スピリット』を経験し、それを外の人にも伝えたくて、私に手紙を寄越した人が何人もあります。

恵まれた自然と『アロハ・スピリット』は、わがハワイの誇りです。殊にハワイに於いては、色々な人種の人々がそれぞれの国の文化を失うことなく共存していて、

このことは、実に重視すべきことだと思います。

日系の人々と話をするとき、私はいつでも『祖国の文化を恥じないで、その文化を持ち続けて下さい』と申し上げています。自分のアイデンティティを無くさないことは実に大切なことだと思います。

私自身、父は福岡、母は熊本の出身です。そして父母の国『日本』を誇りに思っています。プライドというものは大切で、特に物事に成功するには、このプライドと自信を持つことが必要なことだと思います」

「うーん、堯江、僕はアロハ・スピリットという言葉を今まで知らなかった」

「あたしも初めて……」

「……ハワイには、実に素晴らしい思想があったんだねえ。こんな素晴らしい言葉を今まで知らなかったなんて、僕は教師としてつくづく恥ずかしい」

「本当に……。あたしたち日本人の島国根性を反省させられる言葉ですわ」

「うん。僕は、ハワイを『太平洋の楽園』と呼ぶ意味がやっと分かったよ。気候が温暖で、レジャー施設に恵まれているということだけじゃなくて、人種差別が無いということだったんだ」

「ええ、アバルトヘイトの国の大統領にこの州知事の爪の垢でも飲ませてやりたいくらい……」

「まったくだ。今の世界はあまりにも幸せの人間と不幸せの人間の差があり過ぎる」

二人で大いに慨嘆していると、またガイドが始まった。

「入って参りました所、ゴルフ場なんて事おっしゃらないで下さい。国立墓地、バンチ・ボールの丘でございます。太平洋国立記念墓地。みんなお墓で、しかも土葬でございます。ハワイじゃ、クリスマスの日、お正月前にはみんな息子や孫の墓にお参りします。ただ今通過しますこの左右の墓地は、ベトナム戦線で亡くなりましたハワイ出身の十八才前後の青年達の墓です。

暗い感じがしませんでしょう。全部これ生の花でございましてね。一週間に一回ハワイではお墓参りに来るんですが、昨日はクリスマスでしたから皆来ています。この左側の大きな木、これ菩提樹でございます。亡くなった方の中には仏教徒がたくさんおります。日系人と言えば殆どが仏教徒でございますから、わざわざアメリカ連邦政府がインドから船で運んでくれた木でございます」

下車してから改めて眺めると確かに広い。ゴルフ場と間違えるな、とは言い得て妙である。日本でこれだけ広い緑の地帯と言えばゴルフ場位であろう。旧火口丘一杯に連なる芝生には、松に似た大きく枝を広げた常緑樹が点々と植えられ、その間を舗装された道路がうねりながら、或は幾重にも別れながら走っていて、その傍らには

整然と並べられた墓地が幾つもの区画に分けられて設けられている。どれも、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争のハワイ出身の戦死者を葬ったもので、総計二万一千体を越えるという。石碑は、コンクリート製の上げ蓋の上に墓碑銘が置かれ、アンセリウム、オーキッドなどのハワイの美しい花が飾られている。

墓地の中央には、イタリア産の大理石で作られた巨大な慰霊塔が建てられ、「平和の女神・コロンビア像」が大きく長く続く石段の上から暖かくこの戦争の犠牲者たちを見守っている。

ガイド嬢が遠くに見える一角を指さして、

「あの墓地は日本とアメリカの戦争中に二世部隊が召集されまして、イタリー戦線で壮烈な最後を遂げました日系の二世、四四二連隊百大隊の方が眠っています。ほとんどが十六才前後の青年たちでございます。そりゃあもう皆様。戦争当時は、ハワイに住んでいた日本人は、惨めなものでございまして、家屋没収土地没収、財産没収でございます。当時十六才前後の青年たちが、『一つ、我々の血を以てアメリカに対する忠誠を誓おうじゃないか』と、ここに結成されましたのが二世部隊でございますが、当時の大統領ローズ・ベルトは、対日本戦線には使わないで、一番戦争のひどかったイタリー戦線の方へ連れてまいりまして、そこで壮烈な戦死を遂げております」と説明をした時には、一膝シーンと静まり返ったが、それから約三十分間の自由解散が告げられると、忽ち先を争って「コロンビア女神像」の方に殺倒し、まるでピクニックにでも来たような笑い声を上げながら互いに記念写真を撮り合ったり、中にはガイド嬢に頼んで撮って貰ったりしている。ここでも二階堂は一人ぼっちだった。

彼は、一行に背を向けて、広いアスファルトの道路を突っ切り、緑の芝生の中に一メートル置きぐらいに点在する小さな墓地に黙禱を捧げながら歩み続けた。

「どうなさったの？」

後から追いかけて来たらしい堯江の声がした。

「うん、ここはハワイ旅行の目的地の一つだからね。ちょっとお参りがしたかったんだよ」

「そう……」

堯江は、さざめきの聞こえる丘の上をちらっと振り向きながら頷いた。

このハワイへ日本人が「出稼ぎ人」としてやって来たのは明治元年五月のことで、「元年者」と言われた。

この人々は、正式な政府同士の取り決めによる移民ではなかったので、農業専業者が少なく、環境にもなかなか馴染めず、加えて苛酷な労働条件を課せられて苦労したが、それでも、「頑固者」の代名詞のように使われる「元年者」たちだったから、結構、最後まで頑張り抜いて成功した人も少なくなかったらしい。

千八百八十五年（明治十八年）政府間契約の「官約移民」が東京を出港した。内訳は山口四二〇、広島二二二、神奈川二一四、岡山三七、和歌山二二、三重一三、静岡一一、滋賀五、宮城一人。当時日本は全国的な大凶作で、その被害の大きい県ほど、離農して新天地に一攫千金の夢を託したのだった。

その後、この「官約移民」は二十六回実施され、三万人をハワイに送り込んだが、県別では広島、山口が圧倒的に多い。

しかし、彼等を待っていたのは、元年者の時とあまり変わらない慣れない気候、風土と生活習慣、そして苛酷な労働条件だった。これらは、契約違反として、正式機関を通じて次第に改善されていったが、初期の移民たちの苦労は今なお二世、三世を通じて語り伝えられている程酷いものだった。

「官約移民」の時代が終わると、私約移民（呼び寄せ移民）の時代となった。

成功者の一人、沖縄出身の中本辰吉の回顧談。

「父がハワイへ行ったのは私が九才の時でしたよ。十八才まで待って、父の『呼び寄せ』でハワイへやって来たんです。父はワイパフ（オアフ島）にいました。そこには、フィリッピン人が多かったことを覚えています。ワイパフのプランテーションには居留地（キャンプ）が二つあって、下の方は内地（沖縄以外の日本人）の者が占めていました。これは、内地の方が、先にハワイに来ておったからでした。

プランテーション（耕地）の仕事は、男はハッパイコウ（砂糖きび運び、元来は牛がする重労働）、女はパイラ（炊事）。一日働いても幾らにもならなかったねえ。わしらは、一つの家を何人かで借りて住んでいました。

三食は大コックに頼みました。大コックというのはミセスの婦人のことです。肉片などはツーバウンドを七、八人で共同で買って、それを分けて食べておった。私は、ワイパフのプランテーションには一年もおらんかったんで、ハッパイコウの苦労もあまりしないで済みました。

ワイパフを出て、島の裏側にあるカハルーという所で五、六年暮らしたけど、そこの仕事は荒れ地をパイナップル畑にする仕事で、楽だったね。ただ、一日三十五セントにきりならなかった……。

それからホノルルへ出たのよ。そこで人に使われて、白人の車のドライバーになった。自分でトラックを持とうとしたんです。ハオリ（白人）がヤード（庭）に車を放り出してあったので、二百円（ドル）位出して買ったのよ。この車を使ってレストランから出る豚の餌を運んだり、道を作るときに手伝ったりしたので、自然と家を作る、ガレージを作る、トラックも持つようになった。どんな家かって？　公園に置いてあった古い板を買って来て、自分で作ったハウスよ。このハウスに二年位いた。

それからモロカイ島に移ったけど、移る時に結婚した。オアフ島では車は高いから、モロカイへ行って二トンハーフの車、五、六トンは積める車を買った。そして、プランテーションのパイナップルを積んで桟橋まで運ぶ仕事をした。それはプランテーションとのコントライキ（契約）よ」

日本人移民が「出稼ぎ移民」から「定住時代」に入る頃は、生活が落ち着き経済的な余裕が出てきたので、一様に家庭を持つようになった。日本で結婚していた人々は早速妻子を呼び寄せ、独身者は、事業や旅費の都合で写真を交換して結婚した。そのため写真が若い時のものであったり、財産が誇張して書いてあったり、本人が写真とは別人であったというような悲劇もあったが、この「写真花嫁」たちが、明治末から大正年間一杯、続々と大量に海を渡ってハワイに移住してきた。

平良ウシは「写真花嫁」の一人。

「私がハワイに来たのは二十七才。結婚してから七年間、沖縄の親の元で『呼び寄せ』を待ったの。

ホノルルに着くと、ハズバンが迎えに来た。ハズバンはマウイ島のパイヤ耕地で働いていました。

耕地では私は何でもやりました。始めはハッパイコウ（砂糖きび運び）のクック（炊事がかり）。そのあとカチケン（砂糖きび刈り）。今でも『馬鹿らしい仕事だったのう』言うて。今、ワン・デー、三千円やけえ。

ルナ（監督）はポネギー（ポルトガル）が多かった。女は子供が出来ると、耕地現場で働くことは出来ないけえ、キャンプで独身者のために食事を作ったり、洗濯をしたんや。

わしらは二年間パイヤ耕地で働いて、オアフ島のエヴァ耕地に移った。ここに六か月いてまたマウイ島に戻った時、第二次大戦となった。しかし、もうこの頃は、オアフ島のワイホレで農民（ファーマー）になっていたのや。

プランテーションで奴隷のように使われていたわしたち夫婦は、自分のプランテーション（耕地）を持つファーマーに出世したんや。

ファーマーの仕事は死ぬまでやりますよ。なにしろ、自分の仕事やけえ。朝もハナハナ（労働のこと）、夜もハナハナや」

「本当に、元年者や官約初期の移民は、考えただけでも恐ろしいような重労働に携わっていたんだなあ！」

「名前は官約移民でも、実際は奴隷だった、って書いている人もいるわ」

「そうそう、僕もハワイ旅行に備えて大分図書館通いをしたけれど、資料を読めば読むほど、よくここまで耐えて来たものだと考えたら、思わずゾーッとしたね。こ

のハッパイコウなんて、牛や馬がやってた仕事じゃないか。それを人間にやらせるなんて……」

「何の技術も持っていない人たちだったから、どんな仕事でも良いから、まずそれにしがみ付くより仕方がなかったのよ。それこそ死物狂いで……。それから段々と収入の多い仕事に這い上って行ったんだわ、きっと……。少しでも条件の良いプランテーションを持っている島を転々と巡り歩いたのも同じ蠢きね。

そして着々とお金を溜めて行ったのよ」

「こうなると、まるで執念の固まりだね」

「そうよ。命懸けの執念よ。もうこうなると執念と頑健な体力しか頼みになるものは無いからですよ」

「うーむ。どうも君の説明を聞いていると、何となく元年者たちの気概が分かってくるような気がしないでもないけど、どういうものか、僕には君のような感覚がなかなか湧いてこないんだなあ」

「それは、あたしが女だからですわ」

「えっ……」

「働いて所帯を持ち、子供たちには大学教育を受けさせてやりたい、その為には石に噛じり付いても金を溜なければならない。だからどんな苦しい仕事にでもしがみ付いて離れない。こういう発想は、元来母親の発想ですわ。勿論、父親の理解が無ければ実現しないことですけれども……」

「そうすると、父親と母親の子育ての心構えは違うということなのだろうか？」

「ハッキリ申し上げて違うと思いますわ。女親の子育ては、ある意味で、命懸けなのですから……」

「成程ねえ。実を言うと、僕はね。このくだりは、著者が、後の第四四二連隊百大隊の赫々たる武勲を描く為の、伏線として強調して書いているような気がしてならないんだけれどね……」

「いいえ、それは思い過ごしですわ。この移民の親心は本物です。あたしは、これと第百大隊の活躍とは全く別個の問題だと思いますわ！　たまたま、親は子を思い子は親を思う美談になったとしても……」

「ふーん。そうかなあ……」

「第一、今の日本だって同じじゃありませんの。良い学校を出さえすれば、高級公務員にだって、大会社の重役にだって、医者にだって弁護士にだってなることが出来るんですからね。家計を切り詰めたって進学させますわ……」

ただ、極貧の生活をしながら、ピジョン・イングリッシュきり話せず、アメリカ人やポルトガル人、中国人たちにまで軽蔑されながらも頑張り抜いた移民一世の方々の執念にはかなわませんけどね」

「その子育てに熱中している最中に、あの忌まわしい真珠湾攻撃が起きてしまったんだ！」

「そうなのよ……」

日本軍による真珠湾攻撃の直後、ハワイ全島には戒厳令が敷かれた。それと同時に、ＦＢＩや警察、憲兵隊等が活動を開始し、ハワイの日本人社会の指導的立場にある人々を次々に逮捕し抑留した。翌年の二月までの逮捕者数は二百名に達したという。

こうして、ハワイ住民の間に排日機運が高まりつつある中で、ハワイの軍司令官デロス・エモンズ陸軍中将は、「日本人住民が、法律に従う限り、出来るだけ保護をする」と、断固とした日系人保護政策を打ち出した。

この英断が、アメリカ本土の日系人二世と全く異なった行動をハワイ二世にとらせた、と言われている。

このエモンズの努力の結果、僅か千四百四十四名の日系人が戦争中抑留されただけで済んだ。そればかりか、ハワイ在住の日系人は強制収容所に送られることもなく、財産を没収されることも無かった。また、貴重品のガスマスクの配給も、敵性外国人である筈の一世に対してまで全く平等に配給されたのである。

これに反して、アメリカ本土の日系人に対しての弾圧は酷いものだった。山崎豊子の「二つの祖国」はＮＨＫの大河ドラマにもなったが、ロスアンゼルス市の「リトル・トーキョー」を舞台にし、一世の天羽乙七とその長男でアメリカ国籍を持つ二世の賢治たちが、真珠湾攻撃以来どのような迫害を受けたかを克明に描いている。

アメリカ本土の日系人は、アメリカ生まれのれっきとしたアメリカ市民である二世たちまで敵性外国人と見なされ、財産は奪われ、強制収容所へ隔離された。

それはどれも、鉄条網が張られた家畜小屋であった。

このため、日系人たちの憤慨、恐怖は、アメリカ民主主義に対する疑惑にまで変わっていった。

それがまた、アメリカ人の対日感情を益々悪化させ、到頭全キャンプの日系人に対して、「アメリカに対する忠誠度テスト」を実施するまでにエスカレートしてきた。

それに加えて、この反応が予想外に悪く出たため、弾圧は一層強化され、両者の感情的対立は最早抜き差しならぬ泥沼に嵌まり込んでしまった観があった。

ハワイの日系二世たちは、「本当のアメリカ人であることを今こそ示してやる」という気持ちと、「どうしてもアメリカ人になり切れない一世を排日運動から救い出そう」という気持ちから軍隊を志願する若者が続出した。

「それが第百大隊ね」

「それまでは裏切られることを恐れてなかなか許可しなかったアメリカが、急転直下、ハワイ二世部隊の結成を認めたのは、その熱意に打たれたのだという説と、予想以上に早かったマニラ陥落に驚いた軍当局が『手軽な先頭部隊』を作ろうとしたのだという説と、二つの見方

があるんだよ。ま、学者によって見解が違うからね」

「手軽な先頭部隊って、早く言えば『弾避け』のことでしょう？」

「うーん。そう簡単には言い切れないけれど、命を大事にされている部隊では無かったことは確かだろうね」

「そして、アメリカ軍当局が驚く程勇敢なハワイ日系二世部隊の活躍が始まったわけね……」

第四四二連隊はイタリア戦線に投入され各地で赫々たる武勲を立てたが、特にアメリカ国民に絶対の信頼を得たのは、当時「失われた部隊」と異名を付けられていたアメリカ陸軍テキサス第三十六師団救出作戦に成功したことだった。

連合軍の一翼としてフランスに侵入したテキサス第三十六師団はドイツの大軍に包囲され、全滅の寸前にあった。救出の努力は繰り返されたがその度に失敗し、テキサス州の世論は直接ローズベルト大統領攻撃にまで向けられるようになった。

思い余ったローズベルトは、ハワイ日系二世部隊の第四四二連隊第百大隊に三六師団救出の「大統領命令」を発した。

命を受けた二世部隊は、六週間にわたる死闘の末、見事に「失われた部隊」を救出した。しかし、三四一人のテキサス部隊を救出するために、八百人の二世が戦死したり重傷を負った。

千九百四十六年六月、四四二部隊はアメリカ合衆国へ凱旋した。その翌日兵士たちはアメリカ大統領ハリー・S・トルーマンによって勲章が授与された。この日のパレードの後、雨の降りしきるホワイト・ハウスの庭で行われた表彰式で、トルーマン大統領は、

「君達は、敵ばかりでなく、偏見とも戦い勝利を得たのだ」と述べた。

この二世将兵たちの働きで、アメリカはハワイ日系人を心から信頼し、日系二世ばかりか一世まで自由な生活を送ることが出来るようになった。現在、大学教育を受けた二世たちはハワイの各界で活躍しており、一世の人々も幸せな老後を送っている。

「あの辺りかな。四四二部隊の墓地は？」

「そうね。さっきのガイドさんの説明だと、あの辺ね」

「僕はね。県立図書館でハワイの資料を探していた時、思いがけない本にぶつかった。『全国陸軍予備士官学校史』という本でね。僕が在学していた予備士官学校のページを見ているうちに、初めてあの当時の本当の軍の動きを知って愕然としたんだ。とにかく、何一つ真実を知らされずに、教官の言う言葉だけを信じて、国の為、親きょうだいの為に命を捨てる覚悟でいたんだからね」

「……」

「まあ、花なら蕾の紅顔可憐な美少年、いや、美少年

と迄は行かないとしても、まだ二十才の、前途洋々たる青年だったんだよ……」

「……」

「教官の区隊長の執筆した『思い出』という投稿文を読むと、どうも僕たちは特別甲種幹部候補生の身分のまま内地決戦の予備軍に編入されていたらしいんだ。これは、『どうせ八か月の教育後将校に任官して、沖縄の第一線の小隊長として散ることになるらしい』という噂は薄々聞いていたから別に驚かなかったけれども、敗戦を知って、候補生たちが自決を覚悟して集会所に籠城したことまでが、どうも一部の過激派の中堅将校たちの扇動に乗せられていたらしい気配が感じられて、愕然としたんだ」

「その、自決覚悟で集会所へ籠ったってのは？」

「うん、戦争に負けたのは俺達軍人に責任がある。この上、生き恥を晒しておめおめと故郷に帰えるよりは、いっそ、ここで自刃して果てよう……」

「えっ、死のうとなさったの？」

「おいおい、そんな妙な目付きで見ないでくれよ。これでも二十才の純真な愛国心に燃えていた時だってあったのさ。今でこそ腹が突き出て、複雑な社会をぬらりくらりと泳ぎ回るイヤなじじいになっちゃったけどね」

「あら、そんな意味で言ったんじゃないですわ」

「それがどうも、僕たちは、過激派の区隊長たちにうまく躍らされていたのか、と考えたら悔しくなっちゃって……」

「その過激派って何なの？」

「まあ一口に言えば、戦争継続派かな。普段は『天皇陛下のおん為に』なんてうまいことを言いながら、その天皇がポツダム宣言受諾の放送をしようとすると、『玉音盤』を奪おうとした、あの連中なんかもそうだね。

士官学校には二種類あるんだよ。本科士官学校と予備士官学校とね。予備の方は、僕もそうだったけど、本来の職業を持っている人が入る学校だから、戦争が終われば元の職業に戻るのさ。けれど、本科の方は、軍人で身を立てる人の為の学校だから、一生軍人で暮らす人ばかりだ。当然、陸海軍の要職は全部、陸軍なら本科士官学校、海軍なら兵学校を卒業した者が占めている」

「じゃ、今の自衛隊のようなものね」

「いや、同じようだけれど、自衛隊は日本が攻撃された時以外は戦争をしないと憲法で定められている。そこへいくと、旧憲法下の軍隊は、第二次大戦の外に日清日露の戦争を始め数多くの侵略戦争をしたんだ。また、本科士官学校や海軍兵学校は戦争を教える学校だから、軍国主義者の養成所でもあった。「皇国史観」に心酔した者も多かったし、二・二六事件や五・一五事件の首謀者たちもこの学校の出身者だった。勿論、真珠湾攻撃を企て実施したのも彼らだったんだよ。日本を戦争に巻き込

み、敗戦に追い込んで国民を苦しめたのもこの卒業生たちが中心だった。今のシビリアン・コントロールされている自衛隊とは根本的に違うんだよ。

その中で、予備士官学校の区隊長や生徒まで巻き込んで、アメリカに最後の抵抗を示して、少しでも日本に有利な講和条件を勝ち取ろうとした奴らがいた。『思い出』には、本科士官学校から呼びかけられた、と書いてある。恐らく、敗戦になって処刑されるのが怖くなった卑怯者たちの仕業だろう」

「それで、あなたはその時どうなさったの？」

「うん、あっ、一番大切なことを言い忘れちゃった」

「……」

「僕たちは、広い板の間に思い思いの恰好で座っていた。正座している者、頭を抱えている者、じっと瞑想に耽っている者、皆、黙りこくって長い時間、連絡の来るのを待った。連絡が来れば、すぐ自決しなければならない。拳銃で頭を撃つ者、日本刀で割腹する者、首筋の頸動脈を切る者、または互いに胸を刺し合って死ぬ者もあるかも知れない。僕は、おやじが『わが子が将校になるなんて、こんなに嬉しいことはない』と、わざわざ長野県の知人から譲り受けたという日本刀で、頸動脈を切って死ぬことに決めていた。

しかし、堯江、人間って不思議なものだね。今にも、「実施命令」を携えた使者の、コツコッという足音が聞こえて来るという恐怖に脅えながら、片一方では全然別な事を考えているんだよね。

僕は無性におふくろに会いたかった。早く戻って、おばあちゃんともう一度裏庭を散歩したかった。そうだ、出征の時作り掛けていた模型飛行機を早く完成しなくちゃあ、なんて、とんでもない現実離れしたことも考えていた。ま、今考えると一種の痴呆状態だったんだな。

しかし、堯江、本当に怖かったんだよ、僕は……。心の底から怖かった。いっそのこと、裏口から便所にでも行く振りをして、そっと逃げ出せないだろうか、とさえ思った。

しかし、去年の暮れの事件の記憶があまりにも生々しくて、動けなかった。この学校の苛酷な訓練でノイローゼになってしまった僕より一期上の候補生が、逃亡を企てて射殺されてしまったという事件なんだよ。だから、今、僕が逃げても間違いなく射殺される。そうなれば、遺体を下げ渡されたおやじがどんなにか悲しむことだろうな、って考えたら、また体が強張ってしまった。

そっと回りを見渡すと、平然としている奴なんて一人もいないんだ。時間が経つにつれて、段々と恐怖心が高まってきて、誰の顔にも、必死になって生と死と闘っている様子がありありと見えるんだ。

無理も無い。俺も貴様たちも、国の大事に命を捧げようと大学高専のキャンバスを飛び出してから、まだ三か

月きり経っていないホヤホヤの幹部候補生だ。職業軍人と違って、「同期の桜」になりきるのには、あまりにも人間としての血が多すぎる。平和を愛する気持ちが多すぎる」

「それで、最後はどうなったの？」

「靴音がしたと思うと、校長閣下以下中隊長、区隊長が大勢飛び込んで来て、僕らから武器を取り上げ、そのまま全員軟禁されてしまった。扇動した区隊長たちも逮捕されたし、東京から操っていた職業軍人たちも一網打尽だったらしい」

「じゃあ、助かったのね」

「当たり前じゃないか。あの時死んでいたら、今こうして君と一緒にいる訳が無いじゃないか」

「そうね。ホホホホ」

「ただね。この若い四四二連隊百大隊の英霊たちは、随分と怖い思いをしたのだろうなあ、と思ってね。

確かにハワイから歓呼の声に送られて出陣した時は元気一杯だったと思う。しかし、何回も戦闘を続けるうちに、戦死者や戦傷者を目の前に見て、段々戦争の恐ろしさが身に滲みてきたのじゃないかと思う。

僕はね。『失われた部隊』救出作戦が、この若い人たちの一番恐怖に曝された戦闘だったと思うんだよ。戦力だって、各中隊二百名編成だったのが、この時は三十名程度に激減しているし、ひどい部隊になると殆ど戦死してしまっていたり、指揮官がいない中隊などもあったというから、ドイツ軍と戦う前から全員戦死を覚悟していたのじゃないかと思うよ。この引くに引けない立場に立たせられた恐怖感、これを思うと、僕はたまらなくなってしまうんだ。

比較にはならないけれど、僕自身、あの短時間に地獄とこの世を何回も往復して、心の中で『生きたい、生きたい、生きたーいっ』って絶叫した経験があるから、不幸にしてそれが適えられなかったこの若人たちが哀れでねえ……」

堯江は、二階堂の声が掠れてきたような気がして、思わずその顔を見上げると、何と彼の目には大粒の涙が湛えられているではないか。

死に直面した経験のない堯江は、はいり込むことの出来ない男の感覚の世界で、二階堂が心から悲しみ、哀れだと嘆いている姿を呆然と眺めていた。

堯江は、意味が分からないままに貰い泣きをしていたが、突然、矢も盾もたまらず二階堂の胸に取り縋った。

「あなたっ……」

二階堂は、二、三歩よろめいたが、すぐ立ち直ると優しく堯江の肩を抱き締めた。

「あなた。あたしは、あなたが大好き……」

「……」

「あなたはいくつになっても純粋だわ。あなたは、時

々上司に直言をするので教育長にも部長にもなれなかった、なんておっしゃるけれど、あたしは、その反骨精神が大好きなのよ」

夢中で取り縋りながら、つと、向かい合った二階堂の顔を見上げると、彼は、頬から耳朶の辺りをうっすらと赤らめて、慌てて視線を彼女から逸らした。堯江は泣き笑いになりそうな感情を無理に堪えて、さり気なく離れようとすると、今度は二階堂が堯江の肩に掛けていた力を強めてきた。

「堯江、僕も君が好きだ」

「えっ」

「僕は、好きで好きで堪らない程君が好きだ。

僕のように、大正生まれの戦中派は、小さい頃から男が女に愛情の告白をするなんて軽薄な極みだと教えられてきた。だから、例え心の中で思っていても、なかなか口には出して言えなかったし、また、上手な言葉も持っていない。しかし、此処は外国だ。思い切って言わせて貰った」

「……」

「……」

「あなた。ねえ、もう一度言って……」

「……」

「ねえ、もう一度言って下さらない？」

「……」

「駄目？」

「だからさ。僕は、君が世界一大好きなのさ。今この四四二部隊の墓の前に立って、四十年前あの集会所で自決しなくて良かったと、つくづく思っている……」

黙って聞いていた堯江の頬に涙が一筋つーっと流れた。

「ありがとう、あなた」

この時、招集の笛がピーッとなった。何人かがこちらを向いて何か大声で叫んでいる。

「さ、戻ろうか？」

「ええ」

歩き出すと、堯江は素早く二階堂と腕を組んだ。しかし二人の背はかなり違うから、取り縋った形となった。

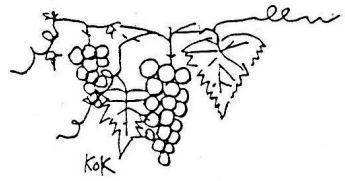
「こ、これは……」

「いいじゃないの。此処は外国でしょ」

「う、うん」

「女神・コロンビア」の下に集まっている一行は、二階堂と堯江が照れ臭そうに腕を組んで歩いて来るのを見ると、しばらくじっと眺めていたが、やがて誰からともなく拍手が起こり、それらが忽ち盛大な拍手に変わった。

やはりここは、「アロハ・スピリット」の国であった。



輝やかしい夏の日々（2）

恋人たちの小径
Lovers' Lane

アリカ ジューン
有香 六月
（青瑠薔薇）

むさし野の雑木林、欅や楢、椚の木、栗の木その他が柔らかな緑に茂り、そして下草もたっぷり根元を被っているその間に一筋走ってゆく五百米以上はある道、それが「緑の修道院」の中の径だけに、独自の性格を持っていた。しかし、恋人たち、ほんものの恋人たちも何組も何組もここを通って結ばれたに違いない、夢のままに終ったかもしれない。

あの頃、必ず日曜には、羽織袴に身を正した、端正な顔立ちの青年が、西寮の応接間に姿を現わした。私たちの先輩を訪ねてくるのであった。午後から数時間、二人はそこにこもっていた。百合子はそれを羨やましいなど思う余裕はなかった。語学とヴァイオリンと——日曜ごとに彼女は、独りか、先輩の三木五月と荻窪の蜂谷龍先生の所にヴァイオリンの稽古に出かけていた。

Lovers' Lane

そのひびきのよい名称を持つ林の小径を、百合子はよく散歩した。独りか、女友達と。

一九四〇年七月の日米学生会議の物語に戻ると、男女の学生百五十名が同じキャンパスで生活を共にしたのだから、当然いくつものロマンスをも産みだしたのである。

小柄で敏捷で、恐ろしく頭の良い花澤啓氏がその生涯の伴侶を見出したのもここである。その一年前に二人はすでにアメリカに渡航した組に入っていたが。その相手の女性は、百合子たちの二年先輩の大へん文才豊かな、一寸皮肉っぽい鋭利な知性の持主の妹で東京女子大の学生であった。さきの京都の名家の令嬢辰見桂子も、いかにもふさわしいパートナーを見つけていた。兄弟で参加していた刈田兄弟だった、たしか銀行に勤務している人の息子たちで、いかにも慶応ボーイらしく、スマートで、洗煉された物腰の、好感の持てる青年たちであった。この会議では慶応の人たちの活躍が目についた。第一、団長の山際氏も慶応の経済学部の人であった。それは洗煉

された、おちついた物腰の人で、どこからみても百五十名の選抜された学生たちの団長にふさわしい人物であった。その彫りの深い端正な顔立ちは近付く人を惹きつけずにはおかなかった。

刈田兄弟の弟は、百合子がアドニスと名づけたほど甘美なマスクの美青年で、生真面目な人物であった。桂子とこの刈田春樹との仲の良さは有名となり、二人はどこにゆくにも一緒の行動をしていた。

この二人は素適なカップルとして必ず結ばれるとみんなに祝福されていたのに、それを妨げたのは、辰見家の当主、桂子の父親であった。その父親の反対を押しきって、宝塚の旧家を飛びだすほど桂子は強くなかったし、それを敢えてさせるほど本人の春樹も、弟を応援する夏樹も強くはなかった……良家の子女の甘美なロマンスにそれは終った。しかしそれがいかにも好感のもてる二人の生涯に影を残さなかったとは言えないようである。

百合子は桂子と親しかったので、しばしば、この仲の良いカップルと同席することは多かった。しかし百合子はそれを好ましいと眺めても、羨やましいと感じたことはなかったし、又槇夫と自分の間がおよそそういうことと縁の無いことに別にこれという感情も持っていなかった、何となく、この幸福な御令息御令嬢の世界と自分たちのは異る世界のような気がしていた。槇夫が会話学校に通っていた時、百合子の予科に入った時の同級生、長谷川禎子という人も一緒のクラスで、槇夫がこの秀れた女性に心秘かに憧れていたこともあとから知った。この女性は十八才で地上から姿を消していた。名の知られた画家の二番目の娘として、眉目形の見事に整った、ふしぎな静かな魅力を湛えた女性だった。彼女も若いのにもう成熟しきっているような感じの人物で、そういえば彼女は、あの中宮寺の黒衣の観音にそっくりな面差を持っていた、といえる。あの完全な円満の美の象徴。あのふしぎな深秘を湛へた謎めいた微笑！　槇夫がこの女性に惹かれていたと知って、いかにも槇夫らしいと思われた。折柄、愛するシンプソン夫人のために王位を捨てたエドウアード八世の話がその会話クラスに出て、クラスの人は一人一人、英語で意見を求められ、その際、長谷川禎子は、「私がシンプソン夫人なら死んでしまう」と答えたと伝えられた。

百合子は後になって、槇夫の傑作と言われる劇、「なよ竹」の女主人公の竹から生まれたという姫のモデルはこの長谷川禎子という確信に近いものを抱いたものである。竹から生まれた姫が、この世の求婚者のすべてを退けて——その中には帝も含まれていた——そして、故郷の月の世界から迎えにきた人たちに守られて、車に乗って、月の世界に帰ってゆくというあの物語も、それは早世する姫君のその運命を象徴したものと信じられた。

槇夫が憧れていたすばらしい女性は、この世に長く留

めておかれない存在であった。そうして槇夫も……

百合子たちは津田の二階にいた、丁度、槇夫はその場に居なかった。百合子はさっき、通りがかりに目にしたキャンパスの隅に咲いていた淡いピンク紫のホタルブクロの花々をふと思浮べていた、そのむさし野の草々に混って咲いているホタルブクロの花々はふしぎに心を和める可憐な存在であった。そこにふっと槇夫が突然姿を現わした、その優しい野の花々は妙に槇夫のイメージと重なった。

前夜、日本の学生たちで、関西のグループと関東のグループの始めての顔合せが、津田カレッジ本舎三階の立派な講堂で行われていた。神戸に生れているが、もともと横浜育ちの百合子たち、関東のグループにとって、関西の人たちとの顔合せはもの珍しかった。その中に当時十九才で、白いカスリの和服をつけ、袴を穿いたイガグリ頭の学生、柳生直行も混っていた。後に人生の様々の途上で交流があった。戦後すぐ務めたマッカサー司令部直轄の新聞検閲部の翻訳部で共に仕事する仲間だったし、又後に勤務した関東学院大学でも。柳生直行はそこの院長となって、三年前に世を去った。

その翌日の午後遅くなって、アメリカの学生たちが、学園に姿を現わした。かなり早く入港していたが税関の手続きなど折柄の国際状勢のため、ずい分手間どり、横浜から、都心をはるか離れた小平の野に到達したのはもう夕方も近かった。何人も混る大男たちに百合子はすっかり圧倒された。それ迄、先生方や宣教師関係以外に外人と附き合ったことがなかったので、よけい圧倒された。なるべくアメリカ人と交流するため、つとめて食事の間、そばに坐るようになっていたし、又、討論のグループではいつも一緒になるので、慣れない百合子たちには大へんな緊張であった。

しかし若者たちは他方で大いに交歓し、楽しんだ。遊びという生活からおよそ遠い生活の日々を送ってきた百合子にとっては戸まどいすることも多かった。彼女にとって、ことに両親が外地に赴任していて、横浜で、もと学校の教員をしていた母方の祖母と弟との三人の生活は、頗る健全で、遊びが入る余地のない生活であった。ただ学校以外に、ヴァオリンの先生に師事していたので、毎日練習に励むそれも修行の日々だった。およそ遊びとは縁がなかった。寮の日々、他の寮生たちは、夕方七時からの自習時間の前までは、パーラーでダンス曲をかけては、女同志ダンスを楽しんでいた。「奥様御手を何卒」「青空」「南国のバラ」主としてタンゴであり、ワルツも混り、フォックス・トロットの軽快なリズムもあり、その流れてくる曲に百合子は親しんだが、自分でその踊りの中に入ることはなかった。

折角、立派な男の人たちを迎えても、その夏、この女人の殿堂ではダンス・パーティは行われなかった。当局の御達しで自粛ということだった。しかし野外でフォークス・ダンスは男女日米学生の間で行われた。十メートルほど離れて並び、双方、中央をめがけてスキップしてきて手を取り交わし、又離れてスキップしてゆく、それさえ、男慣れない百合子は苦手で眺めていただけなのに、一年上の親しい杉原寛子、日頃地味で何かと人々の力になってくれるこの人が、平然として、楽しそうに日米の男性たちと手を組み合せてスキップしてゆくのを、百合子はすっかり驚いて見ていた。

百合子は次第に、チェアマンとして自分たちを指導してくれている木曽槇夫に心が傾むいてゆくのを感じていたが、彼の手を取ることなど考えもしなかった。それは、少女のひたむきな憧れであり、百合子は対象の槇夫を通して、一つの理想に恋していたのだ……

コンサートが行われ、百合子もヴァイオリンを弾いた、ピアノは、大槻藤子が見事な腕前で伴奏してくれた。藤子は東寮の住人、山口市からきていたこのすばらしい女性と百合子は親しくしていた。極めて高い知性と、そしてピアノにも天才的な腕前を持っていた、もし彼女があのまま、ピアノの才分を思う存分伸ばし得る環境にあったなら……彼女は百合子より一年早く卒業して、しかも本科に直接入っていたので、三年間で学校を終え、そのまま東京に残り、荻窪に下宿して会社に就職していた。さぞその生活は彼女の意に添わなかったろうに、一言もこぼしたりはしなかった。

あの夏の日々、百合子と藤子は西寮の彼女の部屋で同居して暮した。もっとも二人ともそれぞれの活動に追われて、寮の部屋は寝るだけ、それもしばしば夜半すぎだったので、部屋でゆっくり話す暇もなかった。朝は、慌てて起きて食堂に降りてゆかなくてはならなかったし…

夏至の夜　聖ヨハネス祭りの夜、梔子(クチナシ)の花の香りが夜の空気の中に流れている

芸術家として卓抜していた仄白い面差の大槻藤子！
しんから心の温い、思いやりに充ちた思慮深い杉原寛子！

この二人を親友として、この中で一番未熟な、ただ憧れのみに逸(ハヤ)る百合子、彼女の奏でるヴァイオリンのようにデリケイトな心情の　百合子！

百合子の時に繊細すぎる心の動きは、槇夫を時にはらはらさせた。槇夫にふさわしいのは、本当は杉原寛子の

ような女性に違いない。決して人目に立とうとせず、静かな愛情で相手を包みこもうとする慈母型の女性。

大槻藤子も百合子的な所があり、あく迄自己の理想、夢に忠実に生き抜こうとするタイプであった。いささかもそのために妥協をしようなど考えないのだった。

槇夫に必要なのは、知性をもって彼を支え、やさしい愛情で包みこむ女性なのであった。

あの夏の夕べのコンサートで――それは雨天体操場で行われた――槇夫も出演した。彼は唄ったのである、ソロで。その渋い深味のある咽喉を聞かせてくれた。槇夫はヨーデルを唄ったのである、裏声で……あの多忙で、勤勉な槇夫がいつこんな器用な芸まで覚えこんだのだろうか？　百合子は、すっかり驚いて槇夫の、その一心に唄う顔を見守るのであった。

東寮には日米の男子学生が宿泊し、西寮には日米の女子学生が宿泊していた。そして槇夫の住んだ部屋は、東寮の二階一番、向うの庭園に面していた部屋であり、そこは大槻藤子、百合子の親友の部屋であった、従って平生、百合子はよくそこを訪ね慣れていた。

百合子の中で、ただ百合子の心の中で、槇夫を敬愛する気持が募り、そして、もっと深い感情に変じていった。時間の経過するにつれて……折柄、月が次第に丸みを増して、その光り、いよいよ青白い光りがクレセンドしていったように。

ある夕方、百合子は用事で槇夫の部屋にゆくことがあった。用事はすんで、槇夫は机の上にあったハーシーの「キス・ミー」のチョコレートをいくつも百合子の掌にのせてくれた。

その場所はどこであったろうか、もう夜に入っていた、食堂は西寮だけが男女の学生に解放されていた、従って夜そこでみんなが集って喋っていた。

ある夜、誰かがそこにレコード・プレーヤーを持ちこんでいた。そしてショパンのノクターンのレコードが何枚かあって、それがかけられた。百合子が自分でそれをかけたのかもしれない、はっきりしていることは、そこにはただ一人日系二世のケイがいて、百合子が夢中でレコードに聞入っているのを感心したように見ていたことをおぼえている。あの夜のノクターンは百合子の心をふしぎな境地に導いていった。それは百合子を、憧れと現実との葛藤から、より高次の世界に連れ去るのだった。その世界の美しさに息をのむ思だった。いつか食堂の上に額を押しつけてしまっていた。それはノクターン「15番の1、ヘ長調」「15番の2、嬰ヘ長調」「15の3、ト短調」であった……

折柄、月の光はキャンパスに益々冴えていた。百合子は寮を出て、本校舎の背後、この字型に配置された中庭

の芝生の所に出た。あちこちに、グループだの、カップルなど散らばって坐っていた、といって誰も他のグループなど気にしていない。その前は、昔のままのむさし野の雑木林が温存されていた。樫（ブナ）、小楢（コナラ）、栗の木々、そしてその林の中に北から南にと五百メートル以上の自然の径が走り、それは、このカレッジでは Lovers' Lane「恋人たちの小径」と呼ばれていた。女性だけの学校であるだけに、この言葉は意味深かった。

青白い月光の燦めく芝生の上にたった独り坐った百合子はいつのまにそこに仰向けになっていた。そのまま時間がたち、いつか真夜中近く、少し冷えて百合子は立ち上った。それは独特の感情だった。相手がいたら、好ましい話相手とそこですごしていたら……しかし月光の中に一人いる気持には、独特の魅力もあった。それは愛器を抱えてソロを奏でているのと同じであった。

外で、都心の要所で、時折パーティが催おされた、昼食会や、正式の夜食会、下級生の百合子は三信ビルで行われた昼食会に一度招れただけであったが。槇夫のような立場の人は度々、もっと華やかな会に招かれているようであった。黒い服に身を包み、白い絹や淡いヒヤシンス絹のワイシャツにネクタイをつけて出かけてゆく槇夫の姿は大へんエレガントであった。槇夫は決して美青年というタイプではない。しかし彼らしいいかにも思索に耽ける芸術家らしい風貌であった。

槇夫は後に、出身の慶応大学の予科（当時）の英語の先生を務めた。しかし、それよりも、新進の劇作家として劇壇に華々しく活躍していた。少くとも百合子のように、戦後、苦しい思で暮していた無名の者にとってはそう見えた。苦しいといっても、それは戦前の生活を思うからで、もっともっと辛い目に会っていた人々の目からは、甘く見えたかもしれない。しかし頼りにする父が開戦後一年もたたず、四十八才で世を去り、後、住居をも失い、いかに婿家とは言え、結局、他人の家の飯を食する身にはこたえた体験であった……

しかし槇夫とて楽（ラク）な身ではなかった筈である。彼の父上は北海道大学の植物の教授であった。彼の兄の令嬢、つまり槇夫の姪に当る女性が、ずっと後に、北京生活を綴り、その特殊な才能で芥川賞を得られたが、叔父槇夫と戦後、世田ヶ谷、若林の家で同居されていたのを記されている。槇夫が自らの意思で世を去ったのは、その家ではなかったろうか。

百合子は、槇夫をよく知っていたという名門慶応高校前教頭で英語の村野先生と親しく話を交わすようになった。同僚として埼玉県のある学校で。このいかにも穏やかな、円満な御人格の中に、様々の豊かな人生体験を蔵されている村野氏は、木曽槇夫の戦後の華々しい活動をよく記憶しておられて、その折の上演の貴重なプログラムを下さったりした。御自分の御意志で御子様を持たれ

ない氏は、数多くの良き教え児たちをこよなく愛され、交流を続けていられる。

戦後、百合子は槇夫に会うことはなかった。ただサルトルの劇、「出口なき部屋」とアヌイの「アンチゴーヌ」の上演で、都心の講堂に、母と出かけたことがある。百合子はあまり劇を好かなかった。しかし母が大好きで、お伴をしたのである。その帰り、上の階にある会場から、細い階段伝いに何階も降りていった。エレベーターは当然満員なので。その時ふっと、階段の自分のすぐ上の所に、木曽槇夫の姿を見かけた、たしかに彼 ― ずい分昔と変っていた、といっても、わづか六、七年前の姿と。それは、全くといってよい蒼白な顔をした痩せた姿であった。百合子ははっと息をのみ、一寸二、三歩すれば近寄れるのに、そのまま挨拶せずに下に降りてしまった。何かお久しぶりで、と気軽に声をかけたい気持をなくさせるものを、その蒼白な表情が示していた……

それから間もなくであった。彼の突然のこの世からの消失を知ったのは……

槇夫は戦時中、海軍予備学生として召集され、船に乗ってフィリピン沖で長い間、海に浸り、それから救出されたと聞いたことがある。彼は体もよくなかったのでなかろうか。そのことが原因で、おそらく胸も患らっていたかもしれない。栄養も行きとどかず、しかも戦時中、戦後の物資欠乏の時代を、劇作のために、懸命の奮闘をしてきた。槇夫は戦時中、小劇団で活動していた間に ― 神田錦町にその本部があった ― 後に、有名になった、地味な女優と結婚していた……

しかしそういう、いわゆる「幸せな生活」、洋々たる未来も、彼をこの世に引き留めておかなかったのだろうか？ 何故？ と百合子はつくづく考えざるを得なかった。

毎日大へんな生活の中で度々、かっての「輝やかしい夏の日々」が蘇るのであった。

槇夫は「劇」の人であった。百合子は「ヴァイオリン」の人である。音楽を呼吸せずには、本質的に生きてゆかれなかった。音楽は彼女に与えもし、又何かを失わせるかもしれない。世の常の幸福とは何であろうか？ 普通の市民と芸術家の生活のギャップに悩んだトーマス・マンが、それを見事に結晶させた「トニオ・クレーゲル」、あの作品の主人公の悩みはそのまま、自分のもののような気がしていた。

普通の健全な市民としての生活を享受しながら、なおかつ、詩という月桂樹の葉をむしりとろうとした人がやはり、トーマス・マンの作品の中に出てくる。その人は、彼が自作を朗読したその宴会の席を白けさせたとある。しかし、それは日本では、別に奇異なことでないだろう。

武士の一人一人まで、和歌という教養を身につけていた日本の伝統ある市民にとっては。たえず、死と生に曝(サラ)されている市民たちも、その本質には一人一人詩人の傾向を持っていると言えるかもしれない。トーマス・マンの主張していることのほうが、むしろ奇異なのかもしれない。

輝やかしい夏のキャンパスの日々！

夜。創立者、津田梅子の立派な墓地が、東北の一隅に静かに収まっている、そこに両側に桜並木があり、その此方側に広大な芝生が拡がって、その西の先きに東寮と西寮があるが、墓地に近いほうの芝生に、ある夜、いく人もの人たちがかたまって、じかに芝生に腰を下していた。冷房もなかったあの日々、ふしぎに暑いと思ったことはなかった。むしろ、芝生の夜気はひんやりしていた。大槻藤子がそばにいた、そして、よく藤子のそばにきて話しかけるようになっていた小柄な凛とした好青年もそこにいた、たしか、彼は外交官になったと思う。梅村といったろうか、梅影、それとも影村梅夫といったろうか。お互いに将来のことを話していたように思う、半ば夢のように。さきに述べたように、学生たちには、実際には戦争の黒い影はまだ迫っていなかった。藤子はしきりに口にしていた、あの時の口調、あの時の彼女の目の輝きをまだはっきり覚えている、

「私は何か一つの理想のために身を献げたいの、一つの真理のために！」

ピアニストでもあり、百合子のヴァイオリンなどより、はるかに秀れた腕前を持っていた藤子は、何故か、その時、「音楽のために身を献げたいの」と口にしなかった。何故だろうと百合子は一寸ふしぎに思った。彼女ときたら、毎朝毎朝七時頃から八時頃まで、すぐ寮のとなりの本校舎の三階の講堂にあるピアノで練習していた。それはベートーヴェンの「ワルドシュタイン」であった。おかげで、百合子はすっかりその曲を覚えてしまった、あの出だしの激しいパッセージは、そのまた一見、温和そうに見えた仄白い面輪の藤子の内に秘めた炎であった。藤子！ 思えばその炎はあく迄神聖なものであった。ヴェスタに献げられた神火を守る巫女(ミコ)のものであった。彼女なら、若い侍女が、男と恋愛しても嫉妬に狂ったりしなかったろう。伝説のサフォのように、若い恋人を若い女性に奪われたからといって、崖から海に投じて果てたりしないだろう。彼女こそヴィンセンチョ・ベルリーニの描いた「カスタ・ディーヴァ 浄らかな女神」であった。

戦時中、東京に務めていた藤子は故郷の山口市に帰り、そこの専門学校の英語の教師となっていた。その学校は後に大学に昇格した。しかし、二、三年で彼女はやめ、西寮の百合子の後輩、やはり山口市の井村美加にそれを譲り、自分は諏訪市の修道院に入り、やがてそこの修道

女院長となり、アルフォンスという名のマザーになった。彼女は音楽としては、アイリッシュ・ハープで聖歌に伴奏する。それまでクリスチャンではなかった彼女が、俄に修道院入りを決意したのは、近くの広島市の原子爆弾投下のあと、悲惨な被害者救済のため、決死の献身的運動をされたという異国の青年司教の感化であることを、後から聞いた……彼女の兄の青年医師は従軍し、南の太平洋の島で戦死していた。母が残されたが、彼女の姉が面倒を見たということである。

藤子、アルフォンス修道女院長は今も健全で、自らの手で、諏訪の修道院を、南国、宮崎の丘、シオンの丘に移し、そこで朝夕、瞑想と祈禱に耽けっている。世の人々の救済のため、神の御加護を求めつづけている。宮崎市長は、一千坪の丘の土地を寄進し、諏訪の地を売却した金子、その他の寄附で、ともかく修道院本部の建物は作られたのである。ミカンの木が一千本も生い茂っている丘の上である。

百合子にとって、二人の一番身近な友人のうちの一人、杉原寛子は二児の優れた母として、大蔵省のお役人の伴侶としてすごした。長女は嫁し、孫も得、次女が東大を出て東京都庁勤務を経て、通産省の役人として積極的に公園課の部門で広く活動している。しかし寛子自身は十年も前、十一月七日、山茶花の匂う日に世を去った。実父、医学書院社長は当時まだ健康で、時至らずして世を去る娘を毎日病床に見舞っていた。そして、娘の世を去った後、キャビネにのばした寛子の写真を親しかった友人の一人一人に贈って下さった。寛子はその長女に百合子の名を付けてくれた。その他、百合子はどんなに寛子の導きを受けたろう。出征していた夫君の帰国を待つ間、寛子はT大学の法科に入った、そしてそれが百合子の励ましになって、その翌年、百合子も同じ大学の文学部に入った、それは槇夫の刺激でフランス文学科であった。本来なら百合子はドイツ文学科に先きに入ってもよかったのであるが、戦後三年目であった、新聞の翻訳の仕事を止めて、思い切って百合子は新しい道を志した。戦後、フランス文学科は俄に人気を増し、それ迄、年に五人位しか志望者がなかったのに一挙に五十人となり、有名な辰野隆先生、鈴木信太郎先生を大へんまごつかせていた。槇夫の手引きがなければ、百合子が、このような御立派な恩師たちに廻り合えたかどうか分らない。そこには、十六世紀ユマニストの御研究で、新旧両派に分れて同じ神の御名の下で血と血で争ったキリスト教の世界を詳述されていた渡辺一夫先生がいらしたし、一番若いデカルト、パスカルの深い研究、それから飽くことのない、激しい知的探究心に燃えて私たちに講義された森有正先生がいらした。どんなにそれぞれ御性格、御研究対象の異るこの大先生たちから百合子たちは感化を受けただろう。食物も充分でなく、まだ配給で、原書も本屋になかった

あの文字通りハングリーの時期、しかし研究室の図書は自由に読めた。それに本屋に原書が売られていたとしてもそれを買うお金は、百合子たち普通の市民の学生にはなかった。だからかえって勉強する意欲が湧いたのかもしれない。

当時百合子は幼い娘を持っていた。しかし、理解のある物理化学者の良人は悦んで百合子の勉強を励ましてくれた。

月日はたって、寛子と反対に、百合子はその一人娘アリサを二十才で失った。娘にはどこか、かって槇夫の憧れた、百合子の津田の時のクラス・メート、長谷川禎子の面影があった。本郷在住の有名な画伯の次女であった。

寛子の娘たちが、母親の遺志を継いで暮しているように、百合子は反対に娘の遺志を継いで何とか生きてゆかなくてはならなかった。その百合子を支えているのはヴァイオリンであり、音楽であった。アリサが真剣な顔をしてシューベルトの即興曲に、夜、よく耳を傾けていたのを思い出す。アリサはピアノを弾いたし、もう一つの名はカロリーヌであり、カロ（愛する）であった。それはシューベルトの若き日の面影を伝えている映画、「未完成交響曲」に登場する、どこかヤンチャな、しかし魅力溢れたハンガリーの大貴族エステルハージー候爵の姫君カロリーヌにあやかったものだった。どちらを取っても、どこか愁いの漂う名前であることにあとから気付いたが。アリサとは、葱科のつましいリラ色の撒形小花を咲かせるアリッサムからきたものであろう。アンドレ・ジッド、植物に強い関心を寄せていたフランスの大作家がつくったきれいな名前である。彼の妻になった二つ年上の従姉マドレーヌの創作上の名前で、「狭き門」の女主人公の名前であった。

今日は一九九〇年九月十三日

午前三時半に、東南の空、向いの建物（十メートルの高さ）の上に、オリオンが、はっきり見える。それから一時間ほどたって見ると、その建物の横から、シリウスが青白く冴えたあの見事な光りを放って、オリオンを目がけて昇ってくる。

あと十日でお彼岸、死者と生者が交流する日。

一九四〇年七月半ばすぎ

広いキャンバスにさしてくる月の光がだんだん拡がってくる。日米の百五十名の学生たち、十九才からせいぜい二十三才までの若者たちが二週間一堂に会し、寝食を

共にして、ディスカッションを行い、余興に興じた。ダンス・パーティもない、ましてディスコもロックもない、静かな音楽の雰囲気の中に包まれて打ち過ぎた日々。一九三二年五月十五日犬養木堂（毅）首相が青年将校に、「問答無用」とピストルで暗殺された。一九三六年二月二十六日の暁方を血で染めた重臣逆殺事件、一部の軍の反乱事件……満州事件……

しかし日米の若者たちを包みこんでいたあの空気はふしぎな位、晴朗で、温かく、相互理解の精神に充ちていた。その中に未来の大蔵大臣花沢夫妻が混っていられた。

月の光は夜毎に光を増して、むさし野の雑木林を縫い、小川に燦めいた。校門の外に、それは今でも幸い切り倒されていない小川ー玉川上水ー沿いに茂っているが。半世紀の以前には、至る所、果しもなく拡がるむさし野の原林と原野であった。春には、金蘭、銀蘭の鈴蘭形の花々が咲き乱れ、秋には萩が一面に細かい花びらをこぼした。野菊が紫染し、われも紅が顔を見せた。早春の小川の堤には、一面にぼけが朱紅の花々を見せた。五月緑のさなかに、かなり背の高い木になるエゴの木が純白な、仄かな香りのする白い花々を一面につけるのだった。それは西寮の向って右手、二階の洗面所の窓まで届いて一本茂っていた。

七月のある夕べというより、夜も午後九時すぎて、百合子は構内の外に出て月光に青白く燦めく雑木林の中を流れる小川のほとりを草に足を濡らして、歩いていった。さすがに一人では憚かられ、丁度、男の学生で親しくはないが、木曽とよく話し合っている人が、附いてきてくれた。それは、まるで夢の中を歩いているようであった、歩いているというより、ふわふわと、足が宙に浮いてさまよっているようであった。あんなに月光を深秘と思ったことはない……もちろん一緒に行く相手が木曽槙夫だとどんなにいいかと思ったかもしれない、しかし、案外槙夫と一緒だと、あまり話すことがなかったかもしれない、……ふっと月に光っている草の茎に蛍がとまり、ラムプをともしていた。このような夢幻な美しさを留めておく言葉はない……ただある旋律だけがそれを伝えられるだろうか、それはショパンの旋律……モーツアルトを愛したショパン！

一体、男性と女性と、それぞれ不完全な個体が合体して何が生みだせるだろうか？やはり不完全な別な個体しか……ただ一人一人の人間の内には完璧を憧れる希求が潜む、この願望こそ、一つの理想へ到達する道なのでなかろうか？それをモーツアルトやショパンが教えてくれる。

人間と人間が協力してできるものは、日常生活での補佐役、それ以上望んではならない、恋は日常生活の領域の枠内では、対象となるものではない。日常生活の基礎をなすのは人間への愛情と労わりである……百合子は

当時、そう判然と自覚できたわけではないが、このことを槙夫から教わった。

やはり夜、西寮の食堂に大勢集まっていた、御飯の残りが、すぐ続く大きな台所に、お櫃に沢山入っていたのでー女中さんたちが、わざわざお夜食にと残しておいてくれたと思うーあと一年位で食糧統整の実行される以前、何と寛大であったことか。百合子たち数人の女子学生はそれで一生懸命お握りをつくり、お皿に山盛りにして広い食卓のあちこちにおいた。槙夫もあとから入ってきて、それを口にしてくれた。

あの頃、何と夜少ししか眠らなかったことか…ことにアメリカの学生たちの体力の強さには驚かされた。明け方帰ってきても、午前八時の会議のテーブルには必ず姿を現わした。たしかに恋愛のカップルもいくつかあったろうが、そういうことにかまけて、本来の使命の日米学生会議をおろそかにするものはいなかった。当時の学生たちは躾が行き届いていたのだろうか？何といっても全国から選抜され、テストを受けて、このメンバーに選ばれた自覚、ことに非常事であり、自分たち一人一人学生の肩にずっしりとその自負、自覚の気持が重くかかっていた。みんなは使命感に燃えていた。

昼間は輝やかしい黄金の日々が燃え、夜は深秘に包まれ、月光が青白く世界を映しだし、まるで別な舞台の住人に変えていた。一方はいわば白日の叡智の世界で、他方は月光の夢幻の領域であった。いわば理智と深秘の交錯の中に、若者たちの青春は揺れ動いていた……

槙夫が姿を現わす、西寮の建物のすぐ下の窓際の草むらに、百合子とほんの少し話を交わす。それは恋人同志などとはおよそ遠く、槙夫は同じ道の大先輩として、百合子ははるかな後輩として。

「勉強をしなさい！　モンテーニュをよく読みなさい！」

そしてそれから長い長い才月が流れた。その間、二、三回会った。少し長かったのは、東京駅八重洲口のなにか大きな建物の二階の一部を占めて、気持のよいカフェであった。レストランだったのかもしれない。百合子たちは、かっての「芸術グループ」の仲間として旧交を温めた。もちろん、チェア・マンだった木曽槙夫も姿を現わした。百合子と仲の好かった辰見桂子も。彼女は、すでに卒業して、宝塚に帰っていたが。百合子は卒業を控えていた。つまり開戦を目前にしたーしかしまだ普通の市民にその予感などなかったろうか。桂子は例によってとても品のよい、しゃれたオーヴァを着ていた。この会議の時、裏方に廻って、東・西寮の寝具、装備の係りであった桂子は、シーツや枕かけ等、寮生から借りた品物のリストをチェックし、大へんな労働を、会議が済んでからも、十日間もかかり行い、くた

くたになって宝塚の実家に帰った。その時の過労も手伝い、翌年三月卒業してから、胸を患らい、軽いものではあったが、サナトリウムから一種の道場に入り、身体を鍛え、その時には回復していた。当時、神戸の六甲に家のあった百合子とは親しく、宝塚と六甲で互いに訪問し合った。その姉で二年上の辰見光子が、その秋、結婚した筈である。六甲の家を訪れた桂子は、百合子の母のもてなしのよさにすっかり打ち解けて、夕方まで楽しんで夕食も終えて帰った。六甲山のすぐふもとの町、阪急六甲の駅から歩いて、七、八分の所にある二階建ての家、お邸としてはそう広いものでなくとも、現在の感覚からは充分にゆとりのある家。辰見織の本家という旧家で、多くの家族のしがらみの中に育った桂子には、一銀行員（当時、次長であった）の親子水入らずの家庭は、屈托なく居心持よかったのであろう。

槙夫を中心にした、多くは女性のその集まりには、心温いものが通っていた。その前年の十一月に築地小劇場で、木曽槙夫作、戯曲、「十一月の夜」が上演され、百合子たち始め当時の仲間はみんな観劇した。槙夫、わづか二十二才の槙夫は新進劇作家として注目を浴びた。

それはごく普通の一市民の家庭の中の、何気ないエピソードをいくつか綴り、劇に仕立てたもので、とりたててドラマチックな盛り上りにない、筋らしいものになく、話の展開はなかった。いくつもの場面の中で次のエピソードを百合子は覚えている。その家庭に、アメリカから電報が、郵便局にきているという。それは何となく槙夫自身の家庭を思わせた。北大教授というインテリ一家の家庭。それは、アメリカに赴任している息子が、父親か母親の誕生日に、祝電を打ってきた。しかし、夜遅いのでその電報はすぐに配達されない。電話で内容が届けられるというのであったように思う。ともかく郵便局の人は、その電報の中味が、いささか呑気すぎると独白している所が印象的だけだった。このさりげないエピソードの連続に、今から思えば、槙夫は、怖面（コワオモテ）にのみなってゆく時流に対して、ひそかなレジスタンスを試みたのでなかったろうか。表立って反抗すれば、それがどういうことになるか、今週で終ろうとする、「凛凛と」によく示されている。アメリカの学生たちと二週間寝食を共にし、心から語り合い友人となった人たちに、どうして日米開戦の必要が認められたであろうか。東大生であった小林義正という人が、しきりに、「歴史的必然性」という言葉を使っていた。この言葉は、果して開戦が歴史の必然性という意味だったのだろうか？従って偏ナショナリズムの表現であったのだろうか？　それも百合子が、ずっと後になってから、気付いたことであった。

ともかく槙夫の考えは、この「十一月の夜」上演によって、間接的に表現されていたと思う。

劇のあと――三日間連続で上演されたプレミエーレ（

初演）のあと、百合子は、楽屋に、一寸挨拶に出かけた。ほんの一寸だけ槙夫と言葉を交わしただけであった。あとで、しみじみ感想を綴った手紙を送った。その時の劇のプログラムに次のように記されていた、

「夢見るよりはもっと激しい希求の彼方に、その輝けるものがあります」

この文章に深く打たれた百合子は、「うごめく群衆の中に抜んでて輝く白い星のような存在である」と槙夫自身に対する賛辞を述べた。それが槙夫にどう伝わったか、今は知るよしもない。

槙夫が、その後、愛して、そうして愛されて、結婚した女優の佐和子夫人と、どのようにして生活を共にしたのか。同じ劇道に精進する同志としての結婚はどんなにか実り豊かなものであったか、と百合子は思ってみるのであるが。ただ槙夫のある知合の話によれば、お二人の仲は、槙夫の晩年、ハーモニーに富んでいたと言えないようである。槙夫は、知り合ってすぐ百合子が見抜いたように、内省の人、思索の人、そして本質的に、「明るい生活」（トニオ・クレーゲルの中のハンスに代表されるスポーツマン、行動者としての生活）に背を向けた人であった。彼は生の昏（クラ）い面に棲む人であり、「私の憂うつやさん」であった。人嫌いではなかったが、しかしその本質では、モリエールの「人間嫌い」のアルセルトであり、華やかな女優のセリメーヌに失恋させられる詩人であった……、槙夫が百合子をフランス文学に導いた。本来、百合子はその生い立ちからみてもゲルマン的であったが。百合子の父の姉はドイツ人を父にしていた。実際にはこの姉は父の従姉にあたった。津田カレッジに在学中、百合子は、自分の求めていたのは英文学であるより、ドイツ文学であることを知った。ゲーテは彼女の文学入門であり、ニーチェに憧れ、「ツァラトストラ」に読み耽けり、トーマス・マンを愛読していた。ことに「ブッテンブローク家の人々」を。ヘッセはまるで自分の兄のように思えた。カロッサもリルケも愛読していた。しかしフランス文学を、戦後三年後入った大学で志した。津田を出てすぐ習ったのはフランス語であった。すでにドイツ文法は習っていたので。そして槙夫のイニシァティヴで志したフランス文学により、パリにそしてパリからウィーンへの道が見つかった。百合子は秋の夕べに記す。

槙夫！

人々の出会いは、いわゆる恋愛を越えてもっと人間としての成長に豊かに寄与することをあなたは身をもって指示して下さった。

今　あなたが生きていらしたら……

しかし　あなたは二十二才ですでに完熟されていたモンテーニュのように、ゲーテのように！

あなたの星はいつも白く光りつづけて　夜の暗い小径
を導いてくれる
かっての「恋人たちの小径」で迷いかけた百合子を導
いてくれたように！
あなたは教えてくれる

生の道は死に至り　死の道は生に至り
二つの道はたえず環流して
存在の本質を形成し
私たちはその中に揺れ動く
一本の草にすぎないことを
年毎にジンジャーが咲く時
その香りが
二つの道を繋ぐ回廊の
秘密の扉を開ける鍵であることを！

一九九〇・九・一六
小樽、稲穂小学校同窓生
の急死を聞いて

このささやかな文章は故劇作家加藤道夫への献花の一束です。

エピログ

それも夏の夜、月の光が映しだした幻影であった。ふしぎなほどに、あの輝やかしい夏の日々、雨の記憶は一度もない、曇った日さえなかったと思う。日増しに光を増してくる月光は、あの広大な庭園とそれを取り囲む、果しもないほど拡がる武蔵野の雑木林を晃々と照らしだしていた。

月光の中に長い間凭っていると人は、少しづつ、気がおかしくなると云い伝えられていることが実感になりそうな夜。

いつか月光に照しだされた庭園にいて、百合子はそこからすぐ近くの東寮の二階の角の部屋、つまり大槻藤子の部屋で、この会議中、槙夫がもう一人の知人と共同で住んでいるその部屋の中に入っている自分を夢想した。誰もいなくて、二つ並んだ机、二つ並んだ椅子、その一つの背凭れに、槙夫のと思われるワイシャツが、無造作にかけられている。淡いヒヤシンス色と真白な絹のブラウス、そのすぐ前に都心でパーティがあって、槙夫たちは招れていっていた筈。ふっと百合子は、そのワイシャツを手に取り、そのカラーの所に頬を寄せた……それは「男性」を意識するよりは、はるかに、槙夫のエッセンスにじかに触れる思いだった……

「汝の肉身（ニクシン）はヒヤシンス」ゲオルク・トラークル

ずっと後になってから、二十七才の若さで、第一次大戦に薬剤師として出征し、チェコの南部グロデクでの戦いの後、血まみれになり、死にかけている重傷者を前にして、何百人という数に、居合せたのは軍医二人と彼のような助手だけ数人、薬もなく、治療所もなく、そこに放棄されている、血まみれの、呻き声を発している人々を見て、自ら絶望に駆られた詩人ゲオルク・トラークルは、手にしたピストルの銃口を自分に向けて引金を引こうとして傍の人に止められた。それから彼は軍用病院に送られ、ほんのしばらくの後、一九一四年十一月四日から五日の夜にかけて睡眠剤の多量摂取で息絶えているのを発見された。それは過失ではないであろうと推論された、何故なら薬剤師の身で、その適量を承知していた筈だからである。

日米学生会議のあった夏は一九四〇年、そしてもう翌年の十二月八日に日本は対米戦争をしかけた。槙夫のような作家も招集され南海に行き、船の沈没で、生命からがら助けられた……そして槙夫もそれから何年か後には、トラークルと同じ運命を辿る。

思えば、すべては七月の夜の月光の織りなす夢幻の像であったのだろうか。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

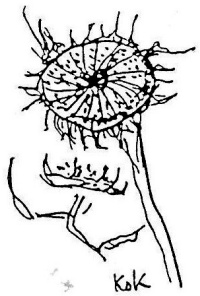
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。



Gone are the Days

山根三枝子

渡辺ハナさんは東寮西寮かけもちの看護婦で寮の人達の軽い病気や怪我などの面倒をよくみていた。朝子達よりそんなに年上でもなかったが母親のような心構えで寮生達に接していた。朝子はいつかアンギーナと当時言われていた症状で扁頭腺に白いものがつき高熱を出したことがあったが、その時の親切な取りあつかいを朝子はよく覚えているし、又腹痛のためであったが夜中に二度も彼女の室をノックして起きて貰ったこと、その時彼女が眠そうな顔をして起きたが不快感の片鱗も表わすことなく手当を考えてくれたことなど記憶から消えることはない。卒業後、何年もたって戦後の世の中も落付いて来た頃に彼女の消息を尋ねる折があったが、既に彼女は乳癌で他界してしまった後であった。

五月四日

東洋倫理が休講だったので近々予定のガーデンパーテ

ィーで上演する劇、イプセン作「小さきイョルフ」の読み合わせをする時間が出来た。三時から四時迄は中島先生指導のホッケーの練習があって出席したがやはり指が痛くてやめて帰った。五時からのタイプも勿論欠席。きょうは入浴日ではないので風呂場の脱衣場でヴアイオリンの練習。（痛い指は弓を持つ方の手なのであまり差支えない）　夜は宿題が多いので忙しい。粕谷先生の訳読はジョージ・メレディスをやっているのだが彼に就いてあらましのことのレポートを提出すること。漱石は英国に滞在中、メレディスをとても沢山読んでいたということ、従って彼はメレディスの影響を受けることが非常に多かったということを知った。消灯になっても未だ和文英訳の宿題が出来ていない。鏡子さんの室に行って懐中電灯を借りついでに力も借りてやっと仕上げた。十一時半に就寝。

五月五日

鏡子さんに朝早く起こして貰い七時半の朝食までレポートのお清書。八時から九時（始業時間は九時十分）までかゝって藤田先生の宿題をした。それでやっと学校に出席出来る準備が出来た。

毎朝　始業前に十五分位の時間をとって三階の小講堂で讃美歌を歌い聖書を二節か三節位読みクリスチャンの人達がお祈りをしていた。宿題などに追われない時には朝子も出席していたが讃美歌を聞きながら窓外の武蔵野の景色を眺めることは気分がすがすがしくなってよかった。しかし宗教の中に入って行くことはどうしても出来なかった。

鏡子さんのことがよく出てくるが彼女は卒業後に朝子の兄と結婚する。その兄はフィリッピン近辺で二十年六月に戦死する。後、彼女はガリオアの第一回留学生として昭和二十五年にイリノイ大学に留学する。遺児を一人育てて彼が大学四年生になった時に癌で四十九才で死亡している。

放課後は久しぶりで時間があいていたので一息つきたかった。でもイプセンの劇の脚本をコピーするよう頼まれて五時過までかゝった。

今夜から三年生の東北旅行は出発だ。出かける人達は夕食を終えてから三三五五出発して行った。居残り組の江上・橋本・小林さん達と上水道わきの農道の方に散歩に出かけた。

塾での学生生活四年間、その間の寮生活のことを思い出す時に朝子にとって忘れることのないものは夕食後の散歩のことだ。現代（イマ）の世の中とはまるで異なった別世界の感じ。物質的には決して現在のような豊さはなかった

がそれに反比例するように自分の時間とか心のゆとりという点では確かに恵まれていた。それに何といってもキャンパス内に寮があったので通学時間が不要であった。又食事を作ることも後片付けをすることもない寮の環境も夕方のゆったりした散歩を可能にしていたことであろう。テレビの前にくぎ付けになることもなし。朝子の日記の一部の或日、或時の散歩についてこんなことが書いてあった。

「何か憂鬱で淋しい気分にとりつかれて夕食後すぐに寮から外に出て行った。校門の前を過ぎて久右衛門橋を渡り右に折れて上水沿いの道をもの思いに更けりながら歩いて行く。やがて初夏も訪れて来ようという晩春の夕暮時、充分に明るさは残っているし西の空は新緑の雑木林の梢越しに茜色に輝いている。心地よい夕暮時、勉強に追われた一日からホッと解放された一時。無為の寂寥感に囚われ一人トボトボと歩みを運んでいた。ふと気が付くと自分は一人で歩いているのではなかった。Aさんがひっそりと私に気付かれないように一寸後ろからつけて来てくれていたのであった。まるで貞淑な妻が夫に従うような態度でうつむきがちに。その時の朝子の孤独を耐えている淋しさにとっては彼女の静かな暖い態度が涙が出る程嬉しかった。朝子は言った、嬉しさで一杯の顔を彼女に見せて。

「あなたってとっても静かな人ね！」

彼女は恥ずかしそうに一寸だけ微笑んだが何も言わなかった。夕暮時の隠やかな雰囲気は二人を青春時代の淡い夢の世界に融け込ませていくのであった。夕焼の空ばかり見ていたせいか、それともそんなにも晩春の日はトップリと暮れてしまったのか視線を地上におろした時その濃さを増した薄闇に気付かされた二人はキリッと気を取り直したような速さで寮の方に急ぎ足で向うのであった。空には金星が光りはじめ、それだのに今夜じゅうにやらなければならない予習や宿題の山が重ったるく彼女達を現実の世界に引き戻すのであった。

みんなで帰ってくる途中で中島先生・河瀬先生と信ちゃん（中島先生の妹）に出会った。誘われるまゝに彼女達のアパート（教師館）に行って八時過ぎまですごし寮に帰って一人で入浴。夜は三年生の人達が大分旅行に出かけたあとなので一寸ひっそりしている。もう十時も過ぎたことだし皆仙台への汽車の中で眠ろうとしている頃であろう。就寝後すぐにはねつかれなかった。十二時頃廊下をカサカサと人間が走り回わるような気配があった。誰かが何かいたずらをしていたに違いない。

五月六日

七時起床。居残り生と他の学年の希望者達で天覧山に遠足に出かけた。あまり気も進まなかったが昨夕　信ちゃんがしきりに誘ってくれていたので出かけた。川の浅

い所を裸足になって向う側に行った。こちら側の人達が羨しそうに見ていた。帰途は東村山から河瀬先生にタクシーに乗せて貰って帰った。

夜は九時過ぎまで旅行で留守の室が並んでいる一番奥のアメちゃんの室でヴアイオリンの練習。そのあと瀬川さんと他後輩二人を招いてお茶をのんだ。

五月七日（土曜）

蜂谷先生の所にレッスンに出かけた。発表会の時に着る洋服を瀬川さんがきょう注文しに行くというので帰途一緒に新宿の「いさみ屋」に立寄って相談にのってあげる。赤味がかった小さな花模様の布地で型はダービン以来流行となっていたボレロ付きのアフタヌーンドレスにした。三時半に帰寮。自室の掃除。買って来た「音楽評論」を読んで夕食を食べそれからモン子の室で雑誌「スター」や「エスエス」を見る。夜は今井さんが貸してくれたバッハのブランデンブルグをリクの蓄音機で聞いた。

消灯の頃になって下級生の瀬戸口さんがフラリと私の室に来た。その夜はお話しながら一つベッドで寝た。彼女は悩みごとがあるんだと言う。そして下手な日本語で

「あたし　ホントはね、日本語で意味のよく分からないことが一杯あるのよお」とあわれっぽい声を出して言った。彼女はアメリカ二世で英語に関しては他の学生より得意であったが日本語に関しては日常生活には一向差支えなかったが概念的と言おうか抽象的な言葉には非常に弱かったようであった。

「あたしね、例えばね、感情的と理性的っていう意味がどうしても分からないの」と言う。よく説明してあげたがいつまでも符に落ちない顔をしていた。彼女は多分、あちらで成功した農業移民の娘であったかも知れない。アメリカでハイスクールを出た後に日本人らしい教育を受けさせたいと言う両親の希望で津田塾に入学して来たと言うことであった。彼女はすべて、もの事の考え方がシンプルで具体的であった。いつも健康的で明るい感じであった。それだのに彼女に悩みごとがあるなんて想像も出来ないことに思えた。私は眠くてたまらなくてそれでもフンフンと一応聞いてあげている風を装っていたが目をあけていることが出来ずに寝入ってしまった。それで彼女の悩みごとは何んだか分からずじまいだったし彼女がいつ室を出て行ったかも覚えていない。でもつまるところ英語以外の日本語でする授業がよく分からず彼女の大きな悩みごとであったということに違いない。

五月八日（日曜）

八時過ぎてからやっと目覚める。朝食をとった帰りに瀬戸口さんの室をノックして一寸のぞいてみたがもういなかった。藤訳と粕訳の予習をしたらお昼になっていた。昼食後　奥田さん（姉の友人で卒業生）とドンに久しぶりで手紙を書いた。北野さんにタイプライターを一寸借りて来て一時間ばかり練習。夕方片田舎監と川上下枝さ

んと三人で散歩。川上さんは卒業生だが事務室か図書室で働いていて寮にいつも食事だけしに来ていた。舎監室に戻ってヨーカンを御馳走になる。洗濯場に降りてお洗濯ものを粉石けん溶液につけた。お風呂のある日はお湯がよく出るので。安藤さんの室に行き東北旅行の土産話を聞いたり絵はがきを見せて貰いガーデンパーティーの時のプレイの相談もした。

五月九日

イプセン作「小さきイヨルフ」の読み合わせ。タイプ出席。夜は英作の宿題

五月十日

体操の時間に久しぶりでバレーボールの試合をして面白かった。夜は消灯まで劇の読み合わせ。自分が読まないでよい時は近々開かれるガーデンパーティーで売るテーブルクロスにステッチ刺繍もした。

五月十一日

ミス・チャペルのリーディングの時間は予習がしてなかったのでヒヤヒヤ首を縮めていたがあたらないで助かった。放課後は劇の練習。寮で夕食後に解散せず一寸だけ残るよう皆に頼んだ。寮の雑則の中に少しだけだが委員会で相談して変更した所があったようだった。しかし彼女はガンとして首をたてに振らなかった。意外にチョロくなかった。

放課後になった。早々と背広服(高野さんの兄上のもの)に着替えていたので暑くて汗だくになった。どうやら劇も終了。

今にして思うにはどんな劇だったのかな。「人形の家」の作者、イプセン作の劇なのだから読みなおしてみたい。相手役のアスタを演じた鏡子さんも委員だった小林さんももうこの世から去ってしまっているが——。

永山さんがテニスコート脇の木立を背景に写真を撮ってくれた。寄宿に帰りアスタ役の鏡子さんとベッドにねころんで休息し、ガーデンパーティーで買って来たサンドイッチを二人で食べたら元気になった。

夜八時から毎日新聞主催の音楽コンクール入賞者の放送があったので食堂のラジオで聞いた。ヴアイオリン部

はじめのうちは中島先生がいて下さった。九時半位になっても未だ二幕しか済まないし皆がしっかり台詞を暗記して来てないのでそれぞれにあせり気分になった。おまけに皆疲れてきてみじめな気分になってきた。こんなことで明後日に演じることが出来るのかしらと——。ところが更に悪いことには停電になってしまいとても怖かった。少し待ったが点かないので月光が恍々と照る中を皆意気消沈した様子で寮に帰って来た。十時過ぎてからやっと電灯が点いたので寮のパーラーで三幕目をドンドンとカットしながら終りまでこぎつけた。どうしたって明後日までに間に合わせなければならないんだから。夜中までかゝった。

五月十二日

朝、眠たくてたまらず学校を休んでしまいたい位。でも七時半の朝食のベルでやっと起き上って食堂にかけつける。登校までの時間に時事問題の宿題(英字新聞の中から意味の分からない単語や熟語を二十ぬき出して意味を調べること)を大急ぎでした。

夕食後又体操場に集まってセッティングをして練習。夜の十一時近くまでかゝった。演劇部委員の小林・安藤・大原さん達だけは用意のため更に残り出演者達は帰ってねた。月の美しい夜だった。

五月十三日

今日の放課後にはいよいよガーデンパーティーが開かれる。そのせいか皆の気持は普だんの日より幾分か浮立っている。それでアゴール先生の会話の時間になった時、先生の姿が現われるとすぐに計画してあったように皆でワイワイ騒いで

「きょうみたいにお天気のよい日には外に出て緑の中で授業をやりましょう」と申し出た。若くて一寸おしゃれな先生なので皆多少つけ込む気持があったようだった。しかし彼女はガンとして首をたてに振らなかった。意外にチョロくなかった。

放課後になった。早々と背広服(高野さんの兄上のもの)に着替えていたので暑くて汗だくになった。どうやら劇も終了。

今にして思うにはどんな劇だったのかな。「人形の家」の作者、イプセン作の劇なのだから読みなおしてみたい。相手役のアスタを演じた鏡子さんも委員だった小林さんももうこの世から去ってしまっているが——。

永山さんがテニスコート脇の木立を背景に写真を撮ってくれた。寄宿に帰りアスタ役の鏡子さんとベッドにねころんで休息し、ガーデンパーティーで買って来たサンドイッチを二人で食べたら元気になった。

夜八時から毎日新聞主催の音楽コンクール入賞者の放送があったので食堂のラジオで聞いた。ヴアイオリン部門の一位は巌本先生のお嬢さん、真理さん(十二才　巌本メリー・エステル)だったが子供とは思えない正確さ力強さでヴィヴァルディの協奏曲を弾いていた。終ってからもそのまゝ食堂にいて椿さんや展ちゃん達とお喋りの時を過ごす。マーガレット巌本先生はその昔、留学生であった日本人医者の巌本氏のあとを追いかけてアメリカから日本にやって来たところ彼の父親の巌本氏が横浜港で立ちはだかって追返えそうとしたとか……それを押し切って結婚したのだとか……　先生の手は冬になると気の毒な位荒れてるわよ。こんど見てごらんなさい……。とかそんなお喋り。

巌本先生は一口に言って素敵な先生だった。教師としての誠実さ、優しさ、根気のよさ、その上家庭婦人らしい円満なおゝらかさ等をすべて兼ねそなえていて人間としてとても尊敬出来る師であった。ヴァイオリニストの一人娘の真理さんを失ってから現在は非常な高令の身を一人で日本で過ごされておられる。

消灯時間が来て電灯を消した室の中に南側の鉄格子の開き窓のガラスを通し薄いレースまがいのカーテンを通してさし込む豊かな月の光。そしてその光がベッドカバーに落ちている様は美しい。丁度きようのプレイの中の台詞にあったように

「幸福や喜びは二人で分け合わなければせっかく喜んだりするかいがないではありませんか　アスタさん」と私が言った通りだと思った。誰かと一緒にこの光を讃美したい。ベッドにもぐってじっとしているとシーンとした夜気の中でくいながクイクイ鳴いていて余計に趣を豊かにしていた。

五月十四日（土曜）

八時半まで深いふかい眠りのうちに過ごせた。午後蜂谷先生宅で発表会の合同下稽古がある。ピアノ伴奏を受持つ本加すみれさんや田中さん、山崎さんなど上手な人達も来ていて何時もとは違った華やかで賑やかな雰囲気であった。丁度先生がピアノと合わせていてこんなのを聞くのははじめてで上手だなと感心した。私の番が来た時二回だけピアノと合わせる練習が出来た。はじめの一回はちぐはぐうまく行かず何度か途中でストップしたが二回目はぐっと良くなった。山崎さんや田中さん達は和服姿の多分何所かの奥さんらしい人達で或いは先生の後輩かも知れなかった。ウイニヤスキーやヴユータンの作品を練習する位の人達で可成り上達した人達のようだった。私達のように勉強や学生活動の合間にやっているのとは違うはづだ。それでもやはりこのようなせまい日本家屋の中ですぐ近くで弾いているのを見聞きすると、所どころで隠しおうせないような美しくない個所も気付かせられる。でもそれはたしかに缶詰の果物ではない新鮮な果物の味わいが感じられるものであった。たとい熟れ方が足りなかったり少し酢っぱかったり逆に熟れ過ぎだったりという変化があっても兎に角、生のものという、そして瞬間的にどうかなるのか分からない所をうまく乗り切るといった痛快さも伴うものであり缶詰果物のような名人の演奏をレコードなどで聞くより余程聞く値打のあるものに思えた。

明治時代に安藤幸子がヨーロッパに渡り当時ヴアイオリン奏法の正統派と広くみなされていたドイツのヨアヒムに師事した。厳しいレッスンを受けたうえで帰国し東京音楽学校（現在の芸大）の教師となった。彼女の弟子の一人が蜂谷龍先生であった。力強さ、ごまかしのない正確さ、高度の理知性そう云った根本的な土台といおうかしっかりした心棒を隠しもった流麗さ……　そういったつまり伝統ある古典性をそなえた上品な奏法が東京音楽学校のヴアイオリン科の伝統として形づくられていった。蜂谷先生の弟子の兎束龍夫氏も芸大教授となりその又弟子の海野義雄氏も教授となった。蜂谷先生はすぐれた技量がありながら上野の分教場の教授で終っている。学生数も当時は少なくてしたがって教授の数も少数で事足りたためであろう。台北のような遠隔の地から出て来たものがたとい短期間であったが彼女のような師に接することが出来たことは今にして考えると不思議な位の恵

に思われる。しかしこれもはかない夢のようなことであったのだと今にしては思われるのである。

入浴して夕食も済ませ「晩年の父」小堀杏奴作を読んでいたらタッちゃんが私を呼びに来た。ミス・ブレイスウエイトが遊びに来ていて今からソーシャル・ダンスをするから一緒につきあってということであった。しばらく皆で踊ったあとタッちゃんの室でミス・ブレスウエイトに写真を見せたり日本の色々なお話をしてあげた。タッちゃんの父親こと龍村平蔵は正倉院御物の中の織物を現代に再現した染色織物師として当時の知名人であり龍村織の元祖でもある。彼女は謡曲や仕舞もたしなんでいたのでそう言った話題や写真はミス・ブレイスウエイトにとって興味深いもののようであった。十時半に散会し彼女をハツホン先生のお住まいまで皆で送っていってあげた。彼女は昨秋英国から来日して以来ハツホン先生の家に下宿させて貰っていた。皆で月夜をエンジョイしながら帰って来たのだが十一時近くの夜気は可成り冷たくて芝生には一面に露が降りていた。こんなことまでが二十才の台湾育ちの娘には面白く感じられた。月夜の夜中の散歩なんて誰かの小説の中に美しい描写があったが体験するのは初めてのことであったので。大分歩いてから寮に入ろうとしたがもうおそいので何処も戸締りがしてあって入ることが出来ない。台所の入口に回ってこっそりおきのちゃんを呼び起こしてドアをあけて貰った。

ヘリに金属のついた固いコンクリートの階段はスリッパ越しに足に伝えてくる何か冷やかさをもっていて階段を上りながら何んとなく寄宿生活のわびしさを感じさせるのであった。或いはそれは又青春の淋しさ辛さであったかも知れない。自室に帰ってからもあまりにも美しい月を眺めずにはいられなかった。そのうち無我の境とでもいったものに落ちていくように感じフト自分が眠りこけそうになっていることに気付きベッドにもぐり込んですぐ深い眠りにおちていった。

ミス・ブレイスウェイトについて

昭和十二年の九月、暑中休暇も終り再び学校に戻った折に星野塾長が一人の新任教師を学生達に紹介した。英国人で名前はミス・ブレイスウエイト。小柄で若い女性。三日月のような弧を描いたまゆ毛をしていた。後になって彼女の顔に白色に近い金色の産毛が沢山生えていることも分った。塾長の紹介の弁によると彼女はケンブリッヂ大学を出て更にスウェーデンの大学で特殊な新しい体操（リズミック・ジムナスティックスと言っていた）を学んだ由。彼女は東洋に憧れて（多分）当時英国の租界地もあった上海の学校で教師になるためにはるばる日数をかけて英国から支那にやって来たのである。時は昭和十二年（一九三七年）上海事変の起った年の夏である。

上海に着いたまではよかったが事変のため上陸が許可されず日本に来てしまった。夏の間にアレコレと奔走したことであろうが九月から津田塾に転がりこむ結果となったようであった。塾長の紹介のお話によると彼女の両親にとっては愛娘が日本のような国に行って住むなんて耐えられない程ショッキングな出来事であり（こゝまで塾長が言った時に学生達はその誤解と言おうか認識不足を皆ドッと笑ったことであった。しかしそれは又学生の側の自国に対する認識不足でもあったのに違いないのだ）あくまでも日本に住むことに反対した由である。しかし塾の英米人教師達の両親あての納得いく手紙の説明と彼女自身のもつ若さの冒険心が塾の教師となることを肯定させたのであろう。なお彼女はクウェーカー教徒でありミス・ハツホンもクウェーカー教徒であることもプラス要因であったかも知れない。当時日本に就いては新聞による僅かな知識、それも侵略国という憎むべき国という印象しかなかった彼女の両親としては当り前の反対であったことはうなずけることだ。

彼女の名前は長ったらしいのですぐに「ブレちゃん」というあだ名がつき人気があった。何しろ彼女は突然日本に来ることになったのでそれに又五十年も昔のことであったので日本については知らないことばかりであったようだ。今日でいう所のカルチャー・ショックを大いに受けたに違いない。日本人が好物として食べる筍やごぼうのことを話したら**Terrible!**と二度叫んで仰天していた。要するに彼女は日本人ずれがしていないと言うことでお互いに新鮮な文化交流があったように思えた。

では彼女の体育の授業はどんなものであったかと言うと――この説明は文字を通してするよりビデオでも用いて見て貰えば一目瞭然なのだが――はじめての授業の時間に先ず彼女の服装に一寸ばかり驚かされた。何しろ半世紀も昔のことだから――。軽く羽おったカーディガンとロングの巻きスカートをサラリと脱ぎ捨てると下は裸に近いうすい海水着様のもの一枚だけ。足も腕もギリギリまでむき出しで体の動きがよく見えるようにしてある。

体操場の片隅にドイツ製の古ピアノが置いてあった。彼女はそのピアノを縦横無尽にたゝき鳴らした。体育選手の機敏さと確実さでピアノを鳴らした。それはショパンやベートーベンではない。それは体を動かす強力な指導力をもった音楽であった。八十八の鍵盤を端からはじまでまるで機敏な鼠が走り抜けるように早く鳴らす時、生徒達はその感じで走る。そして十本の指全部でドーンと響かせる時は思い切り高く跳躍したりした。又やわらかに歌うように弾く時は体を静かに曲げたり回わしたりした。多種多様なリズムとメロディーに合わせて彼女は創作的に自由に動作を考案して生徒達に教えるのであった。道具としてはバレーのボールとかフープやクラブ（

根棒）等も使用した。緊張の勉強時間から解放され音楽に合わせてする彼女の授業は大へん楽しいものであった。このリズミック・ジムナスティックスは当時としては新しく又珍らしいものであったので乞われて自由学園と白木屋デパートの屋上でデモンストレイションを行ったりした。そして当時のスポーツ誌の表紙に大きな写真入りで宣伝された。細田・阿部・小越・椿・田中さん達他数人、自他共に優秀な演技が出来ると認めた者達がその役目を果たしたようであった。しかし日本周辺の緊迫した戦局を案じた彼女の両親がブレちゃんを日本においておくことを案じ本国に呼び戻してしまったので在任一年半位で終りを告げてしまった。それから二十年位の時が流れたであろうか、第二次大戦も終り平和になってから細田・小越さん達は英国を訪れた際に彼女に再会した由だが其の後ブレちゃんは死亡したということである。時々うっとりとしたライトブルーの目で遠い所（故郷の英国をしのんでか）を見つめるようにしていた表情が印象に残っている。

五月十五日（日曜日）

又おねぼうしてしまった。日曜だからいゝけど……。此頃体力減退気味だ。矢野さんにねこみを襲われてやっと起きた。食後　寝具をへらして余分の布団を物置の布団袋に片付けた。タンスの中も夏ものにかえて整理した。午後から誰もいない学校に行ってヴァイオリンの練習二時間。紘をおさえる左手の指先はタコが出来ていてカチカチで固いのにそれでもズキズキ痛む、寮に帰り展ちゃんの室でクロス・ステッチの本（多分英国かフランスの本）を見せて貰う。あんまり綺麗なので一寸ばかり刺繍がやりたくなった。

学校で何かの会がありその時に残ったお菓子を展ちゃんが持ち帰って来ていた。何んだか蝿がたかってたみたいだと云うのでお台所で蒸して貰ってから一緒に食べた。夜はモン子の室のベッドにねころんで本を読んでいたらいつの間にか眠ってしまいふと目覚めたらもう消灯時間になっていた。自室に戻り口をすゝいでねた。

五月十六日

私の満二十一才の誕生日

九時の登校まで大急ぎで予習。リーディングと訳の本に目を通す。昼食後の短い時間に運動部の委員会。（プレイ・デイに関すること）タイプに出席。学校から帰るとプレゼント持参で瀬川さんが来てくれた。コティーの香水とゲーテの詩をコピーしたものと自作の和歌を下さった。午後おなかが痛くなり疲れも感じたので夕食までねていた。夕食後は九時位までかかって運動部の仕事をした。

五月十七日

昼休みに全校生でする十五分間体操のあと昨晩準備し

たプリントを皆に配った。主として中島先生にうかがって作った正しい姿勢に関する説明や注意事項。タッちゃんが皆を前にしてそれを読んだ。三時間目の体操の時間は途中から欠課にしてプレイディに出る選手を決めた。夜は家に手紙を書きそのあとでパーラーの本棚にあったゲーテの詩を読んだ。瀬川さんからの詩に刺戟されたのかな。

恋人の住むこの家を
今は立ちいで　われはゆく
さびしく暗き　森をぬけ
忍ぶ足どり　わがゆけば
檻の木の間に月照りて
ほのあたたかき　風わたり
白樺の梢　たわみつつ
あまき馨りを放つなり

この麗しき夏の夜の
冷え冷えとして　こゝちよき！
心の幸をこゝにして
覚ゆることの静けさよ！
げに楽しさは限りなし
されど神なる天然よ　かゝる夜を
千も　おんみにゆずるらん

恋人が一と夜をわれに与えなば
（ゲーテ）

九時頃から私の室にタッちゃん姉妹、井上・保坂さん達が来てお茶とお菓子で井上さんと私の誕生祝をしてくれた。

オプティミストとペスミストとは？という議論から始まって一寸ばかり下らないお喋りになって来た頃に消灯の予鈴（ヨレイ）ベルが鳴った。片田舎監が三階の電源スイッチを消した帰りに私達のいる室の明け放してあるドアの所から室内をのぞき込んだ。懐中電灯で私達をパアッと照らし、もう寝ないといけませんよと一応はおこったような顔をしてにらんだが私達は皆で先生をからかって追い払った。昨秋着任したばかりの新米舎監にとっては上級生は一寸手強かったであろう。

五月十八日

七時半と思ってびっくりして起きたら未だ六時半だったので一寸もうかったような気分。今日はプレイデイ（体育祭）の予定なのに雨がじゃんじゃん降っていて恨めしい。三時から五時まで空いていたのでトルストイの「幼年時代」を読む、五時からタイプ。

五月十九日

朝、目を覚ますと又雨。プレイデイは又延期でガッカリ。粕訳の予習（The Ordeal of Richard Febrel）放課後　企画部の催しで映画会があった。雪景色の蔵

王と滑降するスキーヤーはとっても素晴らしかった。夜はトルストイを又読む。

五月廿日

放課後　田辺尚雄氏の講演があったのでタイプの練習はお休みにした。ソナタ形式の発達をバッハ・ヘンデル・ベルリオーズの作品を聞きながら説明して貰った。音楽関係の雑誌の中では「音楽評論」が一番よい由。又音楽史は乙骨（おっこつ）さんの著書をすゝめて下さった。田辺氏は顔立ちのきれいな一寸だけ皮肉っぽい目付をした男。入浴後は日本間で西寮の三年生達はすきやきパーティーをしてブレちゃんを招待した。食後　リクでソシャルダンスを少しして日本間に戻った。江上さんの生花、佐藤うた子さんのお琴、タッちゃんの仕舞、伊藤さんの茶の湯等をブレちゃんに見せてあげた。彼女はタッちゃんの着物を着せて貰ってお茶の時に客の一人になった。小柄な彼女は日本着物が似合って可愛らしかった。十時半散会。

当時タッちゃんが仕舞や謡曲をすることは知っていたが他の人達がこのように日本風の芸をたしなむことは其の時まで全然知らなかったので嬉しい喜びであった。今にして思えばこれも大正生れの娘達の一面であったであろう。その昔、高等女学校では課外、今で云うところのクラブ活動で茶道や華道それに弓道部・なぎなた部などもあったのだから。彼女達のたしなみはブレちゃんの好奇心を充分に満足させ又彼女を喜ばせることが出来たようであった。

五月二十一日（土）

一練習してから蜂谷（ひと）先生宅へ。瀬川さんが丁度やってる最中だったので聞きながら待った。きょうの私の演奏はやっと先生に「結構です」と言って貰えた。もっとも今日が結構でなければ一寸困る。帰途新宿に寄って買物をしてから帰寮。

五月二十二日（日）

朝食後　室の掃除。本箱、机、ベッド等の位置を換えて気分転換を計る。お昼前頃　ヴィオッティの二重奏曲を瀬川さんと合奏してみる。発表会もあと一週間後に迫っているのできょうも高円寺の先生宅に行く。金婚式をひく予定の原さんという可愛らしいチビッ子にはじめて会った。私達三人は練習が済んでからも他の人達のをもっと聞きたかったので帰らずに居すわっていたら先生に早く帰りなさいと追払われた。

五月二十三日

早起きして昨夜早ばやと寝てしまった分を取り返すべく勉強。粕訳をしていたら増川さんが嬉しそうな顔をして郵便小包を両手でふりふり持って来てくれた。中から綺麗なロングドレスが出て来た時は嬉しかった。姉がミセス・ヂェームスに相談し教えて貰って作った演奏会用の洋服だ。もう勉強はそっちのけとなり洋服にすっかり

気を取られて着たり脱いだり「どうかしら?」って増川さんにきいたりした。粕訳の授業の時はこんな時だっていうのに運悪く訳があたってしまった。単語だけは一応調べてあったので無事通過出来た。午後の社会問題の時間には勤勉で秀才のIさんが珍しいことにグーグーと眠っていた。

放課後　衛生部企画の講演会。東洋病院の院長　高田博士のお話　「学生と肺結核」があった。

夕食後はドレスを着て演奏するところを矢野・安藤・増川さん達を呼んで来て聞いて貰い当日アップしないための練習をした。そのあと消灯まで鏡子さんのノートを見せて貰って「社会問題」のノートの整理をした。

五月二十五日

延び延びになっていたプレイデイをやっと行うことが出来た。朝のうちは曇っていて気がかりであったが敢行してよかった。やがて天気は回復しだし快晴となった。テニスの試合では選手として宗像さんと組んで出場。三年のもう一組は松本さんと細田さん。宗像さんは運動が何んでも上手。後衛を引きうけて着実に球を返えしてくれて助かった。

テニスのチャンピオン宗像さんは卒業後、早めに結婚して三児をもうけたが早ばやと夫を失った。其の後彼女自身も四十才そこそこで酔っ払い運転のトラックをよけ切らずに交通事故死をした。偶然のことながら彼女の友人の御主人がかろうじてそのトラックをよけることが出来て、ヒヤッとして後続の車はどうかなと振り向いたらもう衝突していたということであった。彼女は昭和三十三年頃だったか亡くなる少し前には全日本ソーシャルダンスでチャンピオンを獲得している。

二時過ぎに体育祭は終る。顔が真赤にやけてしまった。入浴後その顔をみてつくづく困ったものだと思った。だって二十九日にロングドレスを着てステージに立つというのに此のまっくろけとなる顔はどうしたらいゝのかしら。

五月二十六日

三時から五時までの間に伝染病の予防注射をすることになっていたが発表会のことを考えて注射は受けなかった。

五月二十八日（土）

最後の練習に蜂谷先生宅にいく。帰途、四つ谷の「トタニ」に行って髪をカールして貰う。夕食の時に食堂に行ったら皆が私の頭のことをひやかした。

明日のことがあるし一寸疲れていたがボンファイヤが運動場であるので出席しなければいけないと思って出た。

五月二十九日（日）

今日の午後はいよいよ演奏会だ。時季外れに暑くるしい日で朝から疲労感があった。朝食後、三人でリハーサルをする。同級下級生十人位を呼んで来て聞いて貰いアッップしないように練習をする。十時頃寮を出て途中「トタニ」に寄ってお化粧とカールをして貰う。十二時過ぎに有楽町駅近くの保険協会講堂に着き控室に入った。もう大部分の人達は集まっていて盛んに調子を合わせているので部屋中絃の音が鳴り響いていた。サンドイッチの昼食が用意されていたがそわそわした気分で食欲が少しもない。一つだけ食べた。すぐに一時になり演奏会は始まった。一番最初と最後は先生の演奏だ。ベートーベンのソナタ24番が最初だ。先生という立場の蜂谷先生もきょうは一人の出演者として私達と同じ立場にあった。いつもとは違った表情で「あたし　胸がドキドキよ」なんておっしゃるので親近感を味わわされた。先生はもうすぐ舞台に出て行くという時に

「本加さん　背中をドカーンとたたいて」

と頼むので伴奏者の彼女がドンとたたいた。

「そんなたゝき方　だめだめ」

と言って手伝いの為に来ていた楽器屋の男性の人に思い切り叩いて貰ってから舞台に出て行った。私達は控室から大急ぎで客席の方に回って行った。先生の演奏は一楽章だけだったので間もなく終り増川さんがタランテラを弾き終るまでいて控室に戻った。私の番はすぐに来た。案外ドギマギしなかった。出がけに先生が私の背中もドカンとぶったので思わず「アイタッ!!」と叫んでしまった。でもこの一たゝきは何故か効果があり舞台の真中辺に立っても落付いた心境でいられた。しかしいざ弾き始めてみると聴衆は意外に重たい感じ。自分で満足するようにすべてはうまく運ばない。暑さのせいか方々でプログラムをファン替りにしているのが気になる。ドアが開いて人が一人そっと入って来たのも気付いたし色々な雑念にさまたげられて弾いていたら自然にテンポがのろくなったらしい。二頁目のアンダンテに入る時にボーンとフォルテでピアノがいそぎ気味に出てくれたことでそれを気付かされた。二頁目の下から二段目あたりや五頁目の下や六頁目の下の辺りは音程が時折微妙に狂った感じ。終りに近づく頃はもうマラソンのゴール前のような疲労感で一生懸命自分に鞭を打った。もがいてももがいても平常の調子に乗らぬ苦しさにプウッとおこったような顔になっていることに気付き表情だけは訂正した。でも兎に角終って重荷はおりた。当日はやたらに気温が高かったし体も消耗していたとくれば良い演奏など期待するのはどだい無理だったのだ。

後日この日の演奏を考えて見た。ローデの協奏曲八番の第一楽章。さまざまなテクニックを取り入れた堅い曲。立派に成長した男性が力強くひいたらよいような曲。朝子にとっては分不相応な難曲。若し寮生活でなくて親が

身近かに付いていてくれたなら食べ物とか其他生活全般を注意してよい体調を整えるよう考えてくれていたことであろう。しかし万事に未経験な朝子はこの日までに色々な他の活動の為に体力気力を消耗していて充電を必要とするようなコンディションだったのだ。

自分の演奏を終えた朝子は大急ぎで客席の方に戻って次の瀬川さんの演奏を聞く。ベリオの協奏曲七番。華麗な曲。彼女の祖母と叔父が聞きにみえていた。ところが弾いている途中で絃の中の一本がピュッと下がってしまった。こんなことって普だんの練習の時だって一年間、否二年間に一度だって起こることではないのに一体どうしたっていうんだろう。ピアノの譜めくりをしていた先生はすかさず行って絃を巻きあげ調子をとゝのえた。彼女はこのことで大いに気分を乱されたかも知れなかった。しかし実力ある彼女のこと故、充分取り戻したかのように演奏出来たように思われた。しかし終りに近づいて来た時彼女はかけ足テンポとなって来て本加さんのピアノがそれを追いかけるように伴奏していった。終って朝子が控室に戻ると彼女は落膽したかのような表情で盛んに「あゝいやだ。いやだわ」とか「困った、困ったわ」とか朝子の手を握りしめて半分泣き出しそうに言うので朝子は懸命に慰めた。

休憩時間になり服装を着換えて地下の食堂に行き瀬川さんのお祖母さんが冷たいカフェオーレを飲ませて下さった。瀬川さんの叔父さんは三十才台のハンサム・ジェントルマン。

第二部に入ってからは上手な人達がヘンデルやウイニヤスキーの作品を演奏し朝子達は客席で落付いて聞くことが出来た。斜め前の辺りにいた寮生の菊池さん達がふり向いて朝子達の方に向って手を振った。終りに先生が出てきてベートーベンのロマンス・ヘ長調を美しく演奏した。二曲目の Perpetuum Mobile（Kies作）、これはまるで蜂がうなるかのようにすごい速さの指の動きで音がかけめぐる曲だ。途中で一寸だけころけそうな感じになったと思われた時はドキリとして心臓が止まりそうな気がした。だって大好きなそして限りなく尊敬している先生が沢山の人達の前でミスをしたらこれはたまらなく心を痛めることに違いないから。ヴァイオリンの演奏が全部終り友情出演の長坂好子さんが「セビリヤの理髪師」の中から一曲とグノーの「アベマリヤ」を静かに歌った。そして会場は隠やかな雰囲気のうちに幕を閉じた。

来会者が帰りはじめた頃、客席の中に招待券を送ってあったボーイフレンドのドンを見付けた。やっぱり来てくれていたんだ。挨拶をするために彼のところに近づいていった。「あーら、来て下さったのね、どうも有難う」と云った。朝子は自分の演奏について何か一言でもいって欲しかった。潜在的には自分の下手な演奏を慰めてくれるような虫のいい言葉が欲しかったのかも知れない。それで「あたしの　どうだったかしら?」と言った。ドンはノーコメントであった。でも嬉しそうな目付で軽くつばをのみ込んだ。そして朝子を見る時よくする目付でジッと見つめて目だけでこう告げた。朝子の問いかけは無視して——。

（君を愛しているよ　今までよりもっと）

しかし一寸間をおいて彼の口から出た言葉は「蜂谷先生って　ずい分素晴らしいんだね!!」であった。彼は先生の演奏を高く評価していた。朝子は先生が賞められてとても嬉しかった。そして自分の演奏はとてもつたないものであったのにその上手下手にかゝわりなくドンが暖い気持ですべてを理解し又受け入れてくれているのを十二分に理解出来た。

控室に戻り色々な人達が先生の所に来て挨拶しているのを眺めていた朝子はきょう一日で又先生が一層好きになってしまった。

次の日曜から又平常通りに練習することを約束して三人で銀座のオリンピックで食事をとりヴァイオリンをぶら下げて有楽町駅まで歩き電車で帰途についた。三人とも疲労のためあまり喋ることもしなかったし満足出来ない出来ばえに自己嫌悪感にさいなまれてもいた。

帰寮して入浴。演奏会にも来ていた瀬戸口さんが苺とピーチで朝子達を慰労してくれ、そのあと椿さんも三人に紅茶を入れて朝子達をねぎらってくれた。

自室に戻り増川さんときょうの会のことを色々と話しているうちに二人とも自分達の力の足りなさをいやというほど意識しはじめて滅入って来た。お互いに慰め合うのだが両方ともが落ち込んでいくものだからどうしようもなかった。そのうち消灯時間が来てしまうが一人でなんかねていられない位淋しい。お互いに同病相憐れむ者が必要なのだ。増川さんがねまきに着替えてから来てくれて一緒にベッドにはいった。二人で先生は今頃何をしていらっしゃるのかなとか熱海に休養のため出かけるって言ってらしたけどお相手は誰なのかしらなど色々と先生のことを話しているうちに増川さんはスヤスヤと眠ってしまった。彼女は初級の演奏で曲もピースもので楽にこなしたはづだった。朝子は眠るどころか増ます苦しい気分に落込んでいった。

人間なんて一体何を目あてに進んでいるんだろうか。ほんとに朝子は生意気であった。今迄世の中って汚いものだから相手にすまいとか、友情を肯定出来ないと言ったり又結婚生活は罪悪であると批判したりして来た。そしてただ芸術の世界、つまり自分をヴァイオリンに燃焼させることのみに幸せを見いだし生きがいも感じヴァイオリンこそ人生での唯一の友と心に決めていた。ヴァイオリンにそゝぐ熱情にヴァイオリンが応えてくれさえす

れば何も要らない。宗教も神も要らない。しかし今日こそつくづく思い知った。ヴァイオリンを携えて生きて行くことが如何に険しい道程であり苦しみ多く又何んと到達し得られぬような遠き所に目ざすものがあることか！前途に見ていた希望の光はすっかり消え失せてしまった。早朝に起きて誰もいない校舎の中のタワーに行って練習したり又、天候が許す季節には雑木林の中にわけ入って陽だまりの枯葉の上などでも練習した。首のわきには紫色がかったあざが出来、指先はカチカチに堅くなり、右手の人差し指には弓だこが出来、夢中の練習の時間を重ねてどんなに苦しい訓練と戦って来たであろうか。それでもこんな結果とは！

戸外ではひどく風が吹いていた。鉄製の開き窓のせいか窓のあたりで風がうなる。よくね入っている増川さんのいることがせまくるしく感じられてきた。彼女を押しだしたらふっと起きあがりねぼけ半分に一寸よたついて「もう　帰る」といって出ていった。そのあとも何んだかぢっとしていられない気分に襲われ廊下に出た。中央階段の所にある窓を押しあけて外気を吸う。目の前で黒くて大きな木立がザワザワ動いていたがもう真夜中なので寮は静まりかえっている。しばらくして自室に戻ろうとしたら何か物音がした。瀬川さんが室から出て来たところであった。彼女もやはり朝子と同じような状態でずっと眠れなかったということであった。二人は何等かのムーブメントを必要とした。そして一緒に一階に降りて行った。

（未完）

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

ことを考える。

見えばりなのかな、と自己評定をする。

ある初夏の爽やかな日のことであった。物干し場に立つと、真っ青な天空が一面に広がり、暖かい陽光が燦々と注がれ、正に気宇広大を感じた。その陽光の中で風に曝されて軽くなった干し物のふっくらした感触に、須田は、身も心も清々しく洗われる思いがして、むしろ驚きを感じたことがある。女が幸せを感じるときの一つに「洗濯物がよく乾くとき」というのがあるということを、須田は、女性の世界の狭さを比喩的に表現するものと理解していたが、そのとき、須田は、「これだな」と実感した。家族の幸せを願う主婦の思いがそこにあるように思った。

とはいうものの、実際には須田は、洗濯物を取り込むのを忘れることが一再でない。

今日は天気が良いからと、布団を干して

「今日は布団を忘れないでね」

と念を押されても、自分の部屋に籠ってカタカタやっていると時の経過を忘れ、窓の下で妻の車の排気音がするのに、はっとした時は既に遅し、布団は屋根の上でしっとり夜露を吸っている。

「好きなことだけは忘れないのに」

妻のぼやきに抗すべき言葉もない。

掃除もなかなかの作業である。ごみの始末が容易ではない。人間は、ごみを産出するために生きているのかと思うばかりである。昔ならば腐る残滓は土に埋め、燃えるごみは庭で燃したものだが、今は穴を掘る土はないし、煙を出せば隣家の洗濯物を黒くして女の幸せを妨害する。

ごみの始末は、結局市のごみ収集に頼らざるを得ない。

燃えるごみは週二回、燃やせないごみは週一回の収集である。うっかりしていると収集車が朝早く来てしまうことがあって、そうなると次回までごみをどこかに俟管しておかなくてはならない。やたらの所に置くと鼠や猫に食い荒らされる。この保管を億劫がって、収集車が去った後でもそのまま置いて行く者があって、ごみの収集場所は年中犬、猫、野鳥の食事の場所になっている。

朝のごみ出し作業は、須田が担当である。

その朝は、須田は大きな紙袋やビニール袋を抱えて収集場所へ二往復もすることがある。特にプラスチック類は、ごみの分類の上では「燃やせないごみ」になっている。燃やせば燃えるが、燃えるとき高熱を発して燃焼炉を傷め、かつ、有毒ガスを発生して大気を汚染するのだそうである。

しかも、このプラスチック類が甚だ多量なのである。スーパーの総菜類の一つ一つがスチロールの皿に乗りポリラップに包まれていて食事の回数に従って着実に増えるし、デパートなどでの買い物の過剰包装のプラスチック の廃材は、押しても潰しても元の形になってしまう。台所の片すみに大きなビニール袋の中でその存在を誇示している。

これが地中に埋められても腐ることなく地球を傷付けて行くのだと思うと須田はごみを片付けながら憂鬱である。

残滓の始末、便所の掃除など物事を奇麗にする行為そのものは余り奇麗なものではない。須田も時に掃除機を操作しながら、結構時間がかかるこの作業の意味を考える。ごみや埃のないさっぱりとした家庭環境を維持する作業は、一般には家族が家に居ない状態の中で主婦によって行われている。目立たない地味な作業である。しなくて済めばそれに越したことはないものといえるかもしれない。須田は、街を行く潑溂とした美しい女性が結婚して主婦となれば、このような作業に専念するのかと考えると何ともいえない複雑な思いがするのであった。

しかし、と、須田は考える。炊事には家族の健康を守り、味覚を満足させる食物や栄養に関する科学的知識や調理の技術、洗濯なら織布の科学、洗剤を理解する化学の知識、家計についてのやり繰りの経済知識などなど総合的知識を要するのではないか。テレビの洗濟のコマーシャルにしても美人が現れて酵素の働きがどうのこうのと叫んでいるし、また、二種類の洗剤を使ったため化学反応による有毒ガスで死亡事故が発生したとか。さらに、その洗剤が河川を汚染し、自然環境に大きな影響を与える原因にもなっている。洗剤一つにしても化学の知識が必要のようである。

須田は、主婦業こそ総合的科学知識の上に成り立つ実践的総合職ではないかと思うのである。

妻が出勤してから昼まで三時間あるが、この三時間という時間は現役時代にはかなりの仕事をこなす時間であった。須田の今の計画では午前の三時間は主として英語とフランス語の習得に当てる予定である。しかし、なかなか計画通りにはならない。須田の病気のためには食後一時間身体を横にしていることが良いということで、

「せっかく勤めを止めたんですから、それだけはしっかり実行してください」

と妻にも言われる。須田もそうしようと思う。居間のソファに横になって新聞を読むか、テレビを見て過ごす。かれこれ十時近くなって、二階の書斎に上がる。おもむろにテキスト類を開く。

須田が脳の老化に手を焼きながら、なお英語やフランス語に粘りついているのは、いつか妻とヨーロッパを訪ねてみたいと思っているからである。二、三ヵ国の看板を読めるようになればという程度の実用的目的がある。

妻に一ヵ国語は分担させようと思うが、妻は取り合わない。もう一つ、英語については、結構長いお付き合いをしている筈であるのに簡単な日常会話さえ聴きとることができない口惜しさがある。アメリカやイギリスの赤ん坊でも聞き取れることが、長い時間をかけているのにできないことが須田には屈辱に思えるのである。投げ出せば敗北に通じるという思いがある。

リンガフォンのCDの音声に耳を傾けながら、いつの間にか頭の中は別のことが去来する。（庭の草が伸びていたな）とか（次の市民展には何を描こうか）とか（この間の放送大学のレポートはうまくいかなかったな）、とか。

とかくしていると、机の上の電話が鳴る。

「須田さんのお宅でしょうか」

若い女性の声である。妻への電話かなと思いながら

「はい、須田です」

「ご主人様でいらっしゃいますか」

「そうです」

「こちら東京の神田にあるインタナショナル・ファイナンスと申しますが、ご主人様は財テクにご関心がお在りと存じまして・・・」

「あ、それなら残念ですね。関心はあっても、なにがなくてね」

「そんなこと、ございませんでしょう・・・」

「や、御苦労様です」「カッシャン」

そうこうするうちに、今度はインターホンが鳴る。電話で応答する。

「はい、須田です」

「この町に住んでいます清水と申します。お願いがあって参りました。」

須田は、市の市民生活部長を介して総務庁の行政相談委員というものを委嘱されているので「お願い」とあっては迂闊な応答はできない。

「お待ちください。すぐ参ります」

階段を降りて、玄関へ出る。

「わたくし、清水と申しますが、財団法人企画リサーチというところから・・・アンケートのお願いに・・・」

行政への苦情ではないようだ。しかし、こういう手合いは、まともなものか、インチキで警戒を要するものか。信憑性に嗅覚を働かせながら、結局人の良い須田はアンケートに答える。

須田の書斎は、通りに面する駐車スペースに突き出た中二階になっていて、通りの行き来の様子が音になって入り込む。自動車、バイク、人の足音、挨拶を交わす女の声、子供の声、入り乱れる。須田の家の前を駐車に利用する車も多い。車の停まる気配がして、バタンとドアを閉める音がする。スワ来客かと窓の下を覗いて見ると、包みを持った男が脇の私道を入って行く。奥の某氏への

訪問客である。須田家への訪問者は多くはない。そう分かれば門前に停まる車の気配も気にかけることはない。

しかし、気にしないでいると不意打ちを食うことがある。夏のことでステテコ姿でいると、電話機にピンポン、ピンポン、ピンポンとインタホン。電話機で応対するより早く既に玄関内で女の声。

「ごめんください」

ズボンを履く間もなく、ステテコのまま玄関へ出る。二十才前後の若い女が二人立っている。

「印鑑や運勢のことでお話しを・・・・・」

須田をじろっと見て

「誰もいないんですか」

いる人間を前にして、いないのかは挨拶だなと思いながら、敵の質問を逆に利用する。

「ああ、誰もいない。」

「じゃあ、・・・それにしても蒸暑いわね。雨が降りそうね。」

「今年はカラカラだったから、雨が欲しいね。」

「おじさんは農家？」

「そうだよ」

訳の分からぬ留守番じいさんを決め込む。

主夫業は、結局空振りで、机に向かっても一向に能率が上がらないでいる。

そうこうするうちに昼である。

放送大学の正規の過程では面接授業も必須になっている。須田も二年次になって興味を持っている幾つかの科目の面接授業を選択した。さすがに日中の授業は、やはり主婦が圧倒的に多いようである。教室内に散在する男は須田と同じようなリタイヤ組であろうと思われる。

女性は女性で親しい仲間ができて、会話を楽しんでいる。どこから通って来るかも話題である。

「あらっ、熊谷からなの。それは大変ね。熊谷だったら、大宮の学習センターの方が近いんじゃない」

色白のおとなしそうな女性が答える。

「この科目の授業は、大宮では午後なの。子供が学校から帰って来る時間に間に合わないの。ここの授業だと間に合うのよ」

そんな会話が耳に入る。

また、別のグループからは英語学習の苦労話も聞こえる。

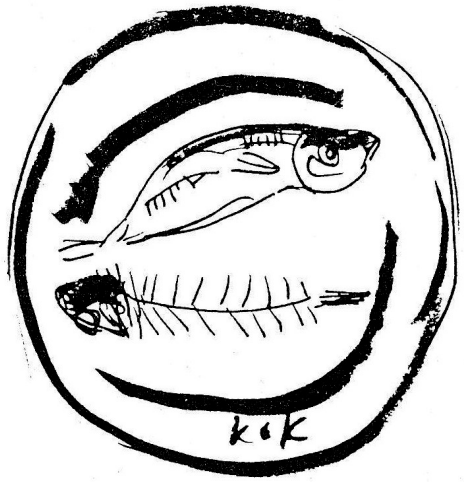
「学校を出てもう何年も経っているし、第一ヒヤリングができないでしょ。だから、放送をテープに取って、炊事をしながら聞いてるの。主人がいてテレビを見ているときなど、邪魔にならないかと気を使うのよ」

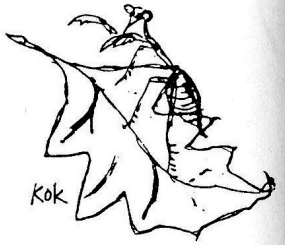
その上、この女性は、ボランティアの仕事も持っているらしい。

県外から通って来る人も多いようである。子供が中学、高校になり、手がかからなくなったのでという人も多い。

彼女たちが学校を出たころは、地元には彼女達を受け入れる短大や大学もなかった。進学の機会を持てなかった彼女達は、今、妻、母、パート、学生の幾足かのわらじを履いて、なお、かつ、家族への思いやりを優先させているのである。須田は、こうして放送大学に通う主婦達の姿に全くもって敬服せざるを得ない。

「主夫」と「主婦」との差は大きいようである。





葬送記

大和禎人

「道灌山会館」はＪＲ西日暮里駅から開成学園の前を不忍通りへ出ると、右折して間もなくのところにあった。不忍通りは昔上野池の端へ音羽の護国寺から都電の走っていた通りだ。（道灌山下）というバス停がいまも昔懐かしく名残りをとどめている。いまは音羽の講談社が大日本雄弁会講談社という旧名でもう少し不忍寄りの（団子坂）に程近いところにあった。

「葬式は家でやれ、と山口は言ってましたから、きっとあの人は自分の家で葬式をやってもらっていると思ってるはずです」

これは次女の高戸なつみさんの言葉だった。告別式が終って最後に喪主として挨拶をされた方子夫人の言葉の中には、

「主人は谷中を愛し、谷中に長く住んで・・・」

という言葉が涙ながらにあったが、自分の葬式は（谷中の住み慣れた家で）という故人の意志であったに相違ない。

葬儀はしかし（助葬会）という法人の手で万端取り仕切られ、前記のような会館で行なわれた。しかも珍しく神式であった。

司会の紹介によると新宿区市ケ谷の亀岡八幡神宮の神官梶恒夫宮司の司祭とのことで、都合二名の神官が通夜告別式の二日にわたって一切の次第を進められた。

「あの人が神様になるんですから、笑っちゃいますよね」

そして、法名に代って（何々の命）になるのでもなく、

「いいえ、ただ神々のお仲間入りをさせていただくだけで、戒名らしきものはありません」

と、なつみさんは言われるのであった。

「いまは他へ移ってないようですが、西日暮里には禊教の教会があって三島由紀夫の盾の会の葬儀はそこで行なわれたと知っておりますが、父の祖父が熱心な禊の信

者だったそうで、ええ、あの人の父もそうなんです」

なつみさんはそんなことも言われた。易経に凝ることがあり、職を退いた後、易断を業とするかに仰々しく大型の名刺を作っていたりしたこの人の精神生活の別の側面に触れる話に聞えた。

戒名なぞはない、ただ天に還る、いかにも山口さんらしいこの世への訣別に思える。

神式の葬儀はまことに丁重をきわめるものであった。はじめテープとばかり思っていた雅楽は気がついて見ると、神官の外に奏者が一人壇の傍にいて笙を奏鳴しているのであった。進行の上に厳かさを添える申し分ない配置だ。会館二階の広間に設けられた祭壇もまた十分に飾られ、弔花もところ狭く一面を占めて、自家ではとうてい望みえない盛儀の雰囲気を盛り上げていた。遺影は初孫誕生の折のものだそうで、かすかに笑みを湛えるというものであった。

「母が父に内緒で助葬会へかねて加入していました、ええ、お墓は都の霊園の申し込みしたんですが、仏のいない申し込みは駄目と言われましたが、こんどは立派に資格がありますから、大威張りで申し込むつもりにしています」

そうしてみると、山口さんの遺骨は当分は書架がありベットが置かれて、あなたが文章を書くため呻吟を繰り返した部屋あたりに安置されるのであろうか。

祭詞は通夜、告別式、そして遺骨の帰ってからの十日祭とそれぞれに内容が異なっていた。朗々、抑揚のよく利いた梶宮司の奏詞は圧巻と思えるものだった。委曲を尽くし、僧侶の唱える経と異なり、本人の閲歴はもちろん子女の縁組におよぶ丹念さで、場合によっては喪家にとって迷惑のフシのものだが、なかなかの名文章であった。

「あの祭詞はぜひもらっておかれるといい」

「そのつもりでお願いしていますが、あらためて後日にという約束です」

余計なことであったが、その後聞くところでは山口家の申し入れに対し、しばらく猶予を頂き、あらためて浄書の上ということらしい。社家には社家として矜持もあってのことだろう。

もはや数年前になるが、谷中霊園五重塔あとに花見を誘われ雑誌の同人の何人かが酒を酌み交わしたことがある。

「来年の花をわたしは見れるかどうか」

このときは例の「さいたま屋百景」、「さいたま屋歳時記」その他一連の作品に登場する愛すべき酒徒のだれかれの寄ってくることがあり、当のさいたまやの女将も顔をみせるなぞの賑やかさであったが、つぶやくような右の嘆息があったことをわたしたちは忘れていない。

「山口さんなに言うの、そんな気弱いことを」

と、たしなめはしたものの、それとない周囲の気遣いはすでに久しいものがあった。思えば氏が死を見つめ、死と顔をつき合わせるような心境はそれからも絶えず持ち続けてきたものなのだ。

東京医科歯科大の放射線科病棟に治療をうけ、腰に鈴を付ける区別をうけた患者仲間は遠に鬼籍に入ったものの多い中に、あなたと顔を合わせながら、なぜか視線を背けて去ったというわたしたちの共通の知人であるKもその一人に数えられる。放射線治療の結果、口腔内に異常を来し、唾液腺閉塞と口中の絶えざる痛みに悩む長い闘病生活が待っていた。

「あの奥さんが大変だった、十年だって言うじゃないか、うちのかみさんなら、とてもできないよ、よく尽くしたもんだ、感心するよ」

「旅行に擂り粉木、擂り鉢を持参でさ、擂り餌状態でないと喉を通らない、あれは大変だった、見ていられない光景だった」

擂り粉木、擂り鉢はわたしたち仲間の親睦旅行でも持参していた。旅行の提案者はつねに氏であったが苦痛の伴う旅路だった。伊香保のときは永寿病院入院中とあって、杖にすがってもというところを自重してもらった。

永寿病院は浅草稲荷町にあり、再三あなたが入院を繰り返したところだ。病室の人々の生態を作品にも書いている。仏壇・仏具の町を病室の窓から眺め、あなたの死生感に触れる、哀感漂う佳作を生んでいる。

「旧制高等学校序説」という作品は未完に終ったが、あなたの弘前でのブリリアントで無頼な青春を描くはずであった。その後の仙台での大学生活とともに、あなたの生涯を支えたバックボーンはそうした学生生活に培われたことは明らかである。通夜、告別式、十日祭のすべてに参列された稲沢正一さんという人はあなたに同じ官学出身で、たしか東大出であったが、あなたの上司として十歳もの隔たりを超えて、たがいに親近を保ち肝膽あい照らす関係にあったようだ。あなたとともに教育界というところではともに異色だけに心の通うものがあったのだと思われる。

しかしながら一方では、

「お前がうけるような大学は大学じゃない」

なぞ浪人中の子息をあなたが叱咤したという話を十日祭の供養の席で方子夫人が語られるのを耳にしたが、あなたの意識の底に抱かれた官学プライドを覗く思いがしないではない。子息山口吉野氏はすでにひとかどの社会人として嗣子の席にあって、きわめて温和な人柄に見受けた。吉野という命名はあなたが「花の吉野」にあやかったものと、わたしに語ってくれた。

棺に供花を投げ入れ、棺を覆う時がきた。「虚仮の歌」という一冊が収められているのを見た。題名に多分の寓意を込められたと思われるあなたの二冊目の本で、昭和

五十六年八月の刊本だ。この本には「まんじ」に発表したあなたの処女作が収録されている。家族の方の思い入れがうれしかった。投げ花に埋もれ、それはやがて荼毘に付され、炎に焼かれる運命を免れないのだが、山口さんの魂魄はこれを胸に抱いて昇天されるであろうと思うと気の休まりを覚えた。

荒川区町屋の火葬場はそこまでの町並の変貌にかかわらず昔のままであった。わたしは祖父の荼毘に際会した少年の日をまざまざと思い出した。休憩所の手水場まで変わっていないのだ。数知れぬ遺体を焼き、家族たちの悲しみ送迎してきたこの場所が変らなすぎることはまた一つなにかしら哀しみを添える。

「でもアチラの建物は新しいんですよ」

と教えてくれる人があった。斉場らしい鉄筋建築がそれだ。前庭の巨大な蓮のうてなに擬した噴水が目に写り印象を刻んだ。

神官の梶氏はこの場所でも、やがて火炎を想像される重い扉の前で懇ろな祈りを捧げられた。仏式と異ならない作法であった。

「これが喉仏です」

磁気で金属を取り上げる無味の作業を了えた係のものが骨上げを促し、人々がそれに従う中にそんな説明があった。金属の箕を傾け、サラサラと遺骨が壺に納められた。故人はいまやまったく骨灰と化した。

「これは埋葬許可証です」

これで火葬場というところのセレモニーは終了である。隠亡なぞの呼びはいまは死語だ。恭しく係員は脱帽し敬礼した。

マイクロバスに同乗していて、

「待ってくれー、おおい待てぇ」

としきりに叫んで、見えかくれ先を走る金ピカの霊柩車を見失うまいと身を乗出していた坊やが帰路ではあどけない眠りに落ちていた。故人の姻戚に違いないがこの日のことを幼心にはどう刻んだのであろうか。

日増しに秋の気配も深まってまいりました。

お電話、「まんじだより」と頂戴致しまして本当に有難う存じます。入院中の主人に次々と変調が出まして、現在は経路不明なのでございますが、抗生物質に強い「セイタイ・コウショク葡萄状球菌」に感染致しまして、治療をつづけておりますが、一昨日主治医の方から急変の可能性大であることを知らされました。主人独特の精神力で蘇っていつものように帰宅できますように念じております。お詫び方々近況をお知らせさせて頂きました。（まんじの皆さまに宜しくお伝え下さい。）秋特有の不純な天候となりました、おん身ご大切に遊ばされますようお

願い申し上げます。

これは介護に疲れたお方からの、それとないお知らせであった。その日から間もない平成二年九月十九日があなたの祥月命日になった。大型台風十九号があなたの好んでよく使われた（にほん国）を襲う情報のさ中、午前十一時五十六分、汚濁のこの世を見限られたのである。食餌を通すための手術を拒否するかに麻酔薬をうたれた瞬間、眼を閉じられたということだ。

山口健二に捧げる弔ひの辞

山口健二さん、あなたのみ霊が神去りましたいま、あなたの柩を前にご親族をはじめ多くの知己の方々が相集い、み霊を天に送ろうとするに際して、しばしの別れを惜しむことをお許し下さい。

思えば長い闘病を終えられ、いまここに安心を得られ立命の境地に赴かれたと解釈することは誤りでありましょうか、病骨の痛みに飽きて、この世を厭われ、忽然として雲に上り、霞のあなたを指して飛ばれるあなたを思うとき、あなたは生来持ち合わせておられた瓢乎たる一面を貫かれ、首尾を全うされたもののようにも思われ、むしろ清々しく、あなたの死を悼む悼みの心は別としていまはただただ、あなたを潔く見送りたいと思います。いまごろはやわらかな雲の上であなたはなにを思っていられるのでありましょうか。私はあなたとは職を同じくする関係の外、たまたま血をうけた郷土を同じくし、奇しきことにあなたのお父上競さまはわたしの父とは同学というご縁も重なるものでありましたが、あなたとの交友を深まりはそうしたことを全く抜きにして、あなたの晩年により多くひろがりを持たせて頂いたものの一人であります。

あなたには書き残された三十五編の小説があり、あなたの生きざまは近ごろ流行の（自分史）なぞ生やさしいものとはと異なる如実を語られ、なお書き続けようとなされながら、筆を断たれました。方子夫人が気遣われる骨身を削る不屈の努力があって、あなたは最晩年に光りを放つ業を積まれたのでありました。あなたが酒を愛し、酒に溺れるがごとき日常があったことは知らぬものとてありませんが、これぞ酒中の仙と申すべきでありましょうか、エンダビー神に命を拾われたあなたの人生凝視は腹の据わったなみなみならぬものでありました。神にしてあなたにいま少しの時間を藉すことがあればと思うとき痛恨を禁じ得ません。この恨みはあなた自身のものであると同時に、わたくしどもあなたと同じ雑誌に拠り志を同じくするものが等しく覚えるものであります。思う存分に生きられたあなたの人生についての話題は昨日の通夜の席でも専らでありました。達人とは実に、実にあなたのごときを指すものに思われます。なにものにも束縛されず、奔放に生き、いま瓢然として天に還られた

あなたには悔いなぞという俗なものは微塵もないのだと思っております。雲の上は青く澄みきり、きぞや心地良いことでありましょう。不幸な世紀を喘ぎつつ生きたことなぞ一切忘れられて、まずはしばらく静かにお休み下さい。少なからぬ無辞をお許し下さい。

山口健二さん、さようなら。

あなたの告別式にあたってわたしは右のような弔辞を捧げた。苦手のことだが、せっかくご依頼でもあり、朗読というかたちで責めを逃れたのである。ほかに松本連隊の戦友の方が素手で語りかけの弔辞を述べられた。

弘前いらいの友人の方たちも多数列席されていたはずであったが、弔辞はなかった。山口さんのことをニックネームして「文豪」と呼んだ方々である。官界その他に重きをなした方も多いはずであった。座席の背後にこの方たちの故人への親愛の話題は絶えなかったので、惜しいことであった。

葬送のすべてを通して、もっとも悲しみを露わに、ときには激しい嗚咽の声を漏らされたのは次女の高戸なつみさんであった。

「あの方がいちばん多く山口さんの血を受けていらっしゃるようですね」

わたしは同席していたS女に私語した。

「語りたくない・でも語らねば」という作品が山口さんの最後の作品になった。二回連載して筆を絶ったのである。いずれも三十余枚、必死の思いを託して書かれた作品だった。輸送船団が魚雷攻撃をうけ、あなたが死ぬべかりし命を助かった奇跡が書かれている。エンダビーの海に飛び込んだあなたは泳げない、しかし、九死に一生を拾うことができた。だが、さらに次の死地へ転属させられトラック島に上陸する、作品はそこで途切れ、同島の地図を手に入れ胸に抱きながら、ついにペンを投げたのである。今年に入ってからは一行も書くことをしなかった。

あなたには五十路入ってから自動車教習に励むということがあって、脱輪、オーバーランでついに免許を取得できなかったという逸話がある。かえって家族の方はホッと胸を撫で下ろされたのだが、このことは過酷な戦争時代を生き抜き、数奇を歩まれたあなたの人生をなにかしら象徴するように思われる。

高戸なつみさんがあなたに代わる作品を寄せられた。

「父が酒を断ち筆を折りました」

悲痛な骨肉の情を嚙み、冷徹な目であなたを追い、しかも温かい情の流れる佳品だった。

人生の起承転結のむすびのところを息女に任せたまま、あなたはついにこれを読もうとはされなかった。

（平二・九・三〇）

山口健二逝く

本誌創刊いらいの同人として毎号作品を欠かさず、誌運の今を導くブレーンとして貢献し、大いに活躍してきた山口健二が宿痾に勝てず九月十九日、入院先において逝去した。二十日通夜、二十一日告別式のいずれも台東区の道灌山下の道灌山会館において執り行われた。ここに深く哀悼のまことを捧げ、本号を追悼号としてきみの霊前にはなむける。

布帛を叩く軽妙な笑声

金子正義

露伴に幸田文さん、紅緑に佐藤愛子さんがいるように山口健二氏にも良い文章を書く息女がおられ「まんじ」三十六号に「父が酒を絶ち筆を折りました」を書いた。

創刊以来一号も欠かさず書き続けた山口氏が病亢進して擱筆したので、代って息女が一文を寄せられたもので、山口氏にそっくりな文体で、父君の人柄や気骨をよく表現していた。父君の性格を良く理解し其の長所短所をも含めて尊敬し、病の篤きを憂える深い愛情が全文に脈うっていた。

盲目な肉身愛に溺れるのでなく冷静に病の進亢を観察し、人の生命の限界と、死に至る人間の弱さを凝っと見据えていた。

流石に高邁剛毅な山口健二氏の血を継いで、息女高戸なつみさんの胸の奥には生命の果敢さと世の無常を眺め返す物書きの血が激り立っていると思われた。

山口健二氏が永遠の旅路に出立するとき、此の一文は最高の餞の辞となったであろう。

山口健二氏は何んと幸なことであろうか、良き御子様方と最愛の奥様と共に、存分に此の世を生き抜き、子孫の繁栄を見届けて去る、何んと幸福な生涯ではなかろうか、氏の冥福を心から祈念し乍ら、多少の羨望と尊敬の念より、更に駄文を添える。

山口健二氏は存分に潔く生きた。自由に昂然と生きた。何事か人生に生甲斐を激らせて青年の心を持ち続けて生きた。

明治の人の気骨と大正のロマンの心情と、昭和のエンターテイメントを併せたように生きた。

其の心情と意見をまんじ創刊以来一貫して書き続けた。自からは名誉や欲得、売名を超えて、それが人の世の奇妙さよ、と、独自な風俗私小説として愛すべき人間像を書き続けた。

虚名・売文で栄える多くの文士作家とは違って、生きる証として書き続けた、この高潔な同人を喪った、まんじ同人、誌友の心の痛手は大きく小生も泪を禁じ得ない。

氏は長らく病床にあった、小生も亦、多病の上に宿痾の耳疾の為に氏とは同人合評会の他は余り交誼を重ねなかった、謂わば君子淡交であった。今にして想えば惜しみ悔いて尽きないが、斯うしたことがあった。

お茶の水の聖橋の車道で離れて右と左であった。小生は耳の病で順天堂へ、氏は口腔腫炎かで歯科医大へ治療に通っていた頃であった。

氏は和服に十徳姿で杖を衝き宗匠頭巾を被り、慌しく行き交う行人は神田川の水の流れか芥のように意に介せず、二、三米先の路上に視線を向けて能の尉面のように静かに足を運んでいた。

喧騒の町内で声をかける必要はなかった。橋の真中を疾走する車の間から一瞬に見た氏の姿は、利久か芭蕉のように幽玄で、言葉を交さずとも電光一閃裡に氏の心情が伝わってきた。正に一期一会、一瞬に永劫の認知であった。

氏より少々若い小生であるが、耳疾もあって老いは秋の落日の如く疾く、今年の夏は蟬の声も耳にせず、今は秋虫の鳴音も野鳥の啼音も聴えず、疾の昔に音楽は分らず歌曲のメロデーも名曲の旋律も記憶から薄れ消えたが、まんじ同人の合評会などでの山口健二氏の、布帛を叩くような軽妙な笑声は今も消えない、いずれ西方浄土やらで氏の脱俗の笑いを聴くことであろう。

平成庚午二年九月二十六日　夜、弔の訃を受けて、

合　掌

山口健二さんを悼む

井　上　二三男

やたらと暑いこの夏。暑さに弱い私は、殆どをクーラーで温度を押さえた部屋のソファに横になって過ごしていた。そして、この暑さを山口さんは病床でどのように過ごしておられるのだろうか、と思った。

この二十六日夜、大和さんからの電話で山口さんの訃に接した。この夏の暑さは、長い闘病生活の山口さんにとって耐え難いものだったに違いない。

私が山口さんに初めてお会いしたのは、昭和五十六年二月、新宿住友ビル四十七階の和室で開かれた「まんじ」発刊の同人総会でであった。

小人数の会合でありながら、人を覚えるのが不得手な私はその日も他の初見の方のお顔を覚えられなかったが、山口さんは、しっかりと記憶に残った。それは、山口さんが私の妻の叔父に似ておられたことと氏と同姓同名の方を存じていたということもあった。しかし、私の印象に刻まれたのは山口さんの思いやりのあるお人柄であった。

山口さんは、若輩で新参の私にいたわりと励ましの眼差しを向けられ、ご出身の大学が私の息子と同じであることなども話題とされた。そして、私が宿痾のため疲労感を引きずっていることを見抜かれ、

「あなたは疲れておられる。お大事になさい」

と、いたわりの声をかけられたのであった。

私は、山口さんの人を見抜かれるご慧眼に恐れ入った。今にして思えばご自身のお身体のことがあって察しられたものではないかと思われる。

同年七月の「まんじだより」には、山口さんの第二作品集「虚仮の歌」の刊行が予告され、私も一冊を書架に置かせていただいた。その「あとがき」に「ながらく、お世話になりました。世間に死亡通知とか死亡広告というものがあります。・・・思い立って、息のあるうちにこれを書いておいて、死んだらこの文を皆様にさし上げてご挨拶とするように、家族に申しておくことにしました。」と、さらに良寛の「死ぬ時期には死ぬがよく候」を引用され、「こんな『ごあいさつ』は、やはり私の派手好みな気性のあらわれでございましょう。ではもう一度、さようなら、さようなら。」と結ばれている。

私は、山口さんのご病状の詳細は存じ上げないが、山口さんはこの時期既にご自身の死を見詰めて生きておられたのではないかと思う。「まんじ」創刊から今年二月の三十五号まで欠かすことなく続いた作品は、死を見詰めて生きる日々の凝視から生まれたものではないか、と思われる。死を見詰めた日々は、透明で、かつ、厳しく凝縮されながら、作品に流れるものは人間に対する暖かい眼差しであった。そこに、私は山口さんを見る思いがする。

その後、幾度か合評会の席でお会いしたが、病を押してのご出席に山口さんの「まんじ」への深い思いを感じて、私はいつも襟を正す思いがした。

また、私の作品についてのご評を大和さんから伝えられたことがあり、お礼のお便りを差し上げたところ、ご丁重なご返事をいただいた。それも、病院のベッドに寝たきりで、手が動かせないためご家人の口述筆記による旨であった。

かって、私がご案内して「まんじ」同人有志が群馬に

懇親の旅行をしたことがあった。そのときも、山口さんは参加を強くご希望されながら、ご病状で許されなかったとお聞きした。私も大変残念に思い、せめてのお慰めに何かをと考え、旅行の順路に立ち寄った妙義山の神社の烏天狗の張り子面などどうであろうかと思ったが、ついにそれを果たさなかった。自分の怠惰を反省し、慚愧に耐えない。

山口さんのご冥福を心からお祈り申し上げる。

毛糸の帽子

柴田富佐子

「まんじ」同人には「元中学校長」が多い。大和さん然り、金子さん、元同人の森本さん、岸田さん、そしてわが山口さん。

山口さんを除く方々の校長ぶりは、私にも容易に想像がつく。校長訓話の時、どんな風に壇上の人となり、どんな口調で話をし、どんな姿勢で生徒を見廻すか、永年の付合いで、話の内容さえ見当がつく。

だが、ただ一人、山口さんに限って、私にはその校長ぶりが全く想像できない。第一、私には彼が校長であったという事すら、信じ難い気持ちが、今でもある。

それは、私が山口さんと知り合った頃、すでに彼は教職を離れて数年が経ち、その上病を得られて勝手気儘な生活をしていらしたせいかも知れない。着物の上にチャンチャンコを着、毛糸の帽子を被って杖を振り振り、下駄をカッポカッポ鳴らして歩いてくる独得のスタイルが、余りにも似合いすぎ、それ以外の彼の姿を私に想像させる余地がなかったからかも知れない。

「まんじ」が発刊されて間もなくの頃、山口さんは病院の帰りだと言って、その病院に近い私の店に、何度か寄って下さった。その頃は午前中のパートの人が帰ると、夕方アルバイトの学生が来るまでの間、私は一人で店番をしていたが、その時間帯は割と暇で、物を書く時間も、本を読む時間もあった。奥の事務室で彼はワンカップにストローを差し込み少しずつ吸い込んでいた。

「そんな飲み方でおいしいんですか」と私が聞くと、「飲みたくって飲むんではないんです。アルコールで麻痺させないと、口の中が痛くてたまらないのです」と言った。外見では解らなかったが、本人にはかなり苦しい病状だったのだろう。アルコールが入ると元気が出て、作品の話、近頃読んだ本の話などをしてくれた。実に何でもよく知っていて相手を倦きさせない人だった。

そもそも私が山口さんの存在を知ったのは大和さんの出版記念会の折、易の話で周囲を煙に巻いている人がいて、その風貌と知識の豊富さから、私が本物の易者と思い込んだのが山口さんであった。次に逢ったのも、大和さんの出版記念会で、今度は象牙製品をいくつか持参していて、象牙についての蘊蓄を傾けていた。一体どういう人なんだろう、という興味と、だいぶ変った人だ、という印象を持った事を覚えている。

「やっとこれだけ書きました」と下書きのノートを見せると、

「頑張って書いて下さいよ。期待してますから」と励ましてくれた。

帰り際、「じゃ、失敬」と右手を「挙手の礼」のように顔の前で一振りし、カッポカッポ下駄の音を残して立ち去る、その肩を怒らした痩せた後姿が、まだ鮮明に私の瞼に残っている。

号を重ねる毎に、山口さんの異才ぶりは光を放った。他の同人の、少々とりすました作品の中で、彼の強烈な個性は輝いていた。一連の「埼玉屋物」に出てくる人物達――母であるカメと嫁であるゼニ子、それぞれに一癖も二癖もあるコップ酒の定連達、それにも負けず傲然と胸を張る本人、あの猥雑な面白さは他に類を見ないものだった。入院生活が続くと、今度は舞台が病院に移り、矢張り癖の強い患者達と傲然たる本人が織りなす人間模様が、たまらなく面白かった。

何故彼の描く世界が、あんなに面白かったのか、それは彼の人間を見る目の確かさと、怖いものなしの居直り、だったと思う。そしてその居直りはエンダビー沖で死に直面した経験が、彼にもたらしたものだと私は思う。

入退院を繰り返すようになってからの彼の作品には、うまい、まずい、などという基準を超越した凄みがあった。生きている中にどうしても書いておかねば、という気迫に圧倒されて、読み終ると強い疲労感を覚えた。だからボルテージの高いその迫力を受けとめるだけの覚悟を決めてから読み始めねばならなかった。

書かずにいられない必然性こそが、読む者の胸を打ち、心を熱くするものだと、しみじみ感じている。

一つでもいい、私も彼の「語りたくない、でも、語らねば」のようなボルテージの高い作品を書き上げ、その墓前に供えたいと思う。

文人山口さん

三戸岡道夫

ほとばしる才能を、嵐のように書きなぐって、あの世

へ旅立っていった人。「まんじ」に残された山口さんの作品群のことを思うと、そんな感慨に打たれる。

山口さんの作品を大きく分けると、「さいたま屋」もの、自伝的なもの、それにある程度のフィクションものと、三つぐらいに分類できるような気がするが、しかし、これらを全部ひっくるめて長編に再構成してみたら、きっと「カラマゾフの兄弟」（少し大袈裟か）のようなものが出来るのではないかと、私は時折思ったものである。その日がいつかは来るとひそかに期待していたのに、それを果たされずに去られたことは、まことに残念であった。

いつかお見舞にお伺いしたとき、部屋に、山口さんの、大きく引き伸した若い頃の写真が飾ってあった。それを見た時、私はふと、若い頃の永井荷風のようだな、と思った。

若い頃の山口さんは、この写真のように、美男で、おしゃれで、ダンディで、気どりやで…、その面影は、晩年の姿にそのまま残っていた。私は晩年になってからのお付き合いなので、私の記憶に残る山口さんは、いつも着物姿であったが、今時、着物をこんなに見事に着こなす人はめったに居ないと、いつもそんなふうに眺めていたものである。

文人。そう、山口さんは文人だったのだ、と思う。もう、永久に、「まんじ」誌上に山口さんの作品は現われてこない、合評会の席上での、あのすばらしい毒舌も聞けないのだと思うと、淋しい限りであるが、どうか、山口さん、あの世でゆっくりと、山口さんの「カラマゾフの兄弟」を仕上げてください。

山口さん、さようむら。（平成二・九・二六）

山根三枝子

山口先生　長い間のご病気、男らしく本当によく耐えられましたね。今は安らかに永遠の眠りにつかれホッとなさいましたでしょうか。お葬儀に向かう途中で色々なことを思い出して涙がにじみ出ました。

その昔　私が短期間ですがある中学校に勤務致しました折にお世話になりましたのがご縁で以後年に一回の年賀状の交換だけは続きましたね。再会のチャンスなどあるとは思っておりませんでしたがお別れして十八年ぶりで、たまたま御近所の朝倉彫塑館に参りました折に全く突然お宅にお寄りしました。それは昭和五十六年の春先のことでした。あの面白かった先生はどんな風になっていらっしゃるかなと玄関で待ってますとパジャマ姿にチョッコリ帽子のようなものをのせて

「山根さあーん、あゝ　おぼえてますよ」

とおっしゃりながら姿を現わし私が吃驚する間もなく

「ぼく　昨日退院したところなんで――」と頬の辺りをおさえながら

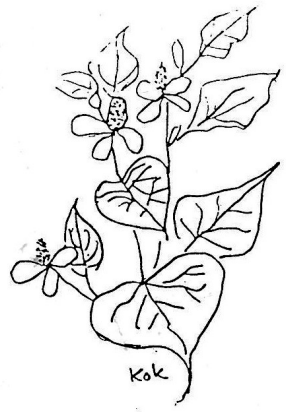
「ぼく　ここのガンなんです」とアッケラカンの顔でおっしゃるではありませんか。驚いて言葉も出ませんでしたが昔から冗談屋さんであったことだし、また、ひとのことだましてるんぢゃないかとも思いました。でも四十才台の時とは違い大部おやせになり又年令も重ねられたご様子に見受けられました。

その昔中学校勤務の頃には俄か先生の自信のない私をおだてたり勇気づけたりして暖かく接して下さいました。私が講師をやめてお別れしてからは年に一度の賀状には面白い俳句や楽しい一行か二行の冗談が書いてあり私を楽しませて下さいましたのに、その先生がほんとうにガンならやがてこの世から姿を消してしまわれるのでは…：ととても残念に思ったことでした。でもこの再会がご縁になって私は「まんじ」の同人にして頂くことが出来、更に九年半の間同人として先生とお交際させて頂くことが出来ましたことは余程のご縁ありましたことゝ思われます。

同人会の合評会でお会い致します時はご自分のご病気の辛さなどふみ倒したような気魄で健康な者達を慰めたり勇気づけたりするような批評を下さる先生の心の広さに感銘いたしました。同人会の皆様共ども御前崎灯台方面に旅行致しましたこともなつかしい思い出となりました。何度もご病気なさり、ひやひやさせられたことは度々でしたが先生は本当に素晴らしいエネルギーと執念で書き続けられましたね。

先生亡きあとこれからもゆっくりと遺された作品を読ませていたゞきユニークなお人柄をしのぶことが出来、また先生が心の底から人にうったえたいことは何であったのかをさぐることも出来ますことは一つの希望です。

どうか天国からご家族の皆様をお守りになって下さい。又残されました御家族の皆様に心の平安が与えられますように祈ります。



金融山脈 (一)

三戸岡道夫

六月の株主総会を機に、帝都銀行の松橋常務は退任した。そして、取引先のY電気に再就職した。

が、その退任と再就職には、円城寺頭取と松橋常務との間に、なにか激しい争いがあったという、根強い噂が流れていた。事実その経過を眺めると、たしかに不自然なところがあった。

まず、松橋常務の退任があまりに唐突であったことである。毎年、五月に入ると、六月の株主総会を控えて、役員異動の噂が流れるのであるが、松橋常務の名前は挙らなかった。それが五月の末になって突然、退任の発表があったのである。何かあったと、感じない方がおかしい。

松橋常務は、かっては帝都銀行の将来の頭取と噂されたことのある実力者である。それが大蔵省から二代にわたって頭取が入り、現在の円城寺頭取ワンマン体制が確立すると、その希望は絶たれてしまった。だが、あれだけの大器である、必ずや常務取締役から専務取締役には昇進し、少くとも副頭取までは行くものと、誰もが疑っていなかった。

それが、何の前ぶれもなしに五月末の決算役員会で退任が決まると、翌日の新聞に発表されたのである。人々は驚き、そこになにか異様なものを感じた。

だが、同時に人々は、

(ああ、やっぱり…)

と、この一年ほど、しきりに流れているあの黒い噂に、思い至るのであった。

退任が決まれば、次の関心事は、

(では、次は、何処へ再就職するのだろう)

である。他人の再就職先など、どうでもいいようなものであるが、銀行重役の再就職となると、他人の眼が拋っておかない。

帝都銀行では重役が退任すると、親密な取引先で、しかるべき格の会社へ、重役として送りこむのが慣例になっていた。どの会社が選ばれるかは、役員の銀行内における序列と、受け容れる会社側の條件によって決るが、いずれにしても、退任時のポストから見て、恥かしくない会社が選ばれる。その決定権を握っているのは、もちろん円城寺頭取である。

過去の実績から見て、常務取締役であれば、一部上場企業が選ばれるのは、ほぼまちがいなかった。退任が新聞に発表されると、同時に再就職先の会社名も発表されるのが普通であったが、どうしたわけか松橋常務の場合にはその発表がないのであった。

「なぜ?」

人々は首をかしげた。再就職の会社が、まだ決っていないのだろうか。

(再就職先も決めないで、あわてて松橋常務を退任させなければならない事情が起きたのにちがいない)

そこで人々は、ひどい近眼で、ダルマのように肥った松橋常務にまつわる、例の黒い噂に思い至るのである。

黒い噂。

それは、円城寺頭取と松橋常務との、確執であった。

二人は銀行の中で、仕事以外のことは、いっさい口をきかないという。その仕事も最小限度にしか話さず、またお互いに代理の者を使って、出来る限り直接接触することを避けているという。

その代償のように、夜になると松橋常務は浴びるほど酒を飲んで、円城寺頭取の悪口を喋りまくるのである。それが廻り廻って円城寺頭取の耳に入る。ますます二人の関係はおかしくなっていく、というのが銀行内に流れる噂であった。どの程度が本当なのか、わからない。が、百パーセントの真憑性はなくても、ほぼ正鵠を射ていた。

松橋常務が役員退任のことを、円城寺頭取から知らされたのは、五月の決算役員会のたった三日前のことであった。普通は少くとも、一ヵ月前には予告される。そのやり方にも、なんとなくルールのようなものが出来上っていて、円城寺頭取から、

「久しぶりに晩飯でも食おうか。静かないい所を見つけたよ」

などと声をかけられ、赤坂あたりの奥まった座敷で酒を飲みながら、退任の話を持ち出されるのである。あるいは、天気のいい日曜日に突然ゴルフに誘われて、緑の芝生の上でボールをころがしながら、引導を渡されることもある。

それなのに、松橋常務の場合には、そうした儀式が一切ないのであった。ある日、秘書役から、

「頭取がお呼びです」

事務的な連絡を受けて、何事ならんと、頭取室に入っていくと、

「長年、ご苦労であったが、今期をもって退任し、後

輩に席をゆずってほしい」
と、書類を決裁するような口調で、そう言っただけだった。
「……」
あまりに突然で、さすがの松橋常務もすぐには声が出なかった。だが、
（頭取は俺を早く辞めさせたがっているのだ）
と、円城寺頭取の考えていることがピンとわかると、松橋の全身の血が音をたてて逆流するのがわかった。顔が赤くほてってくるのが、自分でわかる。
だが、松橋常務はすぐ冷静になった。なった、というよりも、冷静でなくてはならないと、努めたのである。
「わかりました」
簡単に、はっきりと言った。それ以上言うと、頭取を罵倒する言葉が次から次へと口をついて出てきそうで、やっと短い返事で自分を制御したのである。
「うむ」
円城寺は軽くうなずいた。
そのしかつめらしく頷いた姿を見たとき、松橋の中で、再び何かが起きた。
（いい気なものだ。途中で、大蔵省から入ってきた奴が、生え抜きの我々に向って、長年ご苦労であったとは、何事か）
身体が爆発しそうになった。これ以上ここに居ると、何を喋り出すかわからない危険を自分に感じて、辛うじて自分を押し静め、そのまま、頭取室の床を蹴るようにして、退出した。
それを円城寺頭取は引きとめようともしなかった。松橋常務も後を振り向かない。
荒々しい足どりで廊下を戻る松橋の頭の中を、
（このまま、帰ってしまっていいのか）
（すこし切口上すぎたかな）
軽い反省が、かすめたが、
（あれ以上のことが、俺に言える筈がないではないか。後輩に席を譲れだって。銀行から早く出ていけと、はっきり言えばいいものを）
実を言うと、秘書役から頭取の呼び出しの連絡を受けたとき、松橋常務の内心にひらめいたのは、専務取締役昇格への内示であった。当然その位の力は俺にはある。今の専務たちの情ない顔を見てみろ。あんな奴等が専務なら、俺は一挙に副頭取だって、おかしくない。いや、頭取だって出来ないことはない。
（俺は絶対に、負けないぞ！）
肥った身体で廊下の絨緞を蹴とばすと、松橋は常務室へ戻った。
帝都銀行の常務室は合部屋である。
ドアを開けると、居並ぶ重役たちの視線が、いっせいに松橋の身体につきささった。が、すぐに視線を外らして、夫々の机の上の仕事へと眼を落した。
（何だったんですか、松橋さん？）
一人ぐらいは、そう声をかけてくれてもよさそうなのに、誰もが無言であった。聞かなくても、すでに知っているという眼であった。今日まで知らなかったのは、本人である自分だけだったのかという苦い胃液のようなものが、湧き上ってきた。
いくら円城寺頭取と松橋常務の間が犬猿の仲だとはいえ、夜の席の設営もなく、ゴルフにも誘われずに、事務的な方法でしか退任の指示がなされなかったことに、松橋常務の自尊心はいたく傷つけられた。その上、再就職先の話が何も出なかったのが、一段とその思いを強くしていた。
だが、あの場合、まさか俺の口から、
（私はどこへ行くのでしょう）
などという科白が吐けるはずがない。だから、一言、
「わかりました」
と、ぶっきら棒に言って帰ってきた。
だが、それはやはり、まずかったのかもしれなかった。円城寺頭取が再就職先のことを言い出さないうちに、松橋の方が勝手に帰ってきてしまったのかもしれないのである。あるいは、再就職先が松橋から文句をつけられそうな先なので、頭取は言う時期を先にのばしている、ということも考えられた。いや、そんな考えは甘いのであって、ひょっとすると再就職先はまだ決っていない可能性がないでもない。万が一そうだとすれば、失礼千万この上ない。
松橋常務は腹立ちをまぎらわすように大部屋を出ると、隣に続く個室に入って、腰をおろした。
個室といっても、たいした部屋ではない。五坪ばかりの小部屋で、来客があった時の応接室がわりに使ったり、ちょっとした書き物などをするためのデスクが置いてある。一人になれるこの部屋の方が、衆人監視の大部屋よりも、気分が落着いた。
煙草に火をつけ、深々と吸った。くわえ煙草は、松橋常務のトレードマークである。仕事中でも、来客中でも、廊下を歩きながらでも、口から煙草を離したことはない。白い灰が長くのびて、ポトリとズボンの上に落ちても、意に介さない。吸殻を捨てる片手で、もう次の新しい煙草をポケットから取り出すといった有様で、それほどのヘビースモーカーが、頭取室から帰ってくるまでは、煙草のことを忘れていた。それほどショックが大きかったのかと、我ながら驚いて、飢えに突き上げられるように煙草に火をつけると、
「ああ、うまい」
疲れが全身に行き渡る。
（それにしても、どの会社だろう）

再就職先が気になった。松橋は自分の再就職先として候補になりそうな取引先を、次々と頭に浮べてみた。

松橋常務は融資部を担当していた時代が、長かった。だから、帝都銀行の主要な取引先はほとんど知っていた。会社を訪問したり、また工場見学に行ったりした会社も数多くあったから、社長の顔や、工場の設備の状況なども、はっきり思い出すことができた。

その中には、松橋常務お気に入りの会社も数社ある。ちょっと思い浮かべただけでも、Y電気、S建設、M化学工業、B産業……と、たちまち五本の指を折った。なかでもお気に入り銘柄は、Y電気と、M化学工業で、

（この辺りに決ってくれれば、言うことはないのだがな）

社長もよく知っているし、工場見学に何回も行って、帰途の料亭での思い出も深い。だから、これまで会社が必要とする金は申込通りいつも全額貸していたし、松橋常務としては特別に面倒を見ていると思っている取引先であった。

松橋常務は一瞬、Y電気やM化学工業の重役室に、どっかと坐った自分を想像してみた。

（しかし、果して、そう事がうまく運ぶかどうか。さっきの調子では、頭取の奴め、こっちが思うような会社をすんなりと廻してよこさないのではないか）

平素剛気で鳴る松橋常務も、さすが自分の再就職先のこととなると、神経はピリピリと細かくふるえた。

心配した如く、松橋の再就職先はなかなか決まらなかった。決まらないというよりも、まったく音沙汰がないのであった。その為に、円城寺頭取や副頭取が、動いてくれているという感じも受けない。事が事柄だけに、自分で動くわけにもいかず、ましてや、こちらから催促するなどということは、松橋常務の自尊心が許さない。

いらいらしているうちに、時間は速やかに流れて、六月末の株主総会までに、あと数日となった。

（いくらなんでも、もう、そろそろ話がくるだろう）

思っている矢先に、妙な噂が松橋の耳へ流れてきた。それは円城寺頭取が、二、三日前に、Y電気の寺本社長と赤坂で夕食を一緒にした、そして重役を一人送りこむ話をしたが、それは松橋常務ではなくて、経理部長をやっている諸川取締役であるらしい、という内容であった。

（まさか…）

松橋は否定したが、有り得ない話ではなかった。心の中は、穏やかでない。

今度の株主総会を機に、退任する役員は二人いた。松橋常務と諸川取締役である。その諸川取締役の再就職先が、よりによって松橋が狙いをつけているY電気ということは、どういうことなのか。加えて、上席である松橋の方がまだ決っていないというのに、平取締役の諸川の方が先に決まるなんて、順序が逆である。嘘にきまっている。

だが、噂は本当だったのである。

松橋が噂を耳にした次の夜、諸川取締役が、新橋の料亭染山での、Y電気の寺本社長との顔合せの宴に出席したからである。

帝都銀行から重役が取引先に送りこまれる場合、事前に先方の社長との顔合せ、いわゆる〝お見合い〟が慣例としてあるのである。そこで社長の審査に合格すれば、正式な手続が進められ、不合格ならば、また別の会社が選ばれるというわけである。

とは言うものの、実際はお見合いに先立って、円城寺頭取がすでに先方社長の内諾を得ているのが普通であった。事実、諸川取締役の場合にも、事前に円城寺頭取は赤坂の料亭に寺本社長を招いて、諸川取締役のことを話しており、それに対して寺本社長は、

「ほかならぬ円城寺頭取が派遣くださる人物です。ありがたく頂戴いたします。わたくしの会社のことは、すべて円城寺頭取にお任かせしておりますから」

一も二もなく、承諾した。

「それでは一度、本人と逢っていただきましょうかな」

ということで、染山での席になったわけであるから、〝見合い〟と言っても形ばかりのものといってよかった。いや、言いかえれば、〝見合い〟はこの場合即ち、オーケーの印なのである。

ましてや、諸川取締役は、人柄は温厚、仕事ぶりは誠実で、帝都銀行の経理部長を無事勤めているという点からしても、寺本社長の要求する、Y電気経理担当常務に最適任の人物と言えた。断わる理由はない。

翌日、直ちに寺本社長から円城寺頭取のところへ電話が入り、正式に承諾の返事がなされたことは、当然であった。

諸川取締役がY電気へ正式に決ったというニュースは、その日のうちに松橋の耳へも入った。松橋のショックは大きい。掌中の珠を、にわかに他人に奪われたような気になった

松橋は、ふっと、昨年工場見学に行った、Y電気の相模原工場を思い出していた。

Y電気の本社は目黒にあるが、工場は神奈川県の相模原にあった。もともとは本社も工場も目黒にあったのであるが、工場が狭くなったので、三年前に神奈川県に土地を買い、新しく建設したものであって、最新の設備を誇る工場であった。みどりの田圃と野原の中に十万坪の土地がひろがり、敷地の西半分にクリーム色の三階建ての工場が建っていた。正面玄関の前には芝生がいちめんに張られ、数十本の噴水が、細い銀色の水しぶきをあげていた。東半分の敷地は、将来に備えての空地で、今は工員の通勤用の自動車が整然と並んでいた。

電気機器を作る工場の内部は清潔で、中で働く工員た

ちも、きびきびと見えた。
とりわけ松橋が感心したのは、工場には惜みなく金をかけ、最新鋭の機械を据え付けているのに対し、本社の方は、古ぼけたビルのままで我慢していることであった。それに対して寺本社長は、
「メーカー（製造業者）の命は、工場ですよ。本社は製品を作りませんから、古いビルで結構なんです。本社を建てる金があったら、私は工場の設備に注ぎこみます」
と、信念を披瀝した。
まだ株式を上場して間もない、一部上場企業としては小規模の会社であったが、見所のある会社だと、それ以来松橋は感心していた。
Y電気が内定した諸川取締役はさすがにうれしそうで、毎日が活気にみちていた。株主総会終了までは正式の発表を避けているのだが、その喜びは隠しきれず、廊下などで、すれ違いざまに、
「この度はおめでとうございます」
などとささやかれると、大びらに、
「いや、これは、恐れ入ります。でも、電気のことなどまったく素人ですので、弱っておりますよ」
などと、大声で答える始末であった。
それに対して、松橋常務の方へは依然として、何の音沙汰もなかった。松橋の不安は、次第に怒りへと変化していくのが、自分でもわかった。

「松橋常務は西山産業へ行くんだって」
「へえ、初耳だな」
「それが、たしからしいんだよ」
「でも、西山産業ぐらいで、松橋常務がうんと言うかねえ」
「言わないだろう」
「ひと荒れするんじゃないの」
「見ものだね」
銀行内のあちこちで、こんな噂が流れはじめたのは、それから間もなくのことであった。
「それにしても円城寺頭取のやり方って、少し汚くないかなあ。そこまでやらなくたって、いいのにさ」
「仕方がないじゃないか。大蔵派と帝都派との対立が、松橋常務の人事をネタに火花を散らしているんだから」
帝都銀行では大蔵省からの天下り頭取が二代続いた。現在の会長である住江道信と、それに続く円城寺頭取とがそれであるが、二代続いた結果、大蔵派の占領体制はほぼ確立した感があった。
円城寺頭取はそのとき、三人の大蔵省役人を連れて乗りこんできた。川崎常務、藤野取締役、それに黒沼取締役である。大蔵省出身の五人を大蔵派と呼び、帝都銀行生え抜き重役の帝都派と、陰に陽に対立しているのであった。

「なにしろ松橋常務は、帝都派のチャンピオンだからな、何事によらず大蔵派の目の仇にされるのさ」
「でも、考えてみれば、松橋常務の方だって、もう少し頭取に楯をつくのを、加減すればいいのにと、思うよ。なんと言ったって頭取は頭取だからね、喧嘩をしたら損だよ」
「でも、松橋常務は、いい加減にするってのが、出来ないんだよ。大蔵派に占領されなければ、確実に頭取になれた人なんだもの。占領軍のおかげで、頭取の座がふいになった無念さはわかるね」
「でも、おとなしくしていれば、あれだけの人だ、確実に副頭取までは行けたよ。大蔵派だって、帝都派と、全面戦争をするのは得策じゃない。うまく飴をしゃぶらせて、帝都派をうまく使っていくさ」
「だが、おとなしくなんて、していられないんだなあ。あの人。単純と言おうか、純粋と言おうか、意地っぱりと言おうか、一面に子供みたいなところがあって、適当な妥協というのが出来ない。こうと思ったら、絶対に妥協しない」
「自分の力に、絶対の自信を持っているからなんだよ」
「でも、悪くいえば、自信過剰」
「そこが松橋常務の魅力でもあるんだよ。誰かさん達みたいに、ぺこぺこして、専務や、副頭取になろうとしない」

「だから保川専務なんかが、専務になっているのが松橋常務には気にくわないんだよ。自分よりはるかに力のない奴が、専務になって、自分の上にのっかっている、面白い筈がない」
「保川専務って、おべっかが、うまいらしいからね。大蔵派にぺこぺこ取り入る、おべっか専務さ。昔だったら、専務になるなんて、考えられない人だものねえ」
「そう思うと松橋常務、すこし気の毒な気もするねえ」
「円城寺頭取の腹って、案外小さいんだね。再就職先ぐらい、ちゃんと世話しておいて、少し腹の太いところを見せておいた方が、結局は得になると思うのだがね。あんまり松橋常務をギリギリ追いつめると、かえって帝都派の不満分子に火をひろげる結果になりかねないよ」
「そういう見方も成り立つ。だが、頭取にしてみれば、実力のある松橋常務がいい会社に入って腕を振い、アンチ帝都銀行路線を展開して、銀行に反抗されるのがこわいんじゃないのかな。そうなると、大事な取引先を一つ失うことになりかねないからね。だから、出来るだけ小さい会社へ閉じこめてしまいたいんだよ。どうせ取引先を失うのなら、小さい会社の方がいいに決っている」
「でも、今度の問題は、聞くところによると、頭取というよりも、むしろ裏で川崎常務が糸を引いているって、いうじゃないか」
「へーっ、川崎常務が？」

川崎常務は、円城寺頭取が大蔵省から一緒に連れてきた中の、一の仔分である。頭取が一番信頼を置いているだけあって、仕事はきびしく、誰もが、その鋭い眼つきの前に立つと、恐ろしさで身も心も緊張した。

その実力も、松橋常務に拮抗すると見られていたので、二人の間には、いつしかライバル意識が強く動いていた。とくに昨年六月の株主総会で、川崎が平取締役から常務取締役へと昇格したが、その時松橋常務だけが、まだ時期が少し早いのではないかと反対意見を表明したことが、二人の犬猿の間柄に一段の拍車をかけたといってよかった。

「川崎常務の策動は、十分考えられるね。昨年六月の仇を、今年の六月で討とうというわけか、なるほど」

しかし、肝心の松橋常務のところへは、依然として正式な話は何も来ないのであった。頭取から、夜の宴への呼び出しももちろんない。自分の知らない所ですべてが動いているのかと思うと、いら立ちで、全身が震えてきた。

株主総会の日まで、頭取は、このままで押し通すつもりなのか。そして、株主総会の終った直後に、また今度も、

(長い間ご苦労さまでした。今度は西山産業へ行っていただこう)

と事務的に、言い渡されるだけなのか。

「西山産業…、ふん、誰がそんな会社に行ってやるものか」

屈辱感に震えて、松橋常務は思わず口走った。

西山産業。

本社は日本橋堀留にあり、繊維品の綜合卸商である。松橋常務を一応送りこもうとしている候補先であるから、中規模ながら、経営内容のしっかりした、帝都銀行が主力銀行として取引している、優良な企業であった。株式は未だ非上場である。それが松橋には気に入らない。いくら、いい会社だといっても、所詮は中小企業にすぎない。第二の人生を送る会社が、非上場の中小企業だなどということは、松橋の人生設計図の中には描いてないことであった。

西山産業はその名が示す通り、株式会社といっても、実体は個人企業の域を出ていなかった。社長の西山平太郎が一代で築いた会社である。社長の力量、手腕は抜群、二人の息子が専務と常務のポストに着き、社長をサポートしているが、今日の地位を築くまでには、かなりあくどいことをやって、のし上ってきたと言われている。典型的な成り上りの、ワンマン社長会社であった。松橋常務の肌に最も合わない会社といってよい。

(いい会社だといったって、下着会社にすぎないじゃないか)

融資部担当が長かったから、松橋常務は書類の上では西山産業をよく知ってはいた。が、一度も会社を訪問したことはなかった。一度、銀行の記念パーティの席上で、西山社長と名刺を交換したことはあったが、赤ら顔をぎらつかせたごつい面相は、松橋常務の好みからは遠かった。

だが、今の松橋常務の不満は、西山産業のそのような点にあるのではなかった。たかが平取締役の諸川に、一部上場企業のY電気が当り、自分の方には西山産業しか廻ってこないという、不公平、不合理が許せないのであった。

(結局、諸川、お前も保川専務と同じように、おべっか取締役だったんだな)

事実、諸川取締役は、川崎常務の腰巾着だと言われている。目先のきく諸川は、いち早く大蔵派へと乗り替えたのであろう。Y電気のポストも、川崎常務のルートから手に入れたのにちがいない。

噂によれば、諸川取締役は単に大蔵派の軍門に降っただけでなく、川崎常務のスパイだという噂もあった。小人数の大蔵派が、多人数の帝都派を牛耳っていくためには、そうしたスパイも必要なのであろう。

スパイは諸川取締役に限らなかった。総務部長をやっている岩城取締役なども、その中の一人と目されている。そうでなければ、取締役には絶対なれないと言われていた小物の岩城が、取締役になるなんてことは、あり得なかったからである。

帝都銀行の重役陣は、こうして、もつれにもつれた疑心暗鬼の上に、成立しているのであった。

ーつづくー

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（九）

第一章　八丈流人近藤富蔵

二、羽倉簡堂八丈を去る

金子正義

（一）

五月二十二日（七月一三日）簡堂一行は、明け方の大雨が晴れてから末吉を立ち、僅かの道のりなので正午には中之郷に達した。

中之郷の名主は小宮山善右衛門であるが老齢で、其の子善六も未だ名主見習なので村役諸事は、官船預かり役の山下義十郎が島取締役と兼帯していた。従って簡堂は山下義十郎屋舗に入った。義十郎は苗字帯刀を許された船名主で八丈の船頭総元締である。其の屋舗は古い家柄を誇る堂々たるもので大賀郷の陣屋と同じ構えであり、正面入口の左右には珍らしい連子窓がついていた。

門前に出迎えた義十郎の挨拶を受け、奥の間で村事情を聴取して昼食を摂った後、簡堂は作業広場に集められている村預かりの流人四十名余りを訓戒した。

中之郷では此の時期、天保七年より取りかかっていた藍ヶ江湊の港造りの使役もあって、船出入の人足使役等と合せて八丈五村中最も流人が多かった。

中之郷流人は気も荒く此れ迄脱島騒動も度々あり、中でも元文二巳年十一月十二日の佐野新蔵の騒動は、密告に依って未然に捕えられたが、多数の流人共が共謀して名主屋敷に火を放ち、其の騒ぎに粉れて湊の船を奪い集団脱島の計画であった。主謀の佐野新蔵と共謀の四名は登竜峠東側の大根の海蝕断崖、宇右衛門ヶ岳から突き落しの刑で死んだ。

此の事もあってか後年、弘化四年（一八四七）十月に加茂上社の神官梅辻規清が、神道異説の科で流されたとき山下屋舗に預けられた。

梅辻規清は、神仏習合の両部神道に反対する余り、王城鎮護の加茂の神社の正統を主張して、幕府に尊王論として睨まれ流島となり文久元年七月六十四才で没する迄

山下家の一室で神道論の著述に没頭し、『烏伝神代巻』など百数十帖を残した。

配流は近藤富蔵より二十一年も後で、富蔵より八歳年長であったが程なく和歌俳句の友として親交を深めた。亦、富蔵が流島四十余年の後半より書き始めた八丈実記草稿を読み、富蔵が生涯赦されず八丈島辺に朽ち果てるかと、時に嘆いて筆硯を放擲せんとすると梅辻規清が叱咤激励して思い直させることも屢々だった。

梅辻規清は富蔵ばかりでなく兇暴無頼の流人の忿懣を克く聴いて淳々と諭して教化した。梅辻規清は天文地学の造詣も深く八丈農耕暦などを作って村々に分ち与えたり、村の子弟の手習の指導までしてその徳を仰がれた。

文久二年政情改まって公武合体論などが台頭し、将軍家茂の上洛などもあってそれを賀しての規清恩赦の知らせが八丈に来たが、惜しくも規清の病没後であった。

富蔵は我が身の赦されざることより故人の為に天を仰いでその遅きを嘆いた。

天保九年の此の時梅辻は未だ流されていなかった。簡堂は佐野新蔵等の断崖突落しの刑を例として諄々と謀反島抜けについて諭していた。

簡堂は流人戒めを済まして直ぐ中里の砲撃用石室の視察に向った。途中の山の斜面の僅かな梯田に稲が青々と伸びていて、明和五年戊子（一七六八）の大飢饉で中之郷だけでも七百人も餓死したと云うのが嘘のようだった。

藍ヶ江中里の砲撃用石室（砲台）は地の利を得て、海岸一帯より南方洋上遙かに青ヶ島を望見する台地にあったが、砲座には苔むした台石ばかりで、廻らせた石壘も築工以来三十年の風浪、潮害に崩れ始めていた。

文化三年（一八〇六）九月、北辺樺太に露艦が来寇し、翌年四月には択捉島の内保・紗那に砲撃後上陸して食糧武器等を掠奪して去ったが、更に西蝦夷宗谷沖に現われ礼文島の洋上で幕船を襲い利尻島に上陸して食糧等を掠奪して去った。衝撃を受けた幕府は急遽蝦夷地、東北各藩に異国船渡来に備えて沿岸警備強化の令を出した。文化五年伊豆諸島でも主要港湾防禦の為に石積場を強化し射撃場を作り、硝煙倉等を建てたのであった。

同行の島取締役高橋長左衛門の説明に依れば、文政七年（一八二四）の夏、異国船が一隻藍ヶ江湊の入口近くを遊弋して測量などをしていたが上陸せず引揚げた。翌年も同じ船が姿を見せて暫く湊を窺っていたが南へ消え去った。どうやらその頃、小笠原島を捕鯨の根拠地にしようと狙っているアメリカ船のようなので、早速伊豆御代官所へ早船で急報した処、文政十年六月、御代官柑本兵五郎様以下幕府役人総勢二十四人が廻島され、八丈島には、特に三匁五分筒六十挺と弾丸火薬を授け下され、非常防禦五十人組を訓練して帰った。

だが、柑本御代官配下の海防係間宮林蔵殿は、砲台には少なくとも五百目玉の青銅砲が必要であるが、幕府は

本土の沿岸防備の為に砲の手持なく、早速の配置は出来ない。従って島方で木砲を造り工夫を凝らして大筒の如く据置き、異国船来航の時は本船に構わず、夷人共が小舟を寄せて上陸せんとするとき、近くに引付けて小筒にて討ち取るべし、その為島人は日頃より猟などで射撃の訓練をして精熟させよ。と言われたので、砲台は非常防禦五十人組が出漁の無い時期に射撃訓練をやる程度であった。

三匁五分筒の使い方は、天保元年（一八三〇）四月に幕府砲術師範の土屋弥一高暢が、来島し、三十日程陣屋に滞在して陣屋大書記を始めとする島役、村々書記五人組頭、五十人組組頭等を指導して帰った。尚銃砲火薬は潮害で痛み易すく、手入も充分でなく役立ずになるので五村の名主宅や村役所で分担保管するように、と達したので三匁五分筒は名主の蔵に保管してあるとの事だった。

簡堂も大型の異国船を撃退するには、昨年六月江戸湾より米船モリソン号を打ち払った浦賀港の平根山砲台のように、一貫目玉の青銅砲以上でなければ役に立たない、本土沿岸の要地や島嶼の主な湊に此れを配備するのは、到底出来る業ではない、と文政八年二月よりの異国船打払令を危く思い乍ら遥かに南方洋上の青ヶ島を見渡した。

天明三年癸卯五月の大噴火で生き残った者が八丈に避難していたが、今は元名主の佐々木次郎太夫が旧島民を連れて戻り関墾に努めていると云うが、未だ山焼の余煙を吐く孤島にはアメリカ船も近づくまいと思った。

砲台を下り海岸沿いに藍ヶ江の湊に新たに開削した港の視察に向った。

藍ヶ江湊は八丈の最南端に近い漁港であるが、湊の入口が狭く中之郷以外の船は碇泊できなかったが、数年前より村人が力を合わせて湊入口を開削し、湾内に迫る岩壁を繋岩して通路を設け、海底より海面に抽出している岩石は砕き、或いは工夫して船繋岩にするなどして五村の廻船も碇泊できるようになった。

簡堂が波止場を視察のとき、恰度二隻の大船が碇泊していた。海底より突出している牽岩が船繋ぎの竜柱となり、西岸の繋柱と左右より纜を引繋いであった。高橋長左衛門は、外海が多少波立っても船は動かず甲板に立っても陸と変りないと言った。

夕刻山下屋鋪に戻り夜食後、村人の与惣次を呼んで南海を漂流した顛末を聞いた。

暴風雨で転覆した漁船の船板に縋り、何日か漂流していた与惣次を救助して呉れたのは異国の捕鯨船であった。言葉は全く通じないが手厚く介護された上に、親切に送り届ける為に紀州の何処かの浦浜に近づいたが、沿岸の防備が厳しく上陸できず、態々長崎迄航行して阿蘭陀船に移されて漸く長崎に上陸し、長崎奉行所の取調べの後下田に送られやっと八丈に帰ったとのことだった。

簡堂は今度の巡察中各島で漁民の漂流譚を聴いたが、

天明寛政の大黒屋光太夫のように露国が通商を求める為の方便に漂流民を助けるのと違い、日本近海に来航する多くの異国船の中には、人道仁義の上から送り届ける捕鯨船等の有る事を知って、昨年のモリソン号も漂流民を送り届けに来航したのに砲撃を加えた、と難じた尚歯会の蘭学者達の意見に依れば、海外の状況、異国船の渡来について思い直すこと多く、異国船打払令は緩めざるを得なくなるだろうと思った。

五月二十三日（七月二四）簡堂は辰の刻に中之郷を出立して樫立村に向った。途中の三原山麓の道は沿道に変った樹木が多かった。迎えに来た名主の奥山儀左衛門に依れば、幹が桐のように柔らかく滑らかで葉が棕櫚のようなのを蘇櫚（ヘゴ）と言い、幹は棕櫚のようで葉が蕨のようなのを歯朶と言う、いずれも一丈余りの高さで長大の葉を存分に伸ばして爽快であった。

近藤富蔵の父重蔵の学友であり、後年老中となった福山藩主阿部正精が棕櫚を好んで、書画の号を棕軒とつけた。棕櫚が纏いつく枝葉を出さず高く真直ぐなのを潔よしとしたからであった。

紅葉山書物奉行の近藤重蔵が老中首座の水野忠成と、紅葉山文庫拡充について論争し其の忌憚に触れて大坂弓槍奉行に左遷されたとき、阿部正精は重蔵を大いに弁護したが許されなかった。

文政四年近藤重蔵は、大坂に於ける身分不相応の行状あって、御役不相応に付永代小普請仰渡されて江戸召還となった。

阿部正精も亦、清廉剛直にして水野忠成と合わず文政六年老中職を辞した。その致仕を記念して棕櫚が月をさす図の絵を描き画賛に、

勁葉高抽美蔭垂　似嫌攀附直無枝
朝天巨帚掃塵罷　好與清風明月期

棕軒

（勁葉、高ク抽テ、美蔭垂ル、攀附ヲ嫌フニ似テ、直ニシテ枝ナシ。天ニ朝スル巨帚、塵ヲ掃ウテ罷メ、好ク清風明月ト期ス）

と添えた。簡堂は此れを詩友の岡本花亭が福山侯より拝受した祝いの披露の席で拝観した。

阿部侯の棕櫚は颯然として月明に孤立していたが、八丈の蘇櫚、歯朶は一本一株豪快に伸びて群をなしている。阿部棕軒侯に見せ度いものである、と感慨に耽り乍ら緑の下道を行った。

唐滝川に架る中の橋を渡ると樫立村であった。能里の部落を通って小高い縁が山の山懐にある服部屋鋪に入る。中之郷の山下屋鋪より古びた堂々たる陣屋構えである。

服部家は代々幕府の御船預かりを務め中之郷の山下家との養子縁組などもあって、御役は交互に勤めていた。当代の敬次郎は浦賀奉行所詰となって不在であった。

屋敷を囲む見事な二重の玉石垣は、流人の近藤富蔵が

組み築いたものと奥山儀左衛門が言った。

玉石垣は基盤より上に十二段程均等の玉石を組み上げ各段の線が整然と列をなして乱れず、然かも縦には玉石の卵形が六弁の花形の文様をなしていた。全体が冷たい石材の垣というより生物のように柔らかく膨み、息遣いすらあるように思えた。

強風や潮害を防ぐ八丈島人の昔より工夫を重ねた石積み技術に違いないが、古法の衆石積みに透間をつくらない間知積みを合わせた此の技法は富蔵独自のものである。

簡堂はその造形美にうたれ乍ら、一体富蔵は何処で習い覚えたのであろうか、不思議な男よと感嘆した。

簡堂は屋鋪で汗を拭って小休止の後、前庭の樹齢五百年余と云う蘇鉄の大樹の下に集められている三十名余りの流人を訓戒して直ぐ出立した。

高橋長左衛門が、服部屋敷から八町ばかり南の康政里に海辺に沸き出る温泉があって諸病に利く、と頻りに勧めたが暑気の強い日中のことであるので、日照の道を避け、能里より向ヶ里へ山路を牛の背を借りて行った。

掘切山の西より北へ十町程登ると大坂峠の頂上であった。紫色の大岩に立って展望する目下の景観の見事さは暑さを忘れる程であった。峠の下の横間浜の長汀が北に伸びて陸となり、その緑に盛り上った空に優雅な八丈富士が頂きに白雲を浮かばせていた。

簡堂一行は、此の八丈第一の絶景を賞でながら遅い昼食を摂った。

簡堂は、末吉村名主沖山市十郎宅で一夜近藤富蔵と歓談中八丈の風景に触れ、富蔵より八丈嶋八景を知らされたのを思い出した。

八重根の晴風、大里の晩鐘、鳴山の夜雨、神湊の帰帆、名古の秋月、藍ヶ江の落雁、大坂の夕照、西山の暮雪で、大坂峠よりの夕べの展望が絶妙であると言い乍ら富蔵は、

土さへもさけて猶照大坂を
くたる夕へのくるしかりけり

と武骨な掌に似ぬ優雅な筆跡を懐紙に認めた。

空も山も海も悉く黄金に染める夕映も流人の富蔵にはただ峠下りを悲痛な思いにする残照であるのだろうか。

簡堂は、それを確かめるかのように。

「では坂を下るとしようか」

と大賀郷陣屋へ戻る最後の行程に立った。

続く。